

熊本県文化財調査報告 第74集

ふる しろ

# 古城横穴墓群



1985

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告 第74集

ふる しろ  
**古城横穴墓群**

1985

熊本県教育委員会

# 序 文

熊本県教育委員会では、熊本市古城町の県立第一高等学校内災害復旧工事に伴って昭和57年11月から昭和58年6月まで「古城横穴墓群」の発掘調査を実施しました。本書は、その報告であります。

発掘調査の結果、53基の横穴墓が確認され、馬具をはじめ多くの遺物を得ることができました。特に、39号横穴墓の閉塞石から「火守」と読める文字が発見されたことは極めて重要であると考えられます。

本書が、埋蔵文化財に対する認識と理解、さらに学術上の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査段階から報告書作成にいたるまで御指導を賜わりました専門調査の先生方をはじめ、関係各位に心からお礼を申し上げます。

昭和60年3月31日

熊本県教育長 伴 正 善

## 例　　言

- (1) 本書は、熊本県教育委員会が昭和57・58年度に実施した、熊本市古城町に所在する古城横穴墓群の発掘調査報告書である。
- (2) 発掘調査は、県立第一高等学校災害復旧工事に伴う事前調査として実施した。
- (3) 調査には、専門調査の先生方をはじめとして、関係各位の全面的な協力を得た。特に人骨の調査は、長崎大学医学部解剖学第二教室（内藤芳篤教授）に依頼した。
- (4) 遺構の実測は、熊本大学文学部考古学研究室の協力を得て、高木正文・堤圭子・柳原真由美が行い、写真撮影は白石巖氏の協力を得た。
- (5) 遺物は、熊本県文化財収蔵庫で整理し、遺物の実測や図面製図は、高木・堤・佐藤淳子が行った。
- (6) 本書の執筆は、I を隈昭志、III、IV、V を高木が担当し、II は乙益重隆教授（国学院大学文学部）の報告を再録させていただいた。また、人骨について松下孝幸・分部哲秋・中谷昭二の三氏（長崎大学医学部解剖学第二教室）から、文字銘について八木充教授（山口大学人文学部）から、文字銘と馬骨の類例等について乙益重隆教授から、それぞれ玉稿をいただいた。
- (7) 本書の編集は、熊本県教育庁文化課で行い、高木が担当した。

# 本文目次

I	立地と周辺の遺跡	1	
II	過去の調査の記録	6	
III	調査の経過	10	
IV	横穴墓と遺物	15	
	分布と概要	15	
	1号横穴墓	17	
	2号横穴墓	17	
	3号横穴墓	20	
	4号横穴墓	20	
	5号横穴墓	20	
	6号横穴墓	22	
	7号横穴墓	29	
	8号横穴墓	29	
	9号横穴墓	33	
	10号横穴墓	34	
	11号横穴墓	38	
	12号横穴墓	38	
	13号横穴墓	40	
	14号横穴墓	40	
	15号横穴墓	40	
	16号横穴墓	40	
	17号横穴墓	42	
	18-1号横穴墓	47	
	18-2号横穴墓	50	
	19号横穴墓	50	
	20号横穴墓	55	
	21号横穴墓	59	
	22号横穴墓	61	
	23号横穴墓	61	
	24号横穴墓	63	
V	まとめと考察	117	
	立地と分布	117	
	構造と変遷	117	
V	関連論考	127	
	熊本市古城横穴墓群出土の古墳時代人骨		
	松下孝幸・分部哲秋・中谷昭二	129	
	はじめに	129	
	人骨の出土状況	129	
	資料	131	
	熊本市古城横穴墓群発見の文字銘について	八木充	147
1		148	
	2	151	

横穴に表現された文字の用例	乙益重隆	155
馬の隨葬例について	乙益重隆	161
図 版		169

## 挿 図 目 次

第1図 古城横穴墓群と周辺の古墳位置図	2
第2図 古城横穴墓群実測図	7
第3図 横穴墓配置図	16
第4図 1・2号横穴墓実測図	18
第5図 3・4号横穴墓実測図	19
第6図 5号横穴墓実測図	21
第7図 5号横穴墓出土遺物実測図	22
第8図 6号横穴墓実測図	23
第9図 6号横穴墓遺物出土状況実測図	24
第10図 6号横穴墓出土遺物実測図	26
第11図 7号横穴墓実測図	30
第12図 8号横穴墓実測図	31
第13図 7・8・9号横穴墓出土耳環実測図	32
第14図 8号横穴墓出土須恵器実測図	32
第15図 9号横穴墓実測図	34
第16図 10号横穴墓実測図	35
第17図 10号横穴墓遺物出土状況実測図	36
第18図 10号横穴墓出土遺物実測図	37
第19号 11・12号横穴墓実測図	39
第20図 16号横穴墓実測図	41
第21図 16号横穴墓出土遺物実測図	42
第22図 17号横穴墓実測図	43
第23図 17号横穴墓出土刀子・耳環実測図	44
第24図 17号横穴墓羨道部出土土器実測図	44
第25図 18-1・2号横穴墓実測図	46
第26図 18-1号横穴墓遺物出土状況実測図	47
第27図 18-1号横穴墓出土馬具実測図	48
第28図 18-1号横穴墓出土土器実測図	49
第29図 18-2号横穴墓実測図	50
第30図 19号横穴墓実測図	51
第31図 19号横穴墓前部? 遺物出土状況図	52
第32図 19号横穴墓前部? 出土須恵器実測図(1)	53
第33図 19号横穴墓前部? 出土須恵器実測図(2)	54
第34図 19号横穴墓前部? 出土土師器実測図	55
第35図 20号横穴墓実測図	56
第36図 20号横穴墓遺物出土状況実測図	57
第37図 20号横穴墓出土須恵器実測図	58
第38図 20号横穴墓出土装身具実測図	59

第39図	21号横穴墓実測図	60
第40図	21号横穴墓羨道部出土須恵器実測図	61
第41図	22・23・24号横穴墓実測図	62
第42図	28・29号横穴墓実測図	64
第43図	30号横穴墓実測図	65
第44図	30号横穴墓出土刀子実測図	65
第45図	31-1号横穴墓実測図	66
第46図	31-1号横穴墓人骨出土状況実測図	67
第47図	31-2号横穴墓実測図	68
第48図	31-2号横穴墓遺物出土状況実測図	69
第49図	31-2号横穴墓出土須恵器実測図(1)	69
第50図	31-2号横穴墓出土須恵器実測図(2)	70
第51図	32号横穴墓実測図	71
第52図	32号横穴墓出土土器実測図	72
第53図	33号横穴墓実測図	73
第54図	34-1・2号横穴墓実測図	75
第55図	35・36号横穴墓実測図	76
第56図	37号横穴墓実測図	78
第57図	37号横穴墓人骨・須恵器出土状況実測図	78
第58図	37号横穴墓出土須恵器実測図	79
第59図	38-1・2号横穴墓実測図	80
第60図	38-1号横穴墓人骨出土状況実測図	81
第61図	39号横穴墓実測図	82
第62図	39号横穴墓閉塞石実測図	83
第63図	39号横穴墓閉塞石の文字拓影図	84
第64図	39号横穴墓閉塞石の文字実測図	85
第65図	40号横穴墓実測図	86
第66図	41号横穴墓実測図	87
第67図	42・43号横穴墓実測図	88
第68図	44・45号横穴墓実測図	90
第69図	44号横穴墓出土耳環・45号横穴墓出土刀子実測図	91
第70図	46号横穴墓実測図	92
第71図	46号横穴墓線刻文実測図	93
第72図	47・48号横穴墓実測図	94
第73図	48号横穴墓出土刀子・耳環・玉類実測図	96
第74図	49号横穴墓実測図	97
第75図	48・49号横穴墓遺物出土状況実測図	97
第76図	49号横穴墓出土鉄製品・耳環実測図	98
第77図	49号横穴墓出土玉類実測図	100
第78図	古城横穴墓群の分布変遷図	118
第79図	古城横穴墓群の形態変遷図	119
第80図	閉塞石集成図(1)	121
第81図	閉塞石集成図(2)	122

第82図 閉塞石集成図(3).....	123
第83図 閉塞石集成図(4).....	124
図 1 遺 跡.....	130
図 2 人骨の残存状態.....	130
図 3 ペンローズの形態距離.....	138
古城39号横穴墓の閉塞石と文字.....	149
静岡県大北横穴群第24号出土石櫃の文字.....	156
千葉県綱根方横穴群第 2 号の文字.....	156
別 図 古城横穴墓群配置図.....	はさみ込み

## 表 目 次

第 1 表 6 号横穴墓出土小玉集成表.....	27
第 2 表 10号横穴墓出土小玉集成表.....	38
第 3 表 10号横穴墓出土粟玉集成表.....	38
第 4 表 20号横穴墓出土小玉集成表.....	59
第 5 表 48号横穴墓出土小玉集成表.....	95
第 6 表 48号横穴墓出土粟玉集成表.....	96
第 7 表 49号横穴墓出土小玉集成表.....	101
第 8 表 49号横穴墓小土粟玉集成表.....	104
第 9 表 古城横穴墓一覧表.....	112
表 1 出土体数.....	131
表 2 資料数.....	131
表 3 人骨一覧.....	132
表 4 大腿骨主要計測値.....	137
表 5 脛骨計測値.....	138
表 6 頭蓋計測値.....	140
表 7 下顎骨計測値.....	140
表 8 橋骨計測値.....	140
表 9 尺骨計測値.....	140
表10 大腿骨計測値.....	141
表11 脛骨計測値.....	141
表12 腓骨計測値.....	142
表13 歯の計測値.....	142
馬歯・馬骨出土古墳一覧.....	162

## 図 版 目 次

- 図 版 1 1) 県立第一高校運動場拡張工事  
           2) 工事により発見された横穴墓（左から 3 号, 1 号, 2 号）  
           3) 2 号横穴墓の上段ステップ出土須恵器  
           4) 横穴墓奥壁（現24号）
- 図 版 2 1) 調査開始直後の全景（昭和57年11月）  
           2) 調査途中の全景（昭和57年12月）  
           3) 調査完了時の全景（昭和58年 6 月）

- 図 版 3 1) 20号横穴墓閉塞状態  
2) 20号横穴墓の前室から見た後室  
3) 20号横穴墓後室の須恵器出土状態  
4) 20号横穴墓出土須恵器  
5) 20号横穴墓出土須恵器
- 図 版 4 1) 16号横穴墓閉塞石  
2) 8号横穴墓閉塞状態  
3) 8号横穴墓出土須恵器  
4) 8号横穴墓出土須恵器
- 図 版 5 1) 18-1号(左)と18-2号(右:小型)横穴墓  
2) 18-1号横穴墓玄室の須恵器と土師器出土状態
- 図 版 6 1) 18-1号横穴墓出土雲珠・杏葉など  
2) 18-1号横穴墓出土鉸具  
3) 18-1号横穴墓出土須恵器  
4) 18-1号横穴墓出土須恵器  
5) 18-1号横穴墓出土土師器
- 図 版 7 1) 31-1号横穴墓閉塞状態  
2) 31-1号横穴墓奥壁  
3) 31-1号横穴墓右屍床の人骨出土状態  
4) 31-1号横穴墓右屍床の人骨頭部
- 図 版 8 1) 31-1号横穴墓の人骨調査  
2) 31-2号横穴墓外観  
3) 31-2号横穴墓の須恵器出土状態  
4) 31-2号横穴墓出土須恵器  
5) 31-2号横穴墓出土須恵器
- 図 版 9 1) 38-1号横穴墓右屍床人骨出土状態  
2) 38-2号横穴墓(小型)の人骨出土状態
- 図 版 10 1) 37号横穴墓の須恵器と人骨出土状態  
2) 37号横穴墓出土須恵器  
3) 37号横穴墓出土須恵器
- 図 版 11 1) 39号横穴墓閉塞石  
2) 39号横穴墓閉塞状態  
3) 39号横穴墓開口状態
- 図 版 12 39号横穴墓閉塞石の文字銘
- 図 版 13 1) 46号横穴墓玄室全景(奥屍床は後世に埋葬に再利用)  
2) 46号横穴墓玄室の線刻文  
3) 48号横穴墓屍床の遺物出土状態  
4) 49号横穴墓奥屍床の遺物出土状態  
5) 49号横穴墓奥屍床の遺物出土状態



# I 立地と周辺の遺跡

県立第一高等学校の所在する一帯は古<sup>ふる</sup>城と呼ばれる。グランドの北側台地（標高約35m）は古<sup>ふる</sup>城の日本丸にあたる。古<sup>ふる</sup>城横穴墓群はこの本丸跡の南崖面に立地することになる。旧地形は熊本平野に北から延びる植木（京町）台地の南端部にあたり、東側に白川、坪井川、西側に井芹川が流れる。これら三つの水系には多くの遺跡が分布するが、本項では古墳と横穴墓群について略述したい。

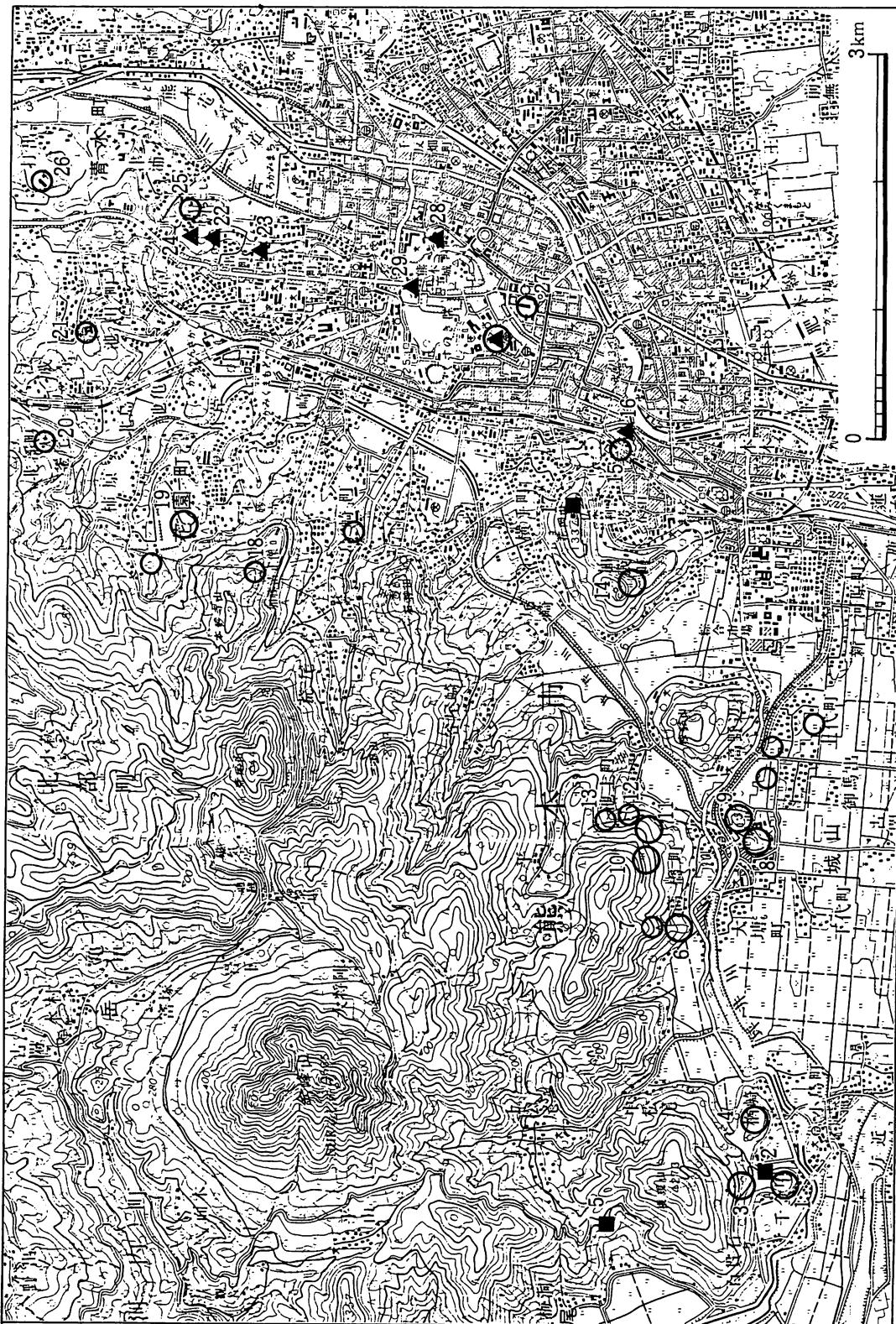
熊本市域の遺跡数は 544ヶ所で全県の約 1 割を占める。このうち古墳時代に属するものは古墳 105ヶ所、横穴群18ヶ所、須恵器、土師器出土地42ヶ所の計 165ヶ所で、市域全遺跡の 3 割を占める。

古墳群は熊本平野の北縁部、下流では坪井川及び井芹川の右岸一帯に多く分布する。

下流域では金峰山の南にある権現山（標高 273m）周辺、約 1.5km上流の皆代山（標高 272m）、鳥帽子山（標高 254m）一帯に集中する。前者では檜崎山古墳群、権現平古墳群、千金甲古墳群、高城山古墳群、後者では城山古墳群、皆代古墳群、宮山古墳、二本松古墳群、小松山古墳群、堂の園古墳、二軒小屋古墳群などである。

檜崎山古墳群は権現山の南斜面に突出する標高約60～70mの丘陵にあり、昭和37年ごろから周辺の開発によって破壊され始めたため、熊本市教育委員会が昭和42年～43年度に調査したものである。従来 3 基の箱式石棺と10基の高塚式古墳の存在が知られていたが、この時点ですでに箱式石棺 2 、高塚式古墳 5 が消滅していた。このうち発掘調査によって内部構造や副葬品が明らかにあったのは第 1 号石棺、第 5 号と第 7 号古墳の 3 例である。第 1 号石棺は安山岩の板石を用いた石棺で、太刀・短剣・刀子の副葬品から 5 世紀代と推定され、当古墳群中最古の様式に属する。第 5 号古墳は平面形が隅丸方形の横穴式石室墳で、周壁は割石平積みの持ち送り式に築かれている。周壁に沿って障壁をめぐらし、羨門寄りの所に板状石を方形に立てめぐらす。変形獸首鏡・丁字形勾玉・ガラス小玉60～70個・横矧板皮綴式短甲・兜片・矛・刀・鎌・鎌先・ワラビ手刀子・斧・鉈など多量の副葬品が出土し、5 世紀末～6 世紀前半とみられる。第 7 号古墳は安山岩の大きな割石を平積み持ち送り式に築いた横穴式石室で平面形は隅丸長方形を呈し幅のせまい羨道を有する。

千金甲古墳群はすでに大正 6 年京都帝国大学によって報告されたもので、最高地にあるものから第 1 号～第 5 号とし、第 1 号を甲、第 3 号を乙、第 5 号を丙として紹介された。甲号と乙号は装飾古墳として有名で、大正10年 3 月 3 日国指定史跡となった。高城山第 3 号墳は舟形石棺で、方格規矩文鏡を出土している。



第1図 古城横穴墓群と周辺の古墳位置図

城山古墳群は3基の円墳で主体部は不明である。また朝出山の中腹にある小松山古墳は石室を有する円墳であったが、昭和41年の開墾によって消滅した。この古墳は斜面を利用したため、墳裾に石墨を築き、石室は板状石をもって三区に区切り、屍床には板石を敷き並べたものであった。二本松古墳群は5基の円墳と4基の箱式石棺からなる。円墳は6世紀後半～7世紀前半の横穴式石室で、石棺群はこれに先行する5世紀末と推定されている。池ノ上町日景谷に面した二軒小屋古墳は直径12m、高さ約3.5mの円墳で複室の横穴式石室で奥室に石屋形を有する。

さらに上流の井芹川左岸、北岡丘陵を含む万日山（標高136m）、花岡山（132m）には万日山古墳群、花岡山箱式石棺群、北岡神社古墳、北岡横穴群などが存在する。万日山古墳群は万日山から南へ馬蹄形に延びる丘陵鞍部に並び開発により消滅したものもある。記録に残る最古の消滅例は明治19年の「万日古墳」（来迎院の下手）で熊本県記録の「古墳発顕記録」により概要が分る。横穴式石室で、勾玉・須恵器が出土しているが、行方不明になっている。

また大正6～7年頃万日山東古墳（長持形の石槨という）、昭和27年頃、万日山山頂古墳（加茂町字北長谷平）が消滅した。最近では昭和36年に取付け道路の造成中に長谷町南長谷平1,845番地で横穴式石室が発見され、乙益重隆氏が調査された。この古墳を万日山古墳と呼ぶ。直径約18m、高さ約4mの円墳で、石室の全長23.2m主軸をほぼ南北にとり、南に開口する4室からなる特殊な内部構造を有する。第一室（第一羨道）は奥行3m、幅1.85m、天井までの高さ約2m、入口から約50cmのところが一段高くなり、礫を敷いている。第二室（第二羨道）は奥行3.05m、幅1.25m、前半分に厚さ15cmの礫床、後半分を凝灰岩の切石でモザイク状に石敷をしている。第三室は中央通路に凝灰岩の切石を敷きつめ、その左右両側に石屋形を設けている。第四室は寄棟造平入りの家形石棺を安置する。そのほか第三室の中央床下から第二・第一の床を通り、羨門前庭部にいたる全長12.6mに及ぶ排水溝が設けられ、その端末は細礫をつめた吸水壇となっている。このような構造は他類例がなく、百濟に盛行した磚室墓の影響をうけたものであろうといわれる。出土品には、鉄刀・鎌・環状鉄片・金環・須恵器等があり、7世紀前半に比定されている。

花岡山箱式石棺群は昭和29年山頂に仏舎利塔が完成したが、その造成中に7基が発見された。とくに3号石棺の近くから石栓（安山岩）をした土師器壺が出土し、その中に勾玉2・ガラス小玉22・赤色ガラス玉1・碧玉管玉1が收められていたが、玉類は持ち去られて不明になって

①古墳群地名表
1 高城山古墳群
2 高城山石棺群
3 千金甲古墳群
4 檜崎山古墳群
5 小林箱式石棺群
6 皆代古墳群
7 宮山古墳
8 高橋箱山古墳群
9 城山古墳群
10 二本松古墳群
11 小松山古墳群
12 堂の園古墳
13 二軒小屋古墳
14 万日山古墳群
15 北岡神社古墳
16 北岡横穴群
17 花岡山箱式石棺群
18 本妙寺山古墳
19 経塚古墳群
20 釜尾古墳
21 富ノ尾古墳
22 稲田横穴群
23 寺原横穴群
24 一ノ谷横穴群
25 舟場山古墳
26 稲荷山古墳
27 山崎町古墳
28 千葉城横穴群
29 磐根横穴群
◎古城横穴群

いる。昭和43年には仏舎利塔裏手で比島英靈顯彰碑の建設中に石棺が再発見された。昭和29年に一部露出していたもので、第7号石棺にあたる。主軸をほぼ東西にとり、長さ2.01m、幅は西側で44cm、東側で31cm、床面には約50枚の板石を敷き、二体分の人骨が納められていた。

北岡神社古墳及び北岡横穴群ともに現存しない。前者は明治25年の鉄道工事に伴う社殿改築に際して発見され、大正11年の再調査の結果、箱式石棺と石槨を有する古墳との中間的な形式と推定されたものである。なお、副葬品には五乳鳥文鏡の他、勾玉、鐵器類があり、鐵器以外は熊本市立博物館に保管されている。後者は北岡神社の南崖面にあったもので、明治13年、同19年に多数の金環と銅釧・勾玉・鐵鏃が発見されている。同様に市立博物館に保管されている。

さらに井芹川の上流では右岸に本妙寺山古墳、天福寺周辺の古墳群、左岸に富ノ尾古墳群、坪井川流域では熊本城周辺の横穴群、山崎町古墳、さかのぼって寺原横穴群、稗田横穴群、一の谷横穴群、舟場山古墳、稻荷山古墳と続く。本妙寺山古墳は昭和23年開墾中の発見で、長さ1.85mの箱式石棺で、2体の人骨と刀子が納められていたという。天福寺周辺では小萩山東部の山麓一帯に古墳群があり、釜尾古墳（飽託郡北部町）、堂出古墳（同町）、天福寺下の道手古墳群、丘陵上の羽山古墳、その西の畠の原古墳3基の一大古墳群である。天福寺裏山（標高約100m）の天福寺裏山古墳群3基はともに横穴式石室で第3号は最も保存がよい。釜尾古墳は直径約18m、高さ約6mの円墳で装飾古墳（国指定史跡）である。「肥後國誌」によると明和6年（1769年）に発見され「口窄ク内ハ一間半四方許リ切石の壁天井ニテ、白ノ石壁朱ニテ塗リ、桔梗ノ紋アリ」と記されている。羨門は南向きて、安山岩の割石で構築した石室（奥行き3.3m、幅3.3m）の奥に石屋形が設けられている。石屋形の天井石に三角文、内部と表に赤・白・青で双脚輪状文を描く。大正6年石室の清掃に際して甲冑・大刀・剣・斧・轡等の破片が出土した。6世紀中葉の古墳である。

富ノ尾古墳群は富ノ尾山の頂上近くにもと3基の円墳があったが、現存1基である。消滅した1基（直径約15mの円墳）は貯水池になっており、他の1基は昭和38年破壊された。現存の1号墳は直径14.4m、高さ約3m、南に入口をもつ安山岩の板石を平積みにした横穴式石室でコの字の屍床をもつ。羨道部の西壁にはもと赤色で円文と三角文が描かれていたが、現在はみえない。この古墳の西南方約400mのところから女性石人が出土し、現在東京国立博物館に保管されている。

山崎町古墳は交通センターと九電ビルの中間九電ビル駐車場の南側あたりにあった古墳で、肥後が生んだ国学者長瀬真幸によって紹介された考古学史上きわめて重要な発見といわれている。寛政8年（1796）12月6日に発見し、その調査記録を各方面の知友に書き送った。とくに伴信友はその著「信友隨筆」に収録したほどである。乙益重隆氏は板石の石材で囲んだ石室墳であろうと推定している。

稻荷山古墳は昭和22年熊本語学専門学校生徒によって調査されたもので、直径約30m、高さ

7mの円墳である。安山岩の平石と割石をもって石室を築き、奥行・幅とも 2.9mの正方形を呈し、南に羨道をもつ。石室の奥壁に板石を使った石屋形を設け、その前面に左右二区の屍床がある。石屋形の奥壁、側壁、屍床の仕切り石に赤・白・青の同心円・三角形の文様が描かれている。変形獸帶文鏡、勾玉、金環、刀、鉢、杏葉、雲珠などが出土した。6世紀後半の古墳で県指定史跡。

最後に古城横穴群周辺の横穴群について述べたい。

熊本城は前述のとおり京町台地の南端部にあり、その台地の東縁部には阿蘇凝灰岩の露頭が連なっている。その崖面を利用して横穴群が分布する。千葉城横穴群は昭和37年NHK熊本中央放送局が建設される際に発見され、乙益重隆氏が調査した。駐車場付近に 6基、その西南側に 4基の計10基である。このうち 8基は通常の規模（床面の広さ 1.9× 1.9m程度）であるが、3号と 6号の 2基は異例の小形（3号=奥行 1.1m、幅 1.2m、高さ 0.7m、6号= 1.0m、1.1m、0.8m）である。3号は指頭大の粒石を敷きつめ、2体の成人骨が出土した。乙益氏は「一般に玄室の面積が 1 平方m 前後の小形横穴については、子供を葬るかまたは火葬骨をおさめたのではないかとみるむきもあるが、本例が示す通り成人を追葬したばあいもあることがわかった」と指摘している。（熊本市文化財調査報告書Ⅱ 北部地区熊本市文化財調査会 昭和46年）この横穴では副葬品を伴わなかったが、5号の前庭部付近に須恵器の甕 1、高壙 5、壺 2、蓋 2、台付壺 1、土師器の高壙 1、壺 3がまとまって発見されたが、ブルドーザーによる削平中のため配置や組合せは不明である。遺物等から 7世紀中葉ごろと推定される。

磐根橋横穴群は磐根橋の南端、監物台樹木園の東側崖面に 4基あり、橋に近い 2基は戦時中防空壕に転用され、戦後も入居者があつて内部の改造が著しい。残りの 2基は前述の 2基よりやや高い所にあり保存はよいが、内部は未調査である。

寺原横穴群は裁判所の下から北に向って数多くの横穴が並んでいたが、戦時に防空壕に改造成され、さらに現在では拘置所下から中坂にかけてコンクリートの擁壁となり消滅している。その北側の寺原の崖面は道路と住宅が建ち並び、現状は不明である。

津浦一の谷横穴群は一の谷の用水池から京町台地に登る小道沿いの段々畑に 5～6基が確認されている。従来この急斜面を畑にしたとき多数の横穴が発見されたが、埋没や破壊によって不明である。現存するものも防空壕に改造され旧状をとどめない。

以上の横穴群は千葉城横穴群の一部を除いて詳細は不明であるが、今回の古城横穴群の調査によって、ある程度の関連づけが見出せるものと考える。  
(限 昭志)

- 
- 参考文献 1. 熊本市西山地区文化財調査報告書 昭和44年 熊本市教育委員会  
2. 熊本市文化財調査報告書(Ⅱ北部地区) 昭和46年 熊本市教育委員会  
3. 乙益重隆『熊本市万日山古墳』考古学集刊3 昭和42年  
4. 乙益重隆『釜尾古墳』『稻荷山古墳』小林行雄編「装飾古墳」昭和39年

## Ⅱ 過去の調査の記録

〔ここでは乙益重隆氏が執筆された「古城横穴群」『熊本市文化財調査報告Ⅱ（北部地区）』（昭和46年）を原文のまま転載する〕

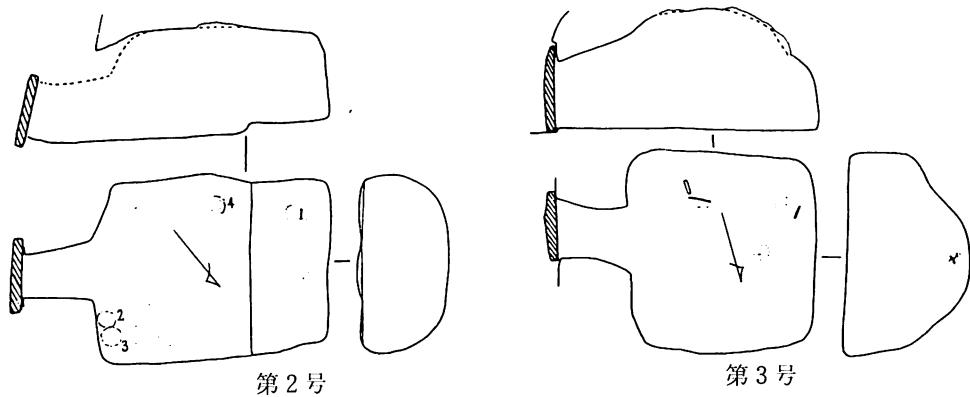
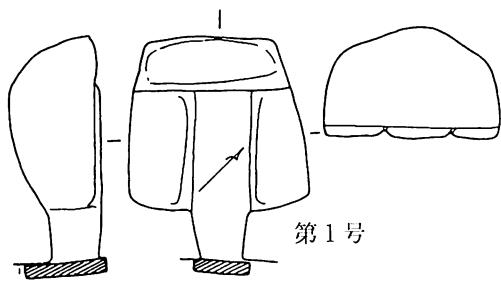
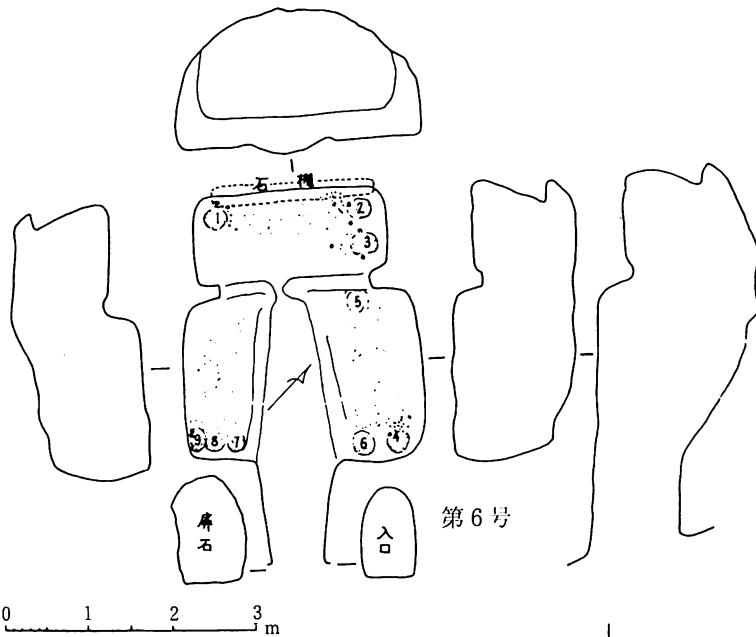
昭和33年秋、熊本県立第一高等学校の運動場が拡張されるにあたって、敷地の北側、すなわち鹿子木寂心の築いた古城の本丸南側断崖がけずられることになった。この地に横穴古墳群があることは古くから知られ、熊本市史やその他一部の記録にもみえている。しかるにこの地には明治以来陸軍の施設があったため、戦時中防空壕が掘られ、崖下にならぶ下段の横穴はすべて破壊されてしまった。おそらくこの地の横穴は、既に破壊されたものに今回の工事中発見した中段・上段の6個を加えると、総数30個近いものがあったろう。

調査は第一高等学校教諭畠本久信氏・野口貞義氏・三島彦介氏を中心に社会研究部の生徒諸君によって行なわれ、これに乙益が協力し立合った。まず昭和33年12月14日、本丸の南側崖面中腹に第1号横穴1個が発見された。ついで同月20日第2号横穴が、さらに翌年2月25日その上段ステップの東端に第3号横穴が発見され、応急調査を行なった。さらに同年3月2日、第3号横穴の西隣に第4号・第5号を発見。ついで同3月13日には第6号が発見され継続して調査を行なった。しかし第4号は内部に土砂が充满し、第5号も危険状態にあったので後の再調査を期し埋没した。したがって調査したのは第1・2・3号および第6号だけである。

古城横穴群のある本丸の丘は、阿蘇熔岩を母体に形成されているが一般に岩質柔かく、崩壊しやすいせいか完好に残るもののが少ない。しかし副葬品が豊富で、この地方の横穴古墳研究に有力な手がかりがえられた。

第1号横穴は総奥行2.65m、羨門部高さ60cm、幅50cm、羨道奥行55cmを有する。玄室の奥行2.10m、最大幅2.15m、天井までの高さ1.10mを有する。床の平面が奥へむかって梯形を呈し、奥壁下に1区、両側壁下に各1区、計3区の屍床を丸彫りにし、中央には羨道につづく通路を設ける。各屍床は浅く彫りくぼめ、おのおの床には骨粉が残り、3人の遺体を葬った形跡を確認したが、副葬品はなかった。

第2号横穴は第1号の東隣に接して発見され、総奥行3.65m、羨門部の天井はすでに崩壊し阿蘇熔岩切石の扉石が立っていた。羨道奥行85cm、幅65cm、高さは復元すると約70cmを有したらしい。玄室は床の平面が長方形を呈し、奥行2.80m、幅2.20m、天井までの高さ1.25mを有する。奥壁にそって屍床1区を丸彫りにし、両側にはなかった。しかし人骨は奥壁下の屍床に1体分（第1号人）奥にむかって右側壁下（東側）にならんで2体分（第2号人・第3号人）



第2図 古城横穴墓群実測図

が検出され、左側壁下にも1体分（第4号人）があった。第2号人と第3号人は頭を入口側にならべ、とくに内側に置かれた第2号人は顔を通路側にむけていた。そして第2・第3号人の間から銅製の帶先金具が検出されたほか、副葬品はなかった。おそらく身につけていたものであろう。この横穴の上段約3mのぼったあたりにステップがあり、須恵器の甕・提瓶・穂・皿・壺・土師器高壺・壺などが一括して発見された。中でも甕は意識的に底部を打ち抜いた形跡があり、鐵片や金銅の薄片も検出された。おそらく上段ステップにはもう1個横穴があり、須恵器類はその前庭部にならべた墓前祭祀の形跡を物語るものであろう。

第3号横穴は上段ステップにならぶ横穴群中、最東端に位する。総奥行3.00m、羨道奥行90cm、幅60cm、高さ約1mを有する。入口は阿蘇熔岩の扉石で塞ぎ、その周囲は彫りくぼめていた。玄室は床の平面が方形に近く奥行2.10m、幅2.40m、天井までの高さ1.35mを有する。床には屍床なく、白粉化した人骨の痕跡を検出したが、何体に上るか明らかでない。奥壁下とむかって左壁下におのおの刀子を1本ずつ出土しているので、少くとも2体以上を埋葬したことは明らかである。その他入口に近い右側壁下には馬具残欠らしい金銅製品破片や鐵鏃も出土した。

その西隣には第4・5・6号とならんで発見されたが、完全に調査したのは第6号横穴だけであった。第6号は古城横穴群中最大の規模を有し、遺物の量も豊富であった。総奥行4.20m、羨道奥行1.20m、幅約1m、高さ約1mを有し、入口には大きな安山岩の扉石を設けていた（1.25m、幅85cm）。玄室には中央通路をはさんで左右2区に床を丸彫りにあらわし、奥壁下には通路より約40cm高く舟形の屍床を丸彫りにする。玄室奥行3.00m、幅2.90m、天井までの高さ1.75mを有し、奥壁の床から約90cm上ったあたりに、奥壁一ぱいに段状の石棚を丸彫りにあらわす。おそらくその動機は横穴式石室の奥壁に設けた石棚に対する考え方と、横穴古墳内部の四隅に彫った段状の軒まわりに対する考え方が結合しているものであろう。

奥壁下の屍床には頭を西に置いた第1号人と、頭を東に置いた第2号人・第3号人の計3体があり、むかって東側、すなわち右屍床には頭を北にした第5号人と、頭を南にした第4号人・第6号人がならんで葬られていた。むかって左側（西側）の屍床には第7号人・第8号人・第9号人がいずれも頭を南にしてならんでいた。これらの男女性別推定年令については熊本大学医学第二解剖学教室に鑑定をお願いしたので、いずれ判定成果が明らかにされるであろう。各人骨に伴なった着装品や副葬品との関係は次の通りである。

第1号人 金環小2個（2.0cm）、管玉1個（長1.4cm）、ガラス小玉16個

第2号人 刀子片2口分、金環大2個（3.0cm）、メノウ勾玉1個、水晶切子玉1個、その他ガラス小玉および破片

第3号人 金環小2個（2.0cm）、その他ガラス玉、玉片。（ガラス玉21個とその破片22個は第2号人と第3号人のいずれに伴なったか不明。）

第4号人・第6号人 刀子2口、金環大2個（3.0cm）、同小2個（2.0cm）、ガラス玉20個、  
同破片10個

第5号人（歯のみ）首まわりに丹粉をまく。

第7号人（歯のみ）

第8号人 金環大2個（3.0cm）、木ノ実1個

第9号人（歯のみ）ガラス玉破片1個

これらの出土遺物は第一高等学校社会科研究室に整理保存されている。

要するに古城横穴古墳群は玄室内に3区の屍床を設ける典型的な肥後型の横穴古墳で、須恵器その他の遺物を考慮して7世紀中葉の所産と考えられる。そして熊本城磐根橋際にある数個の横穴や、同じく千葉城N H K熊本中央放送局敷地から発見された10個の横穴などとも一連をなし、時間的にもほど遠からぬ頃の所産と考えられる。  
(乙益重隆)

〔文 献〕

○平野流香『熊本市史』（昭和6年）

○第一高等学校社会研究部機関誌『峠』第3号（昭和35年）

### III 調査の経過

昭和30年代に行われた調査の後、横穴墓は再び樹木や笹・雑草に覆われ、その存在さえも忘れ去られようとしていたが、昭和57年8月の集中豪雨にさいして古城本丸の南崖面2ヵ所が大きく崩壊し危険状態になった。その対策を第一高等学校（田辺哲夫校長）と熊本県教育庁施設課・文化課の三者で協議し、横穴墓には学術調査を施したうえ、崖面に災害復旧の護岸工事をすることになった。

発掘調査は昭和57年11月中旬から翌年6月までの2年次にわたり、その結果、横穴墓は当初の予想を大きく上回る53基が確認され、文字のある横穴墓の発見をはじめとして多くの成果を得ることができた。

調査・整理の組織は次のとおりである。

調査主体 熊本県教育委員会

総括 森一則（文化課長）

米村嘉人（前文化課長）

岩崎辰喜（元文化課長）

佐々木正典（文化課長補佐）

林田茂一（前文化課長補佐）

隈昭志（文化課主幹・文化財調査係長）

事務担当 柴田和馬（文化課主幹・経理係長）

大塚正信（前文化課主幹・経理係長）

花田隆二（文化課参事）

松崎厚生（前文化課参事）

谷喜美子（文化課参事）

西澤八朗（文化課技師）

専門調査員 乙益重隆（国学院大学文学部教授）

原口長之（山鹿市立博物館長）

三島格（肥後考古学会長）

田辺哲夫（前熊本県立熊本高等学校長）

内藤芳篤（長崎大学医学部教授）

白木原和美（熊本大学文学部教授）

八木充（山口大学人文学部教授）

松下孝幸（長崎大学医学部講師）

調査担当 高木正文（主査・文化課学芸員）  
大田幸博（文化課技師）  
堤 圭子（文化課嘱託）  
柳原真由美（文化課嘱託）

調査協力 熊本県立第一高等学校  
熊本大学文学部考古学研究室  
肥後考古学会  
花岡興輝（熊本県立美術館美術専門員）  
甲元真之（熊本大学文学部助教授）

調査参加 白石巖・安達武敏・野口良子・堀川綾子・河北憲範・松田和昭・吉村宏康・二ノ村映子・江島園子・南秀雄・木下俊恵・岩崎さゆり・瀬丸伸子・園田美津恵・花岡興史・入江久成・明瀬慎吾・松原明美・池田伸二・馬原和広・坂口孝幸・橋本久仁昭・平俊隆・井上信之・三山茂・友口恵子・藤崎伸子・神宮美保・吉永義治・岡本直久・林田奈生子・吉武牧子・分部哲秋・石田肇・入口比呂志・中谷昭二ほか

整理参加 佐藤淳子・高村恭子・吉長都美子・工藤順子・村上恭通・江島園子・二ノ村映子・高島佳津子・中山安子・宮田フミ・笠間いつ子・渕上美香・松原明美・友口恵子・中村絹子・木下俊恵・中原由子ほか

### 調査日誌抄

昭和57年

11月15日

発掘を開始。昭和33年～同36年に調査された横穴墓の再発掘から始めた。まず6号墓と7号墓の露出。

11月16日～11月19日

1号墓～8号墓の発掘と実測。2号墓の屍床に人骨以外に馬の歯があるのを発見した。9号墓を新発見し発掘したところ人骨粉3体分と耳環1個が出土した。

11月22日～11月26日

覆土を除去したところ10号墓～18号墓を発見、発掘を始めた。

11月29日～12月3日

19号墓～22号墓を発見、発掘した。先に発掘を始めた17号墓前庭から須恵器・土師器の破片

や耳環など出土。17号墓・18号墓は未開口であることがわかった。

#### 12月6日～12月10日

23号墓～31号墓を確認。調査前の予想を大きく上回る横穴墓群であることが判明。各横穴墓の発掘続行と、概発掘横穴墓の実測・写真撮影をした。9日鳥取県米子市教育委員会から3名見学に来られた。

#### 12月13日～12月16日

18号墓の閉塞石を開ける。金銅製の杏葉・雲珠などの馬具と共に、完形の須恵器・土師器が出土。同じく未開口であった20号墓の閉塞石を除去したところ、複室の横穴墓であることがわかった。

#### 12月20日～12月27日

各横穴の発掘・実測・写真撮影を進める。20号横穴墓の玄室には河石が敷かれており、耳環・勾玉・管玉・小玉などの装身具と完形の須恵器が出土した。テレビや新聞などで調査の事が何度も報道されたので、見学者が増えた。

### 昭和58年

#### 1月6日・1月7日

年末・年始でしばらく休んでいた調査を再開。昨年の続きの発掘・実測を行う。

#### 1月13日・1月14日

16号墓羨門の前に倒れていた閉塞石を起こしたところ、外面中央に把手を表現したと考えられる四角の陰刻が見つかった。18号の右外壁に軽石で塞いだ小型横穴墓を発見した。

#### 1月17日～1月21日

8号墓の閉塞石を実測中に外面に文様の痕跡とみられる赤色顔料による彩色を発見した。17号墓の閉塞石を開けたところ、玄室は広く、「コ」字形に配置された屍床のうち右屍床上方に棚状のものが造られた特異な横穴墓であることがわかった。また31号の右外壁から須恵器を伴った小型横穴墓が見つかった。18日施設課・文化課・第一高校の三者で横穴墓の保存について協議。

#### 1月24日

調査を手伝ってくれていた河北憲範君が若くして命を絶ったので、告別式があり、高木が参列した。

#### 1月25日～1月28日

17号墓から耳環と鉄鏃出土。20号墓・21号墓などの実測を行う。19号墓～21号墓の上方で、32号墓～34号墓を発見。

#### 1月29日

昨日調査現場に、文化課嘱託の廣瀬正照君が今朝急死したと連絡があった。信じられない事

であったが、今日その告別式があった。

1月31日～2月18日

概発掘横穴墓実測・写真撮影。32号墓～34号墓の発掘。

2月21日～2月25日

34号墓の右側の覆土（約1.5～2mの厚さ）を除去。23号墓は階段状の下り口を造った半地下式の横穴墓であることがわかった。

2月28日～3月4日

35号墓を見出し発掘する。また9号墓の右上方で4基の横穴墓（後に40号墓～43号墓とする）を見出し、発掘した。2月28日に原口長之先生（県文化財専門委員）と田辺哲夫先生（第一高校長）、3月3日に白木原和美先生（県文化財専門委員）に調査指導をいただいた。

3月7日～3月11日

31号横穴墓の閉塞石を開け、内部を発掘。右屍床から人骨がやや良好な状態出土。また34号の右外壁から見つかった小型横穴墓からも頭骨など出土。調査を長崎大学医学部に依頼。11日に松下孝幸先生らに人骨調査をしていただいた。9日には甲元真之先生（熊本大学助教授）に調査の指導をいただいた。

3月14日～3月19日

36号墓～39号墓を見出し。38号墓は未開口で、右外壁に小型横穴墓が付随しているのが確認された。また39号墓も未開口であった。42号墓と43号墓の間で発見された中世薬を発掘したところ、瓦器や土師質皿とともに青白磁や染付も出土した。

3月22日

39号墓の外部を清掃中に閉塞石中央付近に傷のようなものを発見、丁寧に刷毛で土を落としたところ文字が刻まれていることがわかった。連絡で花岡興輝先生（県立美術館美術専門員）、田辺哲夫先生、甲元真之先生、文化課の村井真輝・島津義昭・野田拓治氏が駆けつけ、花岡先生により「火守」と判読された。

3月23日～3月26日

39号横穴墓閉塞石の写真撮影・文字拓本取り・閉塞状態実測などをした。

3月28日

乙益重隆先生（国学院大学教授）、三島格先生（肥後考古学会長）、田辺哲夫先生らに調査指導を頂き、39号墓の文字を確認してもらった。

3月29日

37号墓の実測や38号墓の発掘、両横穴墓とも人骨が残っていた。調査予定になかった崖面に向かって右端の地区（後に44号墓～49号墓を見出し）も調査することに決った。

4月1日

長崎大学松下孝幸先生ら 4 名に37号墓と38号墓の人骨調査をしていただいた。

#### 4月4日～4月8日

ローリングタワーを建て、39号墓の閉塞状態写真撮影。40号墓・41号墓の発掘と実測。6日  
に森貞次郎先生（九州産業大学教授）、8日に韓国の李白圭氏と李健茂氏が見学に来られた。

#### 4月11日～4月15日

横穴墓群の配置状態と地形測量。39号墓の閉塞石を開けた。内部は天井が陥没して落ち込んだ土で埋まっていた。遺物は奥屍床から鉄滓 1 個が出土したのみ。

#### 4月18日～4月21日

配置図作成。39号墓の文字の拓影をとった。未発掘の右端地区の覆土除去。

#### 4月25日～4月28日

右端地区で44号墓と45号墓の 2 基を発見し、発掘した。44号墓から耳環 1 個、45号墓から刀子 1 個が出土した。

#### 5月9日～5月20日

46号墓～49号墓を発見した。46号墓は非常に大きく、線刻文が発見され、奥屍床は後世に墓として再利用された事が確認できた。49号墓からは玉類が多数出土した。

#### 5月23日～5月27日

47号墓と48号墓を発掘。47号墓も後世に墓に再利用されていた。48号墓は奥屍床の右端部が一部残っていただけであったが、耳環 1 個と玉類などが出土した。

#### 5月30日～6月3日

配置図作成。44号墓～49号墓の実測と遺物取り上げ。

#### 6月6日～6月7日

配置図を完成させ、全景撮影などをした。7日に調査を終了した。横穴墓の総数は小型も含めて53基となった。

#### 昭和59年

##### 6月9日

肥後考古学会（三島格会長）の講演のため来熊された山口大学教授八木充先生に熊本県文化財収蔵庫で39号墓の閉塞石の文字を見させていただいた。

（高木正文）

## IV 横穴墓と遺物

### 分布と概要

古城横穴墓群は高さ15mの崖面の幅100 m の範囲に、大きく分けて三段に造られている。

上段はやや左寄りの一部に家形の天井をもつ大型の横穴墓（29号・31号墓）もあるが、ドーム形天井の普通の大きさないしやや小型化した横穴墓が多い。ほとんどの天井が陥没しており、横穴墓のある上の面が限本城の本丸跡であるので、おそらく中世の築城時、あるいはそれ以降に壊れたものと考えられる。このうち最上部にある一基（32号墓）は半地下式の構造となっている。未開口の横穴墓は3基（31号・38号・39号墓）発見され、中央よりやや右寄りの1基（39号墓）の閉塞石に「火守」または「火安」と読める文字が刻まれていた。また上段の横穴墓のうち3基（31号・34号・38号墓）の右側に付随して小型の横穴墓が掘られていた。

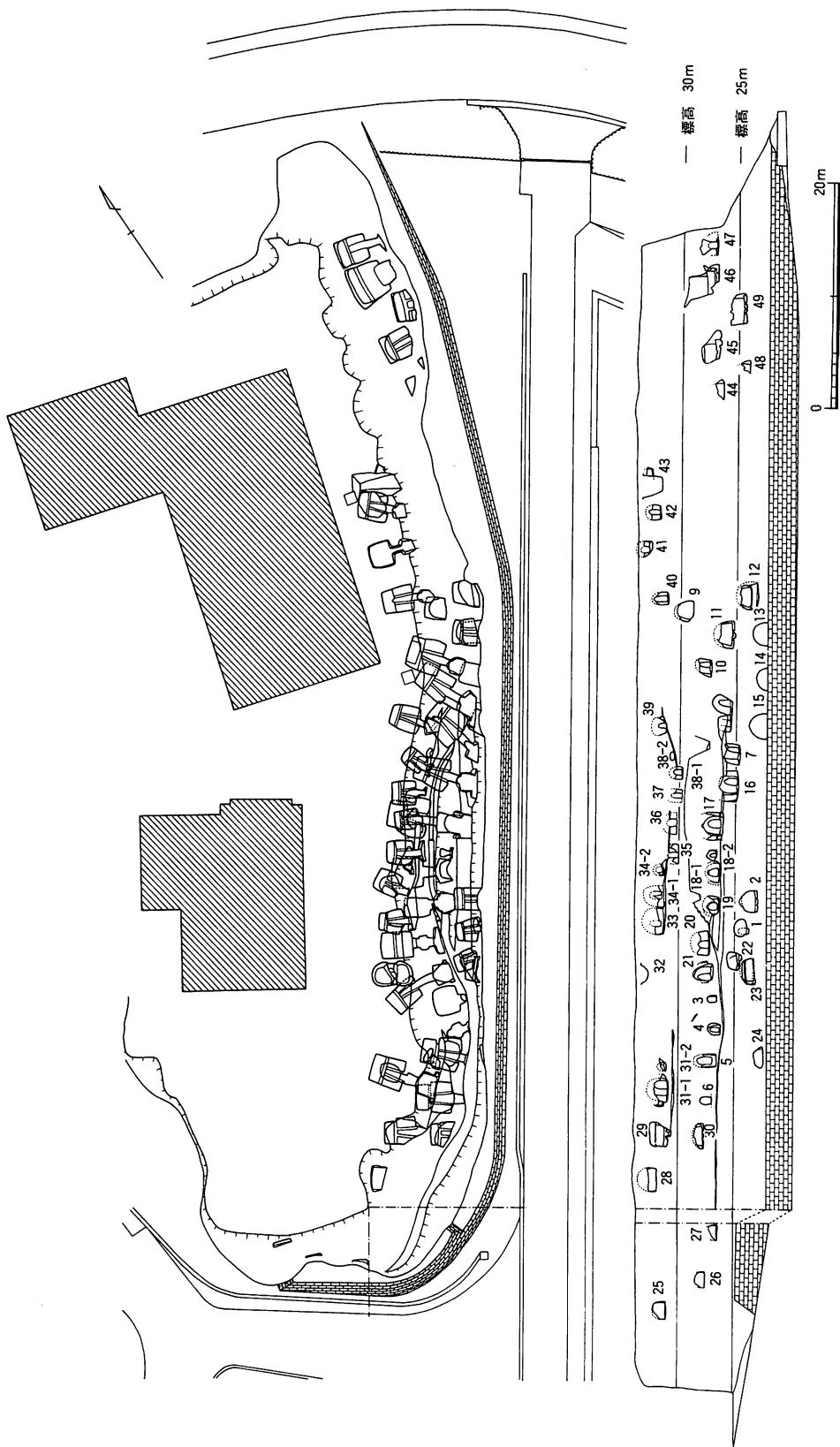
中段の横穴墓は最も保存が良く、玄室の構造もさまざまである。大型の横穴墓が多く、7基（3号・6号・8号・17号・18-1号・18-2号・20号墓）が未開口であった。このうち中央やや左寄りの1基（20号墓）は複室であった。墓室の奥壁上方に棚状の抉り込みをもつ特異な横穴墓も数基みられた。また中央部の18号横穴墓の横には小型横穴墓1基が付随して掘られていた。そのほか中段の右端近くの大型の46号横穴墓からは線刻文、中央部の16号横穴墓の閉塞石には把手を表現したような陰刻、同じく8号横穴墓の閉塞石には赤色顔料の塗られた痕跡が確認された。

下段の横穴墓は後世に削平されたり、拡幅して防空壕として利用されたりしているため、残っているのは少ないが、割合大型の横穴墓が多かったようである。

これらの横穴墓の構造は、羨門部がアーチ形で、玄室天井部がドーム形のものが多く、床面は平らなものもあるが、多くは通路をはさんで左右と奥に合計3区の屍床をもつ、いわゆる「コ」字形に屍床を配置している。

なお中段と上段に墓道状の段があるが、横穴墓の前庭部や羨門部を破壊して造られているので、中世城に伴う段状の遺構と考えられる。しかし本来あった墓道を改造した可能性も強い。

第3図 横穴墓配置図



## 1号横穴墓

遺構 下段の中央よりやや左側に位置する。主軸方向はN58°Wで、南東に開口している。

現在は不明であるが、昭和33年の調査の図面によると幅69cm、高さ98cm、厚さ14cm、を測る切石の閉塞石がみられる。

羨門部も破壊されているが乙益氏によると、幅50cm、高さ60cmであった。また羨門から玄室までは55cmを測る。

玄室は、入口部で幅219cm、奥壁部で幅152cm、奥行き210cmを測り、平面形態は隅丸の台形を呈する。「コ」字形に3区の屍床が造られており、各仕切りの中程に排水の切れ込みがある。天井はドーム形で、通路から天井中央までの高さは121cmである。

遺物 各屍床に人骨粉がみられたので3体以上葬られたと考えられるが、副葬品は発見されなかった。

## 2号横穴墓

遺構 下段にあり、1号墓の右（東）斜め下方に位置する。主軸方向はN54°Wで、南西に開口している。

現在は削られて玄室を露出しているが、昭和33年の調査時には凝灰岩切石の閉塞石が立っていた。

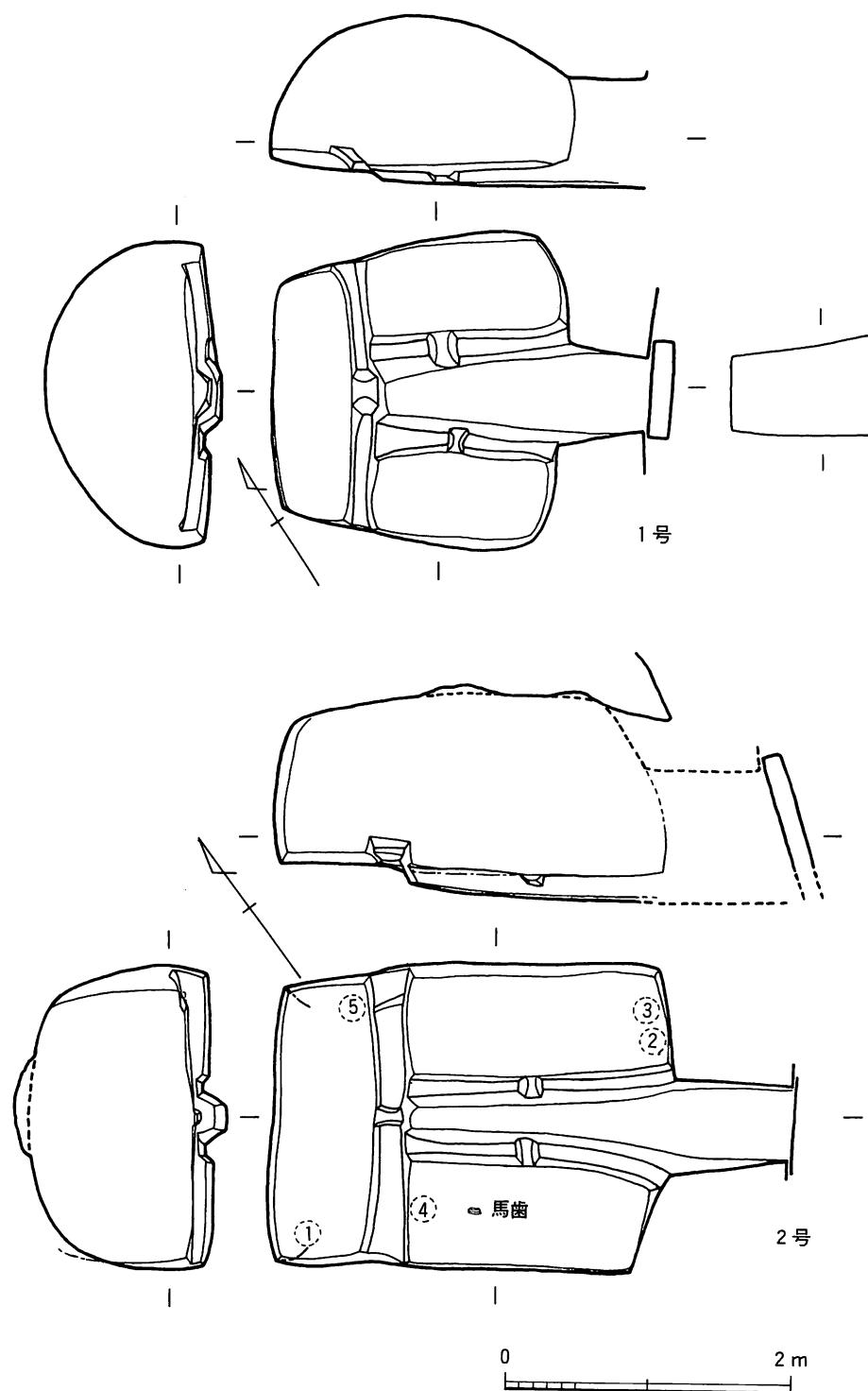
羨門部の上方は崩れていたが幅65cmで、玄室までの長さは85cm、高さは約70cmであったと考えられる。

玄室は、入口部で幅214cm、奥壁部で幅189cm、奥行き280cmを測り、平面形態はほぼ長方形を呈する。左右と奥に屍床をもつ、いわゆる「コ」字形屍床配置の横穴墓で、屍床面を広くとり、通路を狭く造っている。各仕切りの中程には排水の切れ込みがある。奥の仕切りの右端近くは一段高く造られているが、これはゴンドラ形の仕切りの名残りであろうか。天井形態はカマボコ形で、通路からの高さは135cmを測る。

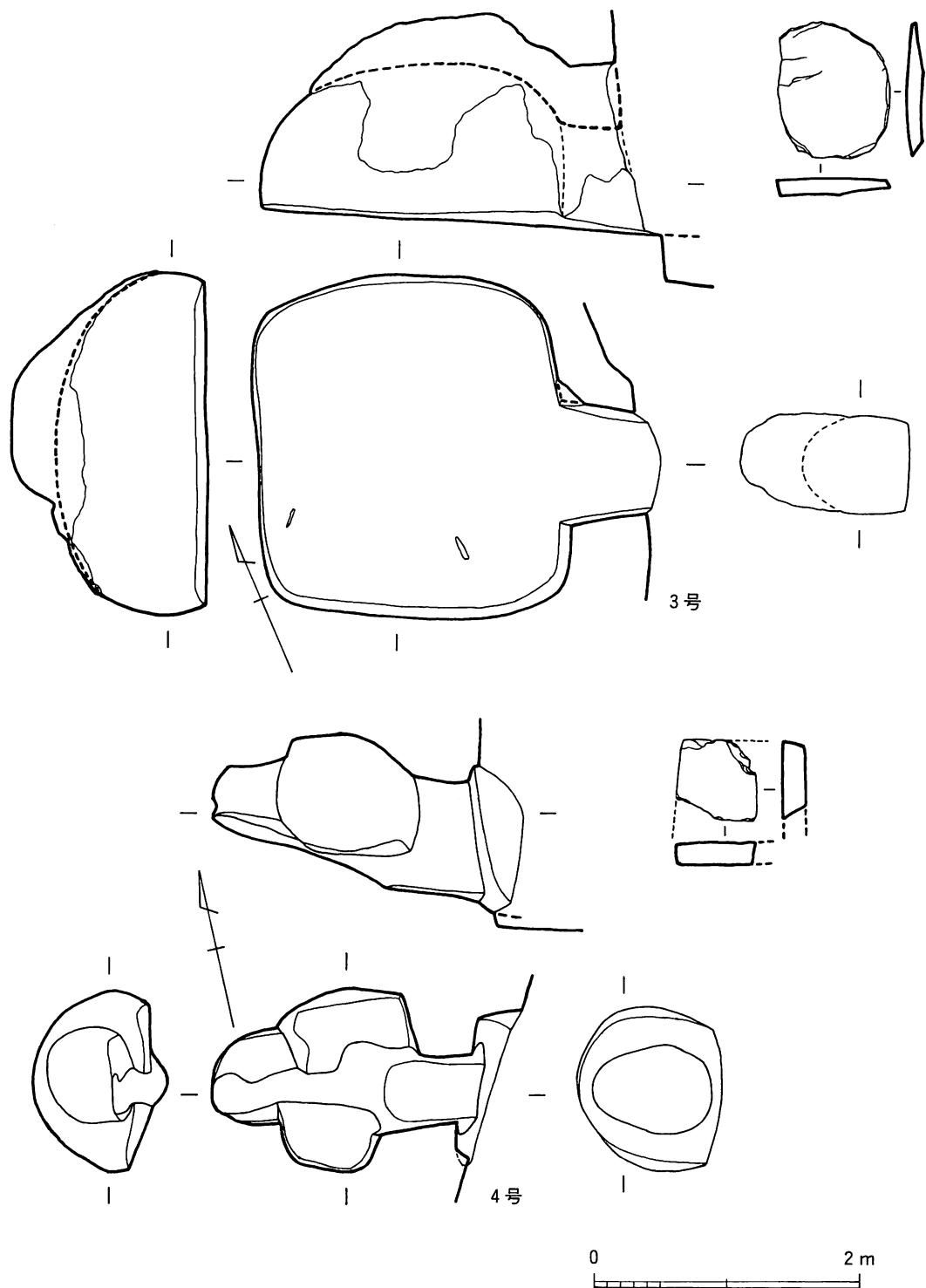
遺物 昭和33年の調査と今回の調査を総合すると、人骨は歯などの残存位置から、奥屍床奥壁に接した左に1体分（1号人）、同屍床右の手前に1体分（5号人）、右屍床入口側に2体分（2・3号人）、左屍床奥に1体分（4号人）の頭骨があったとみられ、全部で5体以上の遺体が葬られていたと考えられる。

左屍床の中央よりやや奥寄りの所からは馬の歯が発見された。これも人骨と同じく屍床面に接しており、また閉塞石の状態から後世の流入とは考えることができない。従って馬が隨葬されたものと考えられる。

昭和33年の調査では右屍床の2体の人骨の間から身につけていたとみられる銅製の帶先金具



第4図 1・2号横穴墓実測図



第5図 3・4号横穴墓実測図

が1点出土しているが、その他に副葬品はなかった。

### 3号横穴墓

遺構 中段の中央よりやや左寄りの位置にある。主軸方向はN66°Wで、南東に開口している。

閉塞石は安山岩製の扁平な割石で、幅85cm、高さ102cm、厚さ14cmを測り、昭和34年の調査時は未開口の状態であった。

羨門は上方が崩れているが、幅74cmで、高さは約80cmであったと推定される。羨門から玄室までは84cmを測る。

玄室は幅254cm、奥行き229cmを測り、平面形態はやや隅丸の方形を呈する。床面は平坦で、天井はドーム形を成す単純な構造の横穴墓である。床面から天井までの高さは約115cmと推定される。

遺物 昭和34年の調査で、玄室の左奥と左やや入口寄りの部分からそれぞれ刀子が出土し、その付近に人骨片もあった。その他入口に近い右側壁下には馬具残欠らしい金銅製品破片や鉄鏃も出土したという。

### 4号横穴墓

遺構 中段、3号墓の左側に造られている。主軸方向はN77°Wで、東に開口している。

羨門の前に幅61cm、高さ60cm、厚さ18cmを測る凝灰岩製閉塞石があった。しかしこれは本来切石の閉塞石が欠損したのちに再利用されたものである。

羨門は幅66cm、高さ90cmを測る。羨門の外に幅122cm、高さ110cmを測る装縁の痕跡がみられる。羨門から58cmで玄室に至る。

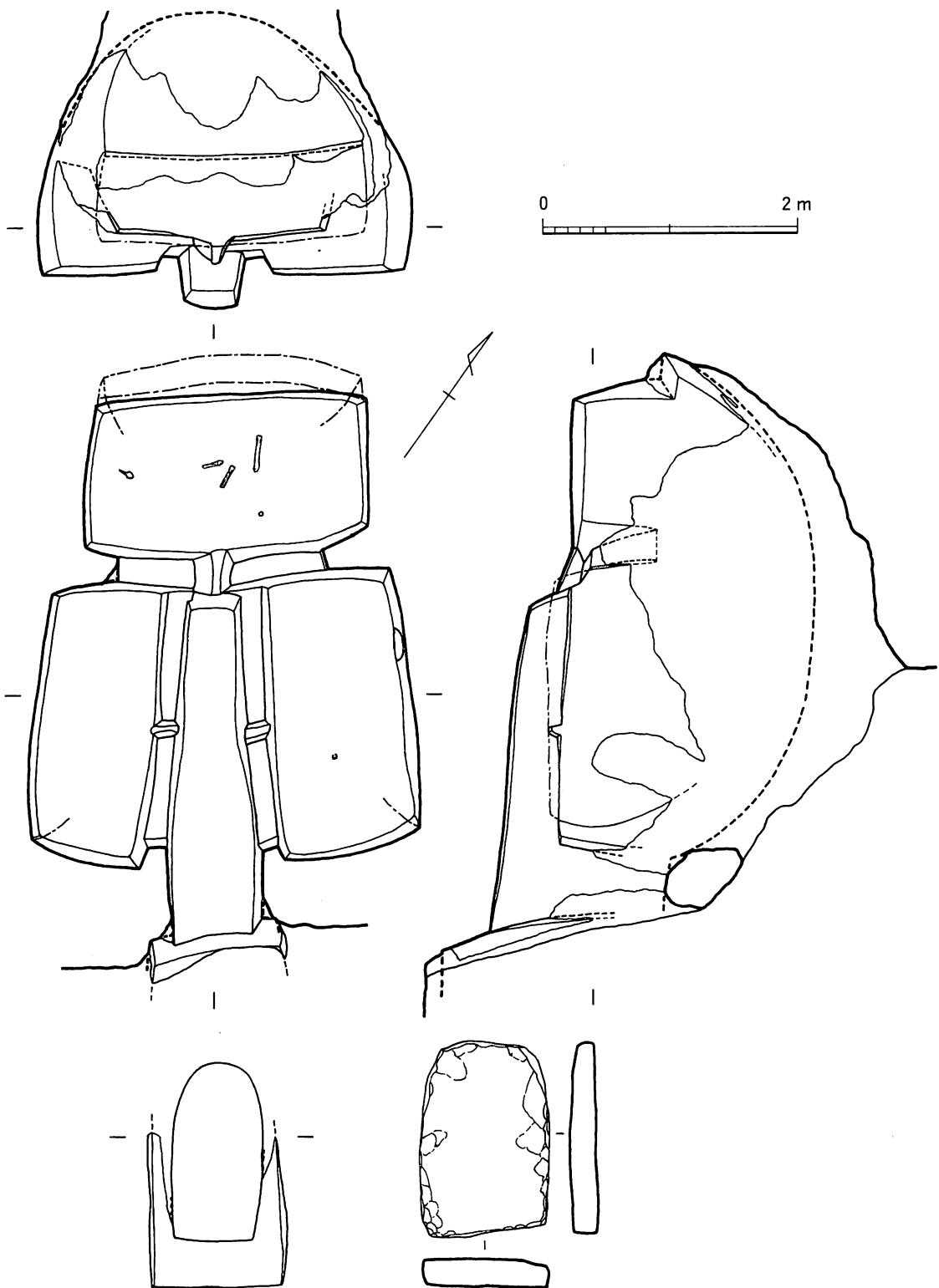
玄室は幅134cm、奥行き150cm、高さ96cmと、非常に狭く、造りも粗い。しかし一応、3区の屍床を設けているのは興味深い。恐らく、右側の3号墓と、左側の5号墓との間にこの横穴墓を造ろうとしたが、その途中で奥の左上方の一部が5号墓に通じてしまったため、小さくまとめたものと考えられる。天井はドーム形に近い。

遺物 遺物は検出されなかった。

### 5号横穴墓

遺構 中段、4号墓の左（西）側に位置している。主軸方向はN36°Wで、南東に開口している。

閉塞石はややすれていたが、未開口の状態であった。凝灰岩製の切石で造られた閉塞石であるが、割って調整した痕が残っており、上部はいくぶん丸みをおびている。幅103cm、高さ



第6図 5号横穴墓実測図

155 cm、厚さ23cmを測る。

羨門はアーム形を呈し、幅72cm、高さ140 cmを測る。羨門の前に36cmの段があり、羨門の両側に飾縁状のものがあるがこれは閉塞石を立てるための抉り込みであろうか。なお、この抉り込みの幅は108 cm を測る。羨門から64cmで玄室に至る。

玄室は、入口部で幅308 cm、奥壁部で幅212 cm、奥行き350 cm を測り、平面形態は台形に近い。奥屍床と左右屍床を設け、仕切りは高く、各仕切りの中央部には排水の切れ込みを入れている。奥屍床の仕切りは両端が立ち上がって、その上部に平坦面を作った、ゴンドラ形を呈している。奥屍床面から70cm程上の奥壁には幅20 cm程の棚状の段がみられる。天井は剝落し、半分程は陥没しているが、高さ約230 cm 程で、ドーム形を呈していたものと考えられる。

遺 物 各屍床に人骨粉がみられたが、特に奥屍床の中央部には四肢骨の一部が残っていた。副葬品は奥屍床の左端から鉄鏃が1点、同屍床の中央よりやや右寄りの手前から耳環1点が検出され、右屍床の中央よりやや入口側からも耳環1点が検出された。このうち耳環は着装していたものと考えられる。

奥屍床の耳環（第7図2）は銅地銀張りで、長径28.0mm、短径27.0mm、厚さ3.0 mm を測る。右屍床の耳環（第7図1）は銅地金張りで、長径16.0mm、短径15.0mm、厚さ8.0 mm を測る。

奥屍床の鉄鏃（第7図3）は透根広鋒両丸造棘籠被三角形式で、身の下部には段があり、全長12cmを測る。身は、長さ5.1 cm、幅4.0 cm、厚さ0.4 cm を測り、籠被は、長さ2.0 cm、幅1.1 ~0.7 cm、厚さ0.4 cm、籠代は、長さ4.9 cm、幅0.9 ~0.3 cm、厚さ0.5 cm を測る。

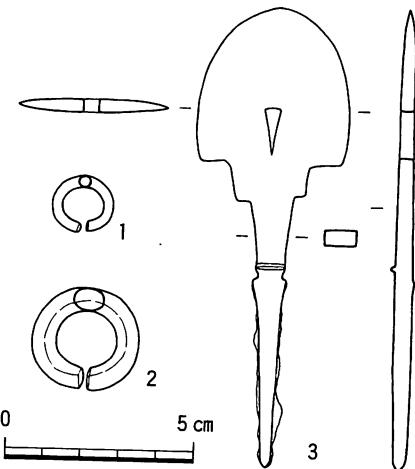
## 6号横穴墓

遺 構 中段、5号墓の左（南）側に位置している。主軸方向N55° Wで、南東に開口している。

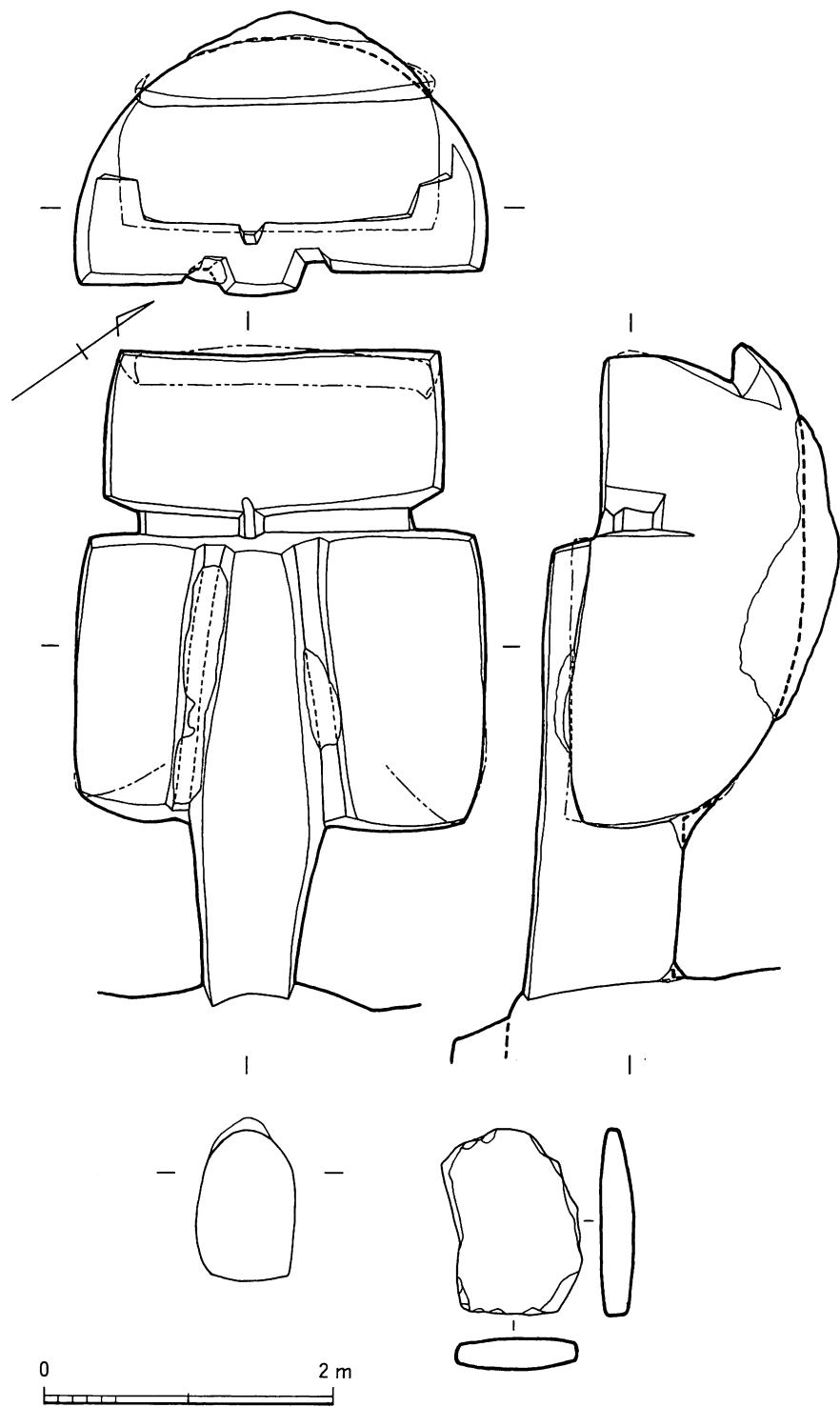
閉塞石は凝灰岩製の割石で、幅88cm、高さ128 cm、厚さ23cmを測り、昭和34年の調査時には未開口の状態であった。

羨門は幅67cm、高さ104 cm を測り、アーチ形を成している。135 cm で玄室に至る。

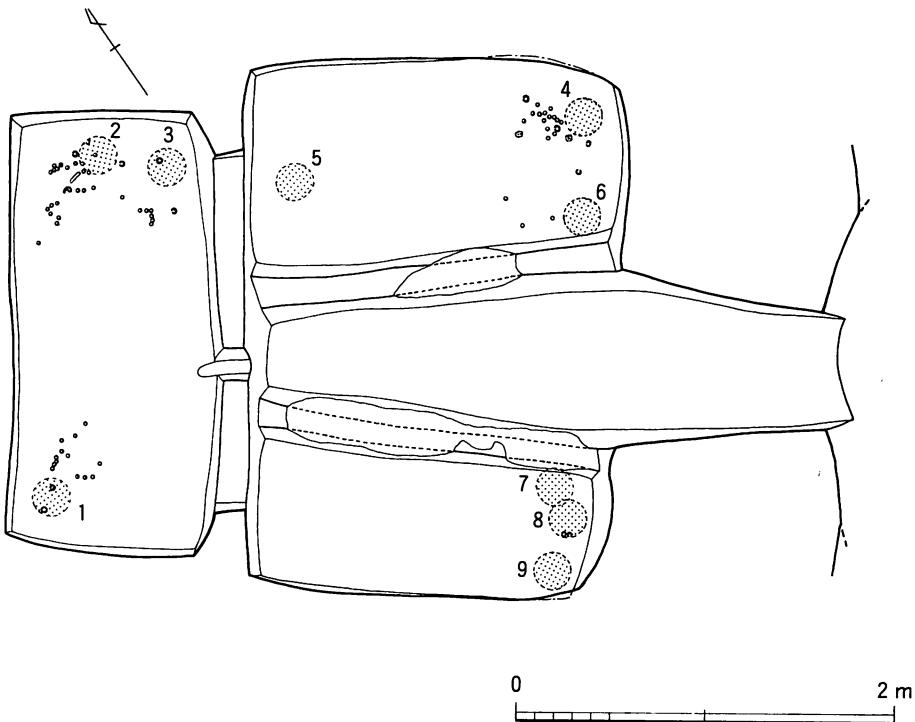
玄室は、入口部で幅284 cm、奥壁部で幅218 cm、奥行き322 cm を測る。「コ」字形に三区の屍床が設けられている。左右の屍床の仕切りには排水の切れ込みはない。左屍床よりも右屍床が



第7図 5号横穴墓出土遺物実測図



第8図 6号横穴墓実測図



第9図 6号横穴墓遺物出土状況実測図

広い。奥屍床の仕切りを正面から見るとまさにゴンドラ形の舟を表現していることがわかる。この仕切りには排水の切れ込みがある。奥壁の上方、奥屍床面から約90cmのところに、幅25cmを測る棚状の抉り込みが、奥壁いっぱいに造られている。おそらく乙益重隆氏が考えられたように「横穴式石室の奥壁に設けた石棚に対する考え方と、横穴古墳内部の四隅に彫った段状の軒まわりに対する考え方方が結合して」発生したものであろう。天井部中央はいくぶん剥落しているが、ドーム形に近く、通路中央部からの高さは約175cmを測る。

**遺物** 昭和34年の調査で各屍床から3体ずつ、合計9体の埋葬が確認された。奥屍床では奥壁に接して左頭位に1体（1号人）、その手前に右頭位に2体（2号人と3号人）があった。右屍床では中央の1体（5号人）が奥頭位に、他の2体（4号人・6号人）は入口頭位に置かれていた。また左屍床で3体（7号人・8号人・9号人）とも入口頭位であった。

遺物の出土状況については前章で乙益重隆氏の記録を紹介したが、小玉破片のうち接合したものや、刀子とされたもののうち鏽を落としたところ帶金具であることがわかったものなどがあるので、今一度訂正して紹介しておきたい。

奥屍床からは刀子1口、金環6個、メノウ製勾玉1個、水晶製切子玉1個、碧玉製管玉1個、ガラス製小玉43個とその破片10個が出土している。人骨の共伴関係は次のようになる。

1号人骨—耳環2個、碧玉製管玉1個、ガラス製小玉16個。

2号人骨—刀子1口、耳環2個、メノウ製勾玉1個、水晶製切子玉1個、ガラス製小玉とその破片。

3号人骨—耳環2個、ガラス製小玉とその破片（ガラス製小玉2個とその破片10個は2号人骨と3号人骨のいずれに伴ったか不明）。

右屍床からは帶金具2個、耳環4個、ガラス製小玉20個とその破片10個が出土しており、これらは4号人骨と6号人骨に伴ったと考えられる。

左屍床からは耳環2個、木ノ実1個、ガラス製小玉破片1個が出土している。人骨との共伴関係は次のとおりである。

8号人骨—耳環2個、木ノ実1個。

9号人骨—ガラス製小玉破片1個。

以下、6号横穴墓出土遺物について詳述したい。

奥屍床の2号人骨に伴った刀子（第10図1）は、最初2口分と見られていたが1口分の破片であった。身・茎部とも端部が欠損している。現存の全長9.3cmで、身部は現存長8.4cm、関部のところの幅1.4cm、厚さ0.3cm、茎部は現存長0.9cm、幅1.0cm、厚さ0.3cmを測る。

帶金具は右屍床から2個（第10図2、3）出土した。1個（2）は2.7cm×2.7cmで、厚さ0.25cmを測る方形の鉄板の四隅と中央に鋸をうつたものである。他の1個（3）は2.5cm×3.4cmで、厚さ0.3cmを測る長方形（一辺はやや丸味をもつ）に近い鉄板の2カ所を鋸留したものである。鋸の頭は丸く、径0.7cm～0.8cmで、高さは0.2cm～0.3cmを測る。

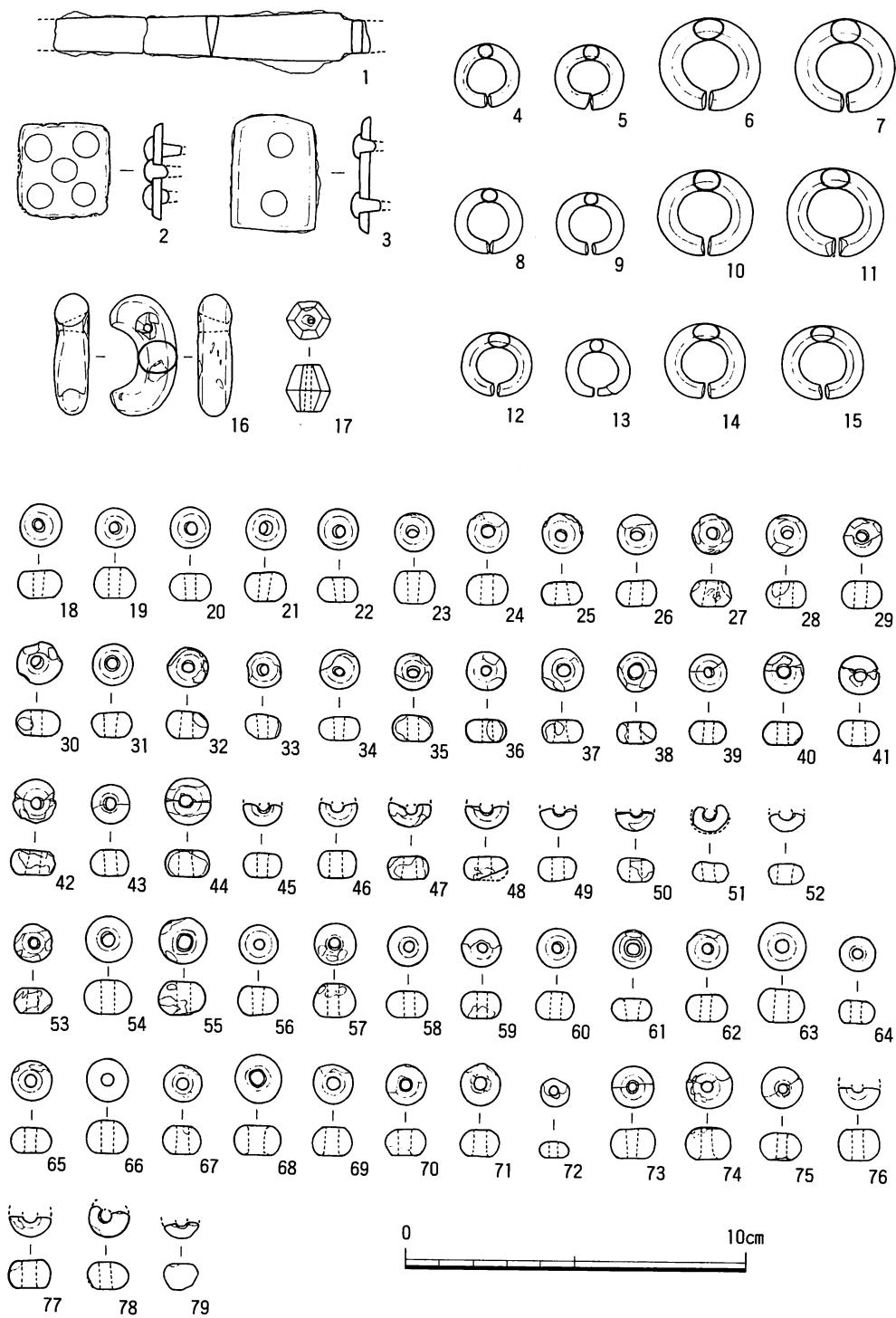
耳環は12個（第10図4～15）出土した。

4と5は1号人骨に伴ったもので、鋲が付着しているが、銅地金張りの耳環とみられる。4は長径19.5mm、短径18.5mm、厚さ4.5mmを測る。5は長径20.0mm、短径18.0mm、厚さ4.5mmを測る。6と7は2号人骨に伴った耳環で、銅地に金張りしている。6は長径29.5mm、短径26.5mm、厚さ8.5mmを測り、7は長径29.0mm、短径27.0mm、厚さ9.0mmを測る。8と9は3号人骨に伴った耳環で、銅地金張りである。8は長径20.5mm、短径19.0mm、厚さ4.5mmを測る。9は長径20.0mm、短径19.0mm、厚さ4.5mmを測る。

10～13は4号人骨と6号人骨に伴った耳環である。10と11は銅地銀張りで、10は長径28.0mm、短径26.0mm、厚さ8.5mmを測り、11は長径27.5mm、短径25.0mm、厚さ8.0mmを測る。12は銅地金張りの耳環で、長径20.5mm、短径19.0mm、厚さ7.0mmを測る。13は銅地であるが鋲と風化のため金・銀のいずれを張っていたのか不明である。長径19.0mm、短径17.0mm、厚さ4.0mmを測る。

14と15は8号人骨に伴ったものである。銅地銀張りの耳環で、14は長径24.0mm、短径22.5mm、厚さ8.0mmで、15は長径24.0mm、短径22.0mm、厚さ7.5mmを測る。

玉類のうち1号人骨に伴った管玉1個とガラス製小玉16個および9号人骨に伴ったガラス製



第10図 6号横穴墓出土遺物実測図

小玉1個は紛失しているが、その他は現存している。

メノウ製勾玉1個（第10図16）は2号人骨に伴ったもので、縦35mm、横19mm、厚さ10mm、孔径2～5mmを測り、「コ」字状を呈している。

水晶製切子玉1個（第10図17）も2号人骨に伴ったものである。径12mm、長さ14mm、孔径1.7～3.5mmを測る。

ガラス製小玉（第10図18～79）62個のうち、18～52の35個と実測できなかった2破片の37個は3号人骨に伴ったものである。また53～79の27個は4号人骨または6号人骨に伴ったものである。それらの個々については第1表に示したとおりである。

第1表 6号横穴墓出土小玉集成表

No	図版番号	材質	色調	径(mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	遺存度	出土位置	備考
1	第10図18	ガラス	緑色	12.2	7.3	4.0	完形	玄室奥屍床	2号または3号人骨に共伴
2	第10図19	ガラス	緑色	12.0	9.0	3.5	完形	玄室奥屍床	2号または3号人骨に共伴
3	第10図20	ガラス	緑色	11.9	8.1	4.0	完形	玄室奥屍床	2号または3号人骨に共伴
4	第10図21	ガラス	緑色	12.6	8.8	4.0	完形	玄室奥屍床	2号または3号人骨に共伴
5	第10図22	ガラス	緑色	11.9	6.6	4.8	完形	玄室奥屍床	2号または3号人骨に共伴
6	第10図23	ガラス	緑色	12.0	9.1	4.0	完形	玄室奥屍床	2号または3号人骨に共伴
7	第10図24	ガラス	緑色	12.3	8.5	4.0	完形	玄室奥屍床	2号または3号人骨に共伴
8	第10図25	ガラス	緑色	12.0	6.7	5.5～4.0	完形	玄室奥屍床	2号または3号人骨に共伴
9	第10図26	ガラス	緑色	12.0	8.1	3.8	完形	玄室奥屍床	2号または3号人骨に共伴
10	第10図27	ガラス	緑色	11.7	7.9	4.0	完形	玄室奥屍床	2号または3号人骨に共伴
11	第10図28	ガラス	緑色	11.5	7.2	4.5	完形	玄室奥屍床	2号または3号人骨に共伴
12	第10図29	ガラス	緑色	12.2	7.9	3.9	完形	玄室奥屍床	2号または3号人骨に共伴
13	第10図30	ガラス	緑色	12.4	7.5	4.0	完形	玄室奥屍床	2号または3号人骨に共伴
14	第10図31	ガラス	緑色	12.1	8.0	4.0	完形	玄室奥屍床	2号または3号人骨に共伴
15	第10図32	ガラス	緑色	12.4	8.2	4.2	完形	玄室奥屍床	2号または3号人骨に共伴
16	第10図33	ガラス	緑色	11.3	6.8	4.2	完形	玄室奥屍床	2号または3号人骨に共伴
17	第10図34	ガラス	緑色	12.2	7.0	4.1	完形	玄室奥屍床	2号または3号人骨に共伴
18	第10図35	ガラス	緑色	11.8	9.0	4.9	完形	玄室奥屍床	2号または3号人骨に共伴
19	第10図36	ガラス	緑色	11.4	7.1	4.5	完形	玄室奥屍床	2号または3号人骨に共伴
20	第10図37	ガラス	緑色	12.7	7.7	5.0	完形	玄室奥屍床	2号または3号人骨に共伴
21	第10図38	ガラス	緑色	11.8	6.4	4.6	完形	玄室奥屍床	2号または3号人骨に共伴
22	第10図39	ガラス	緑色	12.1	7.0	3.5	完形(接合)	玄室奥屍床	2号または3号人骨に共伴

No	図版番号	材質	色調	径(mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	遺存度	出土位置	備考
23	第10図40	ガラス	緑色	11.6	7.1	4.0	完形(接合)	玄室奥屍床	2号または3号人骨に共伴
24	第10図41	ガラス	緑色	12.2	7.3	4.5	完形(接合)	玄室奥屍床	2号または3号人骨に共伴
25	第10図42	ガラス	緑色	12.4	7.6	4.5	完形(接合)	玄室奥屍床	2号または3号人骨に共伴
26	第10図43	ガラス	緑色	12.1	7.6	4.3	完形(接合)	玄室奥屍床	2号または3号人骨に共伴
27	第10図44	ガラス	緑色	13.1	7.8	4.3	完形(接合)	玄室奥屍床	2号または3号人骨に共伴
28	第10図45	ガラス	緑色	11.4	7.6	4.1	1/2	玄室奥屍床	2号または3号人骨に共伴
29	第10図46	ガラス	緑色	11.7	8.3	4.3	1/2	玄室奥屍床	2号または3号人骨に共伴
30	第10図47	ガラス	緑色	12.0	7.2	4.1	1/2	玄室奥屍床	2号または3号人骨に共伴
31	第10図48	ガラス	緑色	12.8	7.3	5.0	1/2	玄室奥屍床	2号または3号人骨に共伴
32	第10図49	ガラス	緑色	11.1	7.5	4.2	1/2	玄室奥屍床	2号または3号人骨に共伴
33	第10図50	ガラス	緑色	10.8	7.2	4.1	1/2	玄室奥屍床	2号または3号人骨に共伴
34	第10図51	ガラス	緑色	10.4	5.5	4.0	1/2	玄室奥屍床	2号または3号人骨に共伴
35	第10図52	ガラス	緑色	9.8	5.8	3.9	1/2	玄室奥屍床	2号または3号人骨に共伴
36	—	ガラス	緑色	—	—	—	1/3	玄室奥屍床	2号または3号人骨に共伴
37	—	ガラス	緑色	—	—	—	1/3	玄室奥屍床	2号または3号人骨に共伴
38	第10図53	ガラス	緑色	10.8	7.9	3.2	完形	玄室右屍床	4号または6号人骨に共伴
39	第10図54	ガラス	緑色	13.7	9.7	5.0	完形	玄室右屍床	4号または6号人骨に共伴
40	第10図55	ガラス	緑色	14.3	9.9	5.0	完形	玄室右屍床	4号または6号人骨に共伴
41	第10図56	ガラス	緑色	11.8	8.0	4.1	完形	玄室右屍床	4号または6号人骨に共伴
42	第10図57	ガラス	緑色	12.5	10.0	4.3	完形	玄室右屍床	4号または6号人骨に共伴
43	第10図58	ガラス	緑色	11.9	8.3	3.7	完形	玄室右屍床	4号または6号人骨に共伴
44	第10図59	ガラス	緑色	11.6	7.6	3.3	完形	玄室右屍床	4号または6号人骨に共伴
45	第10図60	ガラス	緑色	11.5	8.6	3.7	完形	玄室右屍床	4号または6号人骨に共伴
46	第10図61	ガラス	緑色	11.4	7.0	5.6	完形	玄室右屍床	4号または6号人骨に共伴
47	第10図62	ガラス	緑色	12.5	8.6	3.8	完形	玄室右屍床	4号または6号人骨に共伴
48	第10図63	ガラス	緑色	13.9	9.6	4.8	完形	玄室右屍床	4号または6号人骨に共伴
49	第10図64	ガラス	緑色	10.6	6.9	3.5	完形	玄室右屍床	4号または6号人骨に共伴
50	第10図65	ガラス	緑色	12.6	9.2	3.9	完形	玄室右屍床	4号または6号人骨に共伴
51	第10図66	ガラス	緑色	13.0	10.5	4.1	完形	玄室右屍床	4号または6号人骨に共伴
52	第10図67	ガラス	緑色	11.2	8.8	4.6	完形	玄室右屍床	4号または6号人骨に共伴
53	第10図68	ガラス	緑色	14.3	8.8	5.8	完形	玄室右屍床	4号または6号人骨に共伴
54	第10図69	ガラス	緑色	12.6	8.7	5.0	完形	玄室右屍床	4号または6号人骨に共伴

No	図版番号	材質	色調	径(mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	遺存度	出土位置	備考
55	第10図70	ガラス	緑色	12.1	8.3	4.4	完形	玄室右屍床	4号または6号人骨に共伴
56	第10図71	ガラス	緑色	12.4	7.7	4.4	完形	玄室右屍床	4号または6号人骨に共伴
57	第10図72	ガラス	緑色	8.3	5.0	4.0	完形	玄室右屍床	4号または6号人骨に共伴
58	第10図73	ガラス	緑色	12.5	8.5	3.8	完形(接合)	玄室右屍床	4号または6号人骨に共伴
59	第10図74	ガラス	緑色	13.5	9.8	5.0	完形(接合)	玄室右屍床	4号または6号人骨に共伴
60	第10図75	ガラス	緑色	12.3	8.8	3.8	完形(接合)	玄室右屍床	4号または6号人骨に共伴
61	第10図76	ガラス	緑色	12.4	9.2	3.8	1/2	玄室右屍床	4号または6号人骨に共伴
62	第10図77	ガラス	緑色	12.0	8.4	3.8	1/2	玄室右屍床	4号または6号人骨に共伴
63	第10図78	ガラス	緑色	11.8	7.7	3.5	1/2	玄室右屍床	4号または6号人骨に共伴
64	第10図79	ガラス	緑色	10.4	7.9	3.8	1/3	玄室右屍床	4号または6号人骨に共伴

## 7号横穴墓

遺構 中段の中央部にある横穴墓である。主軸方向はN13°Wで、南に開口している。

羨門はアーチ形で、上方がやや崩れているが、幅68cm、高さ126cmを測る。閉塞石は無くなっていた。羨門の前に逆台形をした羨道が、長さ126cm残っていた。その奥の幅は現在178cm残っているが、復原すると約200cm程あったものと考えられる。羨門から玄室までは174cmで、この横穴墓群中で最も長い。

玄室は、入口部で幅328cm、奥壁部で幅206cm、奥行き344cmを測り、平面形態は台形を呈する。「コ」字形屍床で、仕切りは高く大きく、各仕切りの中央に排水の溝が造られている。天井部は剝落して、一部陥没しているが、復元すると通路からの高さ160cm程度と考えられる。

なおこの横穴墓は右側の8号墓、左側の16号墓よりも後に造られたと考えられ、16号墓の玄室と通じるのをさけるため主軸を右に振っているが、振りすぎたため、8号の羨道に通じてしまい、そこを軽石などで塞いでいる。

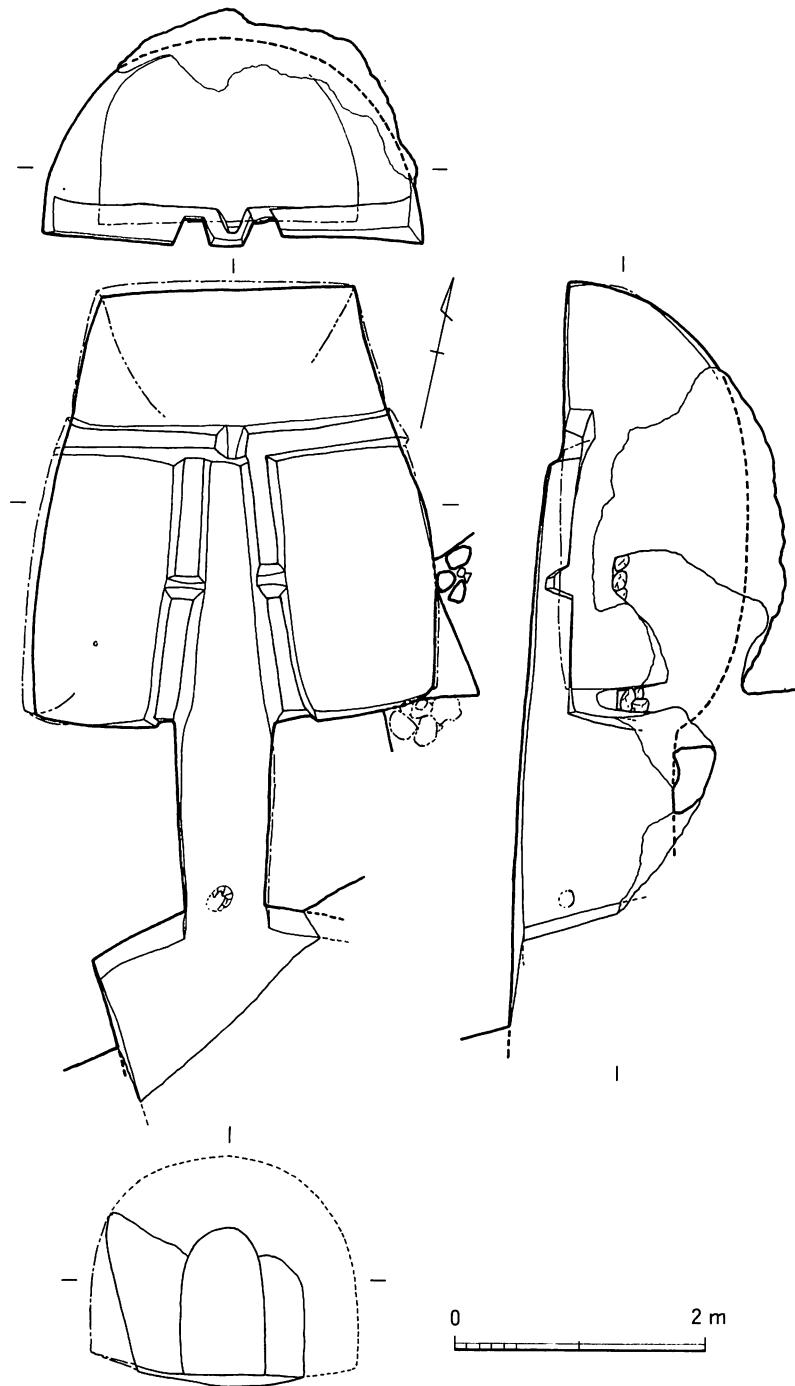
遺物 羨門部の床から35cm程上に土に埋もれて頭骨1個があった。盗掘の際に玄室内から動かされたものであろうか。

玄室内は盗掘されていたらしく、左屍床の入口側から耳環が1個検出されただけである。この耳環（第13図1）は銅地金張りで、長径21.5mm、短径19.5mm、厚さ8.0mmを測る。

## 8号横穴墓

遺構 中段中央部の7号墓の斜め右上方に位置する。主軸方向はN23°Wで、南南東に開口している。

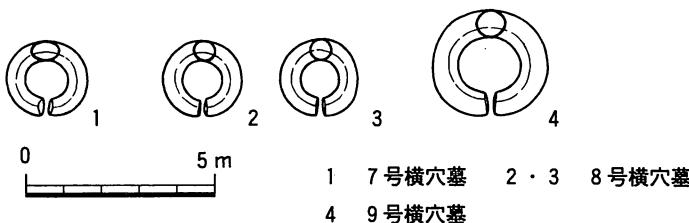
羨門の上方はやや崩れていたが、閉塞石は未開口の状態であった。閉塞石は凝灰岩製切石で、



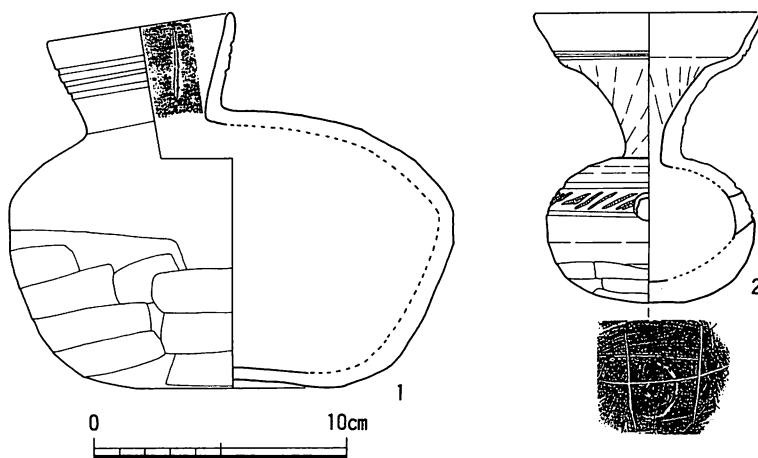
第11図 7号横穴墓実測図



第12図 8号横穴墓実測図



第13図 7・8・9号横穴墓出土耳環実測図



第14図 8号横穴墓出土須恵器実測図

上方がやや狭くなった長方形を呈する。下端の幅93.5cm、上端の幅71cm、高さ155cmで、厚さ16cmを測る。表面は研磨され、一部に赤色顔料の塗られた痕跡がある。痕跡をたどると直線的に並んでおり、しかも全面が塗られていたのではないようなので、文様が描かれていたものと考えられる。しかし図文の形状については推測が困難である。閉塞石の前部は凝灰岩中に含まれる軽石9個で固められていた。

羨門の幅71cmで、高さは128cm程度と推定され、アーチ形に復原される。羨門の外に長さ229cmの羨道が現存している。羨道の平面形態は途中に飾り縁があるので、逆台形を二つ重ねた形を呈する。その奥の幅は206cmを測る。7号墓で述べたように左端の2ヵ所が7号墓の玄室と通じたため数個の軽石で塞いでいる。この軽石は8号墓の閉塞石を固めていたものを利用したものであろうか。また軽石に混じって、須恵器の壇1個と甕の破片1個も用いられていたが、これは8号墓の羨道にあったものを使ったのであろうか。

羨門から162cmで玄室に至る。玄室の平面形態は長方形を呈し、入口部で幅270cm、奥壁部で幅209cm、奥行き318cmを測る。「コ」字形屍床で明瞭な仕切りがある。奥の仕切りの右端は反り上がっておりゴンドラ形の名残りとみられる。天井部中央付近は剥落しているが、カマボ

コ形を呈し、高さ約170 cm を測る。

遺 物 昭和36年の調査と今回の調査で5体以上の埋葬が行われていたことが確認された。奥屍床では右側と左側の各1カ所に歯が残っており、右屍床では入口側の2カ所に歯があった。また左屍床の1カ所にも歯がみられた。

遺物は奥屍床の右側で検出された歯のところから耳環が2個見つかったが、これはこの人骨の着装されていたものと考えられた。右屍床の奥には須恵器の平瓶1個が副装されていた。また羨道の左奥から須恵器の壇1個、羨道の左側の飾り縁の前から須恵器の甕の破片が、軽石礫と共に発見された。

玄室奥屍床から出土した耳環2個（第13図2・3）はいずれも銅地に銀張りしたもので、2は長径20.5mm、短径19.5mm、厚さ6.5mmを測り、3は長径21.0mm、短径19.5mm、厚さ6.0mmを測る。

玄室右屍床から出土した須恵器の平瓶（第14図1）は完形である。いくぶん上げ底ぎみの平底で、胴部下はヘラケズリ整形を行っている。胴部上方は肩が張り、口縁部は短く開き、口唇部は内湾ぎみである。口縁部の外面には三条の沈線をめぐらし、内面にはヘラ記号をついている。焼成は良好で、色調は黒灰色を呈する。胴径17.6cm、口径7.5cmで、器高は14.7cmを測る。

羨道から出土した須恵器の壇（第14図2）は口縁部の一部が欠損しているが、ほぼ完形である。胴部は丸く、頸部はねじりを行なってしづかっている。全体に回転横ナデされ、底部付近はヘラケズリを行なっている。胴部の穴の所には二条の凹線をめぐらし、その間にハケを押し当たした文様を施している。また口縁下部には2条（部分的には1条）の沈線をめぐらしている。焼成はやや良で、色調は茶灰色を呈する。なお底面にはヘラ記号があり、胴部内には穴を開けた部分の粘土の焼けたものが遊離して入っている。口径9.0cm、高さ11.4cmを測る。

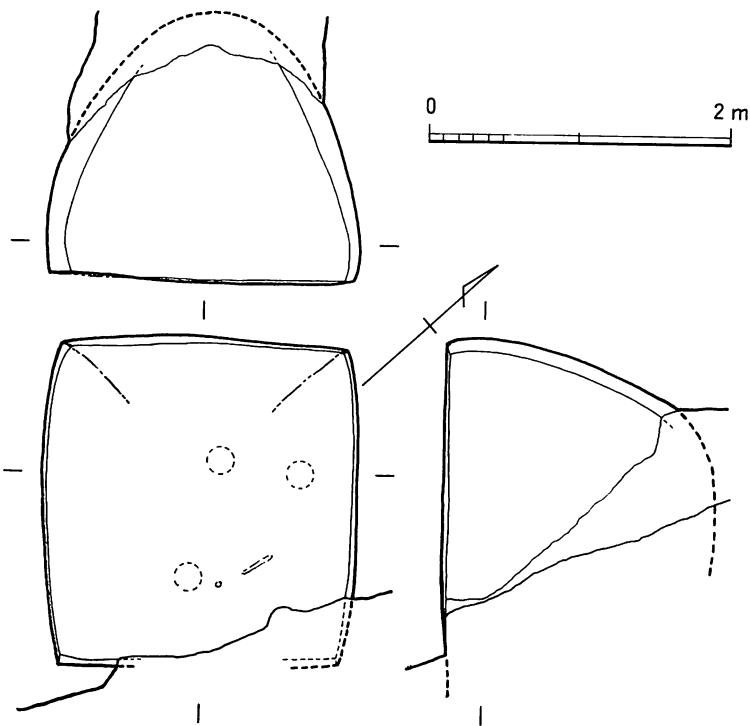
羨道から出土した須恵器の甕の破片は胴の一部で、胴径約50cm程あったと推定され、内面には全体に同心円文タタキ、外面には平行タタキがみられる。焼成はやや良で内面は茶灰色、外表面は暗灰色を呈する。

## 9号横穴墓

遺 構 中央よりやや右寄り、中段やや上方に位置する。主軸方向はN48°Wで、南東に開口している。

昭和57年に崩れ落ちた所の1カ所であるため、羨門から玄室の一部は無くなっている。玄室は平面形態が正方形に近く、幅206cm、奥行き216cmを測る。屍床は平坦なままである。天井部はドーム形または方形造と考えられる。高さは180cmと推定される。

遺 物 尸床面の3カ所に頭骨片や歯が認められたので3体以上が埋葬されていたものと考え



第15図 9号横穴墓実測図

られる。

入口側にあった頭のところから耳環が1個検出された。この耳環（第13図4）は銅地に金張りしたもので、長径30.5mm、短径26.5mm、厚さ8.0mmを測る。

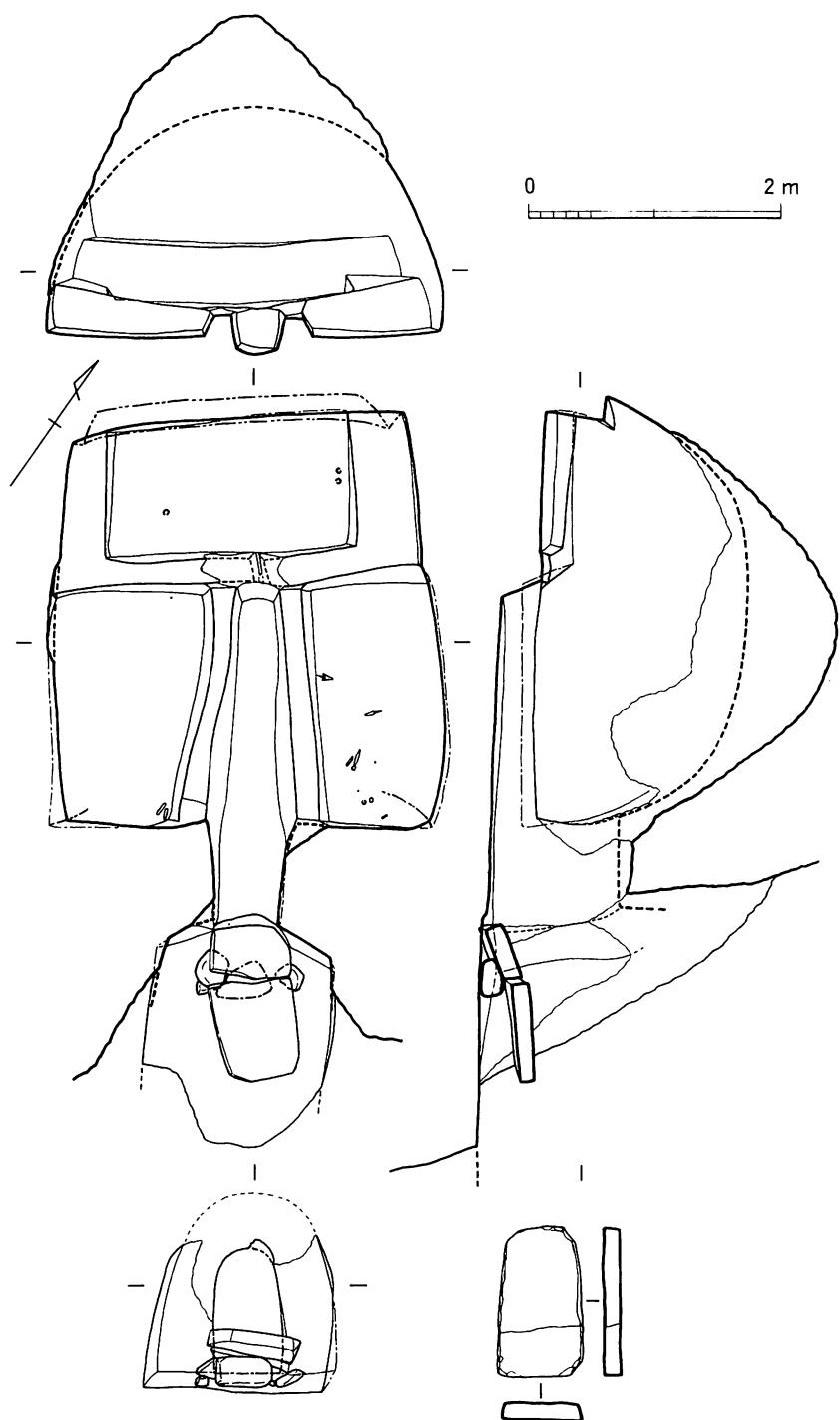
### 10号横穴墓

**遺構** 中段のやや右寄り、9号墓の左下方、8号墓の右上方に位置する。主軸方向はN35°Wで、南東に開口している。

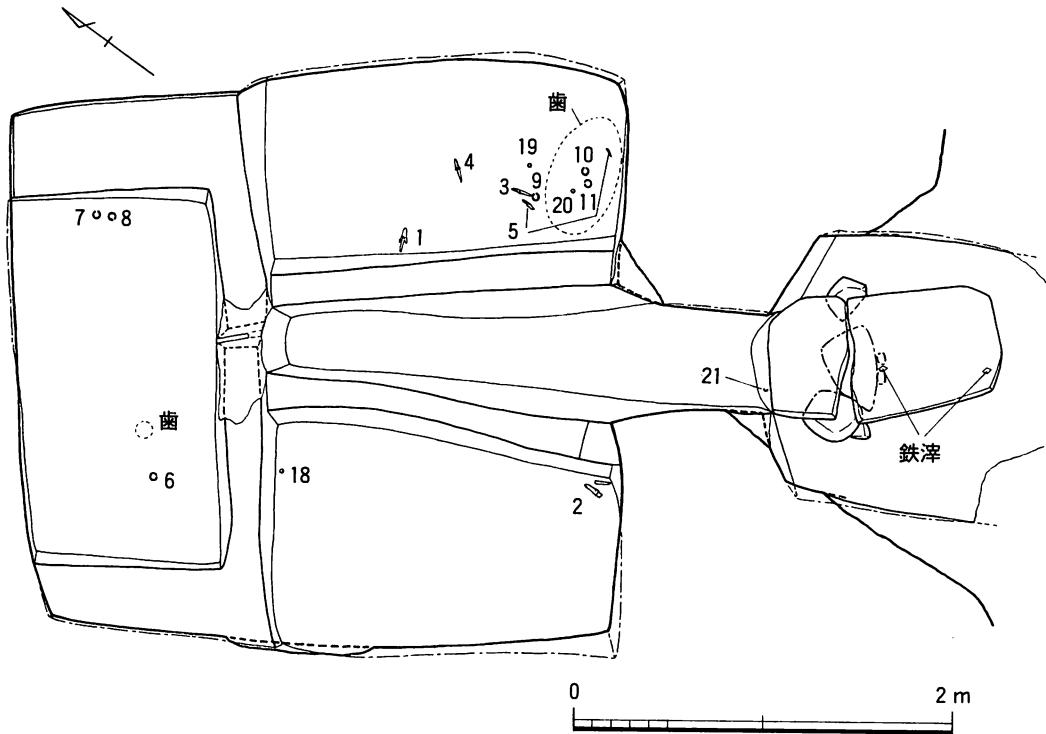
閉塞石は引き倒されたらしく、二つに割れていた。凝灰岩製切石で、復原すると幅68cm、高さ119cm、厚さ14cmを測る。正面観は長方形に近いが、上方は丸みを帯びている。倒れに閉塞石の下に閉塞石の前を固めていた軽石が数個みられた。

羨門はアーチ形で、幅55cm、高さ103cmを測る。羨門の前に幅142cm、現存長158cmを測る羨道がある。

羨門から100cmで玄室に至る。玄室の平面形態は正方形に近く、入口部で幅315cm、奥壁部で幅260cmを測り、奥行きは320cmを測る。屍床は「コ」字形に配置されている。奥屍床は構造が特異で、両端に仕切りから続いた平坦面を残している。その状態はあたかも剖貫の石棺を据えたようである。奥壁の中段、奥屍床面から約50cm程上には、幅20cmを測る棚状の遺構が壁



第16図 10号横穴墓実測図



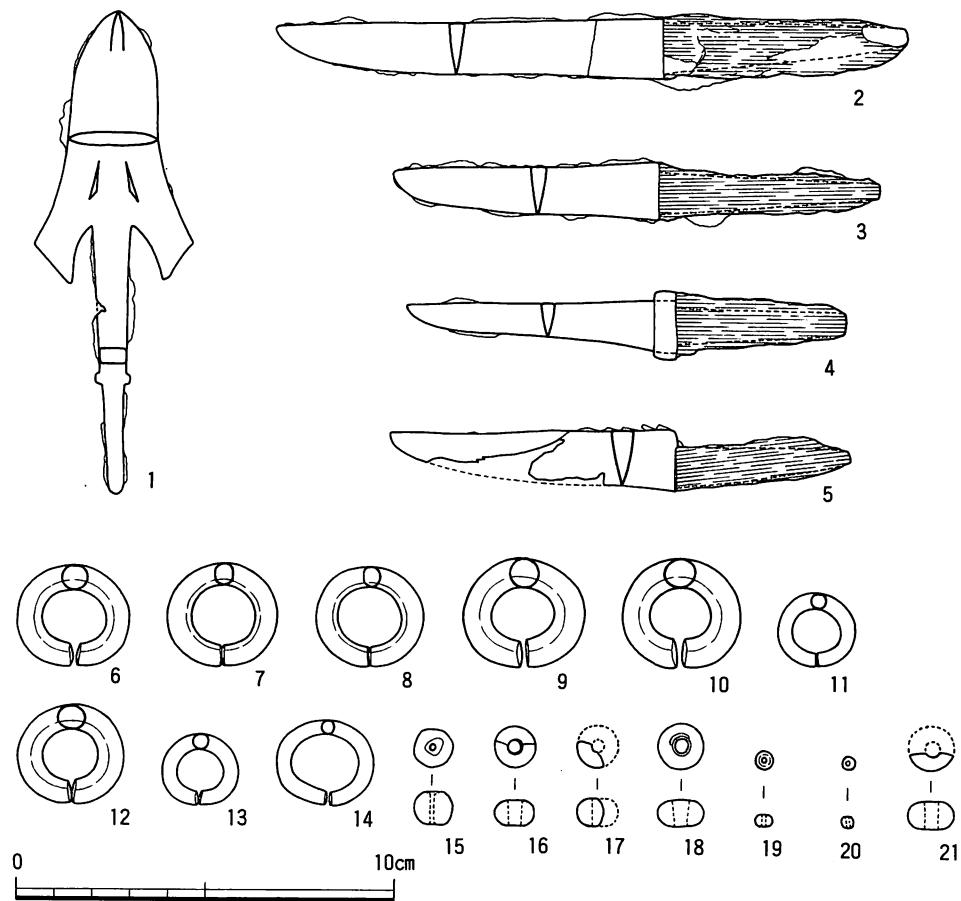
第17図 10号横穴墓遺物出土状況実測図 (図中の遺物番号は第18図と一致)

面いっぽいに造られている。奥屍床の仕切り中央部には排水の溝があるが、左・右屍床の仕切りにはない。玄室の天井部は崩壊しているが、ドーム形で、高さ約195cmと考えられる。

**遺物** 盜掘されていたが、歯の残存位置と耳環の残存数からみて、各屍床に2体以上が埋葬されていたものと考えられる。遺物は、奥屍床から耳環3点、メノウ製小玉1個とガラス製小玉の破片2個（うち1個は左屍床のものと接合）が検出された。右屍床からは鉄鎌1点、刀子3点、耳環3点、ガラス製粟玉2個が検出された。また左屍床からは刀子1点と耳環3点が検出された。その他の羨門のところからガラス製小玉の破片1個、倒れた閉塞石の下から鉄滓が2点検出された。このうち小玉は玄室内にあったものが盗掘の際にかき出されたものと考えられる。

鉄鎌は右屍床から1点（第18図1）出土した。形態から透根広鋒両丸造脇抉三角式と呼ぶべきもので、1対の透があり、全長は12.7cmを測る。身は、長さ7.2cm、幅4.2cm、厚さ0.35cmを測り、鎌被は、長さ4.1cm、幅1.1～0.75cm、厚さ0.4cm、鎌代は、長さ2.9cm、幅0.6～0.45cm、厚さ0.4cmを測る。

刀子は総数4点（第18図2～5）検出された。2は、左屍床から検出されたもので、二つに折れていた。全長16.7cmで、身部長10.3cm、茎部長6.4cmを測る。身部は、最大幅16.0cm、厚さ4.0cmを測る。茎部は木質が残っている。3～5は、右屍床から出土したものである。3は、



第18図 10号横穴墓出土遺物実測図

全長12.9cm、身部長7.1cm、茎部長5.8cmを測る。茎部は木質で被われている。身部は、最大幅1.5cm、厚さ0.4cmを測る。4は、全長11.6cmで、柄金具が付けられており、刀は研ぎ減りが著しい。身部は、長さ7.2cm、最大幅1.35cm、厚さ0.4cmを測り、切羽の幅は0.6cmである。茎部は長さ4.4cmで、木質が良く残っている。5は、欠損が激しいが、接合すると、全長12.2cmを測る。身部は、長さ7.6cm、最大幅1.6cm、厚さ0.6cmを測り、茎部は長さ4.6cmで木質が残っている。関の上方は大きく切り込まれている。

耳環は9点（第18図6～14）検出されたが、いずれも銅地に銀張りである。なお13のみはやや金色を帯びた銀である。奥屍床から検出された6～8の耳環のうち、7と8は対である。6は、長径30.0mm、短径26.5mm、厚さ7.0mmを測り、7と8は、共に長径28.5mm、短径26.5mm、厚さ5.0mmを測る。奥屍床から検出された9～11では9と10が対と考えられる。9は、長径32.0mm、短径28.0mm、厚さ7.5mmを測り、10は長径31.0mm、短径28.5mm、厚さ8.0mmを測る。11は、長径20.5mm、短径19.5mm、厚さ4.5mmである。左屍床から検出された12～14は出土地点が不明確であるが、12は左壁近く、13は入口側壁近くから出土した。12は、長径28.0mm、短径

26.0mm、厚さ8.0mmで、13は、長径20.0mm、短径18.0mm、厚さ4.0mm、14は、長径26.0mm、短径22.5mm、厚さ4.0mmを測る。

玉類は5個と、破片2個（第18図15～21）が検出された。各々については第2表と第3表に示したとおりであるが、その内訳はメノウ製小玉1個、ガラス製小玉4個分、ガラス製粟玉2個である。

第2表 10号横穴墓出土小玉集成表

No	図版番号	材質	色調	径(mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	遺存度	出土位置	備考
1	第10図15	ガラス	赤褐色	11.0	9.3	1.8	完形	玄室奥屍床	
2	第10図16	ガラス	緑色	10.7	6.8	3.7～4.0	完形（接合）	玄室奥・左屍床	追葬または盗掘の際に割れて分散したと考えられる
3	第10図17	ガラス	緑色	約11.0	6.6	約3.0	1/3	玄室奥屍床	
4	第10図18	ガラス	緑色	11.7	6.6	3.8～4.7	完形	玄室右屍床	
5	第10図21	ガラス	緑色	約12.0	7.2	約4.0	1/2	羨門	盗掘の際に移動したと考えられる

第3表 10号横穴墓出土粟玉集成表

No	図版番号	材質	色調	径(mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	遺存度	出土位置	備考
1	第10図19	ガラス	緑色	4.9	2.8	1.2	完形	玄室右屍床	
2	第10図20	ガラス	青色	3.9	3.1	1.1	完形	玄室右屍床	

### 11号横穴墓

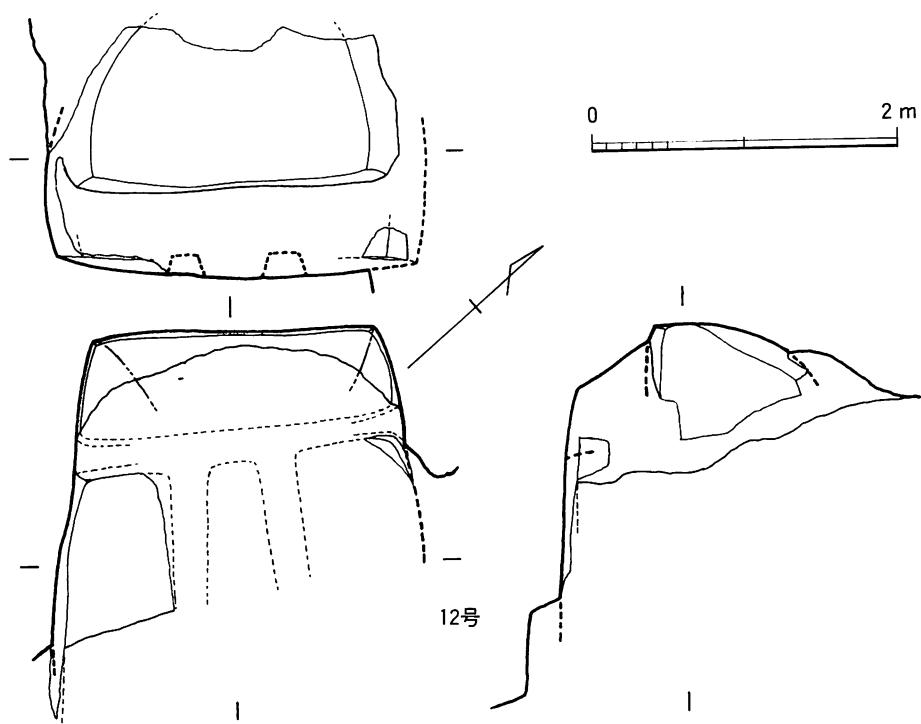
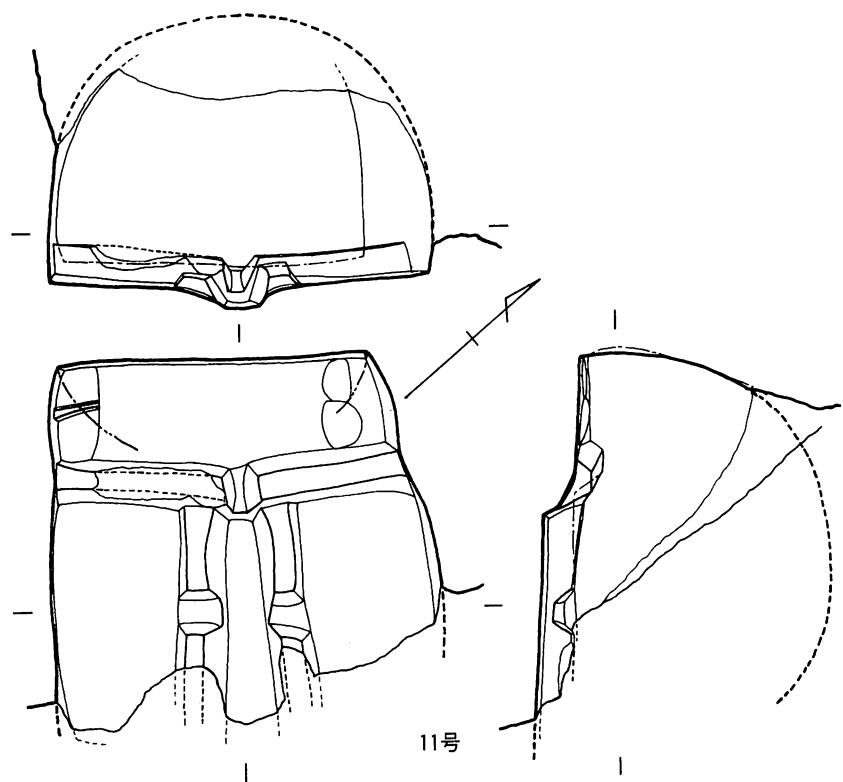
遺構 中段のやや右寄り、10号墓の右下、9号墓の左下に位置する。主軸方向はN52°Wで、南東に開口している。

羨道部から玄室の前部にかけては崩れ落ちている。しかし玄室は、入口部で幅257cm、奥壁部で幅200cm、奥行き約245cmを測り平面形態はいくぶん台形ぎみの方形を呈する。「コ」字形屍床で、通路を狭く、屍床を広く造っている。各屍床の仕切りの中央部に排水の溝を造っている。奥屍床の両端には2つずつの枕がある。右の枕は楕円形に彫り窪めており、左の枕は方形に浅く彫り窪めて間に仕切りを残している。天井部は崩れているが、高さ190cm程度で、ドーム形を呈していたものと考えられる。

遺物 何も検出されなかった。

### 12号横穴墓

遺構 下段のやや右寄り、11号墓の右下に位置する。主軸方向はN51°Wで、南東に開口している。



第19図 11・12号横穴墓実測図

玄室は半分程が崩れ落ちており、まだ改造して仕切りをとり除いて階段状にしている。しかし復原すると「コ」字形屍床であったことがわかる。平面形態は台形を呈していたと考えられ、奥壁部は幅180 cmを測り、入口部は幅約240 cmであったと推定される。奥行きは250～260 cm程度ではなかったかと思われる。奥屍床は左・右の屍床よりも50cm程高く、他の横穴墓に比べると異様に高い。天井部は崩れ落ちているが、高さ約190 cmで、ドーム形を呈していたものと考えられる。

遺物 後世に再利用されているため、何も残っていなかった。

### 13号横穴墓

遺構 下段のやや右寄り、12号墓の左斜め下に位置する。主軸方向は約N60°Wで、南東に開口している。

戦時中、防空壕に改造されたため、玄室の天井部付近が残るのみで、規模や構造は不明である。天井部も崩れているがほぼドーム形を呈する。

遺物 不明。

### 14号横穴墓

遺構 下段、13号墓の左に並んでいる。主軸方向は約N40°Wで、南東に開口している。

13号墓同様、防空壕に改造されたため、詳細は不明、天井部はほぼドーム形を呈する。

遺物 不明。

### 15号横穴墓

遺構 下段、14号墓の左に並んでいる。主軸方向は約N30°Wで、南東に開口している。

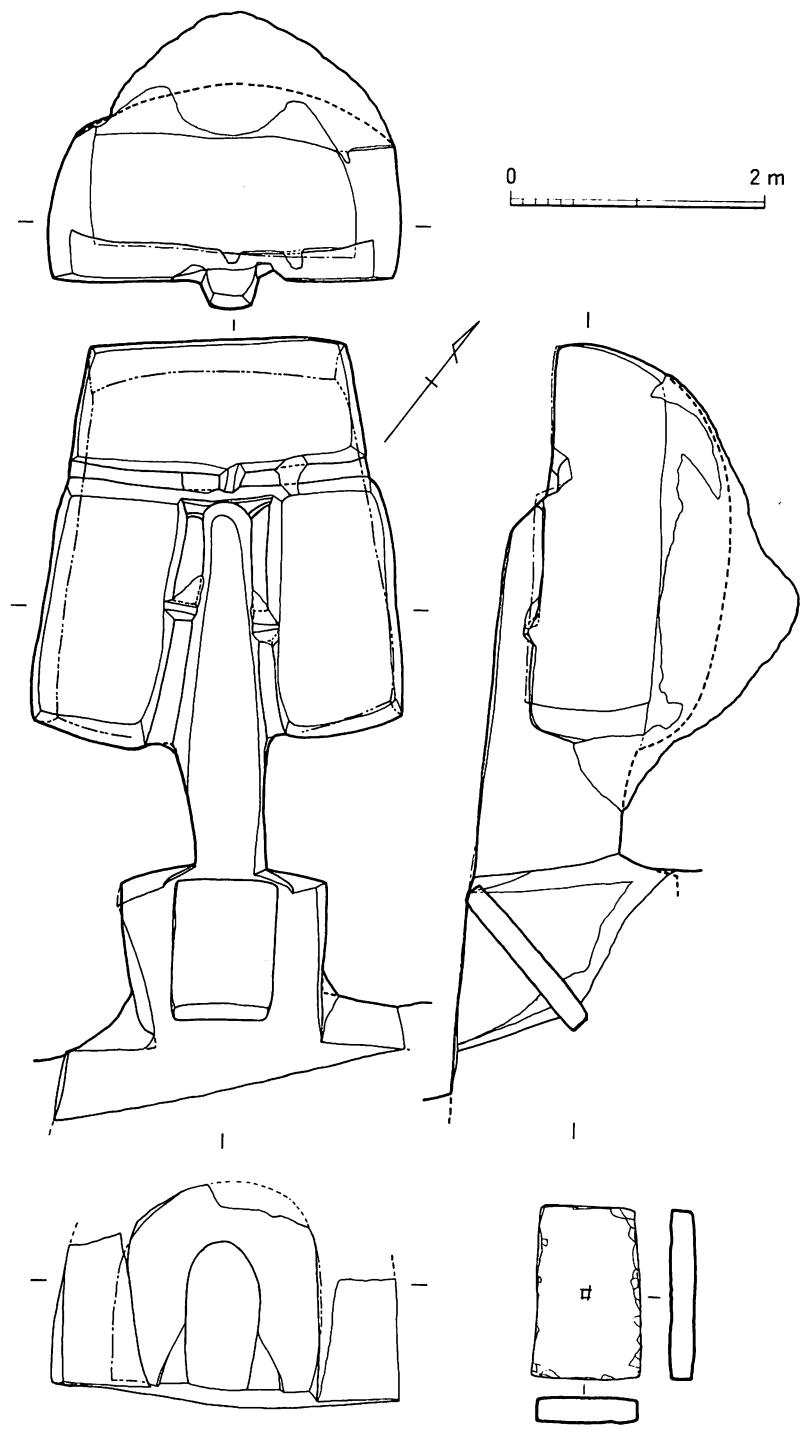
この横穴墓も破壊され防空壕にかわっているので、構造・規模は不明である。ただ天井部はドーム形を呈していたことがわかる。

遺物 不明。

### 16号横穴墓

遺構 中段の中央部付近に位置する。すぐ右には7号墓が並んでいる。主軸方向はN38°Wで、南東に開口している。

閉塞石は斜めに引き倒されていた。凝灰岩製切石の閉塞石で、正面観は上方がやや狭い長方形を呈する。下端部の幅86cm、上端部の幅75cm、高さ137cm、厚さ21cmを測る。正面の中央部に薬研彫りで四角を彫ってある。彫られている位置や形状から、把手を表現したのではないかと推測される。



第20図 16号横穴墓実測図

羨門部はアーチ形で、幅59cm、高さ118cmを測る。羨道部は長さ192cm残存しており、飾り縁が付いている。羨道の奥は幅158cmを測る。また飾り縁部分の幅は266cmを測る。

羨門から102cmで玄室に至る。玄室は、入口部で幅293cm、奥壁部で幅190cm、奥行き318cmを測り、平面形態は台形を呈する。屍床は「コ」字形に配置されており、各仕切りの中央部に排水の溝がある。玄室の各壁面の上方に軒先を表現した屈折線がみられるが、その上方はドーム形を成していたと考えられ、家形の痕跡を残したドーム形天井とみることができる。天井までの高さは約175cmであったと考えられる。

**遺物** 盜掘されていたので遺体の埋葬状態は不明であった。

遺物は玄室内では奥屍床の攪乱土中から耳環が1点検出された。この耳環（第21図1）は胴地に金張りしたもので、長径23.5mm、短径21.5mm、厚さ8.5mmを測る。

また羨門前に倒された閉塞石の上の覆土中から口縁部の欠損した須恵器の頸が1点検出された。この頸（第21図2）はやや肩が張った胴部をもち、一条の凹線を施し、その上に斜めに八ヶの歯を押し当てた文様をめぐらしている。頸部はよくしまり、長くのび、中程に一条の沈線を施している。全体に回転横なでを行ない、底部はヘラケズリしている。内部には穴をあけた際に中に入った粘土が焼けてとじ込められている。全体的に焼成は良く、暗灰色を呈し、一面には自然釉がかかり、黒く光っている。現存高は13.8cmを測る。

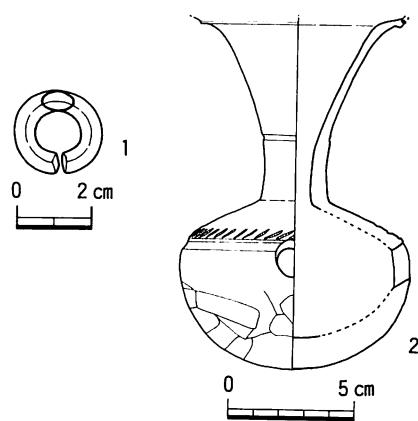
その他、羨門近くの覆土中から鉄滓1点が検出されているが、後世のものである可能性が強い。

## 17号横穴墓

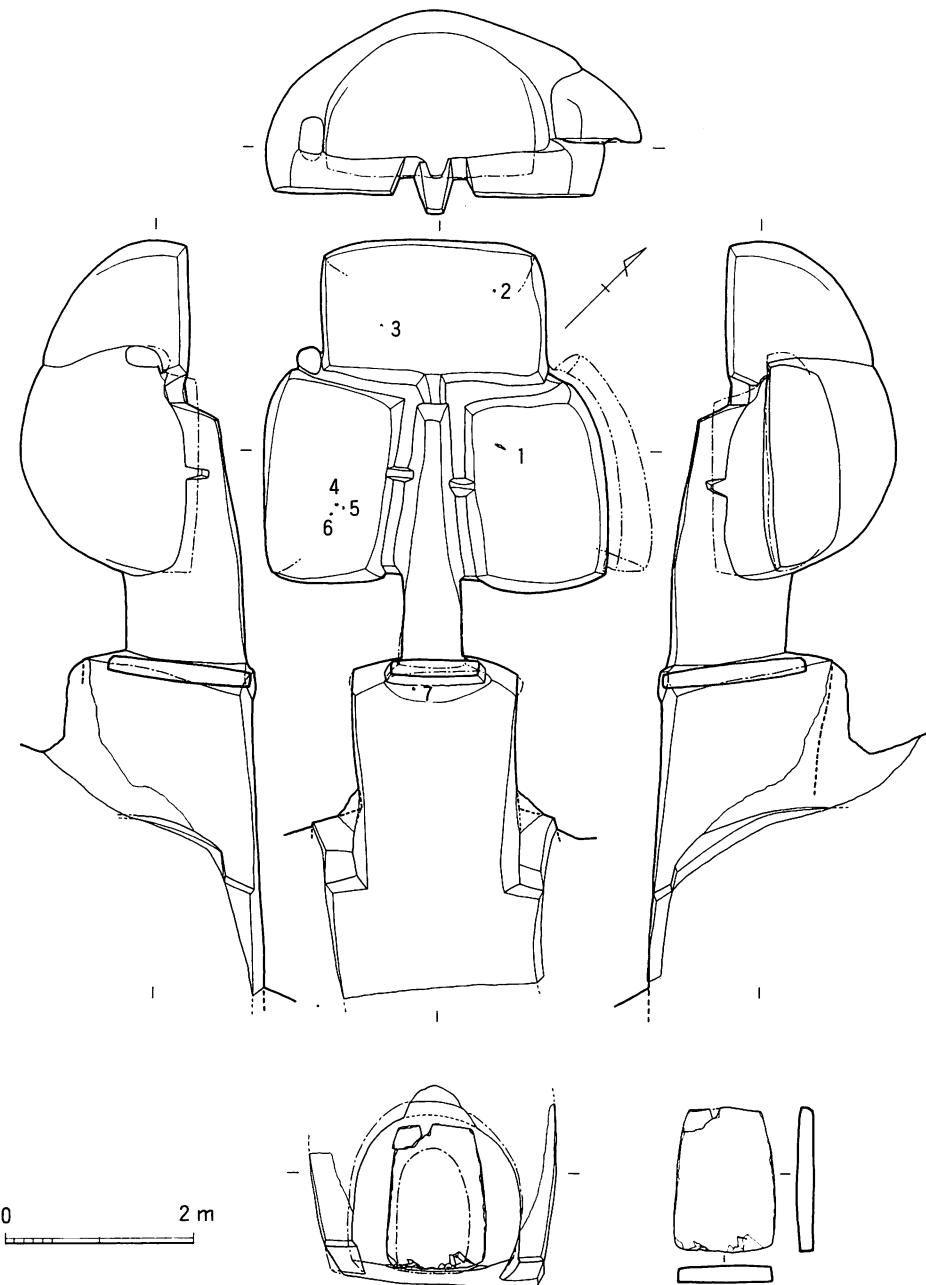
**遺構** 中段の中央部に位置する。16号墓からみると右斜め上にある。主軸方向はN45°Wで、南東に開口している。

未開口の状態であったが、閉塞石の上方が一部割っていたのは、追葬時に割れたのであろうか。凝灰岩製切石の閉塞石で、正面観はほぼ長方形を呈するが、上方がやや狭く、上辺が直線的ないので、将棋の駒形に近い。下部の幅106cm、上部の幅75cm、高さ151cm、厚さ19cmを測る。

羨門はアーチ形で、幅78cm、高さ125cmを測る。羨門の前に羨道が長さ345cm確認される。羨道の奥の幅は170cm、高さ180cmを測る。羨道の途中に飾り縁があり、ここで幅が広くなり、



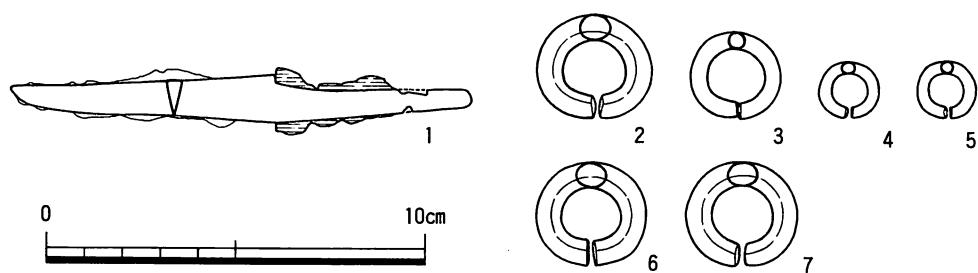
第21図 16号横穴墓出土遺物実測図



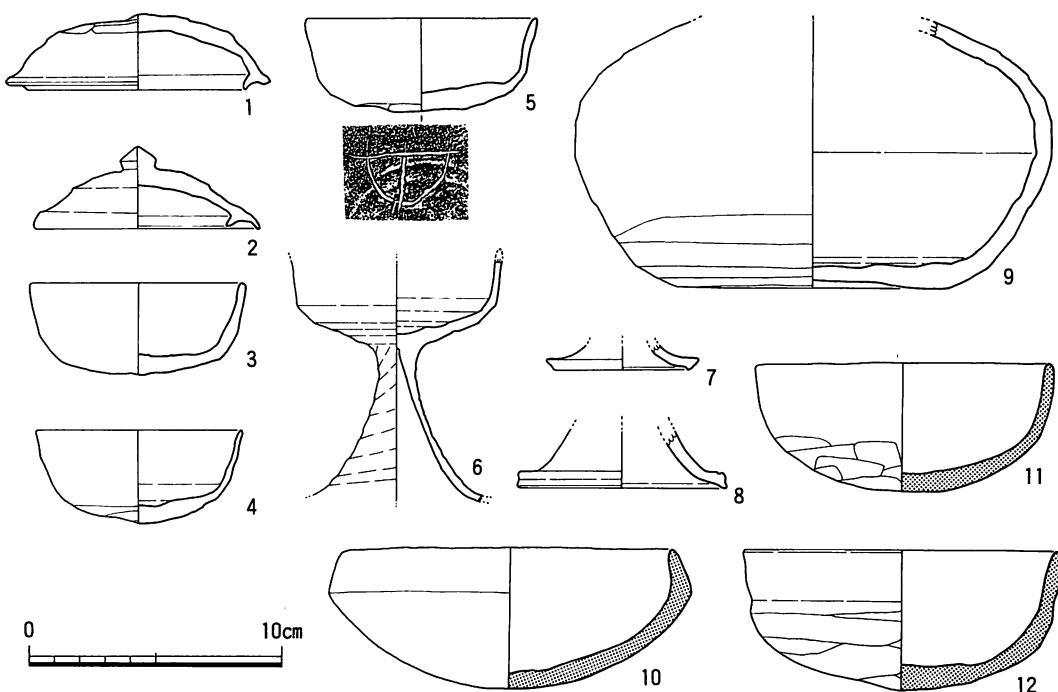
第22図 17号横穴墓実測図 (図中の遺物番号は第23図と一致)

219 cm を測る。飾り縁は羨道面から20~30cmのところに一段のステップを造って立ち上がってい。羨門の所には少し段があり、羨門から96cmで玄室に至る。

玄室は、入口部で幅364 cm、奥壁部で219 cm、奥行き352 cm を測り、平面形態は凸字状を呈する。通路は割合狭く、上り坂になっており、屍床面は高く、非常に広い。仕切りも明瞭で、各仕切りの中央部に排水の溝がある。奥屍床と左屍床の間の仕切りの端部には、壁面に抉った



第23図 17号横穴墓出土刀子・耳環実測図



第24図 17号横穴墓羨道部出土土器実測図

ポケット状の影り込みがある。ここからも人骨片が発見されたが、特異な遺構である。右屍床の床から60cm程上の壁面に棚状の遺構がある。このような遺構は他の横穴墓の数基の奥壁にあるが、右壁にあるのは本例だけである。玄室の天井部はドーム形であるが、奥屍床部分の天井は独立して抉っている。天井部の最高所は通路から212cmを測る。

**遺物** 各屍床に人骨粉が認められた。耳観の出土位置と合わせて考えると、奥屍床に2体以上、右屍床に1体以上、左屍床に2体以上の合計5体以上が埋葬されていたと考えられる。その他、左屍床奥の壁に抉られたポケット状の影り込みからも骨片が検出されたが、これは二次的に置かれたものと考えられる。

玄室内の奥屍床から耳環2点、右屍床から刀子1点、左屍床から耳環3点が検出された。ま

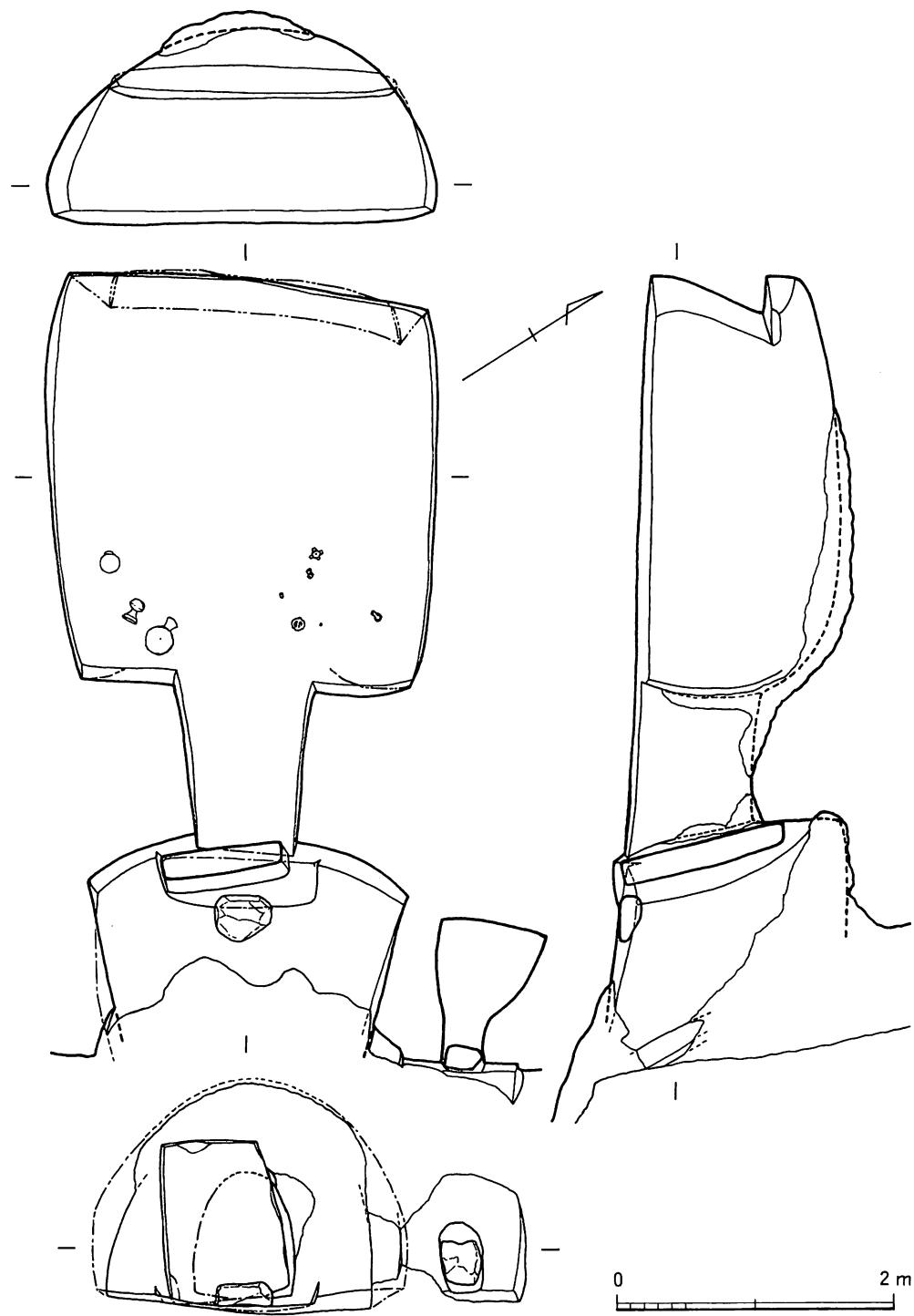
た羨道部奥、閉塞石の直前から耳環1点が検出され、羨道部全体に須恵器と土師器およびその破片が散乱していた。

右屍床から検出された刀子（第23図1）は、全長12.3cmで、身部は長さ7.0cm、最大幅1.25cm、最大厚0.5cm、茎部は長さ5.3cmを測る。茎部には木質が残っている。

耳環は総数6点（第23図2～7）である。2は奥屍床の右側から出土した耳環で、銅地に金張りしており、長径30.5mm、短径27.0mm、厚さ8.5mmを測る。3は奥屍床の左側から出土した耳環で、銅地に金張りしている。長径23.5mm、短径22.0mm、幅4.0mmを測る。4～6は左屍床のやや入口側から出土した耳環である。4と5は対で、銅地に金張りしており、いずれも長径16.0mm、短径15.0mm、厚さ3.5mmを測る。6は銅地にやや金色を帯びた銀張りの耳環で、長径29.5mm、短径27.0mm、厚さ9.0mmを測る。7は閉塞石の前から出土した耳環で、銅地に銀張りしており、長径29.0mm、短径26.5mm、厚さ8.0mmを測る。

須恵器（第24図1～9）と土師器（第24図10～12）はいずれも前庭部から出土した。1は坏蓋で、天井部は回転ヘラ切り調整しており、口縁部は短い。焼成は良く、灰色を呈する。口径は8.4cm、高さ2.9cmを測る。2も坏蓋で、宝珠つまみが付いており、口縁部の長さは身受け部とほぼ同じである。焼成は良好で、暗灰色を呈し、口径6.4cm、高さ3.2cmを測る。3～5は坏身で、3は2と組み合わせと考えられる。底部は回転ヘラ切り調整をしており、焼成は良好で、灰色を呈する。口径8.4cm、高さ3.6cmを測る。4は底部を回転ヘラ切りしてヨコナデ調整しており、焼成は良く、暗灰色を呈する。口径は8.2cm、高さ3.7cmを測る。5は1の坏蓋と組み合わせと考えられ、底部は回転ヘラ切りのあとヨコナデ調整しており、口縁部はやや外反している。口径9.2cm、高さ3.6cmを測り、焼成は良く、色長は茶灰色を呈する。また底部の一側にはヘラ記号が付けられている。6は高坏で、脚部はしづくって細くしている。口径は約8.5cmで、現存高9.6cmを測る。焼成は良く、全体に自然釉がかかっているため、色調は黒色で光っている。7と8は高坏の脚部で、7は底径6.1cm、8は底径8.4cmを測り、いずれも焼成は良好で、色調は灰色～暗灰色を呈する。9は平瓶で、底部付近は回転ヘラ切りのあとヨコナデ調整している。焼成は良く、灰色を呈し、胴部最大径18.8cm、現存高10.4cmを測る。

10～12は土師器の椀で、10は口縁部が内弯し、口縁部の直下には陵がある。全体がヘラ研磨されており、焼成はやや良で、色調は灰褐色ないし褐色を呈する。口径13.3cmで、高さ5.5cmを測る。11は半球形で、口縁部は直口しており、底部はヘラケズリのあと研磨している。焼成はやや良で、色調は灰褐色を呈する。口径11.5cm、高さ5.0cmを測る。12は胴部で屈曲して口縁部は立ち上がっている。底部はヘラケズリのあと研磨している。焼成はやや良で、色調は明褐色を呈する。復原口径12.6cm、高さ5.5cmを測る。



第25図 18-1・2号横穴墓実測図

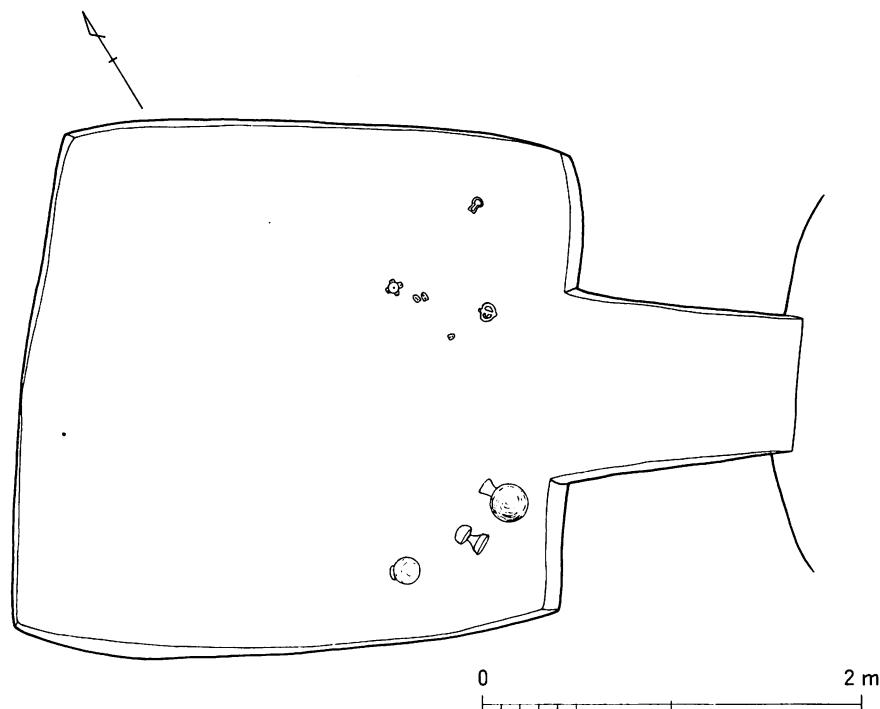
## 18-1号横穴墓

遺構 中段の中央付近、17号墓の左に並んで位置する。主軸方向はN 58° Wで、東南東に開口している。

閉塞石は少し左側にずれていたが、盗掘された様子はないので、追葬時にずれたものと考えておきたい。閉塞石の前に根元を固めに石が1個みられた。閉塞石は凝灰岩製の切石であるが、周囲には割った痕を残している。正面観は長方形に近く、下部の幅90cm、上部の幅72cm、高さ122cm、厚さ18cmを測る。

羨門はアーチ形で、幅73cm、高さ92cmを測り、下に10cm程の段がついている。羨道の平面形態は逆台形で、奥の幅229cmを測り、長さ144cmが残存している。その最も外の右側には飾り縁が一部残っている。

羨門から128cmで玄室に至る。玄室は、平面形態が正方形に近く、入口部で幅240cm、最大幅284cm、奥壁部で幅254cm、奥行き286cmを測る。屍床は平坦なままである。奥壁の上方、屍床面から80cm程のところに幅25cmの棚状の段が造られている。天井部はカマボコ形に近く、高さ143cmを測る。

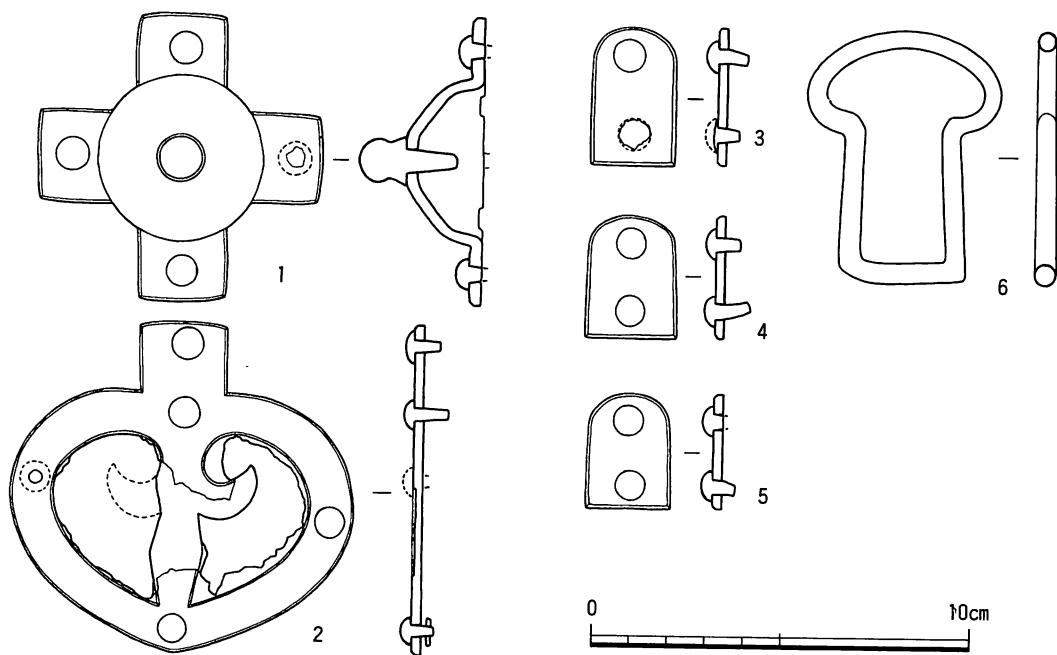


第26図 18-1号横穴墓遺物出土状況実測図

**遺物** 玄室のほぼ全体に骨粉がみられ、特に奥壁に添った部分に顕著であったが、殆んど取り上げが不可能であった。

副葬遺物は玄室の前半部から検出され、馬具が右側に、須恵器と土師器が左側に置かれていた。馬具の散在した状態や土師器の平瓶の転倒した状態から、追葬時に多少移動されたと考えられる。その他羨道部の覆土中から鉄滓が1点検出されたが、横穴墓に伴つものかどうかは不明である。

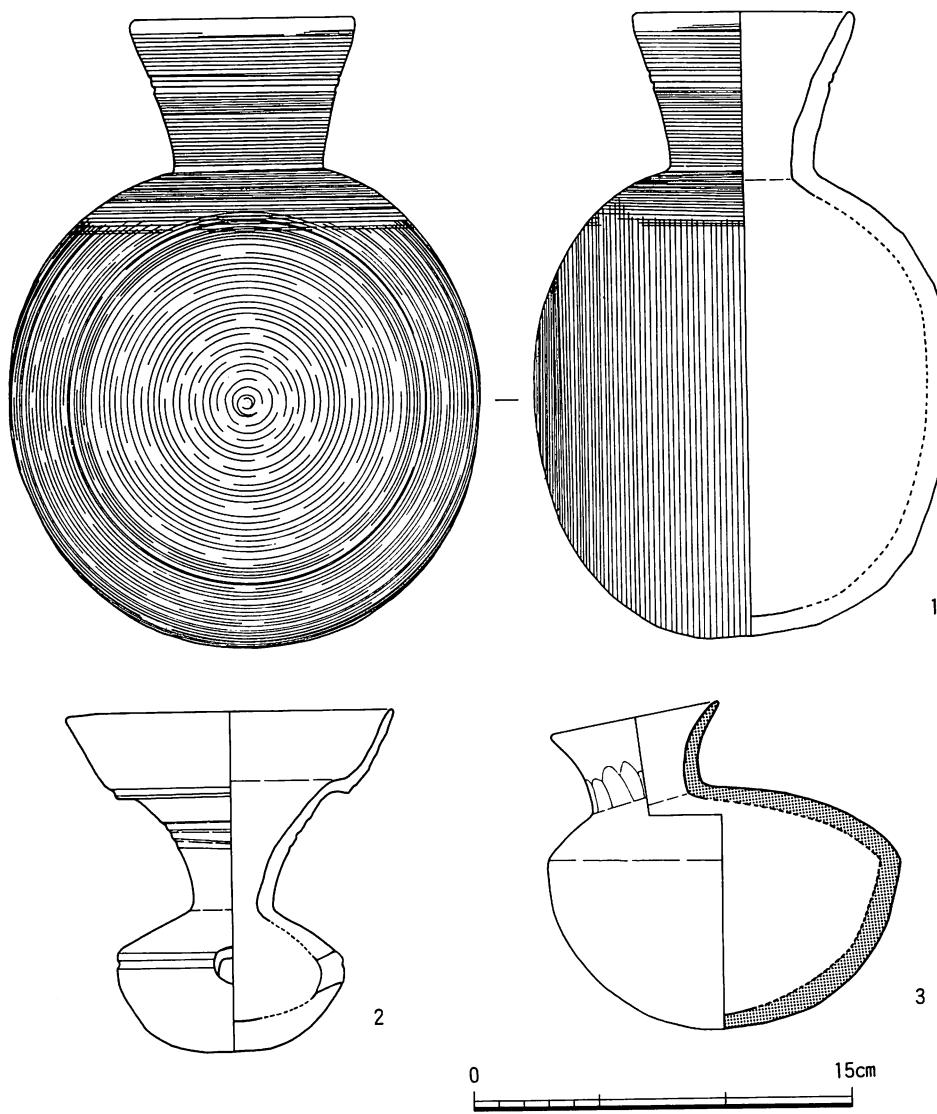
馬具は、雲珠1点、杏葉1点、帶金具3点、鉸具1点（第27図1～6）が検出された。1は鉄地金銅張雲珠である。半球体の頂部に宝珠形の鉢を留めており、4脚を持ち、各脚は1個の鉢で留めている。体部の径は4.35cm、高さ3.3cmを測り、脚を入れた幅は7.5cmを測る。鉢の頭の径は0.8～0.9cmを測る。2は鉄地金銅張杏葉で、形態は三葉文心葉形を呈する。上方には突出部があり、そこに鉢を2個留めており、心葉形の両端に各1個、下端に1個の合計5個の鉢で留めている。鉢の頭の径は0.75～0.85cmを測る。また杏葉の大きさは縦8.7cm、横9.1cmで、厚さ0.25cmを測る。3～5は鉄地金銅張帶金具である。いずれも長方形の一端を丸くしたもので、頭の径0.8～0.85cmの鉢で留めている。3は縦3.6cm、横2.3cm、厚さ0.25cm、4は縦3.2cm、横2.45cm、厚さ0.25cmで、5は縦3.05cm、横2.25cm、厚さ0.25cmを測る。以上の馬具はいずれも鉄地金銅張であり、その形状や数からみてセットをなすものと考えられる。すなわち、雲珠の4つの脚の一端に杏葉を垂らし、他の三方に3点ある帶金具を配置したのでは



第27図 18-1号横穴墓出土馬具実測図

なかろうか。従って杏葉付雲珠とも称すべきもので、福岡県宗像大社蔵の伝沖ノ島出土の馬具中にその例を見ることができる。6は鉄製鉗具で、鍵穴形を呈し、縦6.6cm、横4.1cmを測り、断面形は丸く、径0.5~0.55cmを測る。

須恵器は2点（第28図1、2）出土した。1は大形の提瓶で、胴部が張り、口縁部は外反ぎみに立ち上がっている。全体にカキメがみられ、口縁部中程の外面に二条の凹線を施している。口径8.8cm、器高24.6cm、胴部の幅18.7cm、胴部の厚さ16.4cmを測る。焼成は良く、一面には自然釉がかかり、色調は黒灰色ないし黒色を呈する。2は壺で、体部は肩が張り、その下に一条の凹線めぐらし、頸部はやや締まり中程に三条の凹線をめぐらし、口縁部は大きく開き、そ



第28図 18-1号横穴墓出土土器実測図

の下方にも一条の凹線をめぐらしている。体部の孔の部分の粘土は内部に焼き付いている。口径12.8cm、高さ13.4cmを測り、焼成は極めて良く、色調は灰色ないし暗灰色を呈し、一部には自然釉がかかっている。

土師器は1点（第28図3）出土した。須恵器を模した平瓶で、底部は丸く、肩が張っており、口縁部は外反している。口縁部下方にヘラ削りの痕がみえるが、全体がよく研磨され、光沢がある。口径7.2cmで、器高12.9cmを測り、体部は径13.9cm、高さ9.6cm測る。焼成は良く、色調は赤褐色を呈する。

## 18-2号横穴墓

**遺構** 18-1号墓の右側に付属したように造られた小型横穴墓である。主軸方向はN40°Wを測り、南東に開口している。

羨門は幅36cm、高さ56cmを測るアーチ形で、凝灰岩中に含まれる軽石2個で塞いであった。羨門の外壁は幅92cmで、アーチ形を呈していたと考えられるが、左側は18-2号墓の羨道と一体化していたことがわかる。

羨門から34cmで玄室に至る。玄室は袋状に奥が広くなつており、奥行き72cm、奥壁部の幅78cmを測る。天井部はカマボコ形に近く、高さ49cmを測る。

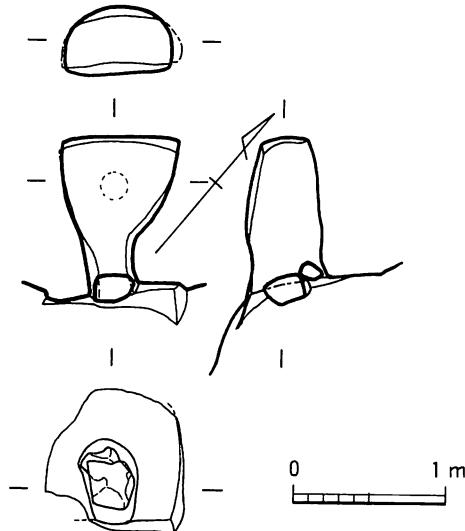
**遺物** 玄室の中央部に歯を含む骨粉がみられた。また、鋸が付いた小鉄片があったが何であるか不明である。

## 19号横穴墓

**遺構** 中段の中央部付近、18号墓の左側、20号墓の右側に位置する。主軸方向はN63°Wで、東南東に開口している。

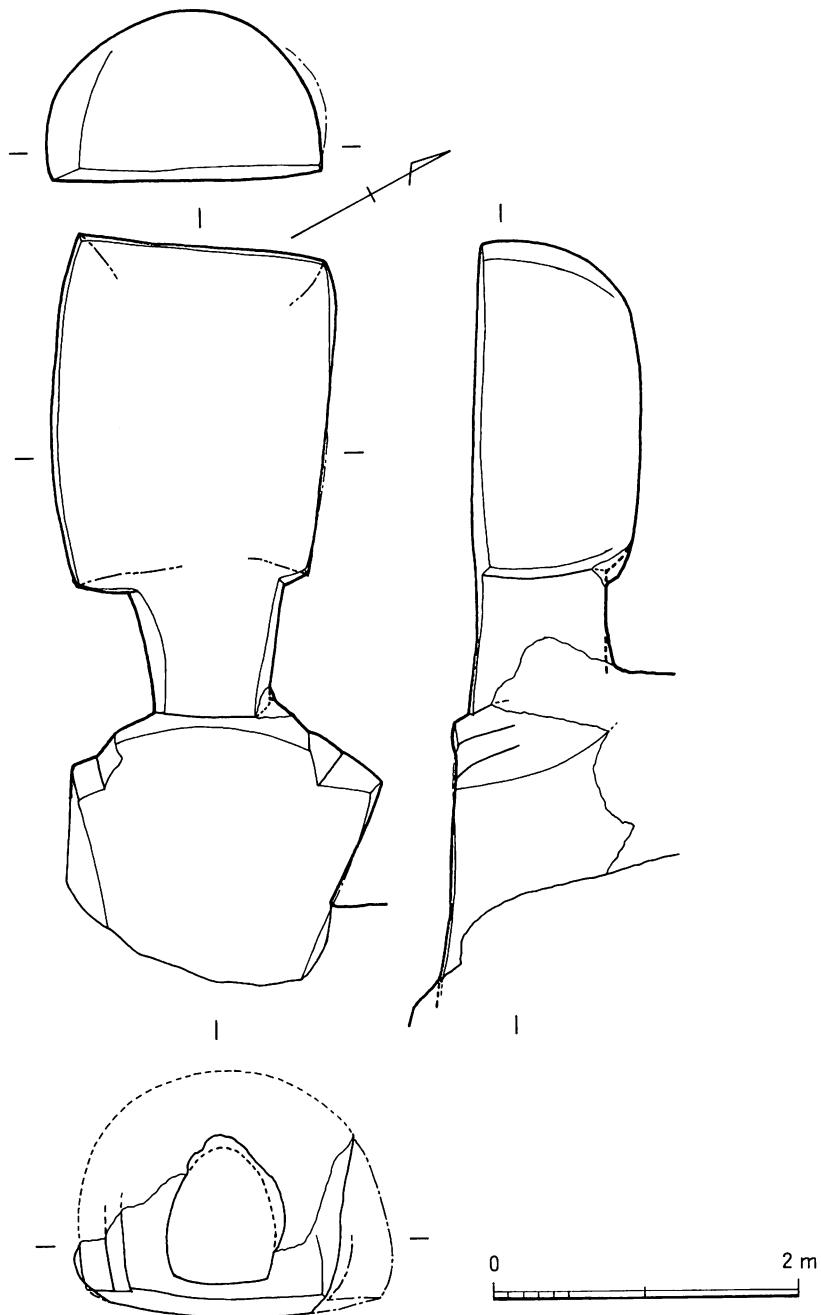
羨門部は上方がやや崩れているが、アーチ形で、幅約72cm、高さ約94cmを測る。羨門の前に10cm程の段が造られ、閉塞石のあった位置がいくぶん窪ませてある。羨道は長さ172cm残存しており、奥の幅は128cmを測る。そのすぐ外に一段の飾り縁がつき、その部分の幅が最も広く、205cmを測る。羨道は外に行くに従つて幅狭になっている。

羨門から84cmで玄室に至る。玄室は、入口部で幅150cm、最大幅182cm、奥壁部で幅160cm、



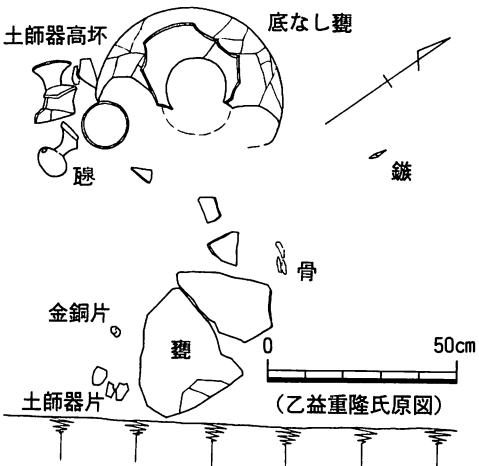
第29図 18-2号横穴墓実測図

奥行き 232cmを測り、平面形態はやや胴張りの長方形を呈する。屍床は平坦なままである。天井部は奥の方はドーム形に近いが、入口側はカマボコ形を呈する。屍床から天井までの高さは 111cmを測る。



第30図 19号横穴墓実測図

**遺物** 今回の調査では何も検出されなかったが、乙益重隆氏によると、昭和33年の調査の際、2号横穴墓の「上段約3mのぼったあたりにステップがあり、須恵器の甕・提瓶・横瓶・壺・皿・壺・土師器高杯・杯などが一括して発見された。中でも甕は意識的に底部を打ち抜いた形跡があり、鐵片や金銅の薄片も検出された。おそらく上段ステップにはもう1個横穴があり、須恵器類はその前庭部にならべた墓前祭祀の形跡を物語るものであろう」とされており、位置的にみて、19号横穴墓の前庭部から遺物が出土したと考えられる。現在、鐵片や金銅の薄片は不

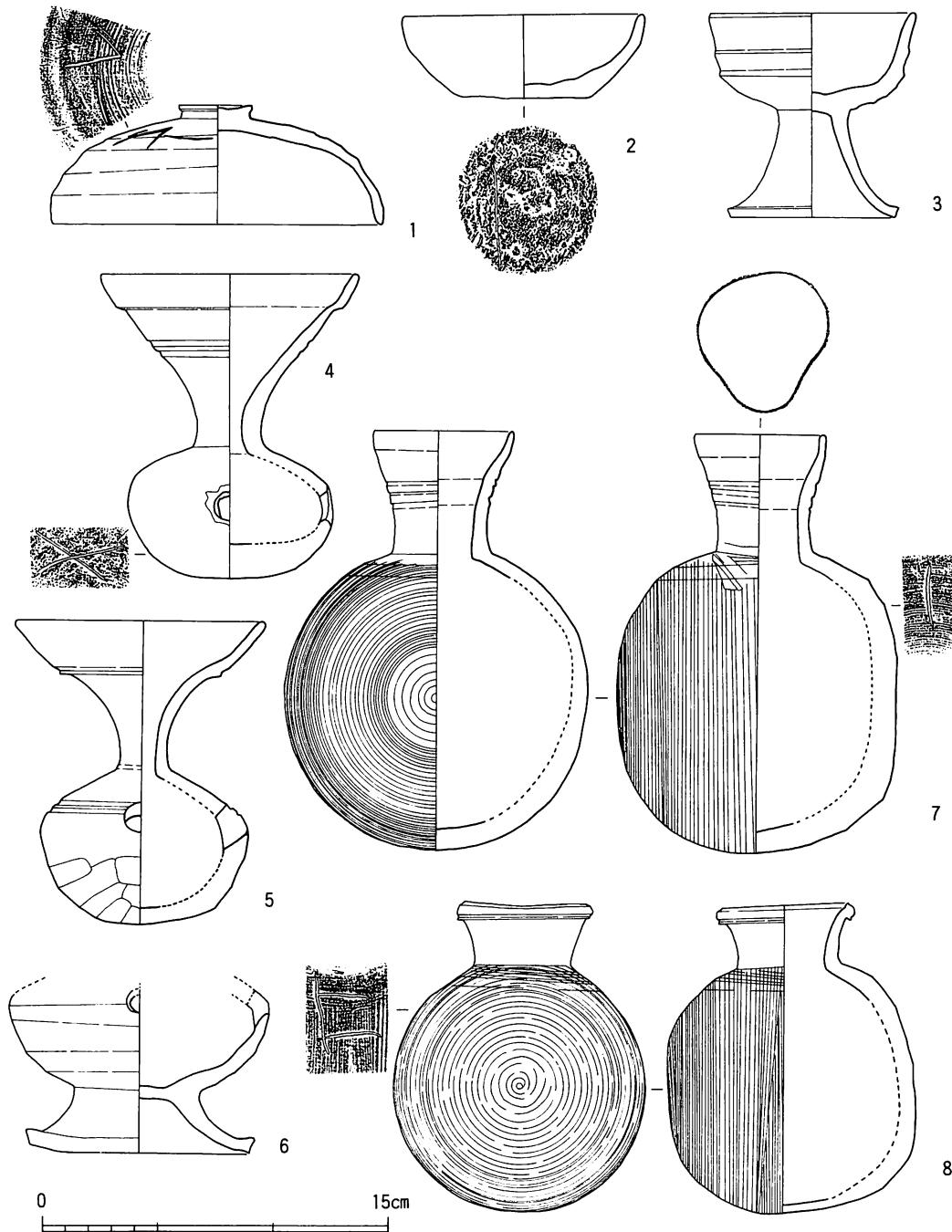


第31図 19号横穴墓前庭部？遺物  
出土状況図（部分）

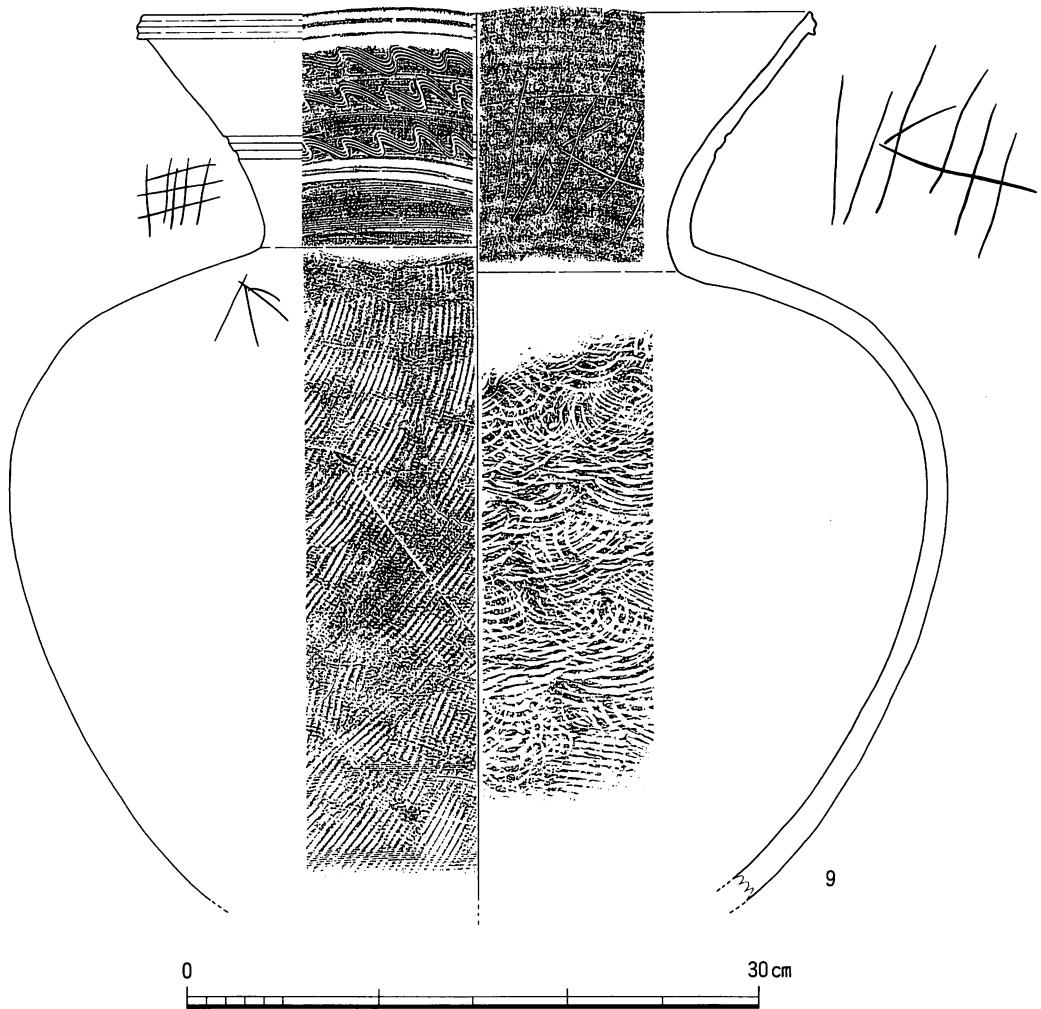
明であるが、第32図～第34図に示した須恵器と土師器がそれに相当する遺物と考えてよい。

第32図1～8と第33図9は須恵器である。1は高杯の蓋と考えられ、扁平なつまみが付いている。全体をヨコナデ調整しており、外面にはヘラ記号が付けられている。口径14.3cm、高さ5.1cmを測り、焼成は良く、色調は灰色ないし暗灰色を呈する。2は壺身である。底部は平底で、回転ヘラ切りの痕がみられ、ヘラ記号が付けられている。口縁部はまっすぐ立ち上がり、口径10.5cm、高さ3.6cmを測る。焼成は良好で、色調は暗灰色を呈する。3は高壺で、口縁部はやや外反ぎみで、下方の2カ所に段がみられる。脚部はゆるやかに開いている。調整は全体がヨコナデされており、焼成は良く、色調は暗灰色を呈する。口径9.0cmで、高さ8.7cmを測る。4～6は甕である。4は丸い胴部をもち、頸部はよくしまり、その上方に浅い凹線を二条施し、口縁部は短い。全体を回転ヨコナデ調整をしている。焼成は良く、色調は灰色を呈する。口径は11.2cm、高さ13.1cmを測る。5はやや肩の張った胴部をもち、肩の所に二条の凹線をめぐらしている。頸部は細くしまり、口縁部は長く延び、その下端に一条の凹線を施している。全体をヨコナデ調整し、底部付近はヘラケズリを行っている。なお、内部には穴をあけた際のその部分の粘土が焼けて遊離したままじ込められている。焼成は良く、色調は灰色ないし黒色を呈する。なお底部の一側にはヘラ記号が付けられている。復原口径は10.9cmで、高さは13.0cmを測る。6は台付甕で、上半部を欠損している。胴部は肩が張っていたと考えられ、穴の上端のところに凹線の一部を確認できる。胴部下半には回転ヘラズリの痕がみられ、台部は低い。焼成は良く、色調は灰色ないし暗灰色を呈する。胴部最大径は11.3cm、台部の径は9.7cm、現存高は7.1cmを測る。7と8は提瓶である。7は一方にやや平坦面を残すが球に近い胴部をもち、口縁部は長く延び、外面中程に三条の凹線を施している。口唇部は上からみると、片口状に変形させてある。大きさは口縁部の長径6.1cm、短径5.7cm、胴部の幅13.3cm、厚さ12.1

cm、器高17.9cmを測る。なお胴部上方の一側にはヘラ記号が付けられている。焼成は良く、色調は灰色ないし暗灰色を呈する。8も球形に近い胴部をもつ。口縁部は短く開き、端部は肥厚している。口径 6.2cm、胴部の幅11.0cm、厚さ10.6cm、器高13.3cmを測る。胴部の上方一側に



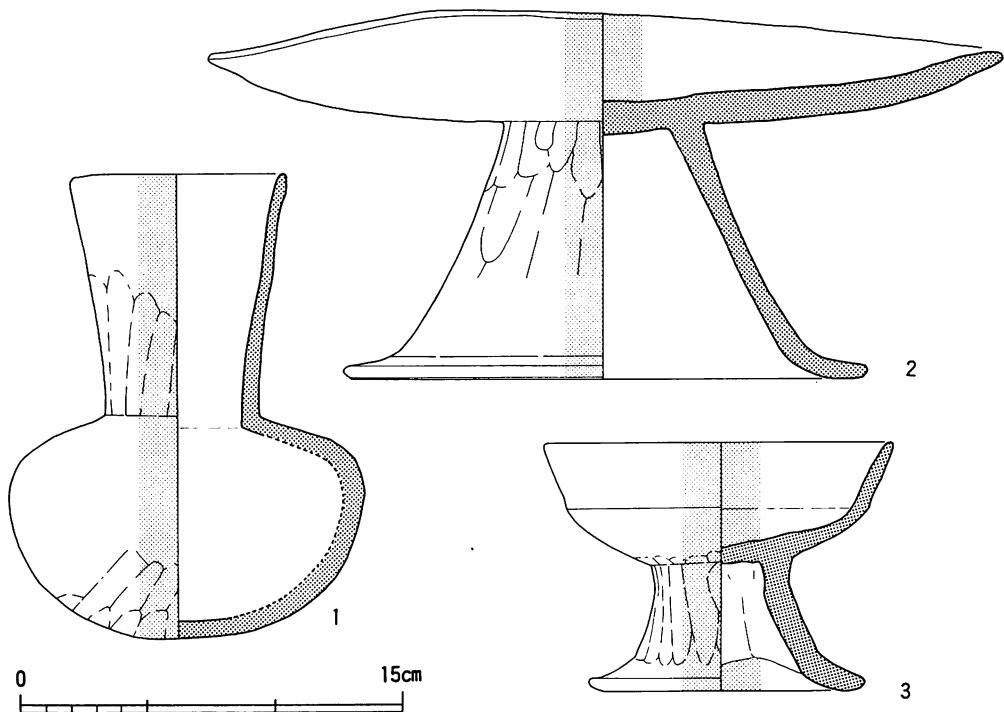
第32図 19号横穴墓前庭部？出土須恵器実測図（1）



第33図 19号横穴墓前庭部？出土須恵器実測図（2）

はヘラ記号がある。焼成は良好で、色調は暗灰色を呈する。9は大型甕である。底部は欠損しており、胴部は丸く、いくぶん肩が張っている。口縁部は「く」字形に折れて、直線的に広がっている。胴部外面は格子目タタキがみられ、内面はほぼ同心円文タタキであるが、内面下部は平行タタキがみられる。口縁部は内外面とも回転ヨコナデ調整で、外面中程には二条の凹線をめぐらし、口唇部の外面にも二条の凹線をめぐらしている。また口縁外面の上半には三重の櫛描き波状文を施している。その他、口縁部の内面と外面及び胴部上方外面の3カ所にヘラ記号状の線刻文がある。焼成はやや良で、色調は灰色を呈する。大きさは口径35.6cm、現存高45.6cmを測る。

第34図1～3は土師器である。1は丹彩長頸壺で、胴部は丸く張り、口縁部は頸部からまっすぐ延びている。底部と頸部にはヘラケズリの痕が残り、外面全体を丹彩研磨している。口径



第34図 19号横穴墓前庭部？出土土器実測図

8.4cm、高さ18.0cmを測る。焼成は良く、地肌は明褐色を呈する。2と3は丹彩高杯である。2は大型で、杯部は浅い。脚部外面にはヘラケズリの痕が認められる。脚部の内面を除く部分は丹彩研磨されている。口径31.4cm、高さ14.2cmを測り、焼成はやや良で、地肌は明褐色を呈する。3は杯部の中程に屈折があり、脚部は端部を除いてヘラケズリがみられ、脚部内側上方以外は丹彩研磨してある。

## 20号横穴墓

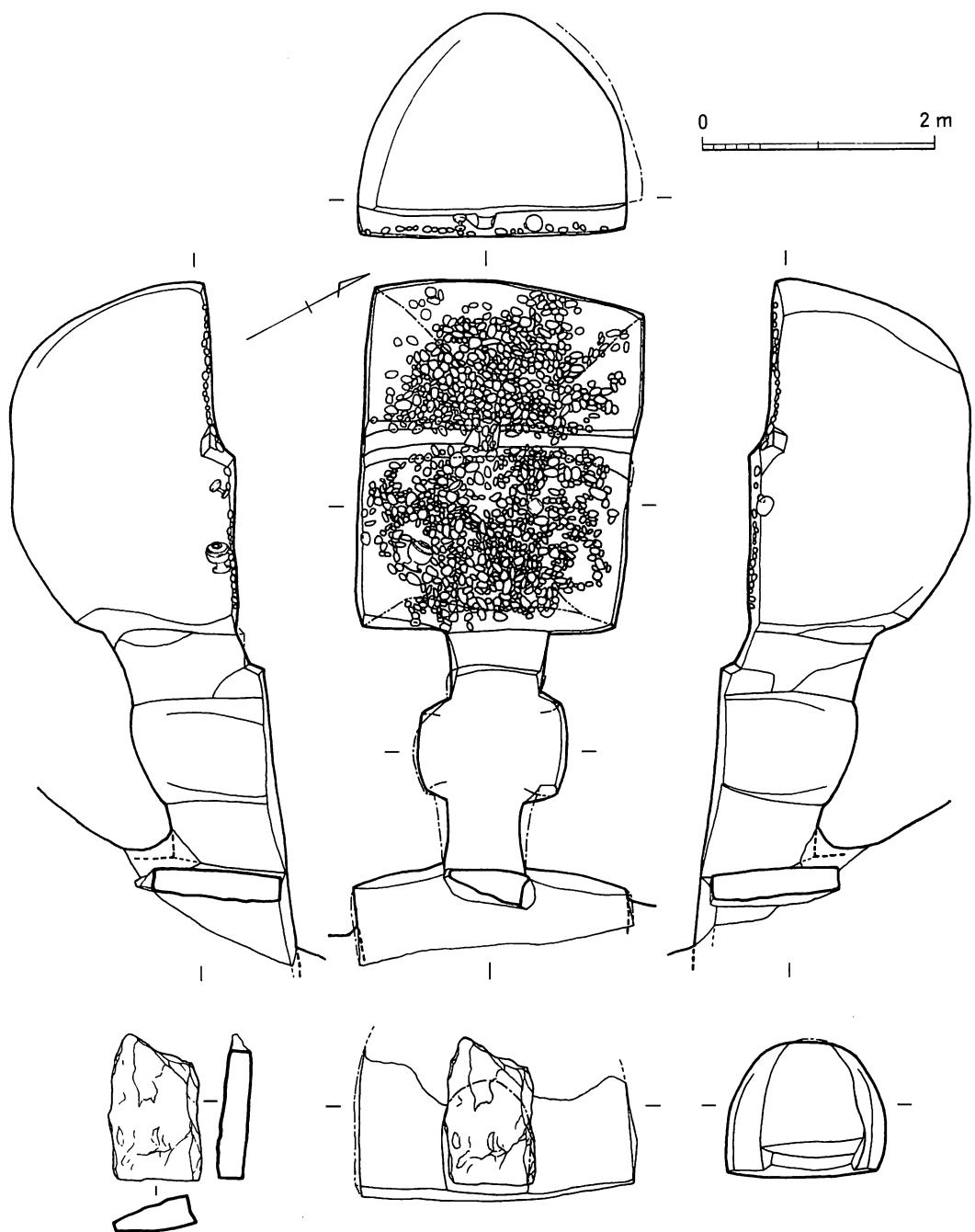
**遺構** 中段の中央部よりいくぶん左側、19号墓の左側にある。地形的にみると、崖面の窪んだ所にあり、横穴墓を造るのに最も良い位置にある。主軸方向はN62°Wで、東南東に開口している。

未開口の状態で発見された。閉塞石は安山岩製の割石が使われており、幅77cm、高さ125cm、厚さ27cmを測る。

羨門はアーチ形で、幅77cm、高さ98cmを測る。羨道は奥の幅244cmを測り、長さ79cmが残存している。

内部は複室になっており、この横穴墓群では唯一の例である。

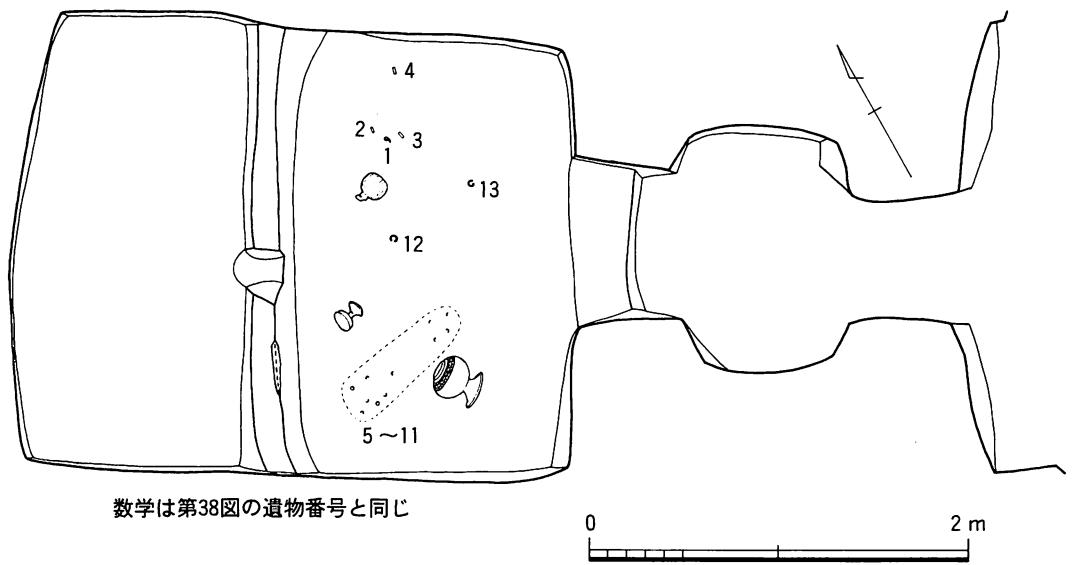
羨門から63cmで前室に至る。前室は、平面形態が横長胴張りの長方形で、幅134cm、奥行き



第35図 20号横穴墓実測図

89cmを測る。屍床は仕切られていない。天井までの高さは 120cmを測る。天井の形態はドーム形ともカマボコ形とも決めがたい。

第二羨門もアーチ形を呈し、幅90cm、高さ 116cmを測る。ここには閉塞石はない。第二羨門



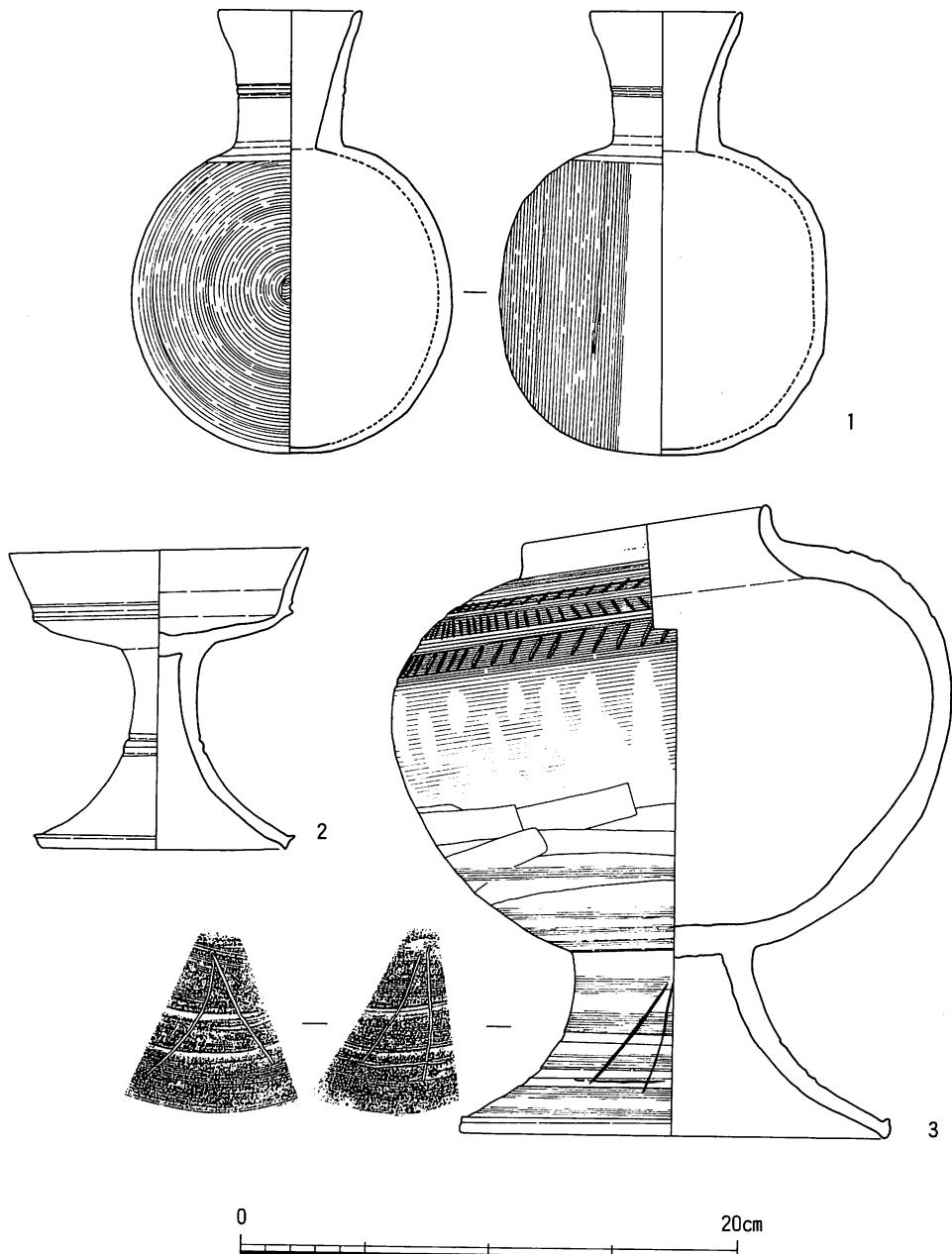
第36図 20号横穴墓遺物出土状況実測図

から後室までは56cmを測り、途中に10cm余の段がついて斜めに上がっている。

後室は、入口部で幅215cm、奥壁部で幅230cm、最大幅240cm、奥行き298cmを測り、平面形態は長方形を呈している。床面の中央部に横方向の仕切りがあり、前・後の屍床に区画している。前屍床よりも後屍床が15cm程高く、仕切りの中央部には排水の溝を造っている。前屍床面から天井までは高さ190cmを測る。天井形態は隣の19号墓と似ており、ドーム形よりもカマボコ形に近い。後室の前・後の屍床とも河石が敷かれていた。

**遺物** 後室の全面に数体分とみられる骨粉があったが取り上げは不可能であった。遺物はすべて後室の仕切りより前部から検出された。内訳は須恵器3点、耳環2点、メノウ製勾玉1個、碧玉製管玉3個、滑石製臼玉1個、ガラス製小玉6個分（完形1個、接合完形4個、破片1個）である。

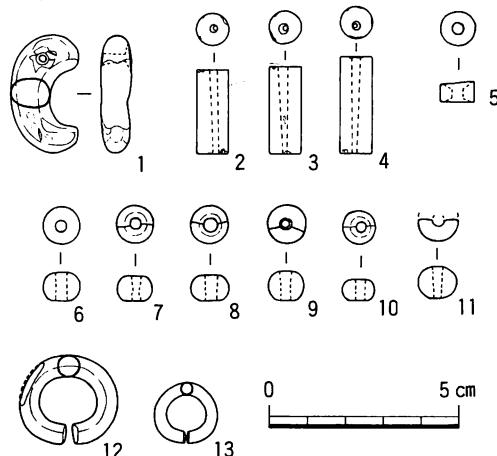
第37図1～3は須恵器である。1は横壺であるが、提瓶に近い形態をしている。胴部は球形に近く、頸部から口縁部へやや開きぎみに延びている。頸部の外面には二条の凹線がめぐらしている。焼成は良好で、一面には自然釉がかかっている。色調は灰色ないし黒色を呈する。口縁部の一部を欠損しているが、ほぼ完形で、口径5.8cm、胴部幅12.9cm、胴部長13.3cm、器高17.5cmを測る。2は高壺で、脚部は細く、ラッパ状に広がり、中程に二条の凹線をめぐらしている。壺部は途中で折れて外反ぎみに立ち上がっており、その下方には凹線状の段がある。焼成は良く、色調は灰色ないし暗灰色を呈する。完形で、口径12.0cm、高さ11.9cmを測る。3は台付壺である。胴部は丸いが、いくぶん肩が張っており、口縁部は短く立ち上がっており、肩部には四条の凹線をめぐらし、その間に交互に、ハケ目を押し当てた綾杉文をついている。脚台



第37図 20号横穴墓出土須恵器実測図

はあまり高くなく、三条の凹線をめぐらしている。器面全体に回転ハケ目調整がみられるが、胴部の一部にはヘラケズリも認められる。脚部の相対する2カ所にヘラ記号が施されている。焼成は良好で、色調は灰色ないし黒灰色を呈する。完全で、口径10.0cmで、高さは25.0cmを測る。

第38図に示したのは装身具類である。耳環は2個検出されたが対ではない。12は銅地銀張りの耳環で、長径26.0mm、短径23.0mm、厚さ6.0mmを測る。13も銅地銀張りの耳環であるが、いく分金色をおびている。長径16.5mm、短径15.5mm、厚さ3.0mmを測る。1はメノウ製勾玉で、縦31.0mm、横18.0mm、厚さ8.0mm、孔径1.7～3.0mmを測り、「コ」字形を呈する。2～4は碧玉製管玉で、深緑色を呈する。2は径8.5mm、長さ22.0mmで孔径は1.5～2.2mmを測る。3は径9.0mm、長さ22.7mm、孔径1.0～2.7mm、4は径9.2mm、長さ25.3mm、孔径1.4～2.3mmを測る。5は滑石製臼玉で、径9.6mm、厚さ5.7mm、孔径2.9mmを測る。6～11はガラス製小玉である。完形1個と破片9個であったが、接合したところ6個体分であることがわかった。個々について第4表に示すとおりである。



第38図 20号横穴墓出土装身具実測図

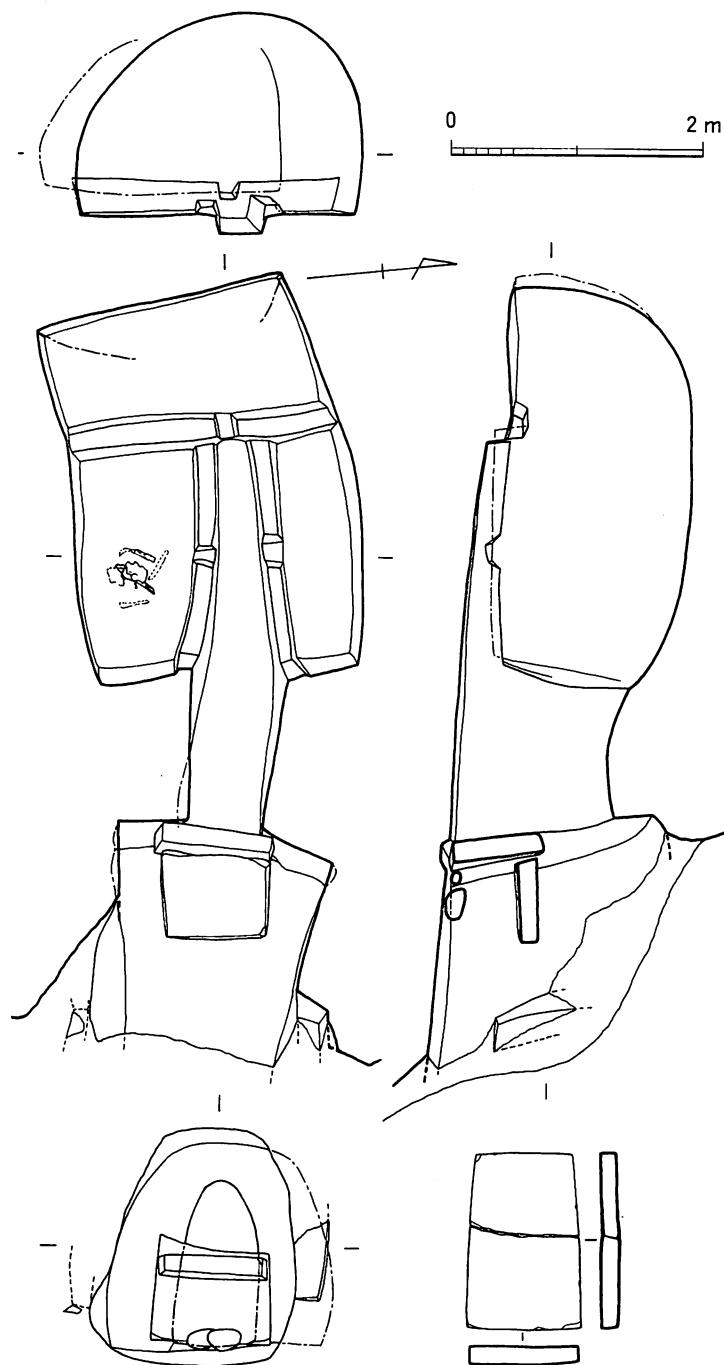
第4表 20号横穴墓出土小玉集成表

No	図版番号	材質	色調	径 (mm)	厚さ (mm)	孔径 (mm)	遺存度	出土位置	
1	第38図 6	ガラス	緑色	9.6	7.3	3.0	完形	後室前屍床	複室での後室の屍床は前・後に仕切られている
2	第38図 7	ガラス	緑色	9.0	6.3	2.0～2.5	完形(接合)	後室前屍床	
3	第38図 8	ガラス	緑色	10.2	6.6	3.2～3.8	完形(接合)	後室前屍床	
4	第38図 9	ガラス	緑色	10.0	7.8	2.1～3.0	完形(接合)	後室前屍床	
5	第38図 10	ガラス	緑色	8.5	5.3	2.0～2.7	完形(接合)	後室前屍床	
6	第38図 11	ガラス	緑色	10.3	8.5	1.8～2.3	1/2	後室前屍床	

## 21号横穴墓

遺構 中段のやや左寄り、20号墓の左側、3号墓の右側に位置する。実測の際の主軸方向はN84°Wであるが、羨道と玄室では主軸が大きく曲がっている。開口方向は東である。

閉塞石は半ば埋もれたまま、無理にこじあけられたとみられ、上半部が折れて倒れていた。凝灰岩製切石で、よく研磨された閉塞石で、復原すると、上方がやや狭くなった長方形を呈し、



第39図 21号横穴墓実測図

下端の幅92cm、上端の幅77cm、高さ 138cm、厚さ15cmを測る。なお閉塞石の前を2個の軽石で固めてあった。

羨門は丈の高いアーチ形を呈し、幅66cm、高さ 130cmを測る。羨道は平面形態が逆台形を呈

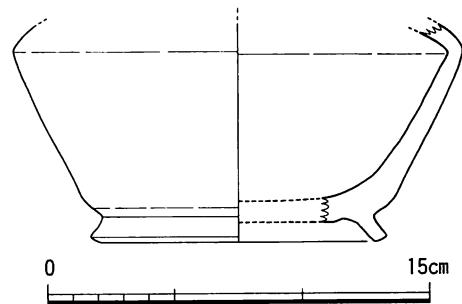
し、羨道奥は幅 195cmで、高さ 165cmを測る。羨道の外側近くにはステップをもった飾り縁が一部残っている。

羨門から 142cmで玄室に至る。玄室は、入口部幅 198cm、奥壁部幅 190cm、最大幅 226cm、奥行き 300cmを測る。平面形態は長方形であるが、主軸が大きく左へ曲がっている。従って、「コ」字形に配置された屍床も、右屍床は非常に狭くなっている。これは先に20号基が掘られていたため、玄室が通じてしまうのを恐れたためではなかろうか。なお各仕切りの中程には排水の溝が造られている。天井部の形態はカマボコ形に近く、通路からの高さは 169cmを測る。

遺 物 玄室の各屍床に骨粉があり、特に左屍

床の人骨は集骨状態で最も保存が良かったが、取り上げは困難な状態であった。

盗掘を受けたためか、玄室内から遺物は何も検出されなかった。羨道には数点の須恵器と土師器の破片があった。第40図はその中で最も大きな須恵器の破片で、長頸壺の胴部と考えられる。低い台が付き、胴部の肩が張っている。全体を、回転ヨコナデによって調整している。焼成は良好で、色調は黒灰色を呈する。胴部最大径は17.5cmで、現存高は 8.5cmを測る。



第40図 21号横穴墓羨道部出土  
須恵器実測図

## 22号横穴墓

遺 構 中段と下段の間、やや左寄りにあり、20号墓と21号墓の下方にある。また右下に 1 号墓、左下に23号墓がある。主軸方向はN75° Wで、東南東に開口している。

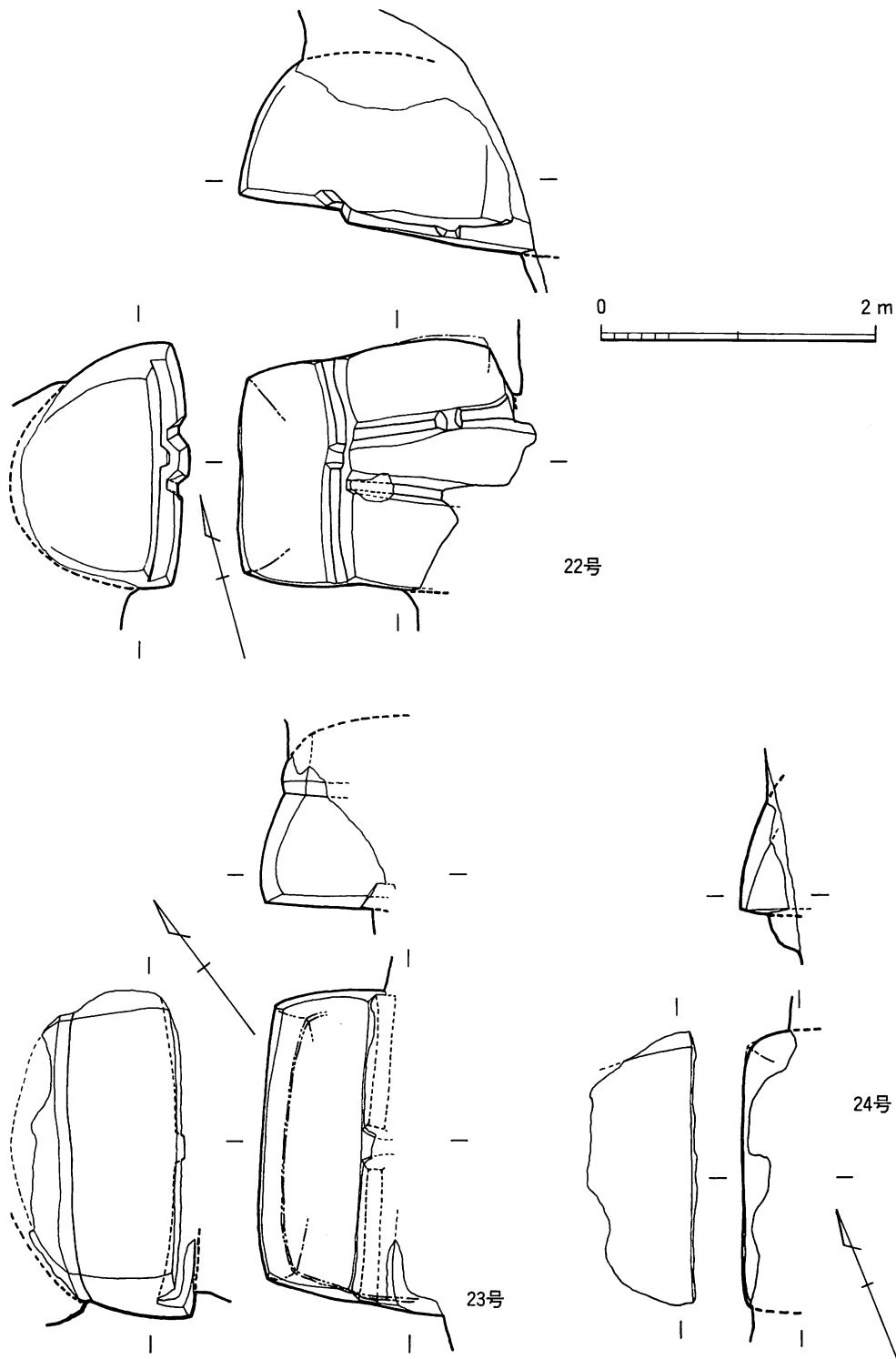
羨門から玄室の入口部にかけて、削られ、天井部は陥没していた。玄室は、入口部で幅 180cm、奥壁部で幅 136cm、奥行き 202cm測り、平面形態は台形を呈する。屍床は「コ」字形に仕切られているが、通路との高低差は小さい。天井は復原すると高さ約 135cmを測るドーム形で、割合小型の横穴墓である。

遺 物 何も検出されなかった。

## 23号横穴墓

遺 構 下段のやや左寄り、21号墓・22号墓の下方に位置する。主軸方向はN50° Wで、南東に開口している。

玄室は大きく削られ、奥屍床付近が残るだけである。平面形態は胴張りの方形または台形を呈していたと考えられ、現存部の最大幅は 228cm、奥壁部の幅 187cmを測り、奥行きは 136cm



第41図 22・23・24号横穴墓実測図

残っている。「コ」字形屍床と考えられ、奥屍床の中央部には排水の溝がみられる。天井部は崩れているが、軒先をめぐらしており、寄せ棟妻入りの家形を成していたものと考えられる。天井までの高さは約140cmと推定され、上方にある22号墓の左屍床面との間はわずか10cmの厚みしかない。広さの割には天井の低い横穴墓である。

遺物 何も検出されなかった。

## 24号横穴墓

遺構 下段の右寄り、5号墓の下方に位置する。主軸方向はN68°Wで、東南東に開口している。

わずかに玄室の奥壁が残るだけである。屍床奥壁部の幅は約185cmを測り、奥行きはわずか35cmしか残っていない。おそらく「コ」字形屍床で、天井部はドーム形を呈していたものと推定される。

遺物 不明。

## 25号～27号横穴墓

遺構 西側の崖面に現在3基の横穴墓の奥壁とみられるものが確認できる。江戸時代の絵図面にもこの面にある横穴墓が描かれているので、その残存であろう。風化が激しいので実測は不可能である。上段にある1基を25号墓、中段の2基を左から26号墓・27号墓とする。いずれも開口方向はほぼ南南西である。

遺物 不明。

## 28号横穴墓

遺構 崖の東に面した側の南端、最上段に位置する。主軸方向はN55°Wで、南東に開口している。

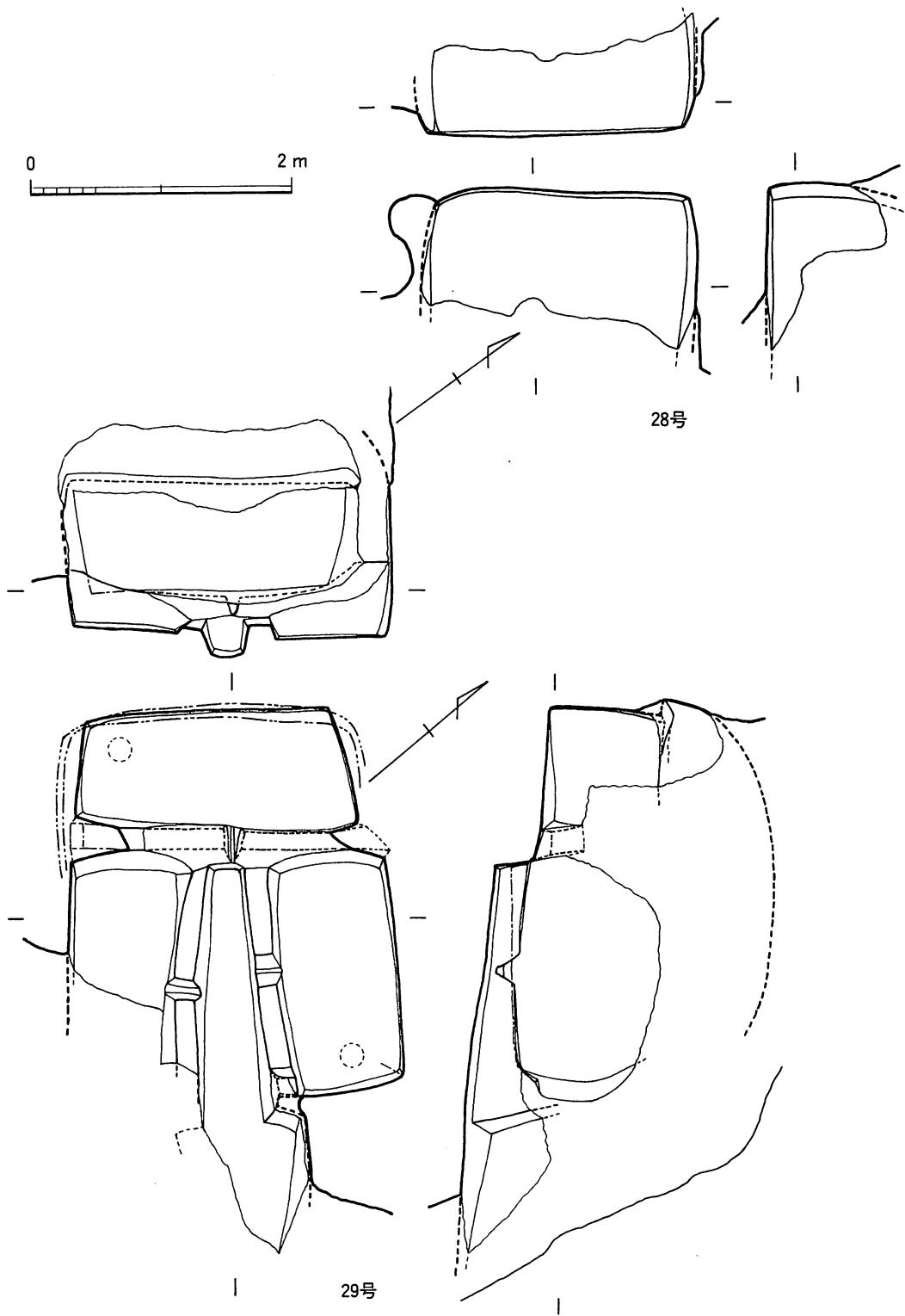
玄室の床面が奥から半分程残っている。平面形態は方形であるが、奥が幅広になっている。玄室の幅は211cmで、現存部の奥行きは119cmを測る。屍床の仕切りはなかったものと考えられる。天井形態は不明であるが、カマボコ形に近い形態ではなかつたかとみられる。

遺物 何も検出されなかった。

## 29号横穴墓

遺構 上段の左端近く、28号の右側に位置する。主軸方向はN51°Wで、南東に開口している。

羨門部は壊れているが、床面は奥に向かって広がり、玄室の直前で幅が狭くなっている。



第42図 28・29号横穴墓実測図

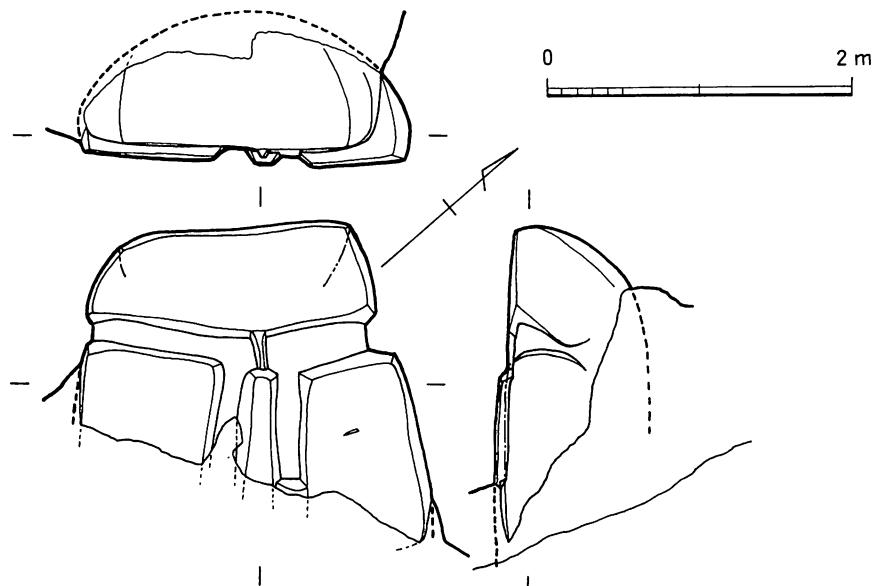
玄室は、入口部が幅 248cm、奥壁部が 181cm、奥行き 290cmを測り、平面形態は台形を呈する。「コ」字形屍床で、仕切りは丁寧ではっきり造られ、各仕切りに排水の溝が切られている。奥屍床の仕切りは崩れているが、両端が高くなっているが、ゴンドラ形仕切りの名残りがみられる。天井部も壊れているが、奥屍床付近に軒先を表現した段がめぐっており、家形の退化したドーム形を呈するものと考えられる。高さは 220cm程度であったと推定される。

遺物 奥屍床の左端と右屍床の入口側に歯の一部が検出されたので2体分の埋葬状態を推定できたが、その他は不明。副葬品などは検出されなかった。

### 30号横穴墓

遺構 中段の左端、29号墓の下、6号墓の左側に位置する。主軸方向はN50°Wで、南東に開口している。

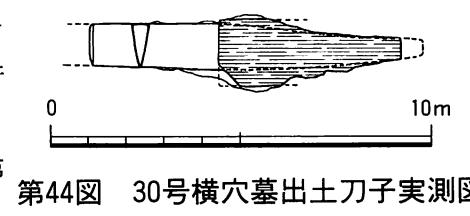
玄室の3分の2程が残っている。玄室は、平面形態が台形に近く、復原すると入口部で幅約240cm、奥壁部で 148cm、奥行き約 220cmを測る。「コ」字形屍床で、通路は非常に狭く、仕切り



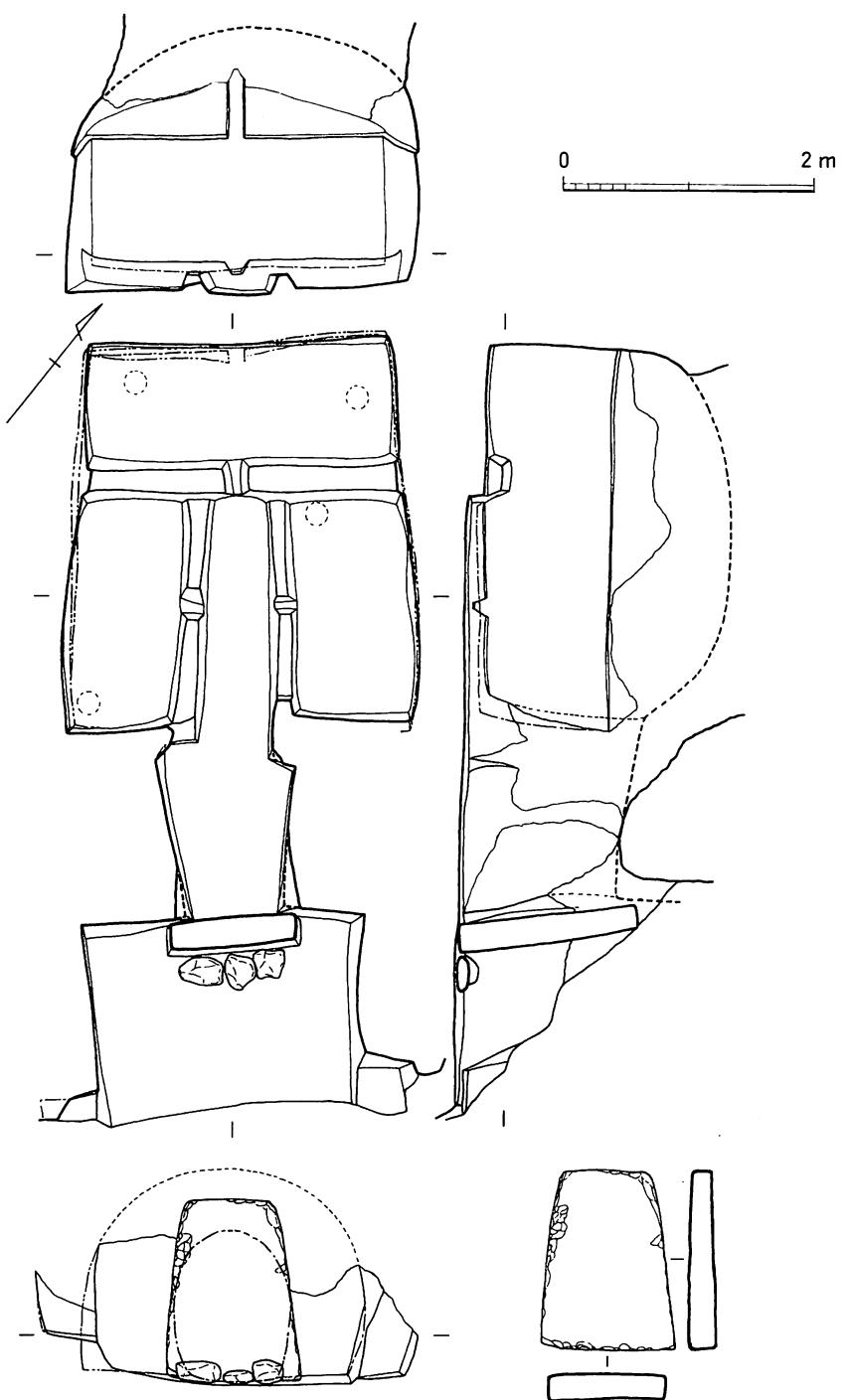
第43図 30号横穴墓実測図

は低いが幅はやや広い。左・右の仕切りと奥の仕切りは上面が続いている。奥の仕切りの両端は反り上っている。天井部は復原するとドーム形で、高さは約 100cm しかなく、非常に天井の低い横穴墓である。

遺物 右屍床から刀子が1点検出された。第



第44図 30号横穴墓出土刀子実測図



第45図 31-1号横穴墓実測図

44図に示したものがそれである。身・茎部にも端部を欠損しており、現存長 8.2cmを測る。身部の現存長 3.4cmで、幅 1.3cm、厚さ 0.4cmを測る。茎部は木質が残っており、現存長 4.8cmを測る。

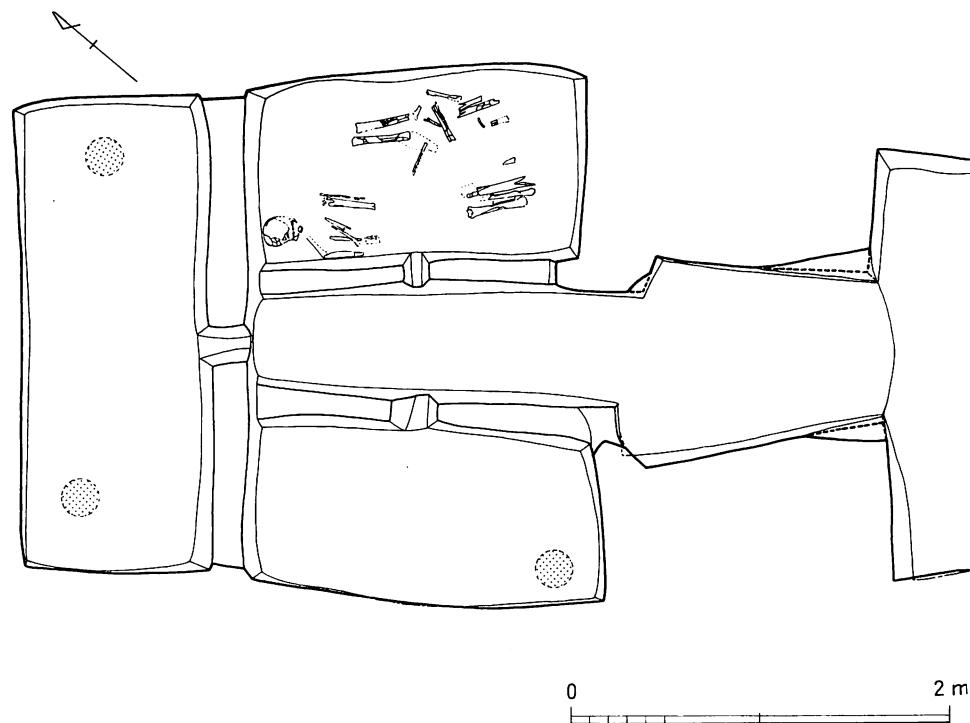
### 31-1号横穴墓

遺構 上段の左端近く、29号墓の右側、6号墓の上方に位置する。主軸方向はN39°Wで、南東に開口している。

未開口の状態で発見された。閉塞石は凝灰岩製切石で、周辺には調整の剝離痕を残している。下端の幅 108cm、上端の幅 74cm、高さ 144cm、厚さ 22cmを測る。閉塞石の前は 3 個の軽石で固めてあった。

羨門はやや崩れているが、アーチ形で、幅約 80cm、高さ約 122cmを測る。羨道は奥の幅 115cmで、長さ 160cm残存している。羨道の両端には一段のステップの付いた飾り縁の一部が残っている。

羨門から 170cmで玄室に至るが、29号墓と同様、進むに従って幅広になり、玄室の直前で幅狭になっている。



第46図 31-1号横穴墓人骨出土状況実測図

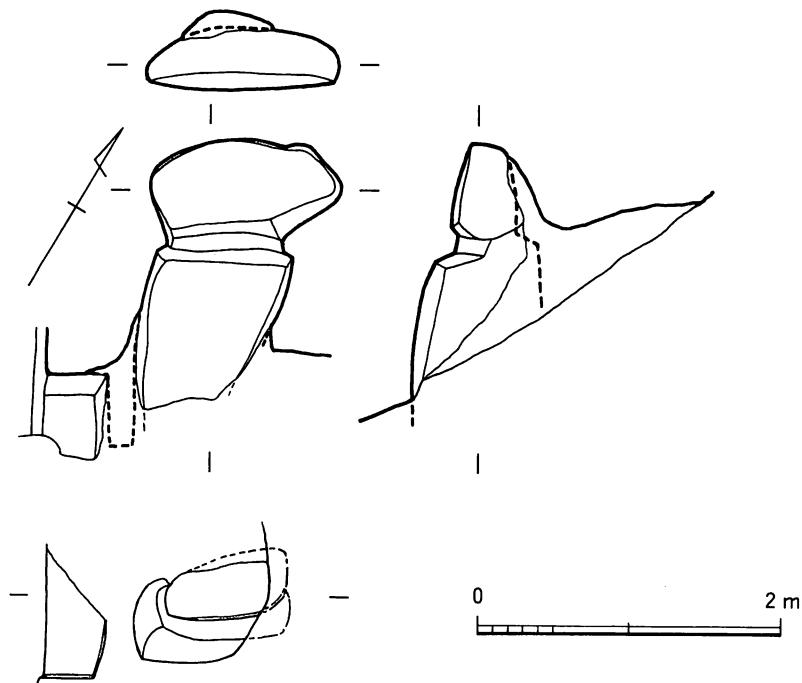
玄室は、入口部で幅 286cm、奥壁部で幅 234cm、奥行き 296cmを測り、平面形態はほぼ方形を呈する。「コ」字形屍床で、仕切りの細部も丁寧に仕上げてある。屍床面から50cmまで壁面が垂直に立ち上がり、その上端に軒先の段がめぐっている。奥壁には軒先より上に柱状の浮き彫りがあり、棟持柱を表現したものと考えられる。以上のように家を意識して造られた横穴墓であるが、陥没した天井の中央部を復原すると、ドーム形になるとみられ、やや退化した家形と考えることができよう。通路から天井までの高さは約 210cmであったと考えられる。

遺 物 未開口であったが、副葬品等は検出されなかった。人骨は奥屍床に 2 体分、右屍床に 3 体分、左屍床に 1 体分を確認したが、骨粉の残存状態からみると実際にはもっと多く埋葬されていたようである。取り上げることができたのは右屍床の 2 体分の一部のみであった。

### 31-2号横穴墓

遺 構 上段の31-1号墓の右側に付属して造られている。歪んでいるので主軸方向を決めたいが、ほぼ N15° Wである。

入口部は壊れているが、平面形態が逆台形を呈した羨道状のものがあり、その奥に横方向の仕切りで独立させた玄室状のものがある。羨道状のものは現存長 102cmで、奥の幅は90cmを測



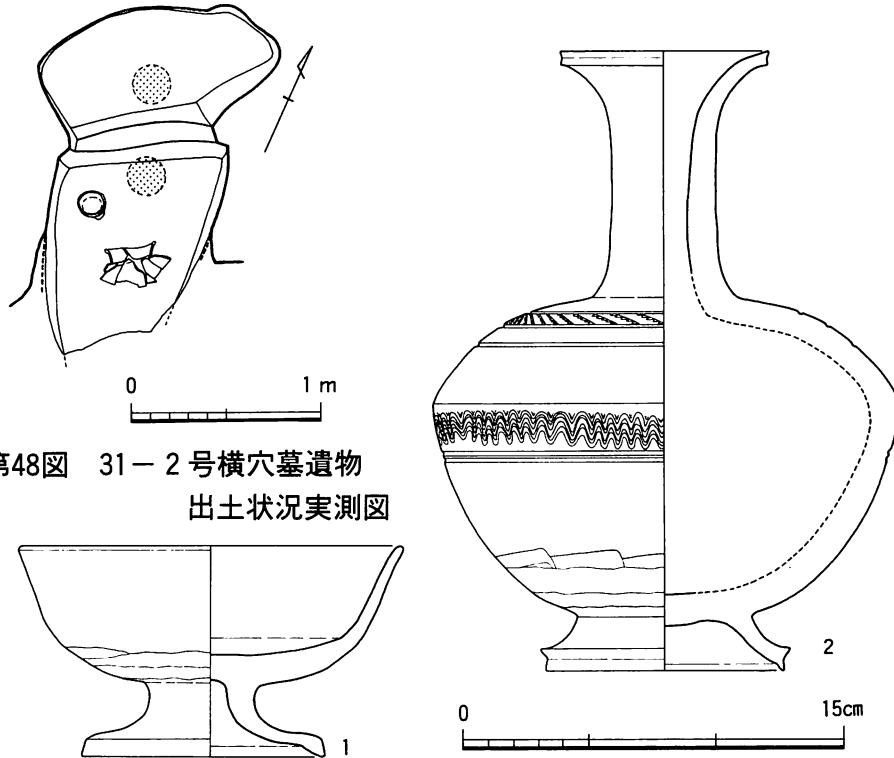
第47図 31-2号横穴墓実測図

る。仕切りの上面の幅は11cmで、ここは幅・高さとも狭くなっている。その奥の玄室状の所は横長で、幅126cm、奥行き60cm、復原高約50cmを測る。天井の形態は分類しがたいが一応ドーム形としておきたい。

**遺物** 横方向に設けられた仕切りの中央部の前後に歯の一部が集まって確認され、2体分の頭骨が埋葬されていたことがわかった。

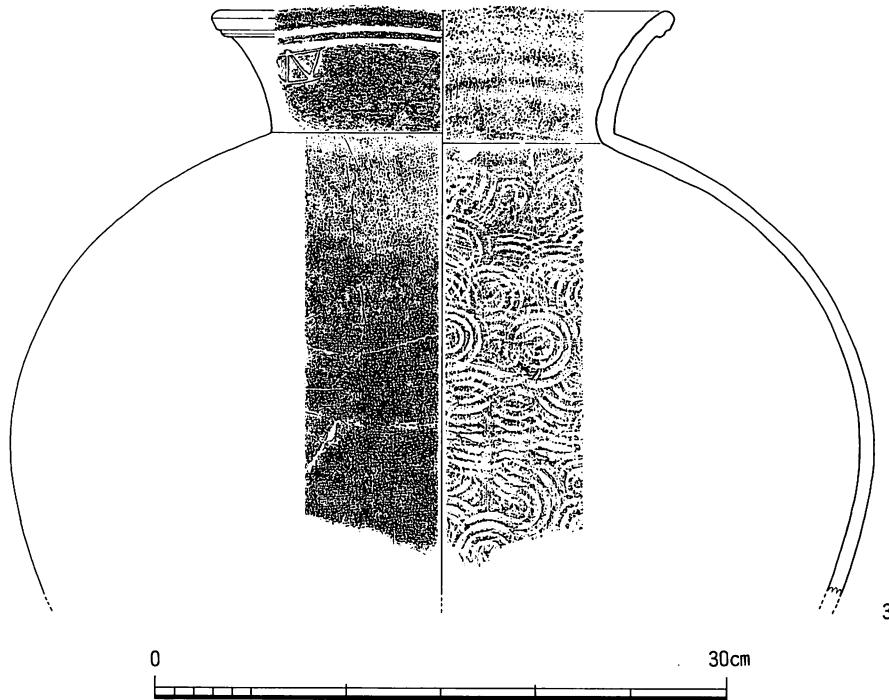
遺物は羨門と仕切りの間で検出され、須恵器の台付椀と大甕があった。このうち大甕の破片は崖崩れにより崖の下や、天井の陥没した5号横穴墓の覆土中からも発見された。また崖の下からは完形の須恵器の長頸壺も転落した状態で発見されたが、位置的にみて、この31-2号横穴墓に伴っていたものと考えられる。

第49図と第50図に示した須恵器がそれである。1は台付椀で、台は低く、椀は口縁部がわずかに外反ぎみである。全体にヨコナデ調整されているが、椀の下部に一部ヘラケズリが認められる。焼成は良く、色調は灰色を呈する。口径は15.3cmで、高さは8.3cmを測る。なお口縁部の一部と台部に欠損がみられる。2は長頸壺で、製作工程における歪みがみられるが、完形である。胴部は肩が張り、底部には低い台が付き、頸部は細く立ち上がり、口縁部は大きく外反している。胴部の下方はヘラケズリされているが、その他は回転ヨコナデ調整されている。肩



第48図 31-2号横穴墓遺物  
出土状況実測図

第49図 31-2号横穴墓出土須恵器実測図（1）



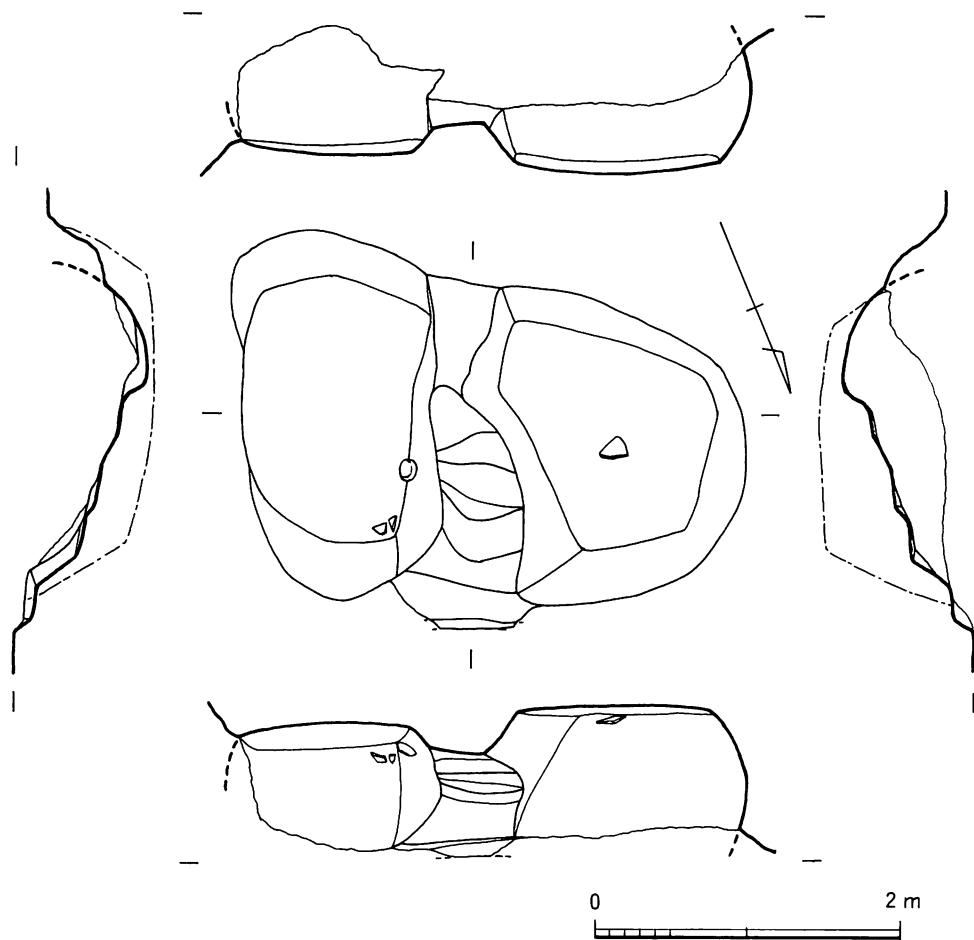
第50図 31-2号横穴墓出土須恵器実測図（2）

部の下方には櫛描き波状文を施し、その下に二条の沈線をめぐらしている。肩部の中程には三条の沈線を施し、上の二条の間には斜めに櫛目を押し当てた文様を連続して施している。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。歪んでいるが、平均した高さはほぼ24.2cmで、口径 8.2cm、胴部最大径18.4cmを測る。3は大甕の破片で、胴部は大きく張り、口縁部は短く外反し、口唇部は外面に肥厚し、その部分に一条の凹線をめぐらせている。胴部外面と口縁部内外面は回転ヨコナデ調整されているが、胴部内面は同心円文タタキ目がみられる。焼成は良好で、色調は黒灰色を呈する。復原口径は24.4cmで、現存高は30.1cmを測る。なお口縁部外面には一部欠損部まで達したヘラ記号がみられる。

### 32号横穴墓

**遺構** 中央よりやや左の上方、21号墓の上にあたる所に位置する。主軸方向はN22° Eで、北北東に開口している。

**羨門・玄室**とも上方が削平されているが、復原すると、半地下式になる。中世に隈本城本丸が造られたため、現在はここが平坦地形であるが、古墳時代には凹凸のある山であったとみられ、その凹部（北側）に羨道を設け、凸部（南側）に玄室を造ったものと考えられる。おそらく造られた時期は崖面に横穴墓を造る空間がほぼなくなつた頃であろう。

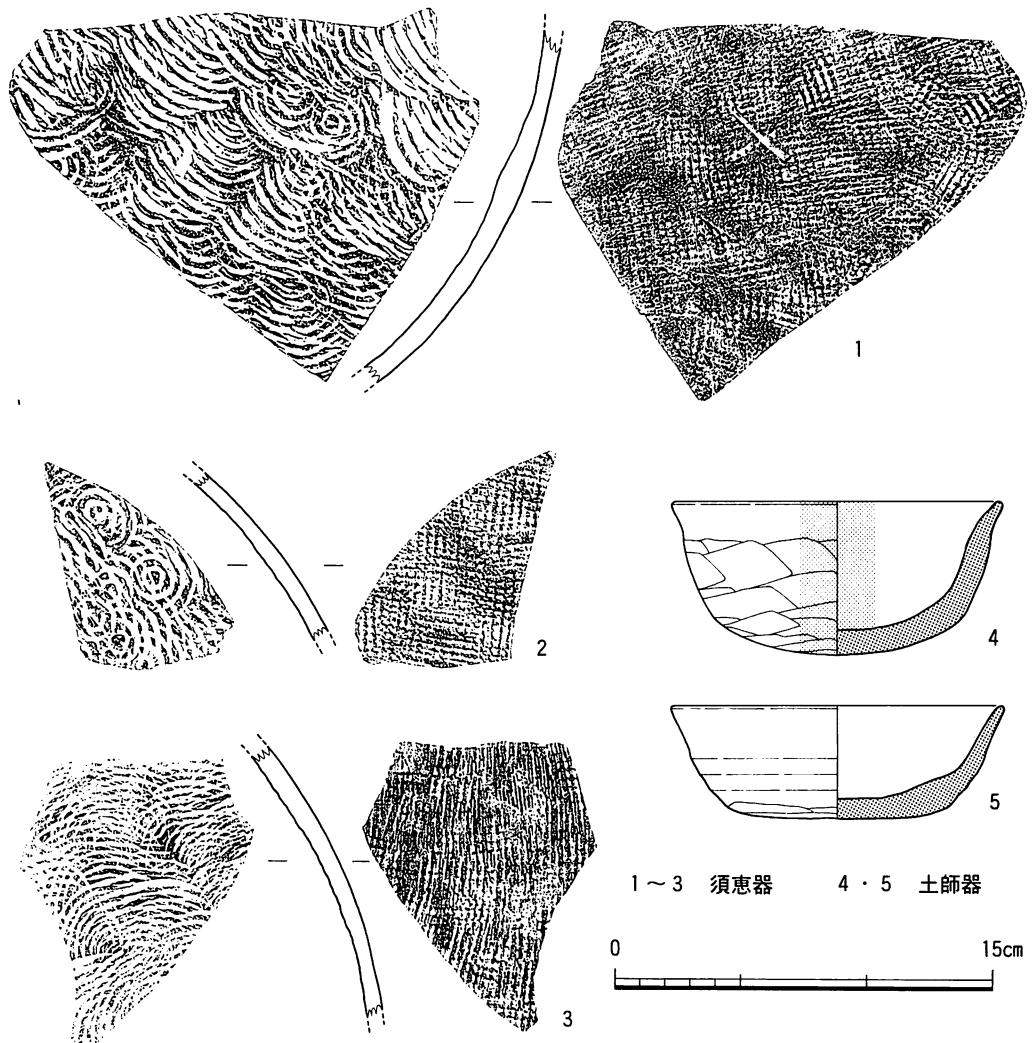


第51図 32号横穴墓実測図

通路は羨門からまっすぐ階段が造られており、その階段の両側に屍床がある。屍床へは階段の奥からさらに左右に一段おりるようになっている。羨門部から屍床面までの比高差は約 100 cm ある。玄室の平面形態は橢円形に近く、幅 340cm、奥行き 240cm を測る。おそらく天井部はドーム形で、屍床面からの高さは 160～180cm 程度であったと考えられる。

**遺物** 人骨の遺存は認められなかった。遺物は玄室内から須恵器と土師器の破片が検出された。

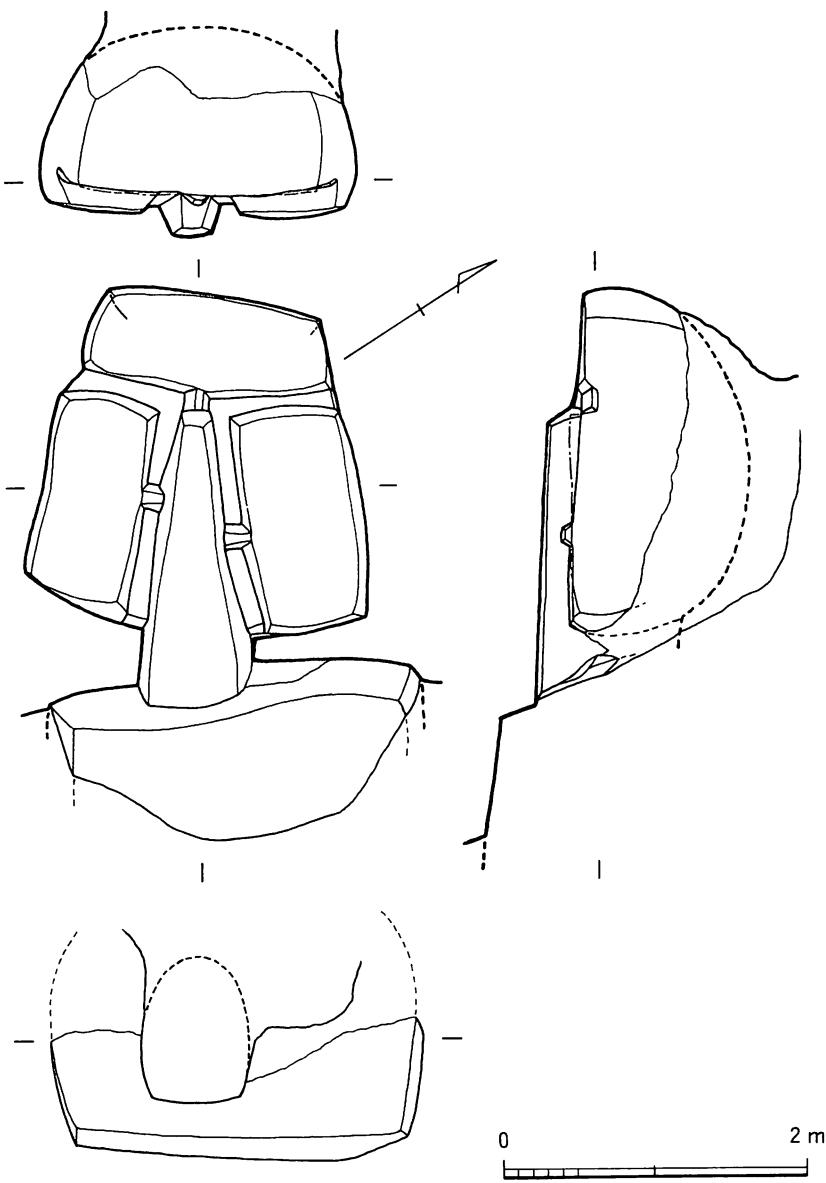
第52図 1～3 は須恵器の甕の胴部破片である。1 と 2 は同一個体であるが、1 は右屍床、2 は左屍床から検出された。割合薄手で、外面は格子目タタキ、内面は同心円文タタキで整形している。焼成はやや良で、色調は灰色ないし黄灰色を呈する。3 は左屍床から検出された。外



第52図 32号横穴墓出土土器実測図

面は格子目タタキ、内面は同心円文タタキで整形している。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。

第52図 4と5は土師器の坏である。4は覆土中から検出された。半分程残る破片で、底部は丸く、厚手で、口縁部は外反している。内面と口縁部付近はヨコナデ調整で、口縁部を除く外面はヘラケズリされている。また、内外全面を丹彩している。焼成はやや良で、丹彩の下の色調は白っぽい褐色を呈する。復原口径13.2cmで、高さは 6.0cmを測る。5は口縁部を部分的に欠損しているが、ほぼ完形である。底部は平底に近く、口縁部の外反は弱い。底部付近に一部ヘラケズリの痕がみられるが、ほぼ全体をミズビキにより整形している。焼成は良好で、色調は明褐色を呈する。大きさは口径13.2cmで、高さ 4.4cmを測る。



第53図 33号横穴墓実測図

### 33号横穴墓

**遺構** 上段の中央部よりやや左寄りに位置する。主軸方向はN 58° Wで、南東に開口している。

羨門は上部が崩れているので高さは不明であるが、幅は約75cmを測る。羨道は殆んど削られているが、奥部が残っており、幅 236cmを測る。羨道から羨門へは20cm程段上がりになってお

り、羨門から52cmで玄室に至る。

玄室は、入口部で幅 225cm、奥壁部で幅 140cm、奥行き 220cmを測り、平面形態は台形を呈する。「コ」字形屍床で、各屍床の仕切りの中央部には排水の溝がある。左・右屍床面は通路より20cm程高く、奥屍床はそれより10cm程高い。玄室天井部は崩れているが、残存部から復原するとドーム形であったと考えられ、高さは 135cm程度であったと推定される。

遺 物 何も検出されなかった。

### 34- 1号横穴墓

遺 構 上段の中央よりやや左側、33号の右に並んでいる。主軸方向はN36° Wで、南東に開口している。

羨門は上方が崩れているが、幅80cmで、高さ約 115cmであったと推定され、正面観はアーチ形であったと考えられる。羨門の前が中世城が造られた時削られているので羨道は殆んど残っていないが、幅は約 200cm程度であったとみられる。羨門から94cmで玄室に至る。

玄室は、入口部で幅 195cm、奥壁部で幅 172cm、最大幅 218cmを測り、奥行は 236cmである。平面形態はやや胴張りの方形を呈する。屍床は「コ」字形であるが、奥屍床には仕切りがない。左・右の屍床を広くするため、通路は細く造られている。通路と左・右屍床の差はわずか 5 cm しかなく、奥屍床もそれより 5 cm 程高いだけである。天井部は崩れているが、ドーム形を呈していたと考えられ、高さは 160cm程度であったと推定される。

遺 物 遺物は何も検出されなかった。

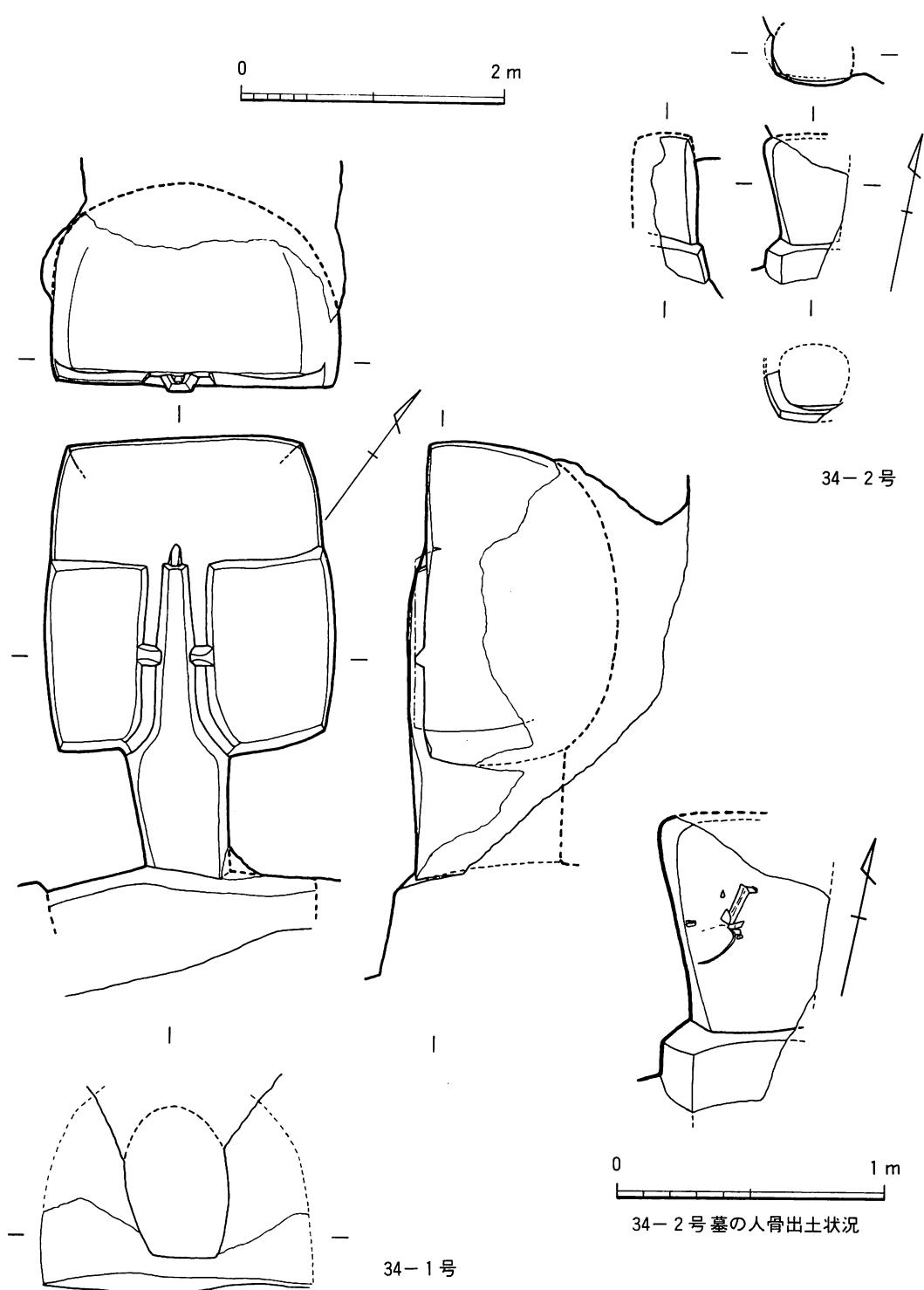
### 34- 2号横穴墓

遺 構 上段の中央近く、34- 1号横穴墓に付属して、その右側に造られている小型横穴墓である。主軸方向はN11° Wで、南に開口している。

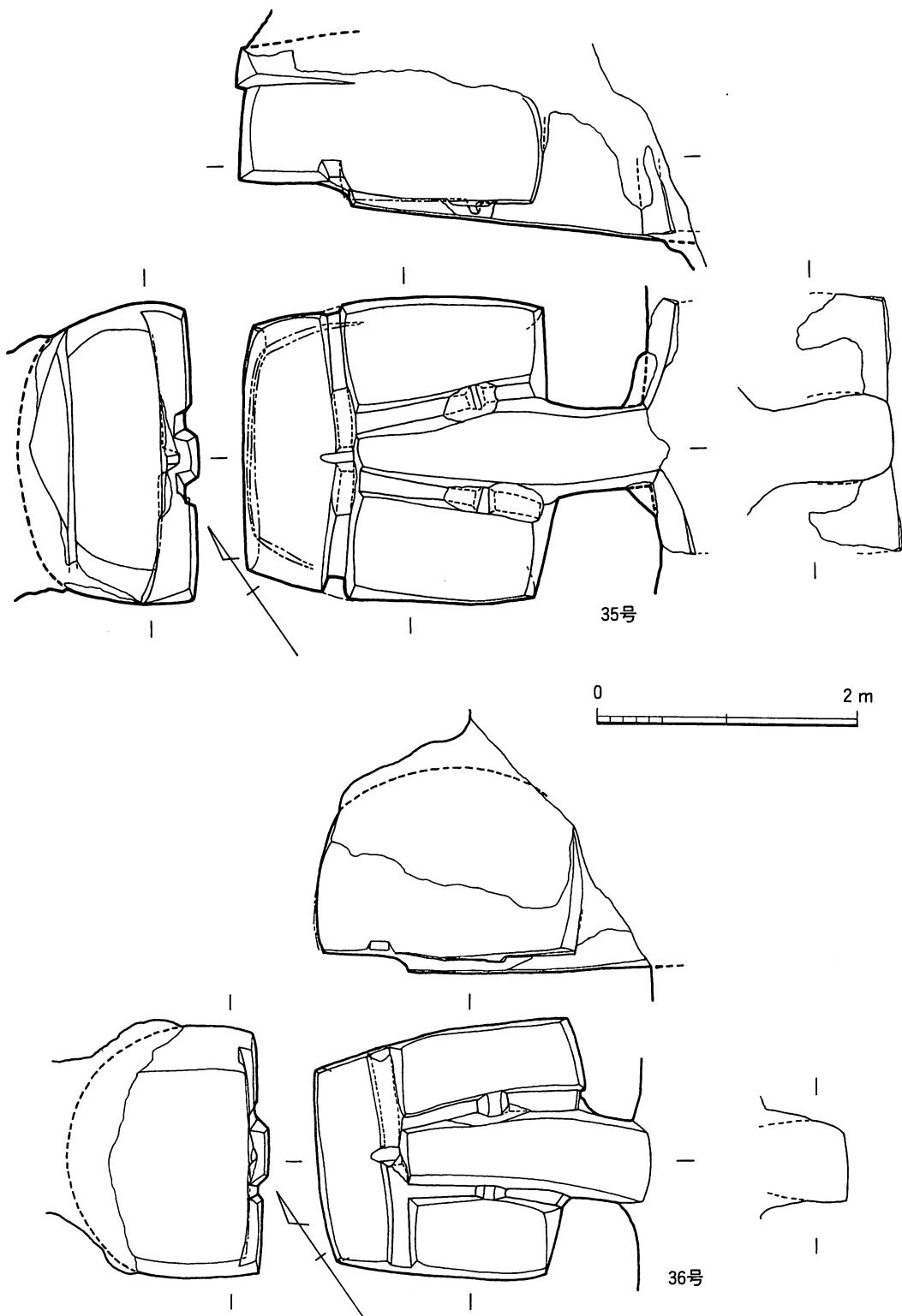
35号墓の左上にあるため大きく崩壊しているが、復原すると羨門部は幅約53cm、高さ約45cmであったと推定される。羨道は下面の幅約50cmで、現在奥行30cmが残っている。羨道と羨門の間には 4 cm 程の段がある。

羨門から直ちに玄室となっている。玄室は、奥壁部で幅約70cmと推定され、奥行きは82cmを測り、平面形態は逆台形を呈する。天井はカマボコ形に近いドーム形であったと考えられ、高さは約50cm程度とみられる。

遺 物 再埋葬とみられる人骨 1体分が検出されたが、副葬品などはなかった。



第54図 34-1・2号横穴墓実測図



第55図 35・36号横穴墓実測図

### 35号横穴墓

遺構 上段の中央付近に位置する横穴墓である。主軸方向はN 56° Wで、南東に開口している。

羨門・玄室とも上方が崩れているが、復原すると羨門の幅は70cmである。羨道は前部を横切る中世の溝で削られているが、羨道奥がかろうじて残っており幅 190cmを測る。羨門から96cmで玄室に至る。

玄室は、入口部で幅 232cm、奥壁部で幅 183cm、奥行き 226cmを測り、平面形態は方形に近い台形を呈する。屍床は「コ」字形に配置され、奥仕切りは中央部に、左・右仕切りはやや入口寄りに排水の溝がある。左・右の屍床面より奥屍床面が20cm程高い。天井部は残った奥壁部からみると切り妻の家形で、妻入りに造られていたものと考えられる。ただ軒先の表現が奥屍床部分しかみられないことから、かなり退化した家形であろう。通路から天井までの高さは 140cm程度であったと考えられる。

遺物 何も検出されなかった。

### 36号横穴墓

遺構 上段の中央部付近に造られた横穴墓で、35号墓の右側に並んでいる。主軸方向はN 55° Wで、南東に開口している。

羨道から、羨門まで削られているが、羨門は幅65cm程度であったと考えられる。羨門と玄室の間は現在58cm残っている。

玄室は、入口部で幅 200cm、奥壁部で幅 146cm、奥行き 204cmを測り、平面形態はややひずんだ台形を呈する。「コ」字形屍床で、各仕切りには排水の溝がある。右屍床が左屍床よりも奥行きが長い。天井形態はドーム形を呈していたものとみられ、高さ 160cm程度であったと考えられる。

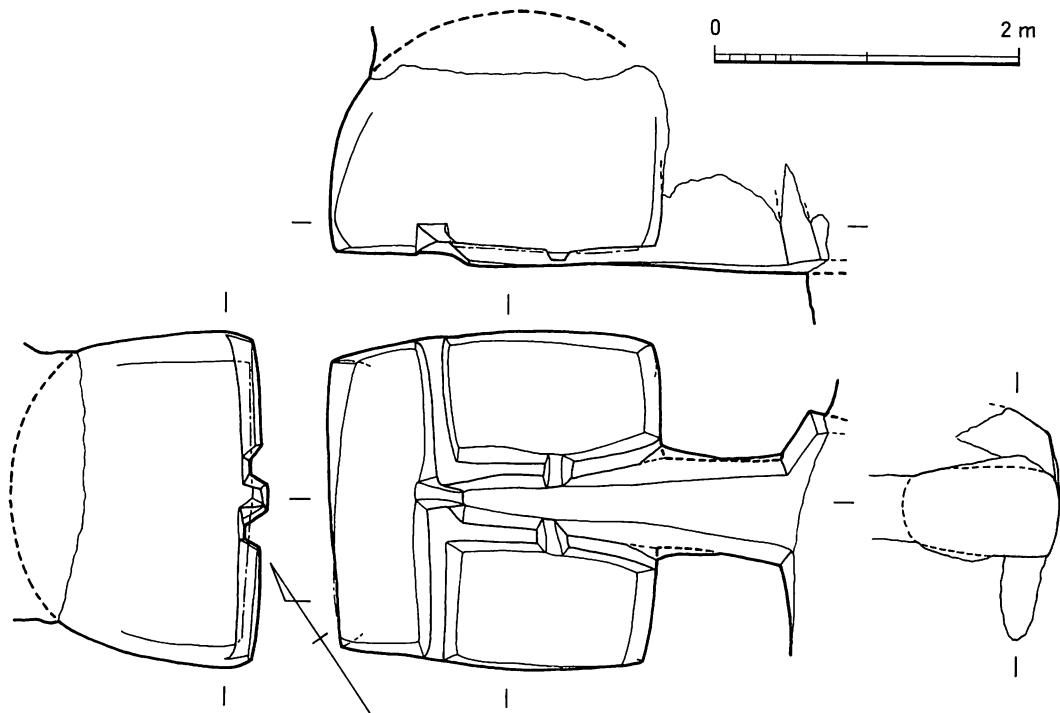
遺物 出土遺物はなかった。

### 37号横穴墓

遺構 上段の中央部付近にあり、36号墓の右斜め下方に位置する。主軸方向はN 55° Wで、南東に開口している。

羨門は復原すると幅約60cmで、高さ約 100cmであったと考えられる。羨道は削られているが、羨道奥の幅は約 130cmであったとみられる。羨門から86cmで玄室に至る。

玄室は、入口部で幅 206cm、奥壁部で幅 186cm、最大幅 220cm、奥行き 222cmを測り、平面形態はほぼ方形を呈する。「コ」字形屍床で、各仕切りの中央部には排水の切れ込み溝がある。



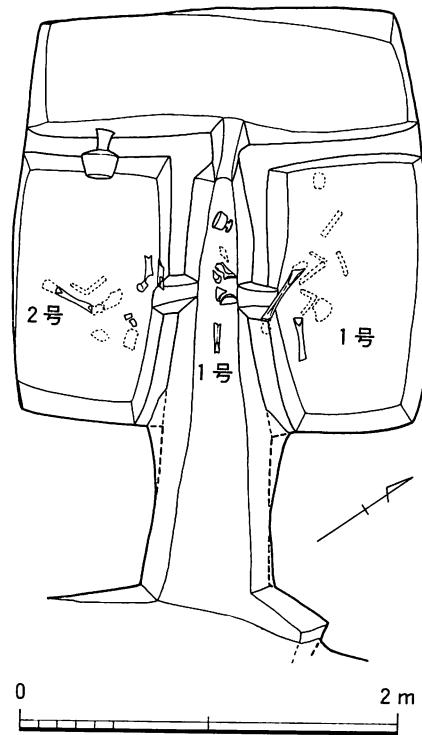
第56図 37号横穴墓実測図

通路と各屍床面のレベル差は非常に少ない。天井形態はドーム形と考えられ、高さは約 170cm と推定される。

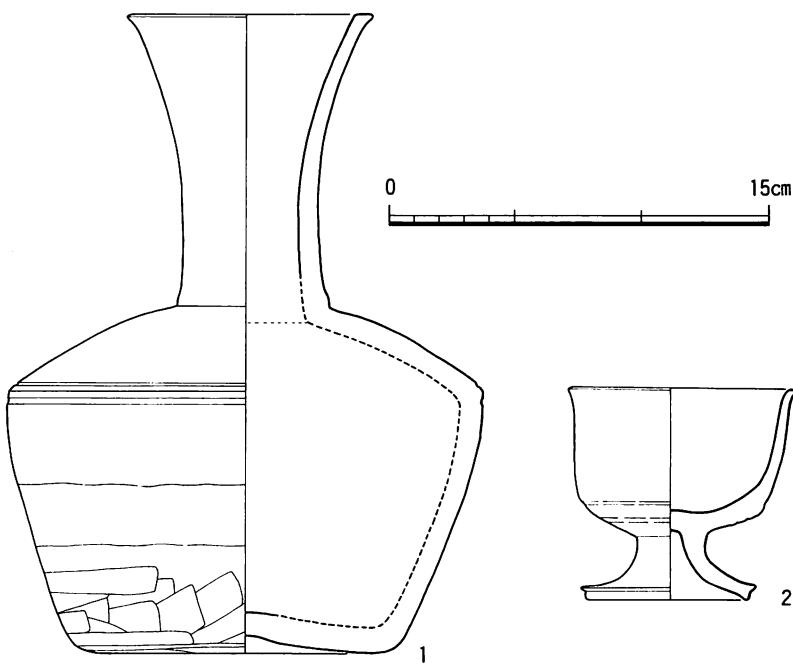
**遺物** 人骨が左側屍床に 1 体と左側屍床から通路にかけて 1 体の計 2 体分が残っていた。

また左側屍床の奥に長頸壺 1 個、通路の奥に台付椀 1 個があった。共に完形品である。

**長頸壺** (第58図 1) は、胴部の肩が張って屈折しており、その屈折部の上下に各 1 条の沈線を施している。底部は平底である。頸部はゆるやかに外反しながらのびている。全体に回転ヨコナデ調整されているが、胴部下半から底部にかけては、さらにヘラケズリを行っている。焼成は極めて良好で、色調は灰色ないし暗茶褐色を呈する。口径は 9.7cm で、胴部最大径 18.8cm、第57図 37号横穴墓人骨・須恵器高さ 24.9cm を測る。台付椀 (第58図 2) は、脚



第57図 37号横穴墓人骨・須恵器  
出土状況実測図



第58図 37号横穴墓出土須恵器実測図

台部はよくしまって低くラッパ状に開き、楕部は深く、口縁部は小さく外反している。全体が回転ヨコナデ調整されている。焼成は良好で、暗茶褐色を呈する。やや歪んでおり、口径 9.4~10.4cmで、高さは 8.3cmを測る。

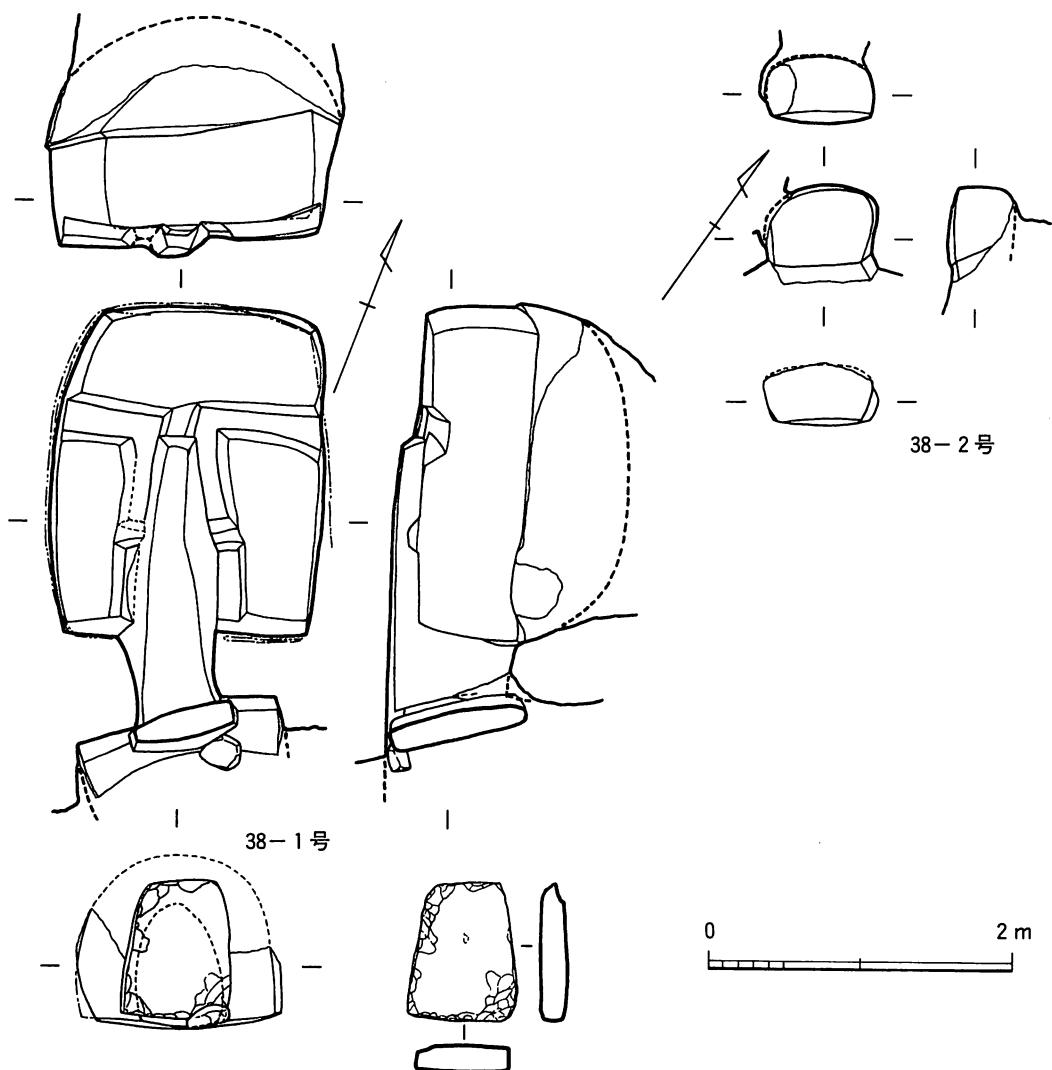
### 38-1号横穴墓

**遺構** 上段の中央部にある横穴墓で、37号墓の右側に並んで造られている。主軸の方向はN 21° Wで、南南東に開口している。

羨道は前部が中世溝で削られているにもかかわらず、羨門には閉塞石が未開口の状態で残っていた。この閉塞石は凝灰岩製の切石で造られており、正面観は台形を呈する。下部の幅は73cm、上部の幅は47cm、高さ90cm、厚さ19cmを測る割合小型の閉塞石である。閉塞石の前に支えた軽石が1個残っていた。

羨門は幅58cm、高さ80cmで、アーチ形をなしている。羨道は先述のごとく削られているが、奥部の幅は 134cmで、26cm残存している。羨門から80cmで玄室に至る。

玄室は、入口部で幅 160cm、奥壁部で 140cm、最大幅 180cm、奥行き 205cmを測り、平面形態は胴張りの長方形を呈する。屍床は「コ」字形に配置され、各仕切りには排水溝をもつが、全体に造りが粗い。壁面上部には軒先を表現した段がめぐっており、奥の一部には隅棟の表現



第59図 38-1・2号横穴墓実測図

があるが、天井部はドーム形になると推定され、かなり退化した家形天井とみることができる。通路から天井までの高さは約160cmであったと考えられる。

**遺物** 奥屍床から人骨1体分が、また右屍床からも人骨1体分が検出されたが、副葬品などは検出されなかった。なお、左屍床にも骨粉はあったので、3体以上の埋葬があったものと考えてよい。

### 38-2号横穴墓

**遺構** 上段の中央部、38-1号墓の右側に付属して造られた小型横穴墓である。主軸方向は

N36° Wで、南東に開口している。

羨道部から玄室の上部にかけて崩れているが、羨門は幅70cmで、高さ約39cmであったと考えられる。羨門から直ちに玄室に至る。

玄室は左側が一部38-1号墓と通じている。これは掘っている途中で通じてしまったと考えられ、その為屍床をいくぶん右側へひずませている。玄室は、幅73cm、奥行き52cmで、高さ44cmを測り、平面形態は橢円形に近く、天井形態はドーム形を呈する。

遺物 何も検出されなかった。

### 39号横穴墓

遺構 上段の中央部に位置する。主軸方向はN38° Wで、南東に開口している。

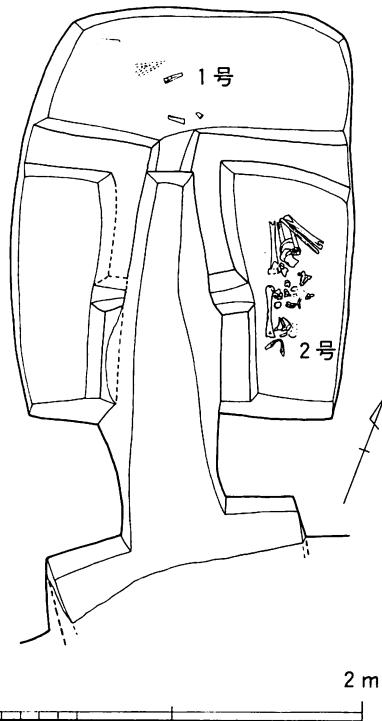
羨門は閉塞石で塞がれ、その根元は三個の軽石を置いて固定してあった。この状況は埋葬当時のままと考えられた。

閉塞石は凝灰岩製切石で、幅55cm、高さ83cm、厚さ17cmで、下端は直線的であるが、上部はやや丸くなっている。閉塞石の外面の中央部やや上方に「火守（または火安）」と読める文字が薬研彫りに刻まれていた。文字の大きさは「火」が横7cm、縦7.5cmで、その下の「守（または安）」が、横7cm、縦8cmを測る。文字の周辺は他の部分に比べて表面仕上げが丁寧（平坦）であり、前工程で文字を彫るのを考慮していたことがわかる。

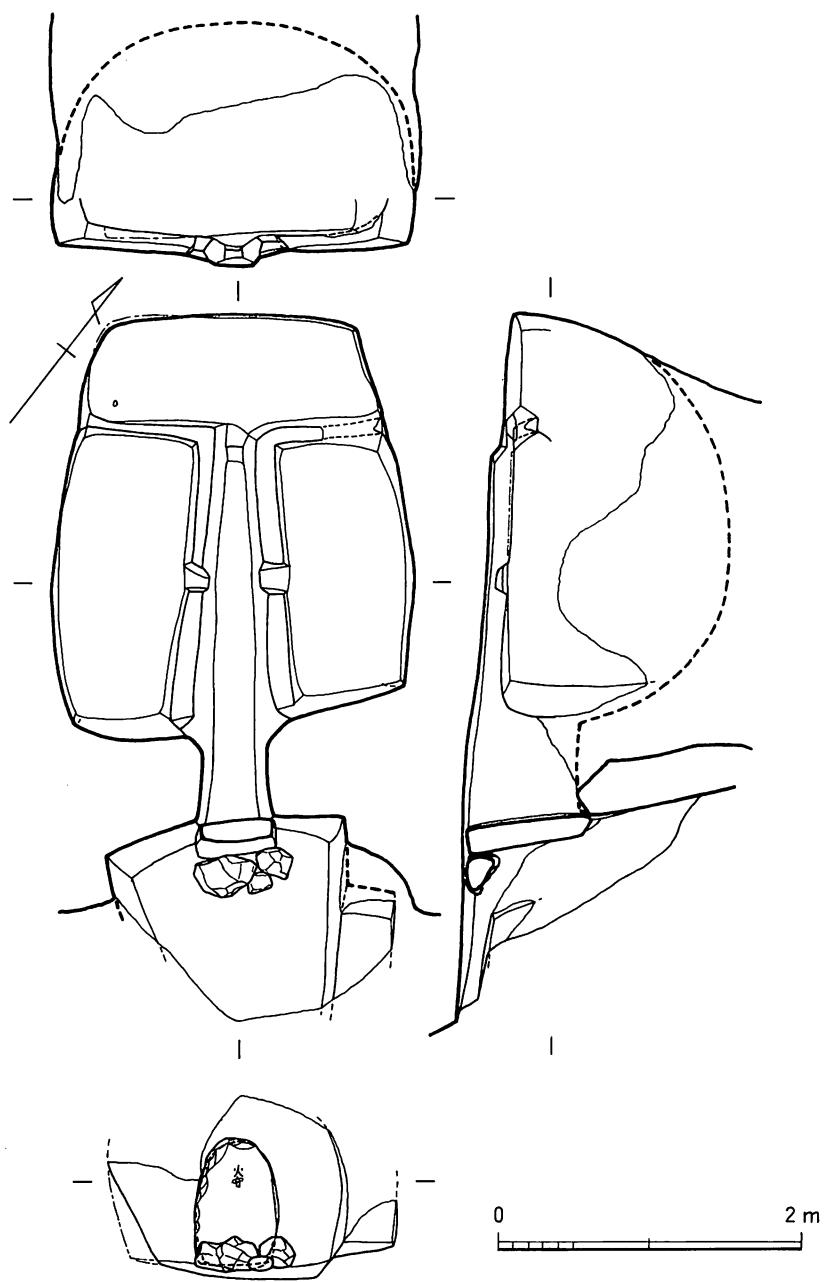
羨門は幅55cm、高さ84cmで、アーチ形を呈している。羨門に至る羨道は、平面形態が逆台形で、奥の幅160cmを測り、長さ128cmが残っている。また羨道の右側には、羨道面より10cm高く幅35cmのステップをもつ飾り縁の一部が確認できる。

羨門から玄室までの間は90cmを測る。玄室は、入口部で幅220cm、奥壁部で幅165cm、最大幅240cm、奥行き275cmを測り、平面形態は台形を呈する。屍床は「コ」字形に配置され、各仕切りには排水の溝が切られている。屍床を広くするため通路を狭く造ってある。左・右屍床面は通路より10cm程高く造られているが、左・右屍床面と奥屍床面のレベル差は殆んどない。天井部は陥没しているが、高さ約160cmで、ドーム形を呈していたと考えられる。

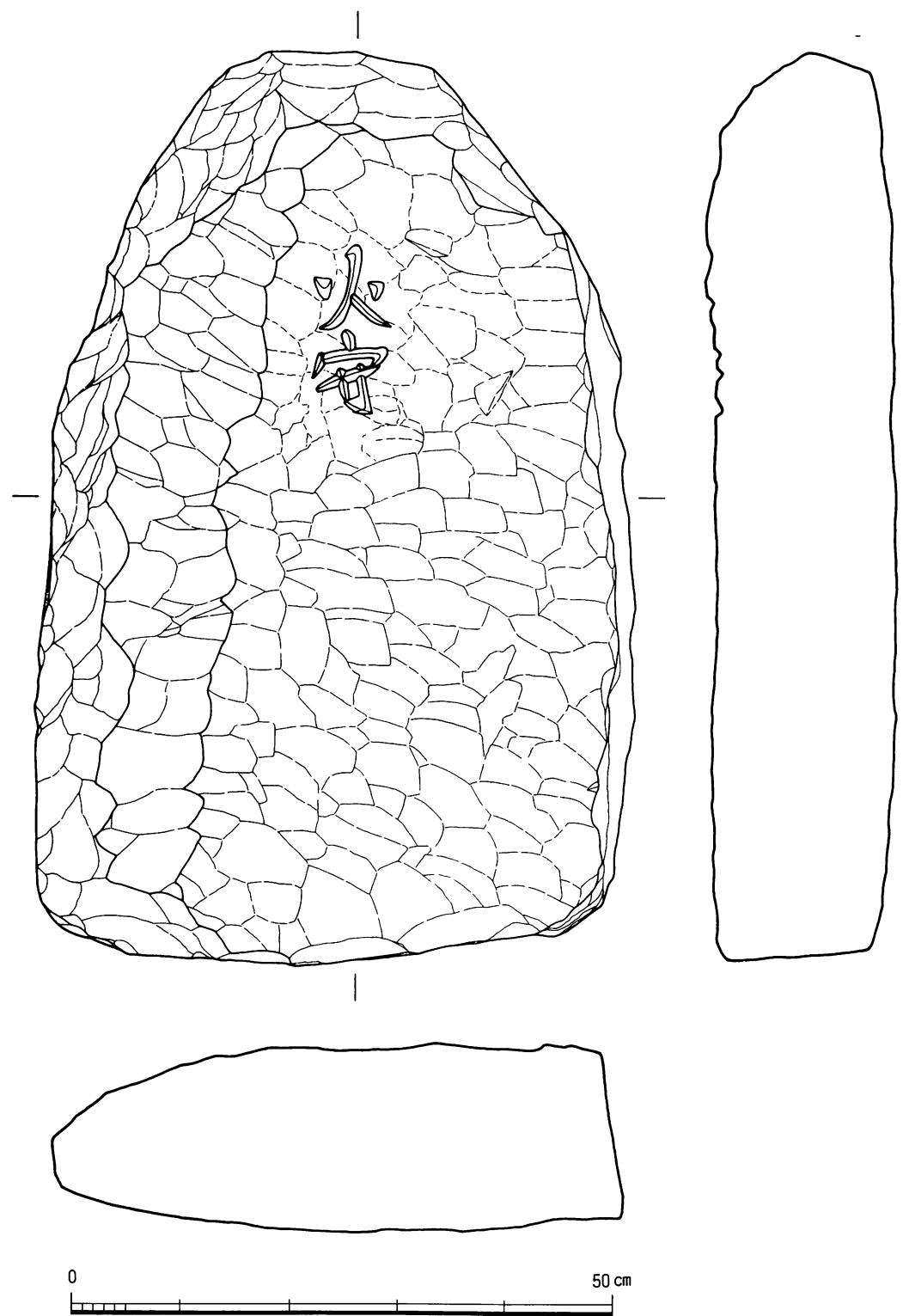
遺物 玄室奥屍床の左側から鉄滓1個が出土した。



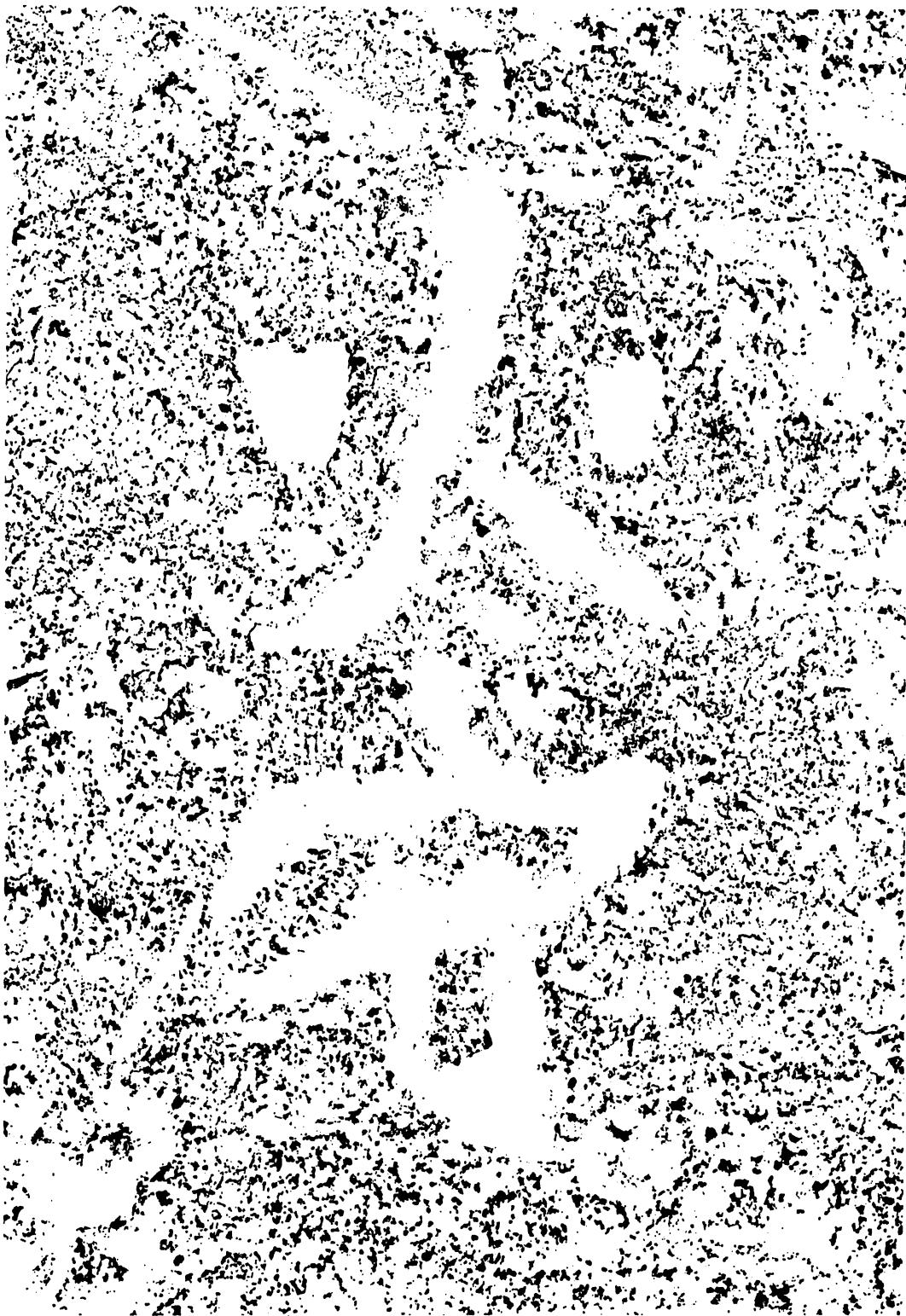
第60図 38-1号横穴墓人骨  
出土状況実測図



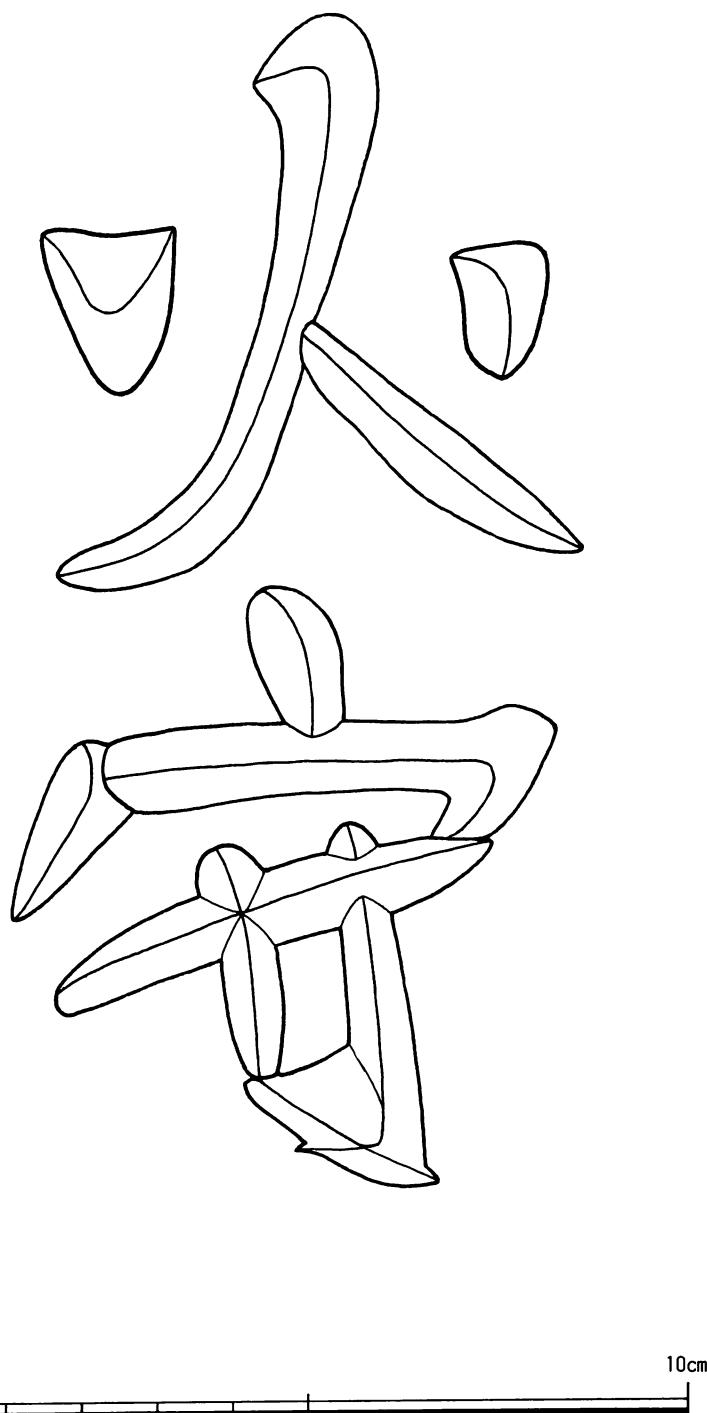
第61図 39号横穴墓実測図



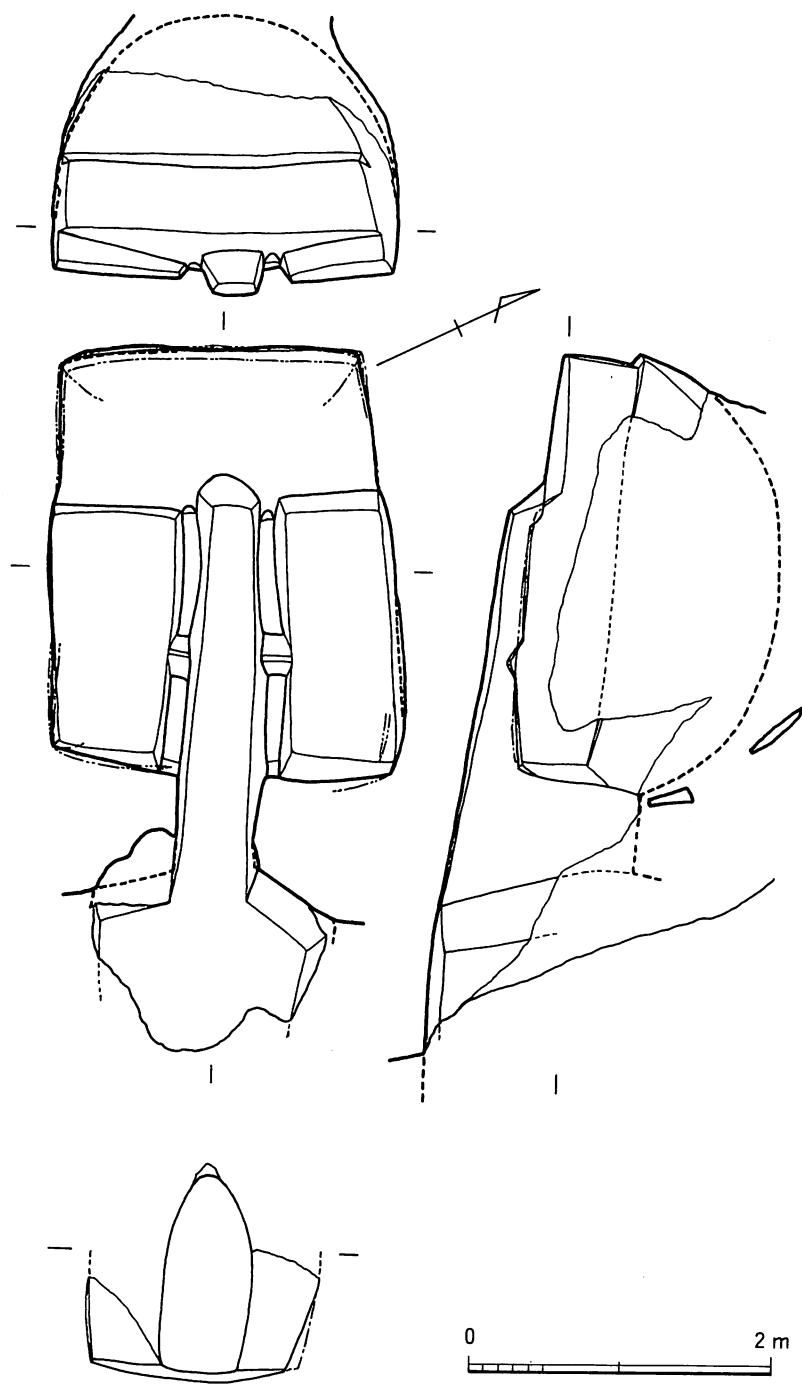
第62図 39号横穴墓閉塞石実測図



第63図 39号横穴墓閉塞石の文字拓影図 (1/1)



第64図 39号横穴墓閉塞石の文字実測図



第65図 40号横穴墓実測図

## 40号横穴墓

遺構 上段の中央よりやや右寄りに位置する。主軸方向はN $64^{\circ}$  Wで、東南東に開口している。

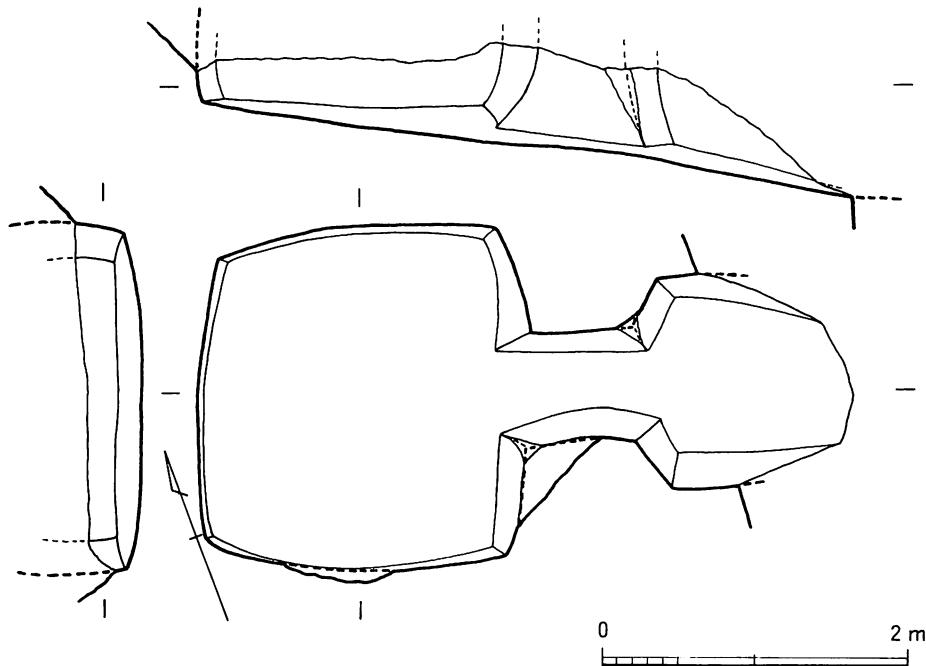
羨門はアーチ形で、幅60cmで、高さは約 130cmを測る。羨道の平面形態は逆台形で、奥の幅155cmで、長さ 100cm程が残っている。羨門から90cmで玄室に至る。

玄室は、入口部で幅 232cm、奥壁部で幅 195cm、奥行き 274cmを測り、平面形態はやや奥が狭いがほぼ長方形を呈する。「コ」字形に屍床が配置されており、左・右の屍床には排水溝を持つ仕切りがあるが、奥の屍床には仕切りがない。通路は奥に向かって上がっており、通路面より左・右屍床面は15cm程高く、奥屍床面はそれよりさらに15cm程高く造られている。壁面の上方には軒先を表現した段がめぐり、その上方には隅棟があるが、天井中央部はドーム形を呈していたものと考えられる。通路から天井までの高さは約 185cmであったと推定される。

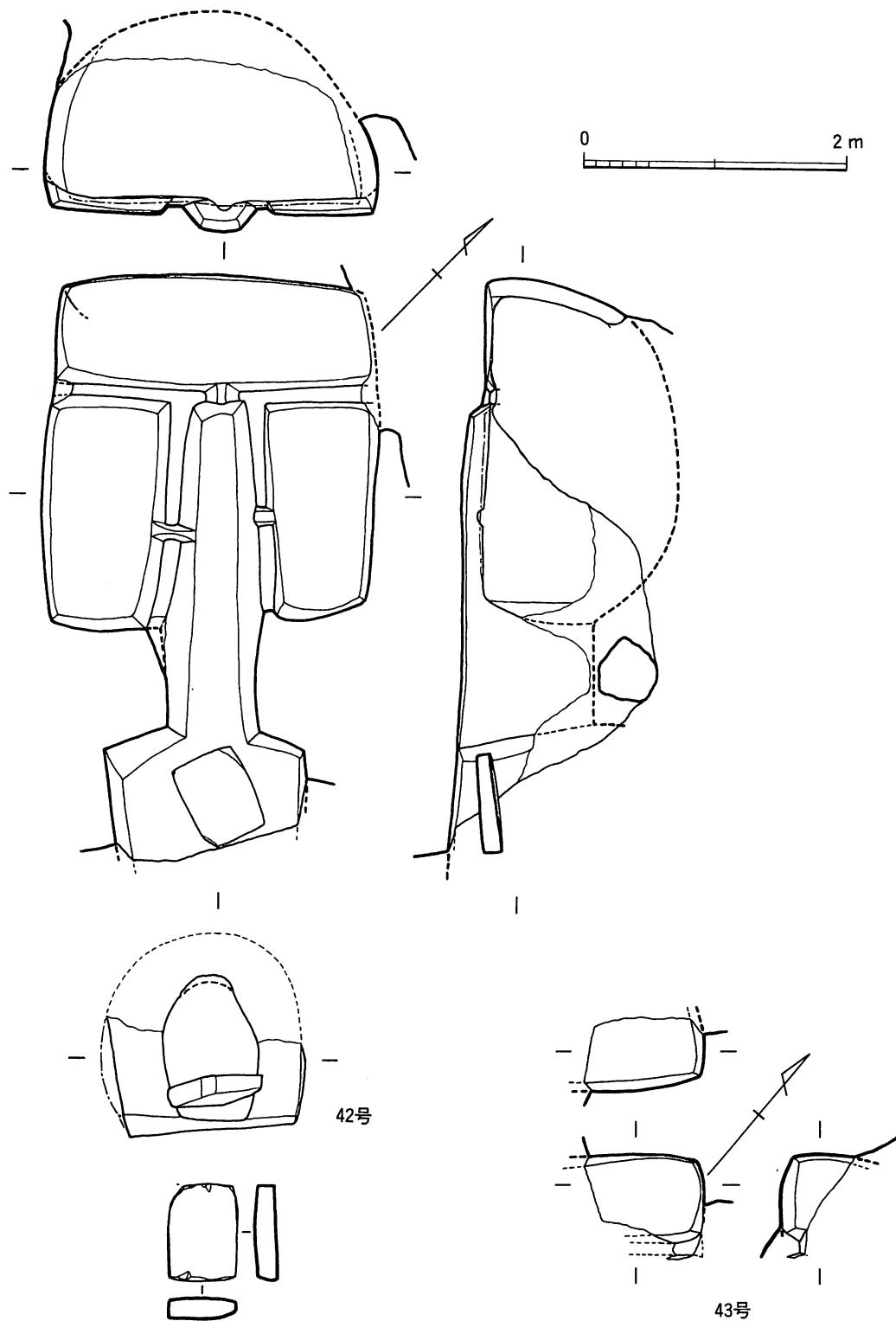
遺物 何も検出されなかった。

## 41号横穴墓

遺構 上段のやや右寄り、40号墓の斜め右上に位置する。主軸方向はN $70^{\circ}$  Wで、東南東



第66図 41号横穴墓実測図



第67図 42・43号横穴墓実測図

に開口している。

羨道から玄室まで上方が壊れている。羨門は幅73cmを測るが、高さは不明である。羨道の平面形態は逆台形で、奥の幅140cmで、長さ134cmが残っている。羨門から100cmで玄室に至る。

玄室は、入口部で幅214cm、奥壁部で幅185cm、最大幅282cm、奥行き202cmを測り、平面形態は胴張りの方形を呈する。床面に仕切りはなく、平坦なままである。天井部の形態は不明である。

遺物 何も検出されなかった。

#### 42号横穴墓

遺構 上段の右寄り、41号墓よりやや斜め右下に位置する。主軸方向はN45°Wで、南東に開口している。

羨門の前に閉塞石が倒れていた。この閉塞石は凝灰岩製切石で、やや不整形であるが、ほぼ長方形を呈し、幅53cm、高さ74cm、厚さ17cmを測る。

羨門は幅72cm、高さ約104cmを測るアーチ形である。閉塞石と比べると羨門が大きいが、羨門のところに大きな軽石が置いてあった（図化していない）ので、その上に閉塞石を乗せて立てていたと考えられる。羨道の平面形態はやはり逆台形を呈し、その奥の幅は152cmで、長さは92cm残存している。羨門から92cmで玄室に至る。

玄室は、天井部が陥没し、右壁の奥が、中世溝で削られているが、平面形態は方形を成している。入口部で幅240cm、奥壁部で約230cm、最大幅は252cm、奥行き257cmを測る。屍床は「コ」字形屍床で、各仕切りの中程には排水の溝が造られている。天井形態はドーム形で、高さ約170cmであったと推定される。

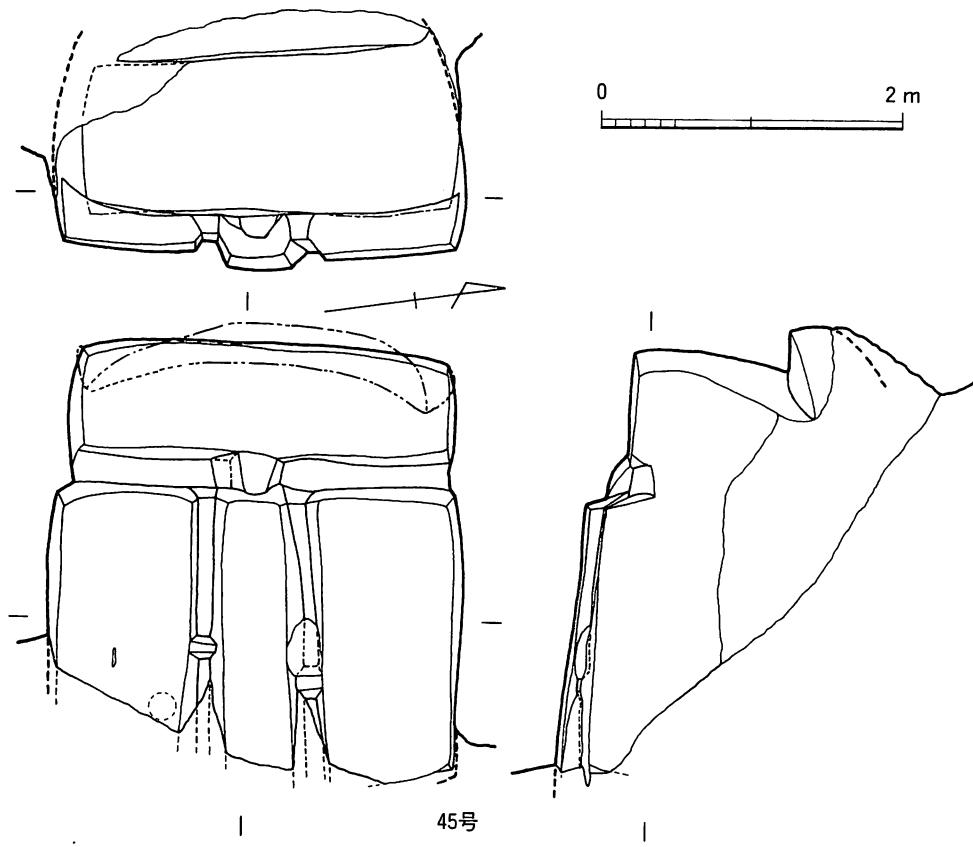
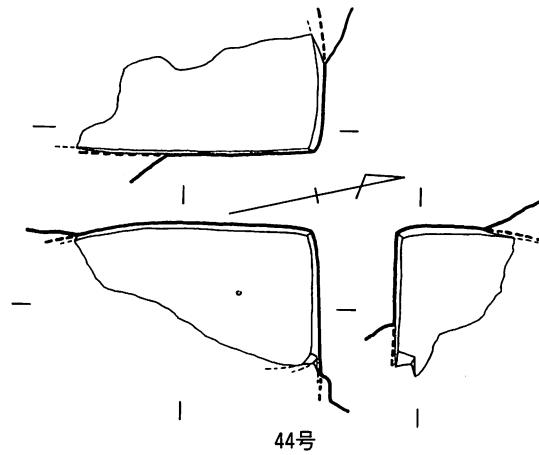
遺物 遺物は検出されなかった。

#### 43号横穴墓

遺構 上段の右寄り、42号墓の右側に位置する。主軸方向はほぼN40°Wで、南東に開口している。

前面が崩れ落ち、左側が中世の溝で削られているため、玄室の奥屍床右端が残っているだけである。残存部から推定すると「コ」字形屍床の横穴墓であったとみられ、奥屍床の奥行は約67cmで、横幅92cmが残っている。

遺物 何も残っていなかった。



第68図 44・45号横穴墓実測図

## 44号横穴墓

遺構 中段のやや右寄りに位置する横穴墓である。主軸方向はほぼN77°Wで、東南東に開口している。

崩壊のため、玄室の右奥が残っているだけである。仕切りが一部認められるので、「コ」字形屍床であったことがわかる。奥屍床の奥行きは約95cmで、幅は163cm以上である。天井部の形態は不明である。

遺物 残った奥屍床から耳環が1個検出された。この耳環（第69図1）は、銅地に金張りしたもので、長径27.0mm、短径25.0mm、厚さ8.5mmを測る。

## 45号横穴墓

遺構 中段の右寄り、44号の右に並んで造られている。主軸方向はN82°Wで、東に開口している。

羨門から玄室の入口側は崩れ落ちている。玄室は、入口側で幅276cm、奥壁部で250cm、奥行き290cmを測り、平面形態は長方形を呈する。「コ」字形屍床で、奥の仕切りの両端はわずかに反り上がっている。奥壁の屍床面から1m上には幅25cmの棚状の段が造られている。天井形態はドーム形と推定され、高さは220cm程度であったと考えられる。

遺物 左屍床の入口側から歯が検出され、奥屍床にも人骨粉が認められた。また左屍床の中央部から刀子1本が出土した。

この刀子（第69図2）は、全長12.4cmで、身部長8.0cm、茎部長4.4cmを測る。身部の最大幅は1.4cmで厚さは0.35cmを測る。茎部には柄の木質が残っている。

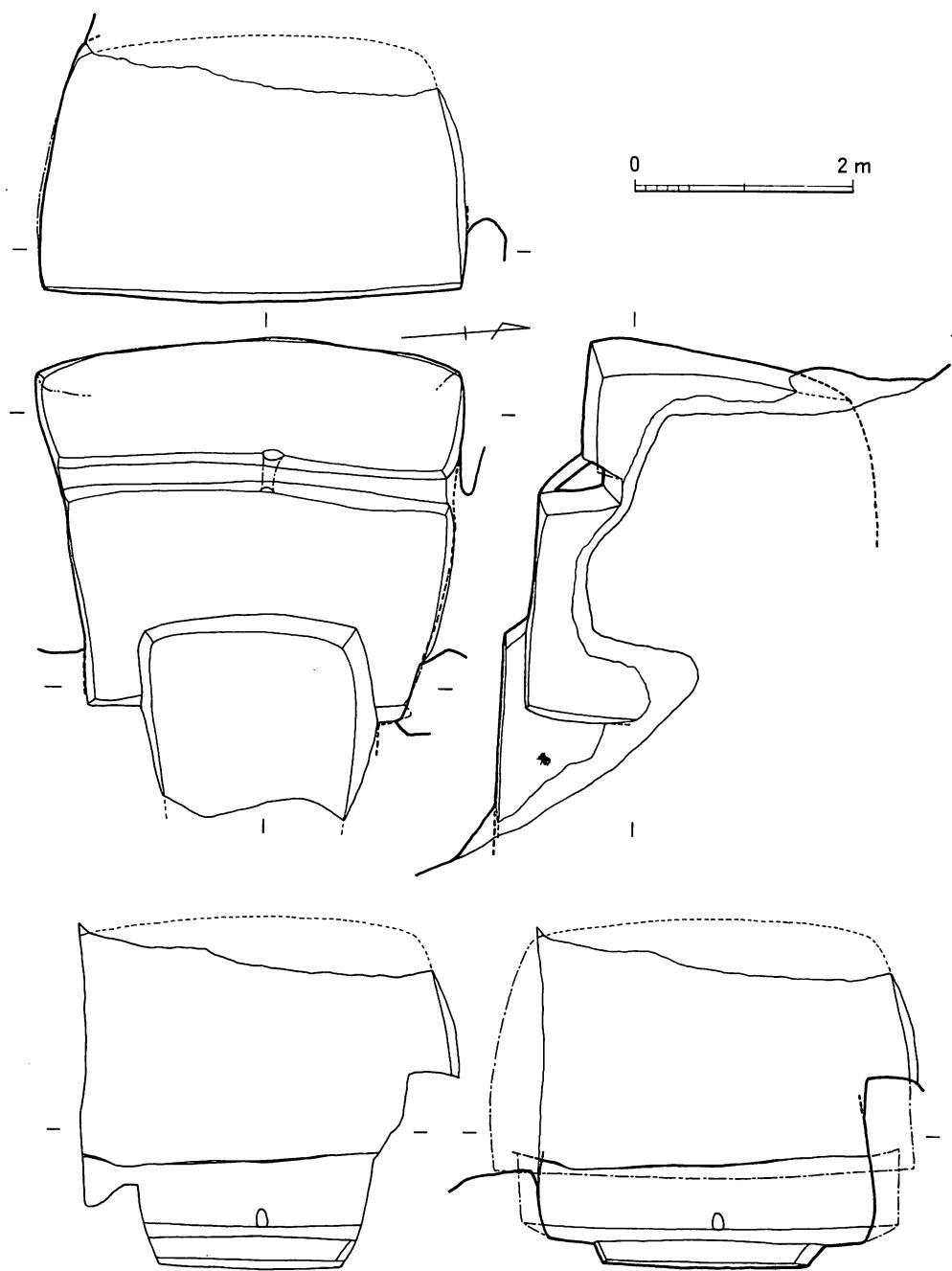


第69図 44号横穴墓出土耳環・45号横穴墓出土刀子実測図

## 46号横穴墓

遺構 中段の右端近くにあり、45号墓の右側に並んで造られている。主軸方向はN85°Wで、東に開口している。

羨道・羨門とも崩れ落ちているが、巨大な横穴墓で、羨門から玄室へ至る通路の残存の最外部の床の幅は165cmを測る。この部分のすぐ前に羨門があったとすれば、あまりにも大きいの



第70図 46号横穴墓実測図

で、この部分も玄室の一部である可能性がある。この通路状の部分の奥は逆台形に広がっており、玄室の一部まで延びており、奥の幅は 210cm 程を測る。

玄室は、入口部で幅 296cm、奥壁部で幅 393cm、奥行き 350cm を測り、平面形態は逆台形を

呈する。通路状の部分から玄室床面までは20cm程段上がりになっており、玄室の奥は高い仕切りを持つ屍床となっている。従って玄室は前後に仕切られており、前屍床面と後屍床面との差は約40cmで、仕切りは後屍床面よりもさらに20cm高い。仕切りの中央には排水の穴が穿ってある。奥壁は平面に造られており、復原すると奥屍床面から高さ 236cmを測る。天井の形態はカマボコ形と考えられ、通路からの高さは約 240cmであったと推定される。なお残存部全体の奥行は 442cmを測る。

通路状の部分の右壁に線刻文が施されているのが発見された。この文様は凝灰岩の壁面のうちやや硬い軽石の部分のみに残っていた。この軽石は縦14cm、横12cmを測り、縦に直線を1本引き、その先端から左右の斜め下方にそれぞれ直線を引いており、その内部の上半を斜め格子目状に直線で埋めている。全体が不明であるので何を描いたのかわからないが、想像をたくましくすると、マストを立て帆を張った船の、マストと帆の部分とも考えられる。

**遺物** 後屍床が後世の埋葬に再利用されたので、それに伴う鉄釘と土師質の皿が発見されたが、古墳時代の遺物は発見されなかった。

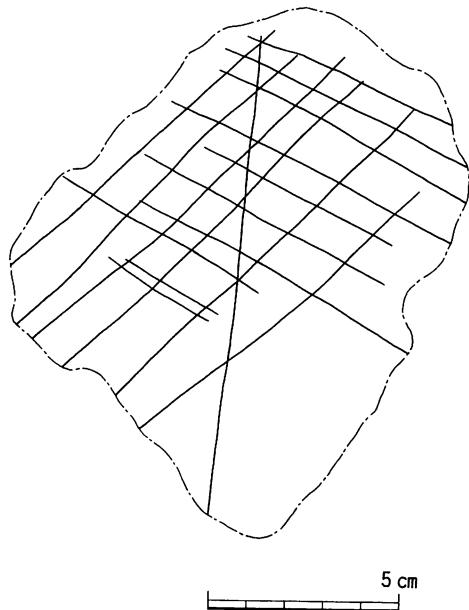
## 47号横穴墓

**構造** 中段の右端、46号墓の右側に並んで造られている。主軸方向はN75° Wで、東南東に開口している。

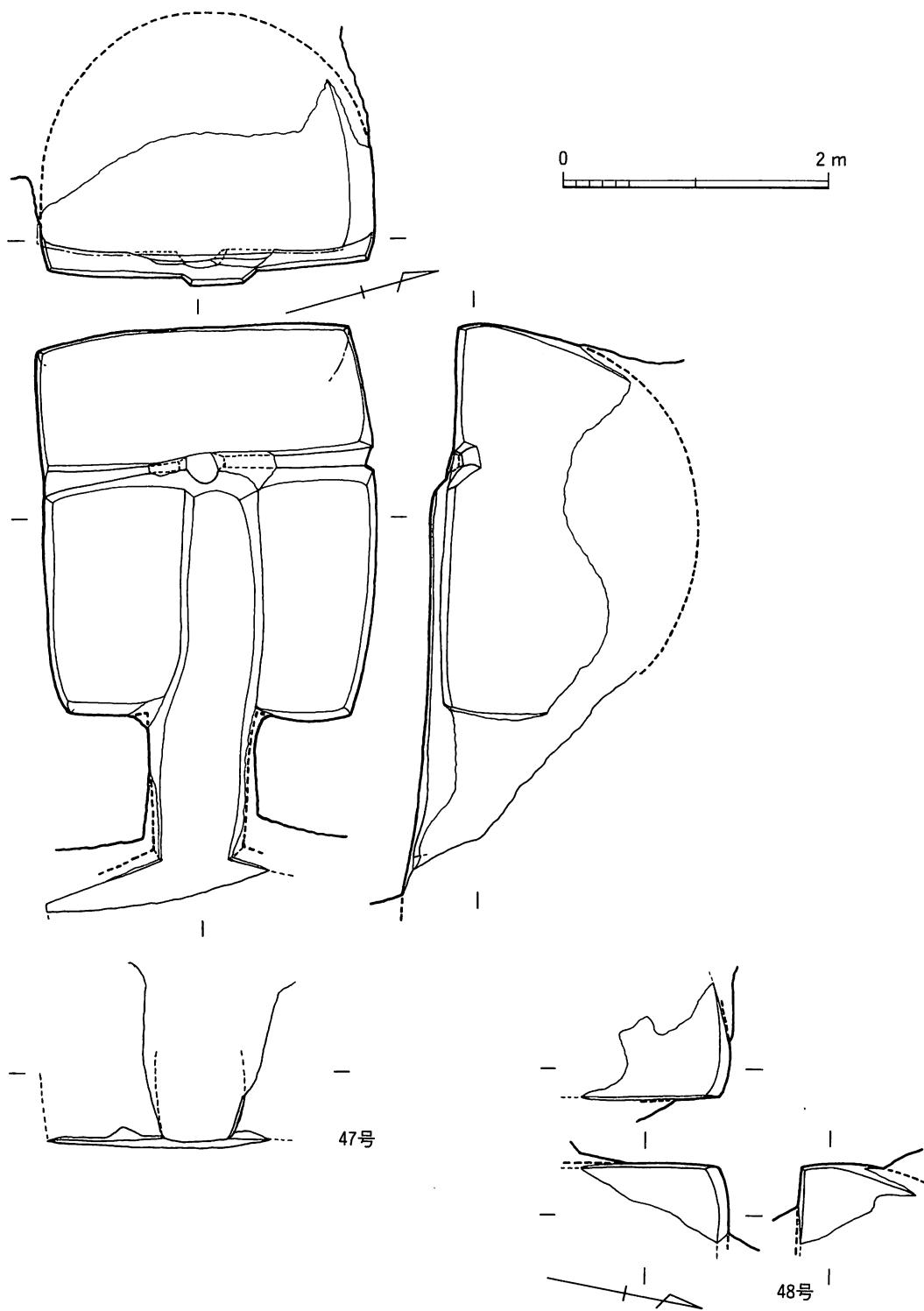
羨門は幅約65cmであるが崩れているので高さは不明である。羨道は平面形態が逆台形を呈していたとみられ、復原すると羨道奥の幅は 230cm程度であったと考えられる。羨門から 116cmで玄室に至る。

玄室は、入口部で幅 212cm、奥壁部で 234cm、最大幅 251cm、奥行 284cmを測り、平面形態は長方形である。「コ」字形に屍床が配置されており、奥屍床には仕切りがあるが、左・右屍床には仕切りがない。天井は壊れているが、高さ約 210cmで、ドーム形を呈していたと考えられる。

**遺物** 後世に埋葬のため再利用されたらしく、玄室中央部から鉄釘が出土したが、古墳時代の遺物は何も出土しなかった。



第71図 46号横穴墓線刻文実測図



第72図 47・48号横穴墓実測図

## 48号横穴墓

**遺構** 下段の右端近く、44号墓の右下方、45号墓の左下方に位置する。主軸方向は約N79°Eで、東北東に開口している。

玄室の奥右端がかろうじて残るだけである。「コ」字形屍床の奥屍床の一部と考えられ、幅112cm、奥行60cmが残っている。天井の形態と高さは不明である。

**遺物** 残った屍床から、刀1点、耳環1点、土製小玉14個、ガラス製粟玉12個分が検出された。

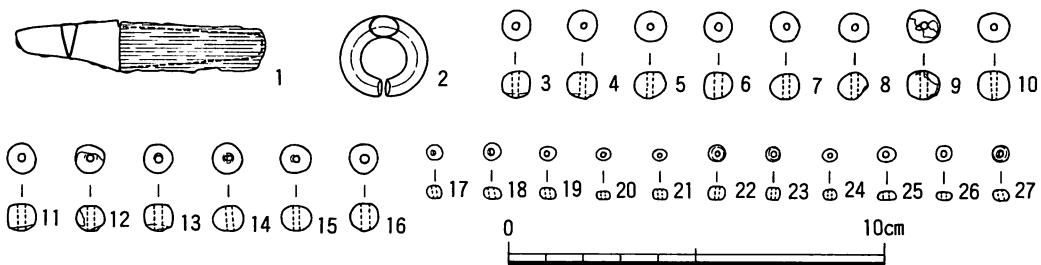
刀子（第73図1）は、身部の研減りが激しく、全長6.5cmを測り、身部長はわずか2.7cmで、茎部長は3.8cmを測る。身部の最大幅は1.3cmで、厚さは0.4mmを測る。茎部には柄の木質が一部残っている。

耳環（第73図2）は、銅地に銀張りであるが、いくぶん金色をおびた色調を呈する。長径23.0mm、短径21.0mm、厚さ7.5mmを測る。

土製小玉（第73図3～16）は14個検出されたが、これらは径8mm前後の黒色を呈する玉で、個々については、第5表に示したとおりである。

第5表 48号横穴墓出土小玉集成表

No	図版番号	材質	色調	径(mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	遺存度	出土位置	備考
1	第73図3	土	黒色	7.6	7.0	1.5～2.0	完形	玄室奥屍床	（「コ」字形屍床であったと考えられる）
2	第73図4	土	黒色	7.0	8.0	1.5～1.9	完形	玄室奥屍床	
3	第73図5	土	黒色	8.2	7.0	1.7	完形	玄室奥屍床	
4	第73図6	土	黒色	7.5	6.6	2.0	完形	玄室奥屍床	
5	第73図7	土	黒色	7.7	6.7	1.8	完形	玄室奥屍床	
6	第73図8	土	黒色	7.8	7.0	1.6	5/7	玄室奥屍床	
7	第73図9	土	黒色	8.3	7.2	1.9	6/7(接合)	玄室奥屍床	
8	第73図10	土	黒色	8.2	7.4	1.2～1.6	完形	玄室奥屍床	
9	第73図11	土	黒色	7.8	7.0	1.6～2.1	完形	玄室奥屍床	
10	第73図12	土	黒色	7.6	6.6	1.9	6/7	玄室奥屍床	
11	第73図13	土	黒色	7.6	7.0	2.0	完形	玄室奥屍床	
12	第73図14	土	黒色	7.0	6.7	1.6～2.0	完形	玄室奥屍床	
13	第73図15	土	黒色	8.0	6.7	1.6	完形	玄室奥屍床	
14	第73図16	土	黒色	7.8	7.2	2.2	完形	玄室奥屍床	



第73図 48号横穴墓出土刀子・耳環・玉類実測図

ガラス製粟玉（第73図17～27）は、完形11個と小破片1個が検出された。個々については第6表に示したとおりであるが、特に黄色を呈する玉の出土は注目すべきであろう。

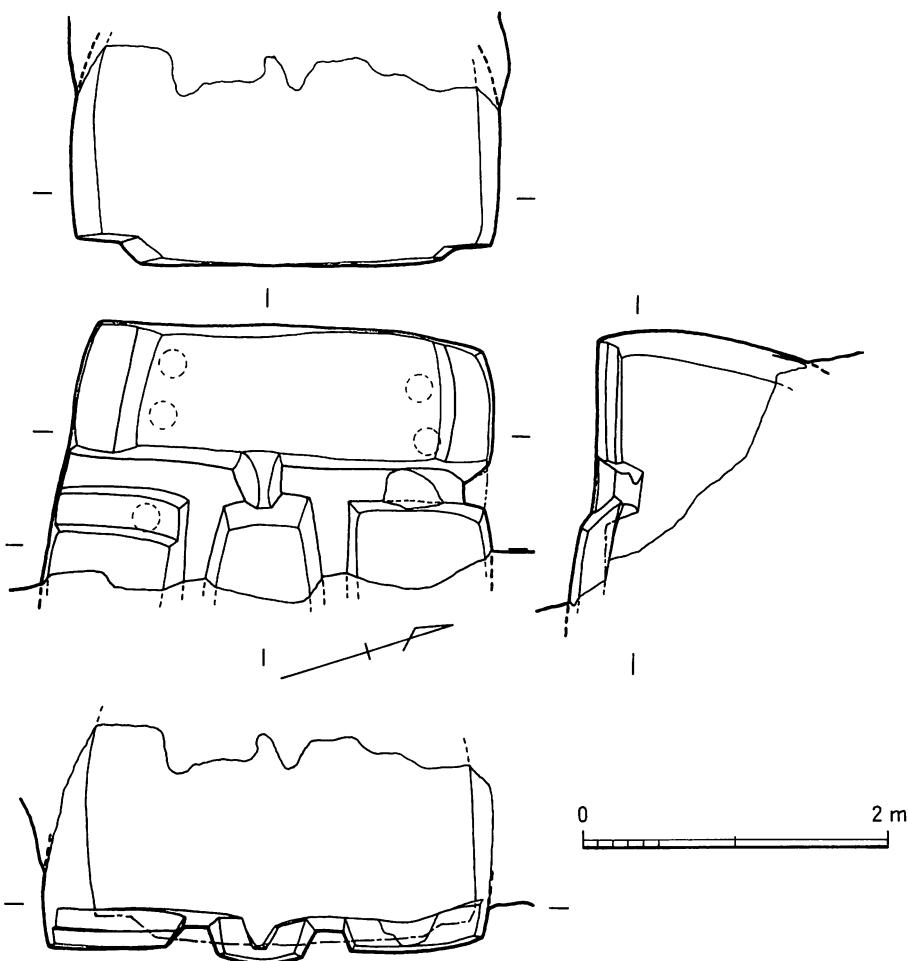
第6表 48号横穴墓出土粟玉集成表

No.	図版番号	材質	色調	径 (mm)	厚さ (mm)	孔径 (mm)	遺存度	出土位置	備考
1	第73図17	ガラス	黄色	4.1	3.4	1.2	完形	玄室奥屍床	（「コ」字形屍床であったと考えられる）
2	第73図18	ガラス	青色	4.7	3.0	1.9	完形	玄室奥屍床	
3	第73図19	ガラス	紺色	4.3	3.0	1.3	完形	玄室奥屍床	
4	第73図20	ガラス	紺色	3.9	2.1	1.2	完形	玄室奥屍床	
5	第73図21	ガラス	淡緑色	3.8	2.8	1.2	完形	玄室奥屍床	
6	第73図22	ガラス	水色	4.5	3.3	1.2	完形	玄室奥屍床	
7	第73図23	ガラス	淡青色	3.8	3.2	1.3	完形	玄室奥屍床	
8	第73図24	ガラス	青色	3.9	2.9	1.0	完形	玄室奥屍床	
9	第73図25	ガラス	青色	4.8	2.3	1.7	完形	玄室奥屍床	
10	第73図26	ガラス	淡紺色	4.2	2.2	1.5～1.7	完形	玄室奥屍床	
11	第73図27	ガラス	濃紺色	4.3	2.9	1.4～1.9	完形	玄室奥屍床	
12	—	ガラス	水色	—	—	—	1/10	玄室奥屍床	計測不可能

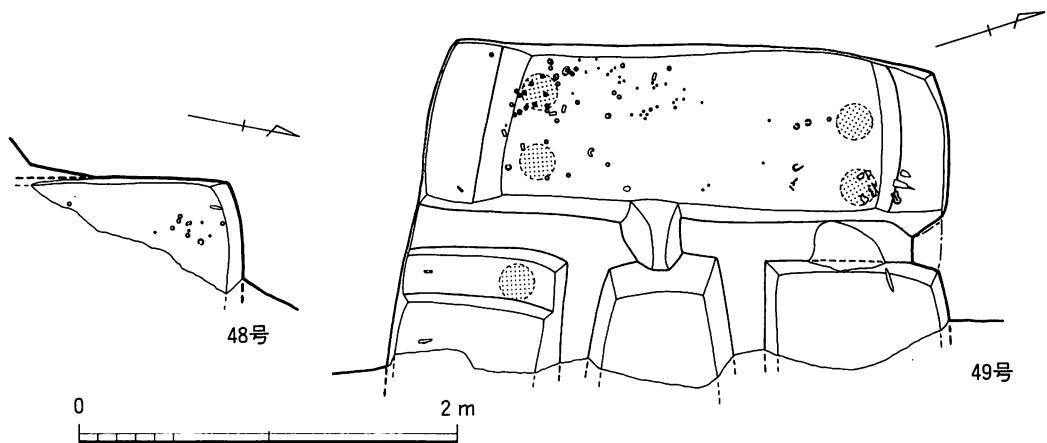
#### 49号横穴墓

遺構 下段の右端、45号墓と46号墓の間の下方、48号墓の右側に位置する。主軸方向はN 72° Wで、東南東に開口している。

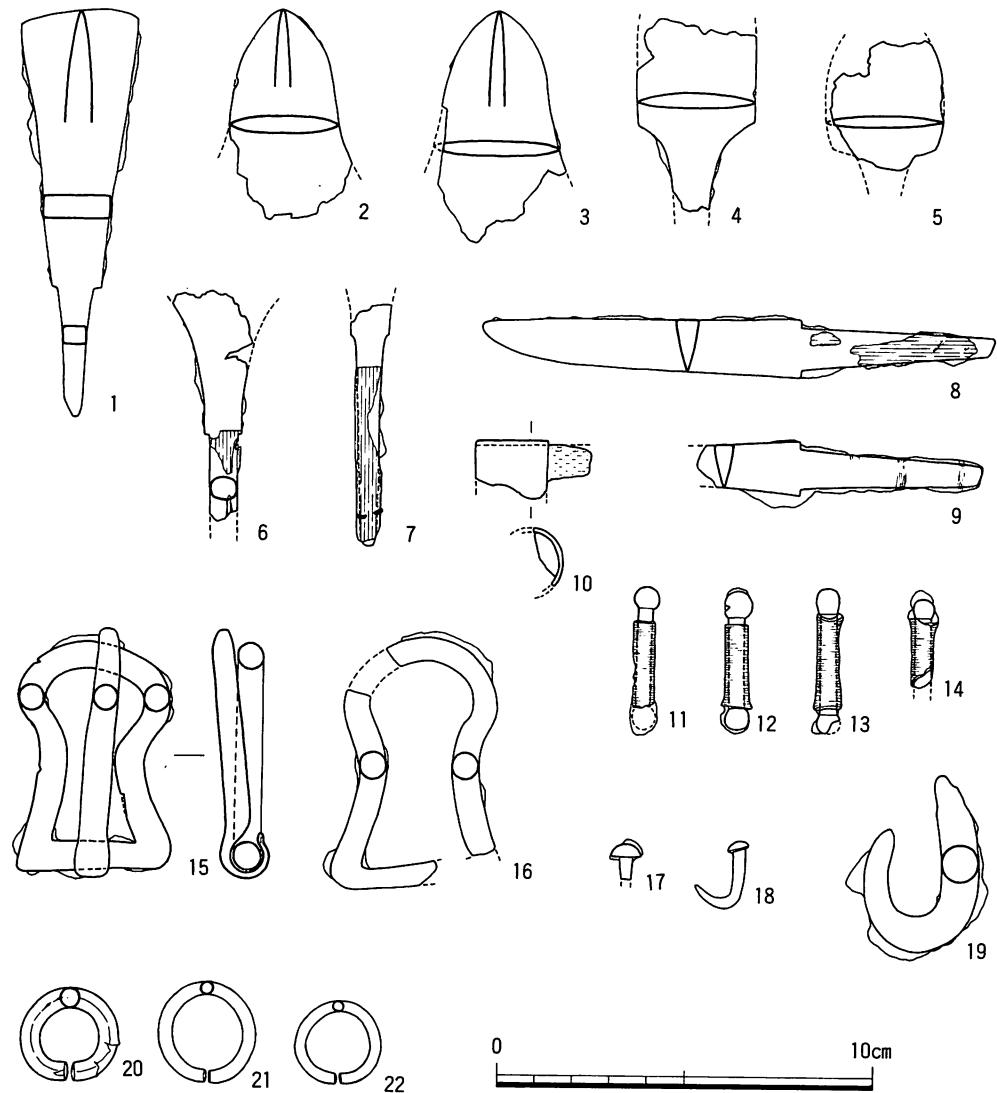
玄室は奥から半分程が残っている。玄室は、残存部の最大幅 298cm、奥壁部の幅 258cm、残存部の奥行 180cmを測り、平面形態は台形を呈していたものと考えられる。割合造りのよい「コ」字形屍床で、左屍床の奥と、奥屍床の両側に造り付けの枕がある。天井の形態・高さとも不明である。



第74号図 49号横穴墓実測図



第75図 48号・49号横穴墓遺物出土状況実測図



第76図 49号横穴墓出土鉄製品・耳環実測図

遺物 埋葬は、歯の残存位置からみて、奥屍床には北頭位に2体、南頭位に2体の合計4体が行われていたと考えられる。いずれも枕の上に頭が乗っていないのは不思議である。また左屍床の奥の枕の上にも歯の一部がみられたので、この屍床にも1体以上埋葬されていたと考えられる。

遺物は、玄室の崩壊が著しかったにもかかわらず、奥屍床を中心に多数検出された。

鉄製品は、鉄鏃・刀子・双頭小鉄棒・鉸具・鉢などがある。

鉄鏃は7点分(台76図1~7)で、6が左屍床で検出された以外はすべて奥屍床から検出された。1は、奥屍床の右枕の上から検出されたもので、方頭広根斧箭式の完形である。全長は

10.7cmを測り、身は、長さ 7.3cm、幅 3.1cm、厚さ 0.7cm、箆代は、長さ 3.4cm、幅 1.0～0.5cm、厚さ 0.5cmを測る。2と3は、欠損しているが、広鋒両丸造脇抉柳葉式の身と考えられる。いずれも奥屍床の右側前部から検出されたものである。2は、現存部の長さ 5.5cm、幅 3.2cm、厚さ 0.45cmを測り、3は、現存部の長さ 6.1cm、幅 3.5cm、厚さ 0.4cmを測る。4と5は、広根両丸造柳葉式の身の下部と考えられる。4は、奥屍床の右枕上から検出されたもので、現存部の長さ 5.0cm、幅 3.1cm、厚さ 0.4cmを測る。5は、奥屍床の中央前部から検出されたもので、現存部の長さ 3.4cm、幅 3.0cm、厚さ 0.3cmを測る。6と7は身を欠いており、6は左屍床の奥から、7は奥屍床の左側前部から検出された。6は、現存部の全長は 6.0cmを測り、箆代は幅 0.75cm、厚さ 0.6cmで矢柄の一部が残っている。7は、現存部の全長 6.4cmで、箆代は完存しており長さ 5.5cmで、幅 0.8～0.4cm、厚さ 0.4cmを測る。また箆代には矢柄が残っており、一部に針金状のものをまいて留めてある。

刀子は2点（第76図8，9）検出した。8は、右屍床から検出した完形品で、全長 13.6cm を測る。身部は長さ 8.5cm、最大幅 1.5cm、最大厚 0.6cmを測る。茎部は長さ 5.1cmを測り、木質が残っている。9は、左屍床から検出したもので、切先を欠損しており、現存全長は 7.5cmを測る。身部は 2.7cm 残っており最大幅 1.4cm、最大厚 0.5cmを測る。茎部は長さ 4.8cmで、部分的に何かを巻いた痕が認められる。

第76図10は、鹿角製の刀子柄の破片と考えられ、長さ 3.1cm 残っている。柄の関部側 1.95cm には厚さ 0.1cm の柄金具が付いており、復元すると長径 1.9cm 程度と考えられる。

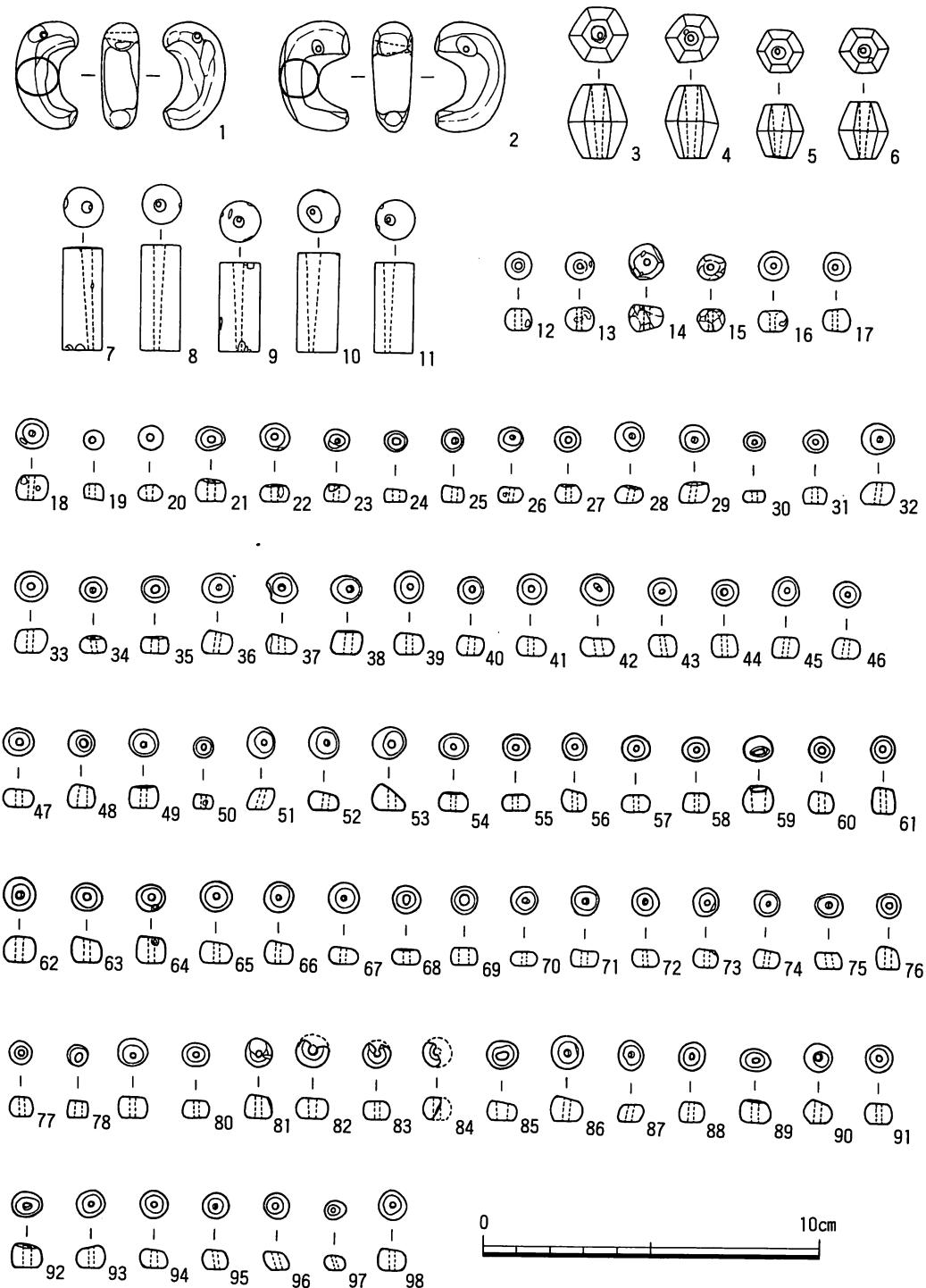
双頭の小鉄棒は4点（第76図11～14）検出された。11と13は左屍床の枕上から、12は奥屍床の左枕上から、14は左屍床から検出された。いずれも径 0.4～0.45cm の小鉄棒の両端に 5.5～7.5cmを測る球状の頭が付いたもので、長さは11が約 3.7cm、12が 3.6cm、13が約 3.8cm、14は現存部 2.3cmを測る。これらの小鉄棒には何かが巻かれており、それは桜の皮ではないかと考えられる。

鉸具は2点（第76図15，16）検出された。15は奥屍床右枕上から、16は奥屍床右前部から検出され、いずれも鍵穴形を呈している。15は皮穴に留める金具が残っており、縦 6.0cm、横 4.0cmを測る。16は欠損しているが、復原すると縦 6.5cm、横 4.5cm程度であったと考えられる。

鉄鉤が左屍床から2点（第76図17，18）検出された。いずれも頭は半球形で、17は頭の径が 0.8cmで、現存長 0.9cmを測り、18は頭の径が 0.55cmで、伸ばすと長さ約 2.8cmを測る。18はあるいは鉄釘と呼ぶべきかもしれない。

不明の鉄製品が1点（第76図19）奥屍床右前部から検出されている。鉄棒を鉤状に曲げたもので、太い所の棒の径は 1.0cmを測る。曲がった状態の大きさは縦 4.6cm、横 3.0cmを測る。

装身具のうち耳環は3点（第76図20～22）検出された。20は、奥屍床の左前部から検出された銅地に金張りした耳環で、長径 25.5mm、短径 24.0mm、厚さ 5.0mmを測る。21と22は、いずれ



第77図 49号横穴墓出土玉類実測図

も奥屍床の右奥部から検出された。21は銅地に金張りであるが、腐蝕が激しく金は部分的に残るのみである。長径26.5mm、短径25.5mm、厚さ 3.5mmを測る。22は、腐蝕のため銅地のみ残っており、長径23.0mm、短径21.5mm、厚さ 3.0mmを測る。

装身具のうち玉類は、すべて奥屍床から検出され、勾玉、切子玉、管玉、小玉、粟玉があった。

勾玉は2点（第77図1・2）検出された。1は、奥屍床の左前部から検出されたメノウ製勾玉で、大きさは縦31.0mm、横18.5mm、厚さ11.0mm、孔径 1.5～ 3.0mmを測り、色調は淡茶色を呈する。2は、奥屍床の左奥部から検出された水晶製勾玉である。大きさは縦32.0mm、横20.5mm、厚さ12.0mmで、孔径 1.5～ 4.5mmを測る。

水晶製切子玉が、奥屍床の左奥部から4点（第77図3～6）検出された。いずれも完形で、3は径17.3mm、厚さ21.3mm、孔径 1.3～ 4.0mm、4は径15.4mm、厚さ21.2mm、孔径 1.5～ 3.9mm、5は径13.6mm、厚さ15.6mm、孔径 1.6～ 4.0mm、6は径14.3mm、厚さ16.7mm、孔径 1.5～ 3.8mmを測る。

碧玉製管玉は5点（第77図7～11）検出された。いずれも完形で、7と8は奥屍床の左奥部から、9と10は奥屍床の左前部から、11は奥屍床の中央部から検出された。7は径11.6mm、長さ30.0mm、孔径 1.5～ 3.0mm、8は径11.6mm、長さ30.9mm、孔径 1.4～ 3.7mm、9は径12.0mm、長さ26.0mm、孔径 1.3～ 3.0mm、10は径12.3mm、長さ29.0mm、孔径 1.2～ 4.7mm、11は径11.8mm、長さ26.3mm、孔径 1.2～ 3.1mmを測る。色調は深緑色を呈する。

小玉は89点検出された。うち実測できた86点（第77図12～98）を図に示したが、第7表にすべてについて示したので参考されたい。89点のうち6点がメノウ製小玉で、他はすべてガラス製小玉であった。

粟玉は 213点検出されたが、実測が難しいのと時間的な制約のため図化しなかったので、第8表を参照されたい。いずれもガラス製粟玉であるが、特に表のNo.1、2に示した黄色を呈する粟玉は注目すべきであろう。

なお、玉類の出土地点が、奥屍床の左奥部に偏在していることは、奥屍床の被葬者のうち、ここに頭位を置かれた人物がこれらの玉類を着装していたことを示すものと解されよう。

（高木正文）

第7表 49号横穴墓出土小玉集成表

No	図版番号	材質	色調	径 (mm)	厚さ (mm)	孔径 (mm)	遺存度	出土位置	備考
1	第77図12	メノウ	淡橙色	8.0	6.5	2.0	完形	玄室奥屍床左奥部	
2	第77図13	メノウ	濃橙色	8.7	7.0	1.6	完形	"	
3	第77図14	メノウ	橙色	10.3	7.9	1.7	完形	"	
4	第77図15	メノウ	濃橙色	8.2	6.7	1.3～1.6	完形	"	

No	図版番号	材質	色調	径 (mm)	厚さ (mm)	孔径 (mm)	遺存度	出土位置	備考
5	第77図16	メノウ	橙色	8.8	6.2	1.5	完形	玄室奥屍床左奥部	
6	第77図17	メノウ	淡橙色	8.0	7.0	1.5	完形	"	
7	第77図18	ガラス	濃紺色	9.3	7.2	1.6	完形	玄室奥屍床左枕上	
8	第77図19	ガラス	緑色	5.9	4.9	1.7	完形	玄室奥屍床左奥部	
9	第77図20	ガラス	灰緑色	7.2	4.8	1.4~1.9	完形	"	
10	第77図21	ガラス	濃紺色	8.7	6.6	1.7~2.2	完形	"	
11	第77図22	ガラス	濃紺色	8.7	5.0	1.8	完形	"	
12	第77図23	ガラス	紺色	7.5	5.2	1.6	完形	"	
13	第77図24	ガラス	紺色	6.6	4.0	2.0~2.3	完形	"	
14	第77図25	ガラス	濃紺色	6.6	5.0	1.7~2.0	完形	"	
15	第77図26	ガラス	濃紺色	7.4	4.7	1.3	完形	"	
16	第77図27	ガラス	濃紺色	7.8	5.4	1.7	完形	"	
17	第77図28	ガラス	濃紺色	8.6	5.1	1.6	完形	"	
18	第77図29	ガラス	濃紺色	8.7	6.1	1.9	完形	"	
19	第77図30	ガラス	濃紺色	6.7	3.6	1.5	完形	"	
20	第77図31	ガラス	濃紺色	7.0	5.0	1.6	完形	"	
21	第77図32	ガラス	濃紺色	9.7	6.6	1.7	完形	"	
22	第77図33	ガラス	濃紺色	9.2	7.0	1.9	完形	"	
23	第77図34	ガラス	濃紺色	8.0	5.1	1.7	完形	"	
24	第77図35	ガラス	濃紺色	8.1	5.0	2.2	完形	"	
25	第77図36	ガラス	濃紺色	9.0	6.9	1.8	完形	"	
26	第77図37	ガラス	濃紺色	9.1	5.8	1.7~2.0	9/10	"	
27	第77図38	ガラス	濃紺色	9.2	6.9	2.2	完形	"	
28	第77図39	ガラス	濃紺色	9.3	6.3	1.8~2.0	完形	"	
29	第77図40	ガラス	濃紺色	8.0	5.8	2.0	完形	"	
30	第77図41	ガラス	濃紺色	8.8	5.7	1.6	完形	"	
31	第77図42	ガラス	濃紺色	9.8	5.5	1.8~2.7	完形	"	
32	第77図43	ガラス	濃紺色	8.2	6.3	1.5~1.7	完形	"	
33	第77図44	ガラス	濃紺色	7.8	6.7	1.8	完形	"	
34	第77図45	ガラス	濃紺色	8.4	6.0	1.7	完形	"	
35	第77図46	ガラス	濃紺色	7.7	6.1	1.7	完形	"	
36	第77図47	ガラス	濃紺色	9.1	5.4	2.0	完形	"	

No	図版番号	材質	色調	径 (mm)	厚さ (mm)	孔径 (mm)	遺存度	出土位置	備考
37	第77図48	ガラス	紺色	8.0	5.9	2.5~3.0	完形	玄室奥屍床左奥部	
38	第77図49	ガラス	濃紺色	8.7	6.7	1.7	完形	"	
39	第77図50	ガラス	濃紺色	6.0	4.3	1.8~2.0	完形	"	
40	第77図51	ガラス	紺色	9.0	6.1	1.7	完形	"	
41	第77図52	ガラス	濃紺色	9.0	5.5	1.9	完形	"	
42	第77図53	ガラス	濃紺色	9.9	7.5	2.2	完形	"	
43	第77図54	ガラス	紺色	8.7	5.2	1.4~1.6	完形	"	
44	第77図55	ガラス	紺色	8.2	4.7	1.7	完形	"	
45	第77図56	ガラス	紺色	7.8	6.6	1.6	完形	"	
46	第77図57	ガラス	濃紺色	8.3	5.1	1.6	完形	"	
47	第77図58	ガラス	濃紺色	7.8	5.8	1.4	完形	"	
48	第77図59	ガラス	紺色	8.9	8.0	1.9~4.2	完形	"	
49	第77図60	ガラス	紺色	7.5	6.4	2.0	完形	"	
50	—	ガラス	濃紺色	—	6.2	—	破損	"	検出時は完形
51	第77図61	ガラス	濃紺色	7.7	7.5	1.8	完形	"	
52	第77図62	ガラス	濃紺色	9.7	7.4	2.3	完形	"	
53	第77図63	ガラス	紺色	9.0	7.6	2.1	完形	"	
54	第77図64	ガラス	濃紺色	8.6	7.8	1.8	完形	"	
55	第77図65	ガラス	紺色	9.3	6.3	1.7	完形	"	
56	第77図66	ガラス	紺色	8.8	6.7	1.6	完形	"	
57	第77図67	ガラス	紺色	9.0	5.1	1.7	完形	"	
58	第77図68	ガラス	紺色	8.2	4.5	1.9~2.5	完形	"	
59	第77図69	ガラス	濃紺色	7.9	5.1	2.8	完形	"	
60	第77図70	ガラス	紺色	8.0	4.2	1.5	完形	"	
61	第77図71	ガラス	濃紺色	8.2	5.0	1.8	完形	"	
62	第77図72	ガラス	紺色	7.9	5.2	1.5	完形	"	
63	第77図73	ガラス	濃紺色	8.0	5.4	1.7	完形	"	
64	第77図74	ガラス	濃紺色	7.5	5.5	1.6	完形	"	
65	第77図75	ガラス	濃紺色	8.1	4.8	1.9	完形	"	
66	第77図76	ガラス	紺色	7.0	6.5	1.5~2.0	完形	"	
67	第77図77	ガラス	紺色	7.0	5.8	1.9	完形	"	
68	第77図78	ガラス	紺色	6.2	4.9	2.2~2.5	完形	"	

No	図版番号	材質	色調	径 (mm)	厚さ (mm)	孔径 (mm)	遺存度	出土位置	備考
69	第77図79	ガラス	濃紺色	8.9	6.2	1.5	完形	玄室奥屍床左奥部	
70	第77図80	ガラス	紺色	7.9	5.1	1.4	完形	"	
71	第77図81	ガラス	濃紺色	8.2	6.8	1.7~2.0	5/6 (接合)	"	検出時は完形
72	第77図82	ガラス	紺色	9.6	6.0	2.1~2.5	3/5 (接合)	"	"
73	第77図83	ガラス	濃紺色	8.0	5.2	1.7	3/5 (接合)	"	"
74	第77図84	ガラス	濃紺色	約 8.0	6.2	約 2.2	2/5	"	
75	第77図85	ガラス	濃紺色	9.2	5.5	2.0~3.5	完形 (接合)	玄室奥屍床左前部	
76	第77図86	ガラス	濃紺色	9.8	7.2	1.9	完形	"	
77	第77図87	ガラス	紺色	8.5	5.0	1.9	完形	"	
78	第77図88	ガラス	濃紺色	8.2	6.0	1.5~1.7	完形	"	
79	第77図89	ガラス	濃紺色	9.0	6.5	1.5~2.0	完形	"	
80	第77図90	ガラス	濃紺色	8.3	6.9	2.1	完形	"	
81	第77図91	ガラス	濃紺色	8.0	6.0	1.6	完形	"	
82	第77図92	ガラス	濃紺色	9.0	7.2	1.9~2.7	完形	"	
83	第77図93	ガラス	紺色	8.6	7.0	1.5	完形	"	
84	第77図94	ガラス	紺色	7.9	5.8	1.8~2.0	完形	"	
85	—	ガラス	深緑色	6.6	約 6.5	1.6	破損	"	検出時は完形
86	第77図95	ガラス	濃紺色	7.8	6.0	1.6	完形	玄室奥屍床中央奥部	
87	第77図96	ガラス	濃紺色	7.7	5.6	1.8	完形	"	
88	第77図97	ガラス	青色	6.2	4.4	1.2	完形	"	
89	第77図98	ガラス	濃紺色	8.8	6.7	1.7	完形	玄室奥屍床右奥部	

第8表 49号横穴墓出土粟玉集成表

No	図版番号	材質	色調	径 (mm)	厚さ (mm)	孔径 (mm)	遺存度	出土位置	備考
1	図版なし	ガラス	黄色	4.2	2.7	1.2~1.6	完形	玄室奥屍床左奥部	
2	"	ガラス	黄色	3.3	3.5	0.9	完形	"	
3	"	ガラス	淡緑色	4.3	2.6	1.2	完形	"	
4	"	ガラス	緑色	3.7	2.8	0.8~1.2	完形	"	
5	"	ガラス	紺色	4.2	2.6	1.3	完形	"	
6	"	ガラス	青色	4.9	2.8	1.2	完形	"	
7	"	ガラス	青色	4.3	2.9	1.2	完形	"	
8	"	ガラス	青色	4.0	3.3	1.5	完形	"	

No	図版番号	材質	色調	径 (mm)	厚さ (mm)	孔径 (mm)	遺存度	出土位置	備考
9	図版なし	ガラス	青色	4.5	2.6	1.3	完形	玄室奥屍床左奥部	
10	"	ガラス	青色	4.8	3.0	1.1~1.2	完形	"	
11	"	ガラス	青色	4.6	3.4	1.5	完形	"	
12	"	ガラス	青色	5.0	3.6	1.3	完形	"	
13	"	ガラス	青色	6.2	3.1	1.8~2.1	完形	"	
14	"	ガラス	青色	4.8	2.5	1.7	完形	"	
15	"	ガラス	青色	4.6	2.5	1.2	完形	"	
16	"	ガラス	青色	3.8	2.5	1.2	完形	"	
17	"	ガラス	青色	3.9	3.0	1.1	完形	"	
18	"	ガラス	青色	4.8	2.7	1.4~1.6	完形	"	
19	"	ガラス	青色	4.2	3.3	1.0	完形	"	
20	"	ガラス	青色	4.5	2.9	1.2	完形	"	
21	"	ガラス	青色	4.8	2.2	1.3	完形	"	
22	"	ガラス	青色	4.2	2.6	1.0	完形	"	
23	"	ガラス	青色	4.5	2.6	1.8	完形	"	
24	"	ガラス	青色	3.8	3.0	1.0	完形	"	
25	"	ガラス	青色	3.8	2.4	1.2	完形	"	
26	"	ガラス	青色	4.0	2.0	1.6	完形	"	
27	"	ガラス	青色	4.0	2.2	1.2	完形	"	
28	"	ガラス	青色	4.1	2.0	1.5	完形	"	
29	"	ガラス	青色	4.0	2.6	1.0	完形	"	
30	"	ガラス	青色	4.1	2.0	1.0~1.4	完形	"	
31	"	ガラス	青色	3.5	2.3	1.1	完形	"	
32	"	ガラス	青色	3.8	2.0	1.2	完形	"	
33	"	ガラス	淡青色	5.0	2.2	1.7	完形	"	
34	"	ガラス	淡青色	4.3	1.9	1.7	完形	"	
35	"	ガラス	淡青色	4.8	2.4	1.7~1.9	完形	"	
36	"	ガラス	淡青色	3.8	2.7	1.3	完形	"	
37	"	ガラス	淡青色	4.3	2.0	1.7	完形	"	
38	"	ガラス	淡青色	3.9	2.6	1.3	完形	"	
39	"	ガラス	淡青色	4.3	2.2	1.2	完形	"	
40	"	ガラス	淡青色	4.1	2.2	1.4	完形	"	

No.	図版番号	材質	色調	径 (mm)	厚さ (mm)	孔径 (mm)	遺存度	出土位置	備考
41	図版なし	ガラス	淡青色	3.5	1.6	1.2	完形	玄室奥屍床左奥部	
42	"	ガラス	淡青色	3.7	1.7	1.2	完形	"	
43	"	ガラス	淡青色	4.0	2.0	1.2	完形	"	
44	"	ガラス	淡青色	3.8	2.0	1.2~1.4	完形	"	
45	"	ガラス	淡青色	3.5	2.0	1.5	完形	"	
46	"	ガラス	淡青色	3.8	1.9	1.6	完形	"	
47	"	ガラス	淡青色	4.0	1.8	1.3	完形	"	
48	"	ガラス	淡青色	3.4	1.3	1.5	完形	"	
49	"	ガラス	淡青色	3.2	1.7	1.3	完形	"	
50	"	ガラス	淡青色	3.4	1.8	1.0	完形	"	
51	"	ガラス	淡青色	3.4	2.3	1.0	完形	"	
52	"	ガラス	淡青色	3.5	1.7	1.1	完形	"	
53	"	ガラス	淡青色	3.8	1.7	1.5	完形	"	
54	"	ガラス	淡青色	3.7	2.0	1.0	完形	"	
55	"	ガラス	淡青色	4.0	2.2	1.3	完形	"	
56	"	ガラス	淡青色	3.0	2.2	1.0	完形	"	
57	"	ガラス	淡青色	3.6	1.7	1.2	完形	"	
58	"	ガラス	淡青色	3.6	1.3	1.2	完形	"	
59	"	ガラス	淡青色	3.4	1.8	1.2	完形	"	
60	"	ガラス	淡青色	3.8	1.9	1.4	完形	"	
61	"	ガラス	淡青色	4.2	2.0	1.2	完形	"	
62	"	ガラス	淡青色	3.5	2.0	1.1	完形	"	
63	"	ガラス	淡青色	3.3	1.6	1.0	完形	"	
64	"	ガラス	淡青色	3.2	1.7	1.0	完形	"	
65	"	ガラス	淡緑青色	4.0	2.1	1.1	完形	"	
66	"	ガラス	淡緑青色	3.1	2.4	1.0	完形	"	
67	"	ガラス	濃水色	4.0	2.2	0.9	完形	"	
68	"	ガラス	濃水色	5.0	2.9	1.8~2.0	完形	"	
69	"	ガラス	水色	3.0	3.1	1.0	完形	"	
70	"	ガラス	水色	3.8	2.7	1.3	完形	"	
71	"	ガラス	淡水色	4.0	3.1	1.2	完形	"	
72	"	ガラス	淡水色	3.8	2.1	1.0	完形	"	

No.	図版番号	材質	色調	径 (mm)	厚さ (mm)	孔径 (mm)	遺存度	出土位置	備考
73	図版なし	ガラス	淡水色	2.8	1.5	0.9	4/7 完形 (接合)	玄室奥屍床左奥部	
74	"	ガラス	淡緑色	3.9	1.8	1.5	完形	"	調査中に割れたもの?
75	"	ガラス	緑色	2.9	1.7	1.2	完形	"	
76	"	ガラス	紫色	3.8	3.3	1.1	完形	"	
77	"	ガラス	淡紺色	3.7	2.5	1.0	完形	"	
78	"	ガラス	淡紺色	2.7	2.7	1.0	完形	"	
79	"	ガラス	紺色	3.7	2.6	1.1~1.2	完形	"	
80	"	ガラス	紺色	3.9	2.3	1.1	完形	"	
81	"	ガラス	青色	5.3	3.6	1.2~1.3	完形	"	
82	"	ガラス	青色	4.7	2.8	1.7	完形	"	
83	"	ガラス	青色	4.5	2.7	0.8~1.3	完形	"	
84	"	ガラス	淡青色	3.7	3.2	1.4	完形	"	
85	"	ガラス	淡青色	3.9	2.7	1.1	完形	"	
86	"	ガラス	淡青色	4.0	2.8	1.2	完形	"	
87	"	ガラス	淡青色	4.1	2.2	1.0~1.1	完形	"	
88	"	ガラス	淡青色	4.0	2.3	1.2	完形	"	
89	"	ガラス	淡青色	3.8	2.3	1.2	完形	"	
90	"	ガラス	淡青色	4.0	1.7	1.3~1.5	完形	"	
91	"	ガラス	淡紫色	3.1	1.5	1.1	完形	"	
92	"	ガラス	青色	4.0	2.5	1.6	完形	"	
93	"	ガラス	青色	4.0	2.9	1.2	完形	"	
94	"	ガラス	青色	4.1	2.5	1.7	完形	"	
95	"	ガラス	青色	3.7	2.2	1.0~1.2	完形	"	
96	"	ガラス	青色	4.7	2.3	1.2~1.7	完形	"	
97	"	ガラス	淡青色	4.0	2.3	1.1	完形	"	
98	"	ガラス	淡青色	4.0	2.1	1.5	完形	"	
99	"	ガラス	淡青色	3.5	2.2	1.1	完形	"	
100	"	ガラス	淡青色	4.3	1.9	1.5	完形	"	
101	"	ガラス	淡青色	4.7	2.1	2.1	完形	"	
102	"	ガラス	淡青色	3.8	1.7	1.3	完形	"	
103	"	ガラス	淡青色	3.7	2.0	1.1	完形	"	
104	"	ガラス	淡緑青色	3.2	2.5	1.0	完形	玄室奥屍床左前部	

No	図版番号	材質	色調	径 (mm)	厚さ (mm)	孔径 (mm)	遺存度	出土位置	備考
105	図版なし	ガラス	紺色	4.0	2.8	1.3	完形	玄室奥屍床中央奥部	
106	"	ガラス	青色	5.2	2.9	1.6~1.8	完形	"	
107	"	ガラス	青色	3.9	2.9	1.0~1.2	完形	"	
108	"	ガラス	青色	4.0	2.1	1.2	完形	"	
109	"	ガラス	青色	4.6	2.6	1.6~1.7	完形	"	
110	"	ガラス	青色	4.3	2.1	2.0	完形	"	
111	"	ガラス	青色	3.3	2.9	1.2	完形	"	
112	"	ガラス	青色	4.6	2.7	1.3	完形	"	
113	"	ガラス	青色	4.7	2.7	1.6	完形	"	
114	"	ガラス	青色	4.1	2.6	1.2	完形	"	
115	"	ガラス	青色	4.1	3.5	1.4	完形	"	
116	"	ガラス	淡青色	3.6	2.0	1.0	完形	"	
117	"	ガラス	淡青色	3.6	1.5	1.3	完形	"	
118	"	ガラス	淡青色	3.9	1.8	1.2	完形	"	
119	"	ガラス	淡青色	3.4	1.7	1.1~1.3	完形	"	
120	"	ガラス	淡青色	3.3	2.0	1.3	完形	"	
121	"	ガラス	淡青色	3.7	1.7	1.1	完形	"	
122	"	ガラス	淡青色	3.5	1.9	1.6	完形	"	
123	"	ガラス	紺色	4.0	5.7	1.2	完形	"	
124	"	ガラス	紺色	4.0	2.6	1.0	完形	"	
125	"	ガラス	紺色	3.7	2.5	1.2	完形	"	
126	"	ガラス	紺色	3.6	2.0	1.1~1.2	完形	"	
127	"	ガラス	淡紺色	3.6	2.1	1.2~1.4	完形	"	
128	"	ガラス	濃青色	4.3	2.1	1.8	完形	"	
129	"	ガラス	青色	5.2	3.3	1.3	完形	"	
130	"	ガラス	青色	4.1	2.3	1.1~1.2	完形	"	
131	"	ガラス	青色	4.3	2.3	1.4	完形	"	
132	"	ガラス	青色	4.0	2.4	1.2	完形	"	
133	"	ガラス	青色	3.7	3.2	1.2	完形	"	
134	"	ガラス	青色	3.9	3.0	1.0	完形	"	
135	"	ガラス	青色	3.6	2.1	1.4	完形	"	
136	"	ガラス	青色	3.9	2.5	1.6	完形	"	

No.	図版番号	材質	色調	径 (mm)	厚さ (mm)	孔径 (mm)	遺存度	出土位置	備考
137	図版なし	ガラス	青色	3.8	2.5	1.2	完形	玄室奥尾床中央奥部	
138	"	ガラス	青色	4.6	2.3	1.6	完形	"	
139	"	ガラス	青色	3.8	2.2	1.2	完形	"	
140	"	ガラス	青色	4.0	2.4	1.2~1.5	完形	"	
141	"	ガラス	青色	3.6	2.4	1.4~1.6	完形	"	
142	"	ガラス	青色	4.8	2.9	1.5	完形	"	
143	"	ガラス	青色	4.4	2.5	1.4	完形	"	
144	"	ガラス	青色	3.9	2.3	1.3	完形	"	
145	"	ガラス	青色	3.8	2.5	1.2~1.4	完形	"	
146	"	ガラス	青色	4.2	2.7	1.2	完形	"	
147	"	ガラス	青色	4.0	2.2	1.6	完形	"	
148	"	ガラス	青色	4.9	2.9	1.6	完形	"	
149	"	ガラス	淡青色	4.2	2.3	1.8	完形	"	
150	"	ガラス	淡青色	3.1	1.6	1.1	完形	"	
151	"	ガラス	淡青色	4.1	2.0	1.5	完形	"	
152	"	ガラス	淡青色	3.5	1.9	1.0~1.3	完形	"	
153	"	ガラス	淡青色	4.2	2.1	1.6	完形	"	
154	"	ガラス	淡青色	3.6	2.0	1.5	完形	"	
155	"	ガラス	淡青色	4.7	2.4	2.0	完形	"	
156	"	ガラス	淡青色	3.2	1.6	1.2	完形	"	
157	"	ガラス	淡青色	3.7	2.0	1.1	完形	"	
158	"	ガラス	淡青色	4.3	2.7	1.5	完形	"	
159	"	ガラス	淡青色	4.5	3.0	1.6	完形	"	
160	"	ガラス	淡青色	5.0	2.2	1.7	完形	"	
161	"	ガラス	淡青色	4.0	1.7	1.6	完形	"	
162	"	ガラス	淡青色	3.7	2.5	1.2	完形	"	
163	"	ガラス	淡青色	4.0	2.1	1.2	完形	"	
164	"	ガラス	淡青色	3.6	2.3	1.3	完形	"	
165	"	ガラス	淡青色	3.7	1.8	1.1	完形	"	
166	"	ガラス	淡青色	3.9	2.0	1.7	完形	"	
167	"	ガラス	淡青色	3.9	1.8	1.1	完形	"	
168	"	ガラス	淡青色	3.7	2.2	1.3	完形	"	

№	図版番号	材質	色調	径(㎜)	厚さ(㎜)	孔径(㎜)	遺存度	出土位置	備考
169	図版なし	ガラス	淡青色	3.7	1.9	1.3	完形	玄室奥屍床中央奥部	
170	"	ガラス	淡青色	3.9	2.1	1.6	完形	"	
171	"	ガラス	淡青色	3.7	1.6	1.3	完形	"	
172	"	ガラス	淡青色	4.0	1.7	1.6	完形	"	
173	"	ガラス	淡青色	3.4	1.7	1.2	完形	"	
174	"	ガラス	淡青色	3.7	1.7	1.4	完形	"	
175	"	ガラス	淡青色	3.5	1.7	1.4	完形	"	
176	"	ガラス	淡青色	3.3	1.3	1.2	完形	"	
177	"	ガラス	淡青色	3.6	1.7	1.2	完形	"	
178	"	ガラス	淡青色	3.4	1.4	1.3	完形	"	
179	"	ガラス	淡青色	3.4	1.6	1.1	完形	"	
180	"	ガラス	淡青色	3.2	1.5	1.2	完形	"	
181	"	ガラス	水色	4.0	2.8	1.3	完形	"	
182	"	ガラス	青色	4.5	2.6	1.5	完形	玄室奥屍床中央前部	
183	"	ガラス	青色	4.2	2.5	1.4	完形	"	
184	"	ガラス	青色	4.0	2.4	1.3	完形	"	
185	"	ガラス	淡青色	5.0	2.1	1.8	完形	"	
186	"	ガラス	淡青色	3.7	2.0	1.3	完形	"	
187	"	ガラス	青色	3.7	2.4	1.8	完形	玄室奥屍床右奥部	
188	"	ガラス	青色	4.5	2.3	1.6	完形	"	
189	"	ガラス	青色	3.4	3.3	1.2	完形	"	
190	"	ガラス	青色	4.1	1.9	1.1~1.6	完形	"	
191	"	ガラス	青色	4.0	2.9	1.0	完形	"	
192	"	ガラス	淡青色	4.1	2.3	1.6	完形	"	
193	"	ガラス	淡青色	3.8	1.9	1.5	完形	"	
194	"	ガラス	淡青色	3.7	1.9	1.3	完形	"	
195	"	ガラス	淡青色	3.6	2.2	1.0	完形	"	
196	"	ガラス	淡青色	3.6	1.7	1.4	完形	"	
197	"	ガラス	淡青色	3.6	2.0	1.2~1.3	完形	"	
198	"	ガラス	淡青色	3.5	1.8	1.3	完形	"	
199	"	ガラス	淡青色	2.9	1.3	1.2	完形	"	
200	"	ガラス	青色	3.8	2.8	1.4	完形	玄室奥屍床右前部	

No	図版番号	材質	色調	径 (mm)	厚さ (mm)	孔径 (mm)	遺存度	出土位置	備考
201	図版なし	ガラス	淡青色	3.8	1.8	1.3	完形	玄室奥屍床右前部	
202	"	ガラス	青色	4.5	2.8	1.4	完形	"	
203	"	ガラス	青色	3.8	3.5	1.3	完形	"	
204	"	ガラス	淡青色	4.8	2.6	1.2	完形	"	
205	"	ガラス	淡青色	4.5	2.4	1.6	完形	"	
206	"	ガラス	淡青色	4.1	2.2	1.0	完形	"	
207	"	ガラス	淡青色	4.2	2.8	1.6	完形	"	
208	"	ガラス	淡青色	3.7	2.0	1.2	完形	"	
209	"	ガラス	淡青色	3.4	2.3	1.1	完形	"	
210	"	ガラス	淡青色	3.9	1.9	1.2	完形	"	
211	"	ガラス	淡青色	3.4	1.8	1.3	完形	"	
212	"	ガラス	淡青色	2.8	2.0	0.9	完形	"	
213	"	ガラス	淡緑青色	3.6	1.8	1.2	完形	"	

第9表 古城横穴墓一覧表

番号	平面模式図	羨道部規模(cm)		羨門部長(cm)	玄室規模(cm)			天井の形態	出土遺物				備考	
		幅	長		幅	奥行	高		羨道部	玄室	土器	武器・馬具	装身具	
1				55	219	210	121	ドーム					人骨粉	昭和33年調査 閉塞石(未開口)
2				85	214	280	135	カマボコ			帶先金具1		人骨5体以上 馬齒	昭和33年調査 閉塞石(未開口)
3				84	254	229	約115	ドーム			刀子2 鉄鏃1 金銅製品破片		人骨3体以上	昭和34年調査 閉塞石(未開口)
4		122	29以上	58	134	150	96	ドーム						昭和34年調査 閉塞石(再利用) 掘りかけ?
5		108	36以上	64	308	350	約230	ドーム			鉄鏃1	金環1 銀環1	人骨片	閉塞石 奥壁に石棚状の掘り込みあり
6				135	284	322	約175	ドーム			帶金具2	金環8、銀環4、メノウ製勾玉1、水晶製切子玉1、碧玉製管玉1、ガラス製小玉64	人骨9体	昭和34年調査 閉塞石(未開口) 奥壁に石棚状の掘り込みあり
7		178以上	126以上	174	328	344	約160	ドーム	人骨(頭骨)			金環1	人骨片	
8		264以上	229以上	162	270	318	約170	カマボコ	須恵器(腰1、カメ片1)	須恵器(平瓶1)		銀環2		昭和36年調査 閉塞石(未開口、赤色顔料が一部に残存)
9					206	216	約180	ドーム 又は方形造				金環1	人骨3体以上	
10		142	158	100	315	320	約195	ドーム	鉄滓2 ガラス製小玉1		刀子4 鉄鏃1	銀環9、メノウ製小玉1、ガラス製小玉3、ガラス製粟玉2	人骨3体以上	閉塞石 奥壁に石棚状の掘り込みあり
11					257	約245	約190	ドーム						

番号	平面模式図	羨道部規模(cm)		羨門部長(cm)	玄室規模(cm)			天井の形態	出土遺物				備考
		幅	長		幅	奥行	高		土器	武器・馬具	装身具	その他	
12				234	205 以上	約 190	ドーム						後世に改造
13				約 200			ドーム ?						防空壕に改造
14				約 200			ドーム ?						防空壕に改造
15				約 200			ドーム ?						防空壕に改造
16		276 以上	192 以上	102	293	318	約 175	家形に 近いド ーム (軒先 あり)	須恵器 (環1) 鉄滓1(覆土 中出土)		金環 1		閉塞石 (把手を表現した 線刻あり)
17		233	345 以上	96	364	352	212	ドーム	須恵器(环3、 高环3、平瓶 1、破片) 土師器(环3、 破片)、鉄滓 1、銀環1	刀子 1	金環 4 銀環 1	人骨粉	閉塞石(未開口) 右壁に石棚状の掘 り込みあり
18	① ②	229 以上	144 以上	128	284	286	143	カマボ コ	須恵器 (環1、提瓶 1) 土師器 (平瓶1)	金銅製杏葉1 金銅製雲珠1 釦具1 留金具3		人骨片	閉塞石(未開口) 奥壁に石棚状の掘 り込みあり
19		205 以上	174 以上	84	182	232	111	カマボ コ					
20		244 以上	79 以上	前室 63 玄室 56	134	89	120	ドーム に近い カマボ コ	須恵器 (高环1、横 甕1、台付甕 1)		金環1、銀環 1、メノウ製 勾玉1、碧玉 製管玉3、ガ ラス製小玉6 滑石製白玉1	人骨粉	複室 閉塞石(未開口) 敷石(河石)あり
21		195 以上	173 以上	142	226	300	169	カマボ コ	須恵器 (破片数点)			人骨1体と人 骨粉	閉塞石
22					180	202	135	ドーム					

番号	平面模式図	墓道部規模 (cm)		玄室規模 (cm)			天井の 形態	出土遺物				備考	
		墓門 部長 (cm)		幅	奥行	高		墓道部		玄室			
		幅	長	(cm)				土器	武器・馬具	装身具	その他		
23					228	136	約140	家形? (軒先 あり)					
24					200 以上			不明				削平により奥壁の 一部残存	
25					170 以上			不明				崖崩れにより奥壁 の一部残存	
26					145 以上			不明				"	
27					135 以上			不明				"	
28					211	119 以上		不明				尻床は平坦か?	
29					125	248	290	約220	家形? (軒先 あり)			人骨片	
30					234	212	約102	ドーム		刀子 1			
31	① ②	①	288	160	170	286	296	約210	家形? (軒先 あり)			人骨 6体以上 閉塞石(未開口)	
31	① ②	②	90	102 以上	11	126	60	50	ドーム ?	須恵器 (台付塊1、 カメ1) 人齒		人齒 小型横穴墓	
32					340	240		ドーム ?		須恵器 (カメ片3) 土師器 (环1)		半地下式横穴墓、 通路は階段状	
33				236	86 以上	52	225	220	約135	ドーム			

番号	平面模式図	墓道部規模(cm)		墓門部長(cm)	玄室規模(cm)			天井の形態	出土遺物室				備考
		幅	長		幅	奥行	高		墓道部	土器	武器・馬具	装身具	
		幅	長	幅	奥行	高	天井の形態	土器	武器・馬具	装身具	その他	備考	
34	①  ② 	約200	87以上	94	218	236	約160	ドーム					
35		190	26以上	96	232	226	約140	家形？(軒先あり)					
36				58以上	200	204	約160	ドーム？					
37		約130	27以上	86	220	222	約170	ドーム		須恵器(長頭壺1、台付壺1)		人骨2体以上	
38	①  ② 	134	26以上	80	180	205	約160	ドームに近い家形(軒先あり)				人骨2体以上	閉塞石(未開口)
39		192	128以上	72	240	275	約160	ドーム				鉄津1	閉塞石(未開口、外面に「火守」の線刻あり)
40		155	100以上	90	232	274	約185	ドーム？(軒先あり)					
41		140	134以上	100	228	202		不明					
42		152	92以上	92	252	257	約170	ドーム					閉塞石
43				92以上	80以上		不明						中世の溝で切断、コの字形屍床と考えられる

番号	平面模式図	羨道部規模(cm)		羨門部長(cm)	玄室規模(cm)		天井の形態	出土遺物室				備考	
		幅	長		幅	奥行		土器	武器・馬具	装身具	その他		
					163 以上	96 以上		不明			金環1		
44													
45					276	290	約220	ドーム? ?		刀子1	人骨粉	奥壁に石組状の掘り込みあり	
46					393	442 以上	約340	カマボコ? ?				右壁に線刻文あり 奥屍床は後世に埋葬に再利用	
47		168 以上	38 以上	116	251	284	約210	ドーム? ?				後世に埋葬に再利用	
48					112 以上	60 以上		不明		刀子1	銀環1、ガラス製粟玉12、土製小玉14		
49					298	180 以上		不明		刀子2 鐵織7 鉗具2 小鐵棒4 鐵紙2 その他1	金環3、メノウ製勾玉1、水晶製勾玉1、水晶製切子玉4、碧玉製管玉5、メノウ製小玉6、ガラス製粟玉213	人骨5体以上	

## V　まとめと考察

前項で古城横穴墓群の調査結果について述べたが、ここでは若干の考察を加えまとめたい。

### 立地と分布

熊本平野に北から延びる植木（京町）台地の南端部、古城の旧本丸（標高約35m）の東側から南側にかけての崖面に古城横穴墓群は位置している。

古城横穴墓群は、高さ15mの崖の幅 100mの範囲に、大きく分けて三段に造られており、53基確認されたが、本来は70基程あったものと考えられる。熊本県内の横穴墓群は横に一列に造られているものが多いが、古城横穴墓群は数段に造られているのが特徴である。このような配列をなすものは山鹿市付城横穴墓群、鹿本郡植木町宮穴横穴墓群などがあり、いずれもやや軟弱な凝灰岩のため露頭部が斜面になっていることに起因すると考えられる。

### 構造と変遷

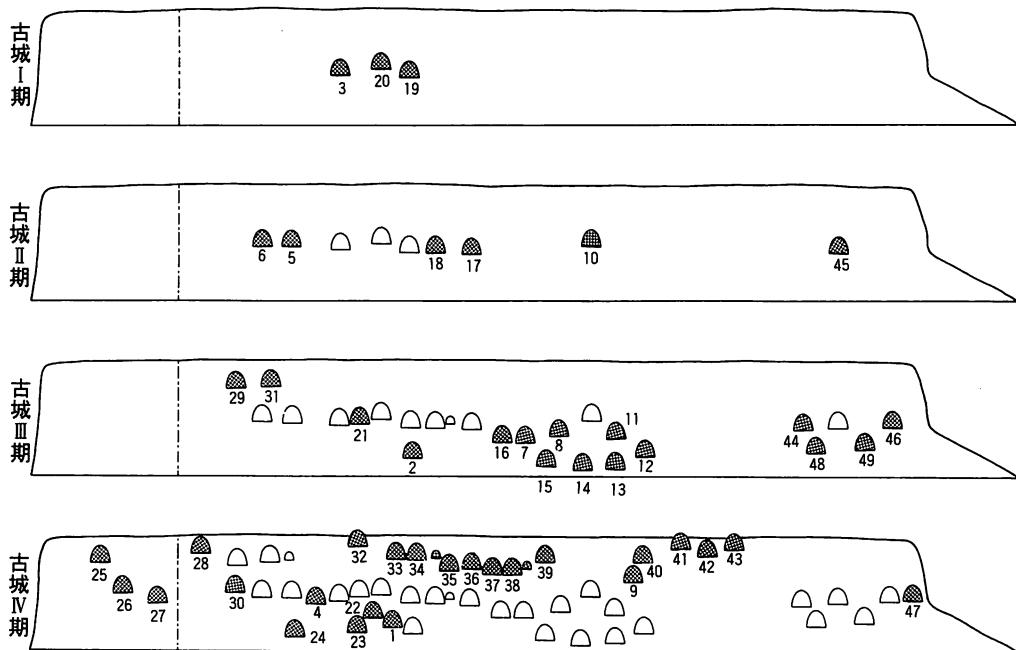
横穴墓の造られた順序を考えるには横穴墓に副葬された遺物、特に土器が手がかりとなるが古城横穴墓群では土器の残っていた横穴墓はあまり多くはなかった。しかし横穴墓の造られた位置や墓室の形態の違いをもとに考えるとその大まかな流れをつかむことができる。そこでここでは主として横穴墓の構造から考えた変遷過程を四期に区切って提示したい。

**古城Ⅰ期の横穴墓** 崖の地形がやや窪んで、位置的に最も最も横穴墓を造るのに適した中段のやや左寄りにある20号横穴墓が最初に造られたのではないかと考えられる。この横穴墓のみは複室構造になっており、おそらく横穴式石室の形態を模して造られたものである。

閉塞石は安山岩の割石が使用されており、未開口の状態で残っていた。前室は狭く、床面は平坦である。後室は前室より一段高くなっている、平面形はやや奥に長い長方形で、中央付近に横方向の仕切りがある。この仕切りの前後では奥が少し高くなっている。仕切りの中央部は排水の切れ込みがある。後室の天井部はカマボコ形とドーム形の中間的な形態をしている。

20号横穴墓の右側の19号横穴墓と、左側に1つとんである3号横穴墓は、床面がともに平坦で、3号横穴墓は20号横穴墓と同じく安山岩閉塞石を使用しているところから、この2基が20号横穴墓に統いて造られた横穴墓と考えることができよう。

この3基を古城Ⅰ期の横穴墓としたい。造られた時期は、20号横穴墓から出土した須恵器からみて、6世紀後葉と考えられる。



第78図 古城横穴墓群の分布変遷図

**古城Ⅱ期の横穴墓** 古城Ⅱ期と分類した横穴墓は、古城Ⅰ期の横穴墓のすぐ右側に並んで掘られている18—1号、17号横穴墓である。これらの横穴墓の特徴は割合大型で、墓室の壁面のやや上方に棚状の段をもつことである。

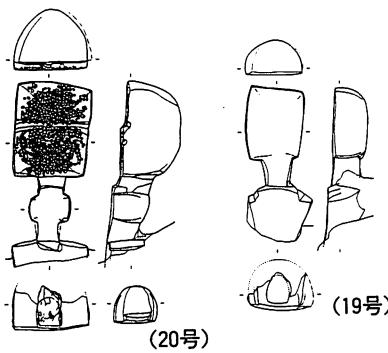
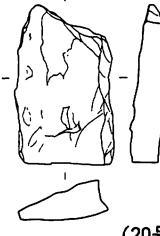
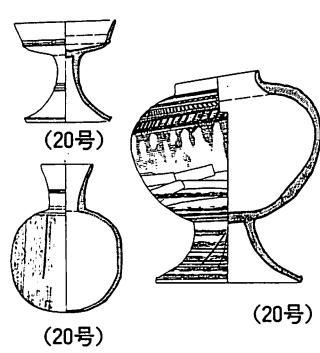
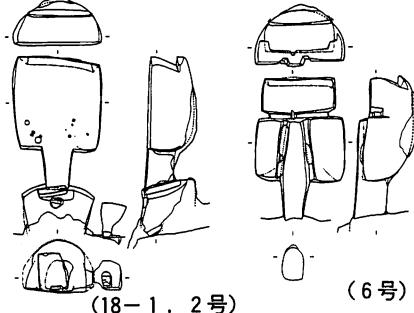
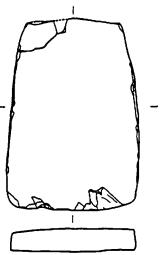
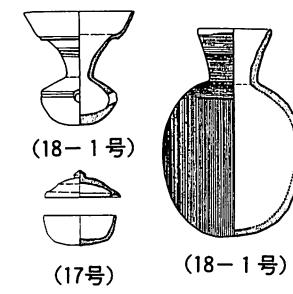
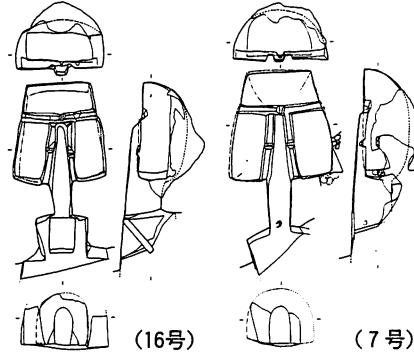
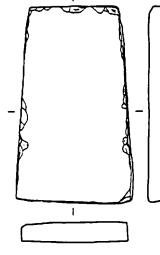
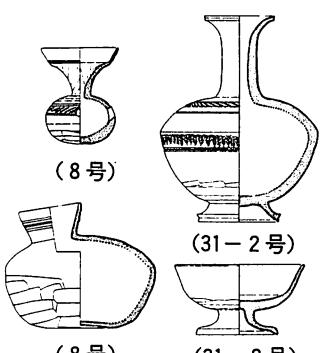
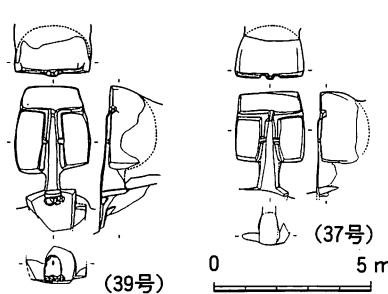
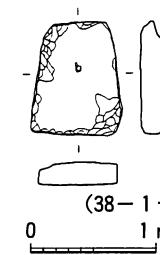
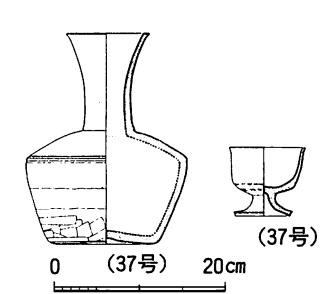
18—1号横穴墓は床面が平坦でほぼ正方形を成し、奥壁上部に棚状の段がある。

17号横穴墓は左右と奥に三区の屍床をそれぞれ抉るように掘っているので、平面形は凸字状を成している。棚状の段は右壁にある。

これらの棚状の段からは、遺物も人骨も発見されていないので、物を置くために設けられたものではないかと考えられる。おそらく乙益重隆氏が述べられた（註1）ように「横穴式石室の奥壁に設けた石棚に対する考え方と、横穴古墳内部の四隅に彫った段状の軒まわりに対する考え方方が結合して」発生したものとみられる。今後、類例の増加を待って確認すべき問題である。

このほか、玄室の奥壁に棚状の段をもつものは5号、6号、10号、45号横穴墓があり、これもほぼ同時期に造られたと考えられ、古城Ⅱ期の横穴墓として分類する。いずれも中段に造られた三区の屍床をもつ横穴墓で、10号や45号横穴墓などのある位置から、分散して造られた状態もみることができ興味深い。このうち10号横穴墓の奥屍床は削り込みの石棺を思わせる。また5号と6号横穴墓の奥屍床の仕切りは両端が上がっており、ゴンドラ形の舟を表現したと考えられる。

古城Ⅱ期の横穴墓の閉塞石は、扁平で大型の凝灰岩切石が用いられ、形の整ったものもあるが、不整形なものもみられ、表面仕上げはあまり丁寧ではない。

	横穴墓	閉塞石	須恵器
古城Ⅰ期	 (20号) (19号) (20号)	 (20号)	 (20号) (20号) (20号)
古城Ⅱ期	 (18-1, 2号) (6号) (17号)	 (17号)	 (18-1号) (17号) (18-1号)
古城Ⅲ期	 (16号) (7号) (8号)	 (8号)	 (8号) (31-2号) (31-2号)
古城Ⅳ期	 (39号) (37号)	 (38-1号)	 (37号) (37号)

第79図 古城横穴墓群の形態変遷図

古城Ⅱ期の横穴墓の造られた時期は、18—1号横穴墓などから出土した須恵器から、6世紀末ないし7世紀前葉と考えられる。

**古城Ⅲ期の横穴墓** 古城Ⅲ期と分類した横穴墓は、造られた位置や形態からみて、古城Ⅱ期の横穴墓に次いで造られたと考えられる割合大型の横穴墓である。中段の古城Ⅰ、Ⅱ期の横穴墓の間やその周辺にある16号、7号、8号、11号、21号、44号、46号横穴墓、下段の一部分にある2号、12号、13号、14号、15号、49号横穴墓、上段の一部にある29号、31—2号横穴墓がこれに属する。

古城Ⅲ期の横穴墓は、造りが丁寧で、整った形態をしており、すべて「コ」字形屍床で、仕切りも高くはっきりしている。平面形は奥にやや長い長方形が多いが、16号、7号横穴墓などは入口側が張っているので台形になっている。天井部はほぼドーム形を成すが、31号横穴墓は軒先の表現と奥には棟持柱状の浮き彫りがあり、家形の名残りがある。線刻文のある46号横穴墓は大型で、屍床の形態が特異な横穴墓である。

古城Ⅲ期の横穴墓の閉塞石は、大型の凝灰岩切石が用いられ、四隅が角ばって、やや台形に近い長方形を成している。表面仕上げも丁寧である。

古城Ⅲ期の横穴墓の造られた時期は、8号や31—2号横穴墓から出土した遺物からみて、7世紀中葉を中心とした時期と考えられる。

**古城Ⅳ期の横穴墓** 最も新しいと考えられる横穴墓群は、入口や内部が古城Ⅲ期に比べてやや狭くなり、全体の仕上げがやや雑になっているもので、これを古城Ⅳ期の横穴墓群として分類した。中段の9号、30号、49号横穴墓、下段の1号、22号、23号横穴墓など中・下段の一部にもみられるが、中・下段で造る場所が無くなつたため、大部分は上段に造られている。28号、32~43号横穴墓などがそれである。

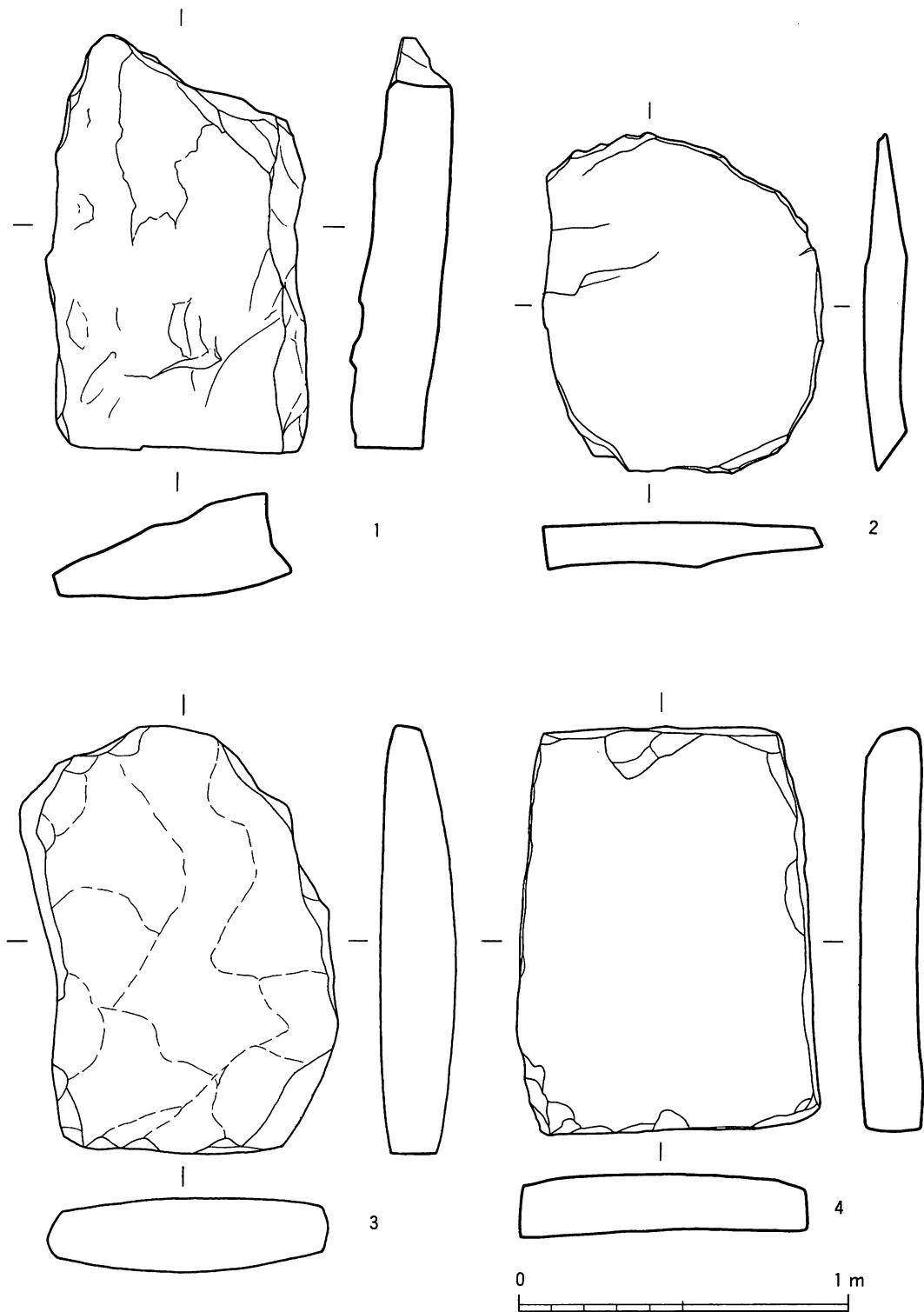
玄室床面は方形と台形があり、隅丸ぎみになっているものが多い。屍床は「コ」字形に仕切られたものが多いが、仕切りは低く、一部には段差をつけただけで仕切りを省略したものもある。

閉塞石はいずれも凝灰岩切石を用いており、長方形と台形があるが、小型である。

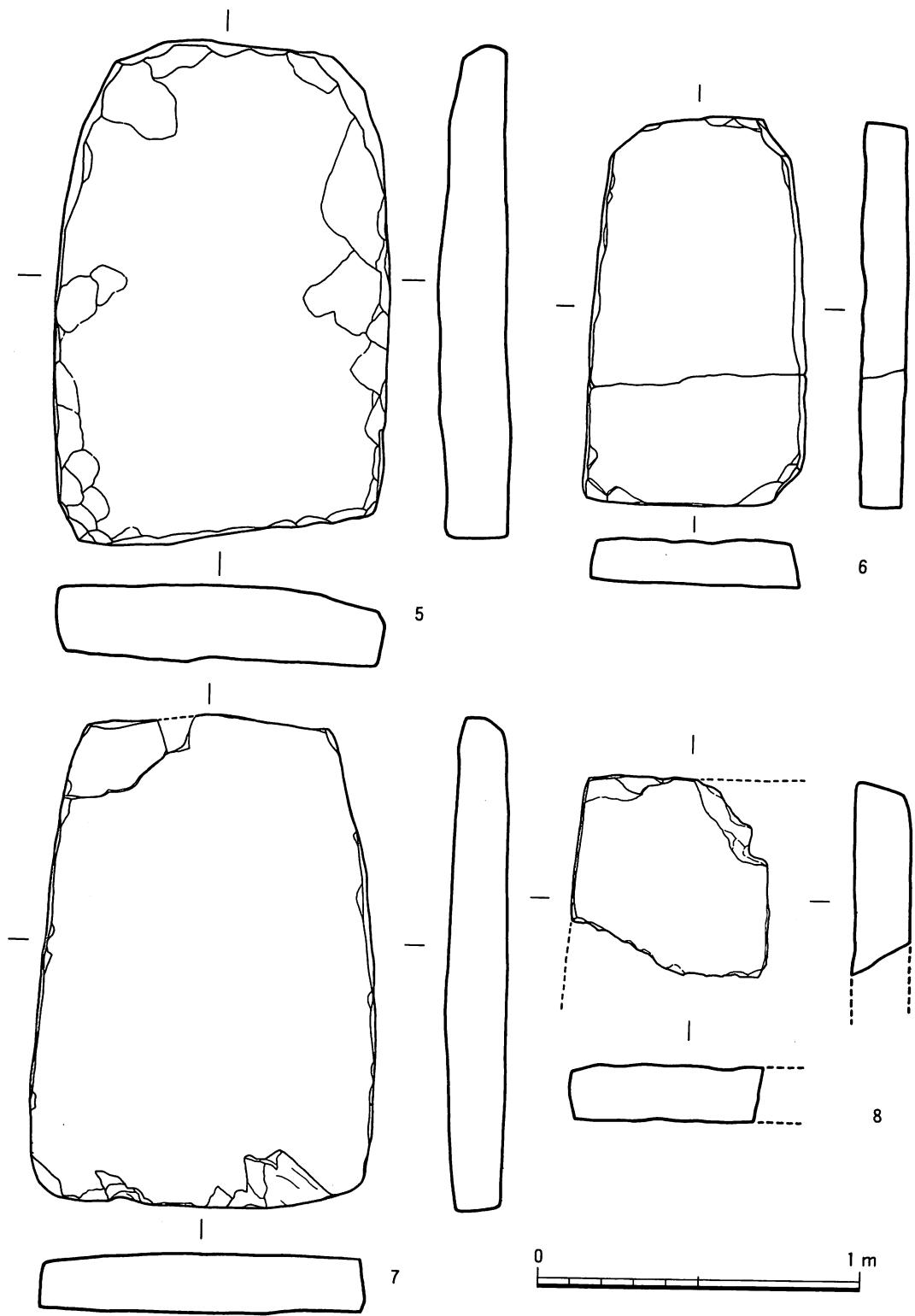
古城Ⅳ期の横穴墓からはあまり遺物が出土しなかつたが、37号横穴墓から出土した須恵器からみて、7世紀の後葉頃造られたものと考えられる。

### 埋葬について

横穴墓は「コ」字形に仕切った屍床のある構造からもわかるように複数の遺体を埋葬することを前提として造られた追葬墓である。古城横穴墓群では人骨の遺存状態があまり良好ではなかったが、歯の位置などから追葬の事実を確認することができた。

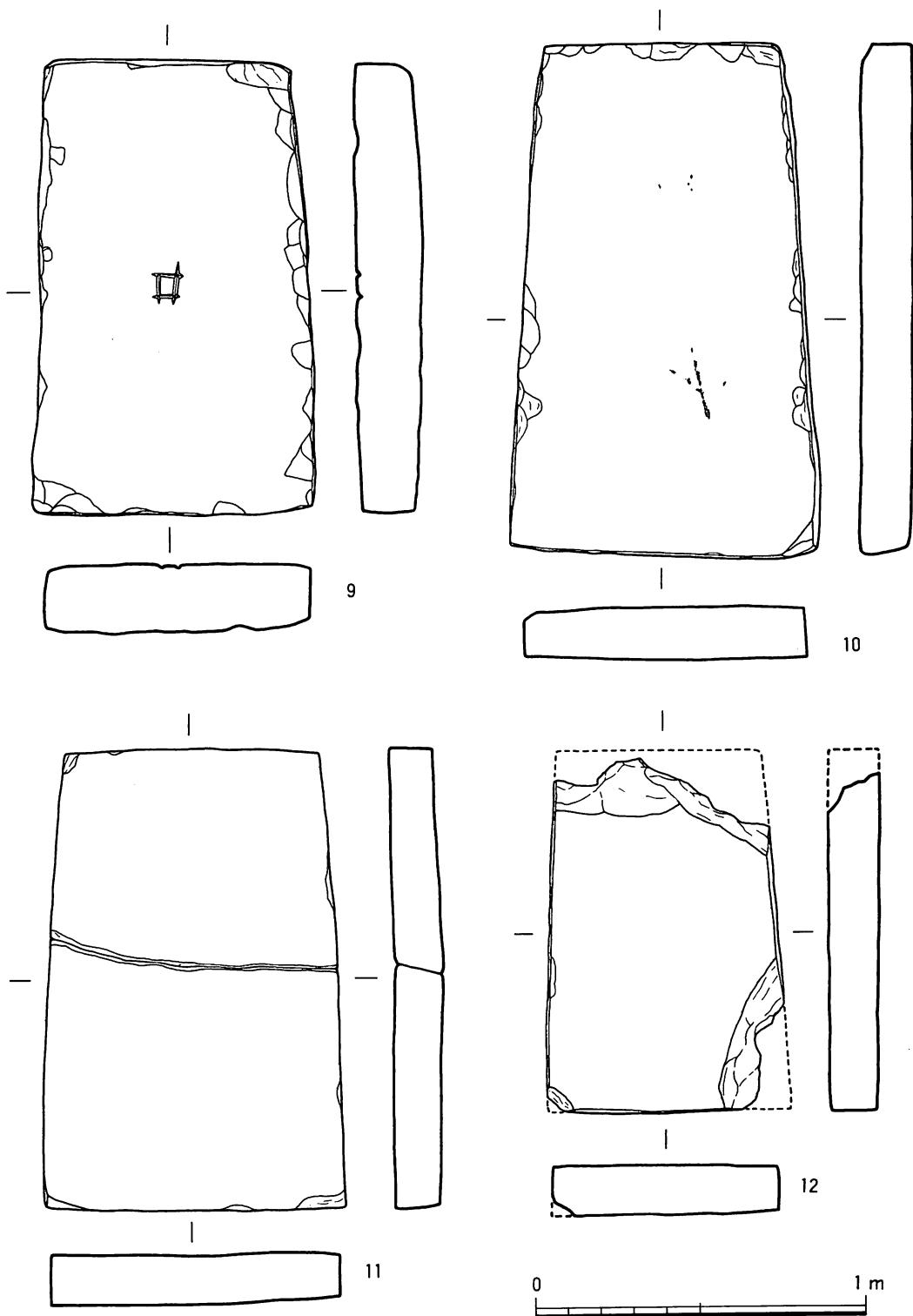


第80図 閉塞石集成図 (1)  
[1, 2 古城Ⅰ期 3, 4 古城Ⅱ期]



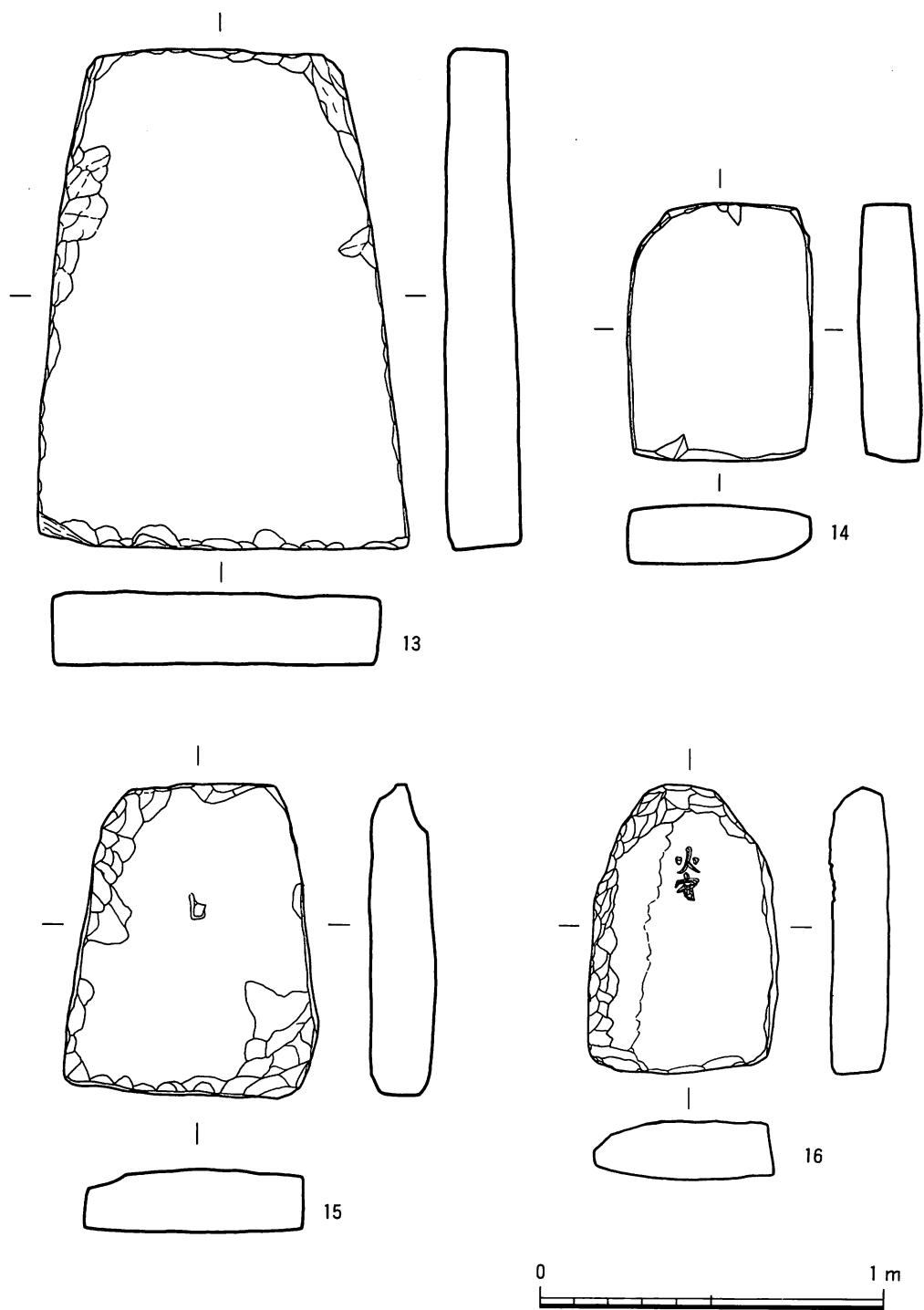
第81図 閉塞石集成図（2）

5 5号墓 6 10号墓 7 17号墓 8 4号墓  
[5~7 古城Ⅱ期 8 古城Ⅲ期]



第82図 閉塞石集成図 (3)

9 16号墓 10 8号墓 11 21号墓 12 不明  
[9~12 古城Ⅲ期]



第83図 閉塞石集成図（4） 13 31-1号墓 14 42号墓 15 38-1号墓 16 39号墓  
[13 古城Ⅲ期 14~16 古城Ⅳ期]

6号横穴墓は、「コ」字形屍床をもつもので奥屍床からは玉類などに混じって対になると考えられる耳環が3カ所から出土した。これから推定すると奥屍床には右に頭を向けた遺体が2体、左に頭を向けた遺体が1体の合計3体以上が埋葬されていたと考えられる。右屍床では玉類と共に2対の耳環が出土したが、歯の位置から推定すると奥に頭を向けた遺体が1体、入口側に頭を向けた遺体が2体の合計3体以上が埋葬されていたと考えられる。また左屍床では耳環は1対であったが、歯の位置から入口側に頭を向けた遺体が3体埋葬されていたと考えられる。従って6号横穴墓には9体あるいはそれ以上が埋葬されていたと考えることができる。また2号横穴墓や8号横穴墓でも5体以上の埋葬が認められた。

31号横穴墓は、「コ」字形に3区の屍床を配置した横穴墓である。この横穴墓の右屍床からは頭骨1つがやや良好な保存状態で発見された。しかし他の部位の骨とは遊離しており、埋葬後動かされたと考えられた。また大腿骨などの数からみて、この屍床には3体以上分の遺体が置かれていたことがわかった。これは追葬時に整理された結果と考えることができ興味ある資料である。なお歯の位置から奥屍床には2体以上、左屍床には1体以上が埋葬されていたことがわかった。このように玄室内で遺体を集骨状態に整理したものは21号横穴墓でも確認できた。

この横穴墓群から4基の小型横穴墓が発見された。18-2号、31-2号、34-2号、38-2号横穴墓がそれである。小型横穴墓の機能については、成人の遺体をそのまま埋葬することが困難であるところから、火葬墓説、小児用墓説、副葬品埋納用説などがあったが、ここでは別の機能<sup>(註2)</sup>であることを確認できた。

すなわち、18-2号横穴墓は軽石2個を重ねて閉塞しており、未開口の状態で発見されたが、中央部から性別は不明であるが壯年と鑑定された歯と骨粉が検出された。火葬されておらず、壯年の遺体を狭い玄室の中にしかも頭部を中心において埋葬することは困難である。従って大型の横穴墓の内部においてさえ追葬時に前の骨が整理された例があるように、この小型横穴墓の機能も大型横穴墓で骨になった遺体を整理するための改葬墓と考えができるであろう。また小型横穴墓が必ず大型の横穴墓の横に付属したように進められていることもこのことを裏付けるものである。

31-2号横穴墓からは、仕切りの前後のやはり中央部から小児と幼児と鑑定された歯が検出された。これも狭い玄室の中央に頭部を置いて埋葬することは困難である。出土した須恵器も改葬時に31-1号横穴墓からいっしょに移されたのではないかろうか。

また34-2号横穴墓では、大腿骨などの上に頭骨を載せた状態で壯年の男性と鑑定された遺体が検出された。これは改葬されたことを如実に物語っている。

38-2号横穴墓には人骨の遺存がなかったが規模から改葬用とみることができる。このほか掘りかけと考えた4号横穴墓も、改葬墓として使用されたことも考えられる。

なお、取り上げが可能であった人骨については長崎大学医学部解剖学第二教室から調査結果

をいただき、本書に収録したので、そこを見られたい。

## その他

古城横穴墓群のうち18号横穴墓からは、金銅製杏葉、金銅製雲珠、金銅製帶金具などの馬具が出土したが、2号横穴墓玄室内左屍床からは馬歯が検出され、馬そのものが隨葬されたことがわかった。このことについては乙益重隆氏に玉稿をいただき本書に収録することができた。

熊本県内には全国の約半分を占める約180基の装飾古墳が知られているが、古城横穴墓群でも8号横穴墓と46号横穴墓の2基に装飾を認めることができた。8号横穴墓は閉塞石にある。この閉塞石は凝灰岩切石の立派なもので、外面の一部に直線的に赤の彩色が認められるが、消えかかっているので、描いてあった文様は不明である。46号横穴墓は玄室に入ってすぐの右壁に小さく線刻文で描かれているが、壁面が崩れやすく、やや硬い軽石の部分にだけのこっており全体の文様は不明である。残った線から、県内の線刻文と比較して推測すると、マストを立て帆を張った船に近いが断定はむずかしい。なお船の線刻文は宇土市仮又古墳や梅崎古墳、宇土郡不知火町桂原古墳など宇土半島の基部の石室墳に多くみられるが、玉名市の石貫ナギノ横穴墓群や石貫古城横穴墓群などにもあることが知られている。

閉塞石に彫刻したものが2基発見された。16号横穴墓には四角を、39号横穴墓には文字を彫ってあった。

16号横穴墓の閉塞石は凝灰岩製で、やや上部が狭いが、ほぼ縦長の長方形で、その外面中央部に薬研彫りで四角を彫ってある。位置的にみて把手を表現したものと考えられる。把手の類例は宇土郡不知火町国越古墳や球磨郡多良木町赤坂古墳などの横穴式石室の閉塞石にみられ、これらは浮彫で表現している。似た例として県内の装飾古墳の盾に把手のあるものが、山鹿市鍋田横穴墓群、人吉市大村横穴墓群、球磨郡錦町京カ峰横穴墓群などにみられる。また閉塞石に線刻を加えた例が下益城郡城南町牛頸横穴墓群にみられ、これは閉塞石を斬に見えるように表現している。これらの例などから考えると16号横穴墓の閉塞石も単に把手を描いたとみるより、閉塞石を盾と見たて把手を描いたのではなかろうか。

39号横穴墓の閉塞石も凝灰岩製で、正面観では上方が丸みを帯びており、割合小型である。文字は外面の中央部やや上方に「火守」または「火安」と認める文字が刻まれている。この文字銘とその類例については、八木充氏と乙益重隆氏に玉稿をいただき本書に収録することができたので、そこをみられたい。

(高木正文)

### 【註】

- 1) 本書8頁21行
- 2) 高木正文「古墳時代の再葬」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』下巻 1982年

## VI 関連論考

(1) 熊本市古城横穴墓群出土の古墳時代人骨

松下孝幸・分部哲秋・中谷昭二

(2) 熊本市古城横穴墓群発見の文字銘について

八木 充

(3) 横穴に表現された文字の用例

乙益重隆

(4) 馬の隨葬例について

乙益重隆



# 熊本市古城横穴墓群出土の古墳時代人骨

松下孝幸<sup>\*</sup>・分部哲秋<sup>\*</sup>・中谷昭二<sup>\*</sup>

## はじめに

熊本市古城町に所在する古城横穴群の発掘調査が1983年（昭和58年）の春に行なわれ、この調査で人骨が出土した。この人骨群の保存状態は後述しているように、あまり良いものではなかったが、なかには計測ができるものもあった。

長崎大学医学部解剖学第二教室では、日本人の成り立ちや日本人の形質変化を解明するために、西日本各地から出土する古人骨の蒐集とその形質人類学的研究を続けている。古墳時代人骨に関しては、宮崎県の地下式横穴から出土する古墳時代人骨の研究をある程度蓄積してきており、この地方の古墳人の特徴の概要を捉えることができたが、さらに詳細な検討を行なうために、現在も人骨の蒐集とその研究を続けている。また山口県でも山口市の朝田墳墓群や宇部市から出土した古墳時代人骨の調査を行なうことができ、山口県中部地域における古墳時代人骨の特徴の一端をうかがい知ることができた。

古墳時代人骨は縄文・弥生時代人骨に比較すると、比較的どの地域からも出土しているが、その割には研究が遅れており、各地域ごとの特徴を明らかにするところまでは至っていないのが現状である。私達はこうした空白を埋めていくために、一つひとつの人骨を資料化する努力を続けている。

本例の保存状態はあまり良いものではなかったが、興味ある所見も認められ、本県の古墳人の特徴の一部を知ることができたので、その結果を報告しておきたい。

## 人骨の出土状況

私達が現場で調査した、21号横穴、31-1号横穴、34-2号横穴、37号横穴、38-1号横穴について記載しておきたい。

### 21号横穴

左床に人骨が集骨状態で残存していたが、ほとんど骨粉に近く、取り上げることができなかった。

### 31-1号横穴

右床に人骨が残存していた。中央部寄りの人骨はほぼ自然の状態を保っており、その他についても一部は自然の状態にあるものもみうけられたが、全体的には攪乱を受けていた。人骨は

\* 長崎大学医学部解剖学第二教室

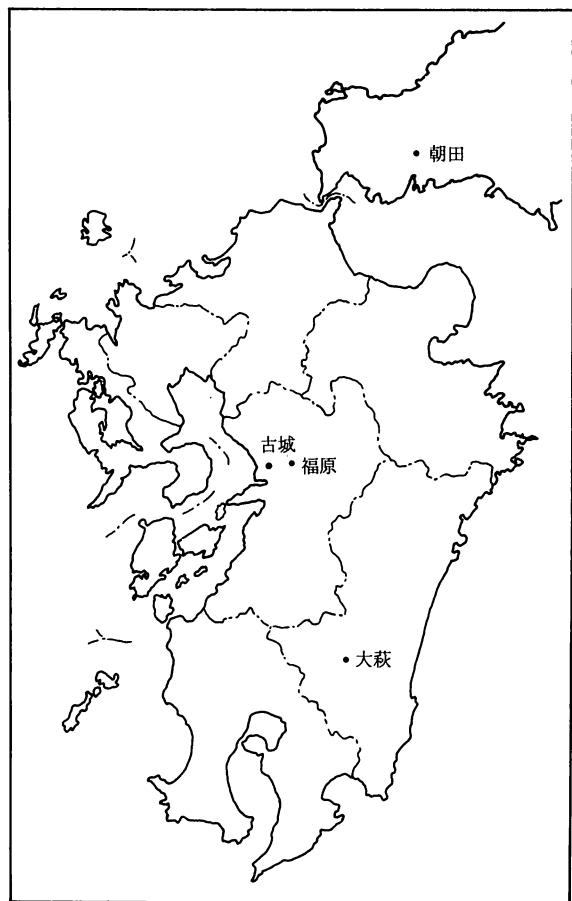
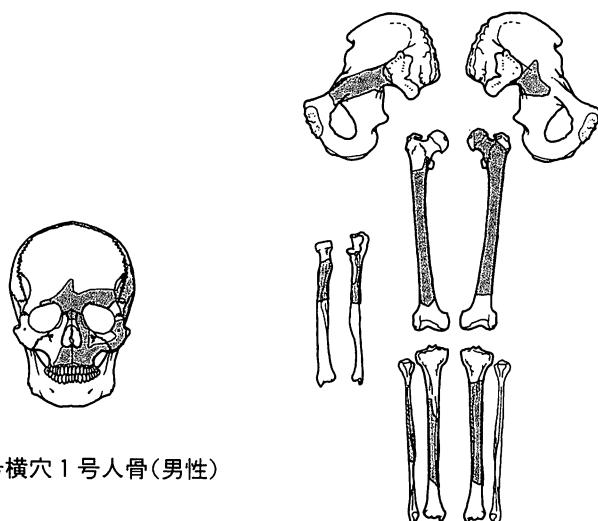


図1 遺跡



31-1号横穴1号人骨(男性)

38号横穴2号人骨(女性)

図2 人骨の残存状態

良く残っていたが、やはり骨質は脆くなってしまっており取り上げはきわめて困難であった。人骨は頭蓋および四肢骨が残存しており、その残存状態から、3体分を確認したが、取り上げることができたのは2体分の一部のみであった。後述しているように、四肢骨の骨体は太いものであった。

#### 34-2号横穴

34号横穴に付随して小さな横穴があり、そのなかで頭蓋と大腿骨と脛骨の一部を検出した。出土状態は埋葬時のままではなく、2次的な集骨状態であった。

#### 37号横穴

墓室中央に人骨が散乱状態で出土した。人骨は比較的良く残っている方で、大腿骨の数から2体分と判断した。そのうちの1体の四肢骨は太く、このことから1体は男性と推定した。人骨は脆くなってしまっており、その取り上げはやはり困難であった。

#### 38-1号横穴

1体は散乱状態で、もう1体は集骨状態で出土した。2体とも四肢骨の残りが良く、この四肢骨の状態から2体とも女性人骨と推定した。このうちの1体の保存状態は、今回出土した人骨群の中では最も良好なもので、計測も可能なものであった。

### 資料

人骨の保存状態はあまり良いものではなく、大部分は脆くなってしまっており、なかには骨粉状態のものもあり、取り上げはきわめて困難であった。従って、人骨を取り上げて計測することはきわめてむずかしいと判断し、できるかぎり現場で詳細に観察することにした。

現場での観察と教室での人骨の精査の結果、各横穴で検出した人骨数は表1のとおりである。また、表2に示しているように、今回の調査で検出した人骨は合計14体で、そのうち2体は幼

表1 出土体数

横穴番号	体数
7号横穴	2体
18-2号横穴	1体
21号横穴	1体
31-1号横穴	3体
31-2号横穴	2体
34-2号横穴	1体
37号横穴	2体
38-1号横穴	2体
合 計	14体

表2 資料数

横穴番号	体数	成 人			合計
		男性	女性	不明	
7号横穴	2体				
18-2号横穴	1体				
21号横穴	1体				
31-1号横穴	3体				
31-2号横穴	2体				
34-2号横穴	1体				
37号横穴	2体				
38-1号横穴	2体				
合 計	14体	4	3	5	2 14

表3 人骨一覧

遺構番号・人骨番号	性別	年令
7号横穴1号人骨	不明	壮年
2号人骨	女性	壮年
18-2号横穴人骨	不明	壮年
21号横穴人骨	不明	不明
31-1号横穴1号人骨	男性	壮年
2号人骨	男性	壮年
3号人骨	不明	不明
31-2号横穴1号人骨	—	小児（7～9才）
2号人骨	—	幼児（4～5才）
34-2号横穴人骨	男性	壮年
37号横穴1号人骨	男性	不明
2号人骨	不明	不明
38-1号横穴1号人骨	女性	不明
2号人骨	女性	壮年

小児骨であった。成人骨12体のうち性別を判別できたのは7体のみで、男性骨は4体、女性骨は3体であった。なお、各人骨の性別・年令は表3のとおりである。

なお、この人骨群は、別稿で述べられているとおり、考古学的所見より古墳時代後期（6世紀末から7世紀）に属する人骨群である。

計測方法は、Martin-Saller (1957) によったが、一部はHowells (1973) の方法で計測した。

また脛骨の横径は、オリビエの方法で計測を行なった。歯の計測は藤田 (1949) の方法で行ない、1/20mm副尺付のノギスで計測した。

比較資料としては、同じ熊本県の例として、福原古墳人（松下・他、1985）、宮崎県の地下式古墳人の例として、大萩（松下、1984a）から出土した地下式古墳人および山口市の朝田墳墓群第Ⅱ地区にある横穴墓出土の古墳人（松下、1982、松下・他、1983b）を用いた。

## 所 見

各骨および歯の計測値は一括して表7から表13に示している。

### 7号横穴1号人骨（性別不明、壮年）

右側側頭骨、左右の頭頂骨などのそれぞれ一部が残存していたにすぎない。冠状縫合とラム

ダ縫合の一部が観察可能で、おそらく両縫合は内外両板とも開離していたものと考えられる。このことから、年令を壮年と推定した。

また、乳様突起はあまり大きいものではなく、外耳道は観察できなかった。

#### 7号横穴2号人骨（女性、壮年）

左側側頭骨や頭頂骨などの一部が残存していた。乳様突起が著しく小さいことから、女性の可能性が強い。また、左側外耳道には骨腫は認められない。矢状縫合の一部が観察できたが、おそらくこの縫合は開離していたものと考えられる。この所見から、年令は壮年と推定した。

#### 18-2号横穴人骨（性別不明、壮年）

頭蓋片や四肢骨片が小量および歯冠が1個残存していたにすぎない。

歯は上顎の左側第一大臼歯と考えられる。咬耗度は Broca の1度である。性別は不明であるが、年令は歯の咬耗度から、壮年と推定した。

#### 21号横穴人骨（性別、年令不明）

頭蓋片、四肢長骨片および寛骨片などが残存していたにすぎない。性別・年令ともに不明である。

#### 31-1号横穴1号人骨（男性、壮年）

頭蓋、上腕骨、大腿骨および脛骨が取り上げ可能であった。

##### (1) 頭蓋

残存部の状態は図2に示しているとおりである。脳頭蓋の大部分は存在しないので、頭型は不明である。外耳道は両側とも観察可能で、骨腫は左右とも存在しない。縫合は矢状縫合と冠状縫合のそれぞれ一部が観察可能で、両者とも内外両板は開離している。眉上弓はやや隆起しているが、上顎骨の前頭突起は前額位で、鼻根部は扁平である。また、鼻骨は小さく狭い。計測ができたのはごくわずかで、顔高は108mmと著しく低顔である。

下顎骨は下顎体の大部分が残存していた。下顎体の高径も著しく低いものである。

上下両顎には歯が残存していた。その残存歯を歯式で示すと、以下のとおりである。

$M_3 \circ$	$M_1 P_2$	$P_1 C$	$I_2 \circ$	/ /	C	$P_1$	$P_2$	$M_1 M_2 \circ$
$M_3$	$M_2$	$M_1 \circ$	$P_1 \circ$	$\circ \circ \circ$	$\circ$	$\circ$	$\circ$	$P_1 \circ \circ \circ M_3$
[ / : 不明 (破損) ]							以下同じ	
[ ○ : 齒槽開存 ]							以下同じ	

咬耗度は Broca の 1 度である。

### (2) 四肢骨

上腕骨は、右側骨体の一部、左側骨体遠位部のごく一部がのみが取り上げ可能で、大腿骨は、右側骨体の内側部が、脛骨は、右側骨体の外側半のみが取り上げ可能であった。骨体は厚く、残存部から推測すると、四肢骨の骨体は太いことがうかがわれ、事実、現場では骨体の径が大きいことを確認している。

### (3) 性別・年令

性別は、眉上弓の隆起が強いことや四肢骨の径が大きいことから、男性と推定し、年令は歯の咬耗が著しく弱いことから壮年と推定した。

#### 31-1号横穴 2 号人骨（男性、壮年）

現場では四肢骨を確認したが、これらは取り上げることができず、ただ歯のみが取り上げ可能であった。残存歯はすべて下顎の遊離歯のみで、これを歯式で示すと次のとおりである。

○	○	M <sub>1</sub>	○	P <sub>1</sub>	C	○	○		○	○	○	○	○	M <sub>1</sub>	○	○
---	---	----------------	---	----------------	---	---	---	--	---	---	---	---	---	----------------	---	---

咬耗度は Broca の 1 度である。

性別は、現場で観察したところ、四肢骨の径が大きかったので、男性と推定し、年令は歯の咬耗が著しく弱いことから壮年と推定した。

#### 31-1号横穴 3 号人骨（性別、年令不明）

現場では四肢骨を確認したが、取り上げることができず、また、現場での観察でも性別、年令を決める手掛かりは得られなかった。

#### 31-2号横穴 1 号人骨（小児、7～9才）

31-2号横穴からは歯のみが取り上げが可能で、解剖学的に精査したところ、2体分の、幼児と小児の遊離歯であることが分かった。

1号人骨とした遊離歯は次のとおりである。

M <sub>2</sub>	M <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>1</sub>	C	/	I <sub>1</sub>	I <sub>1</sub>	I <sub>2</sub>	C	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	/	M <sub>2</sub>
M <sub>2</sub>	M <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	/	C	/	/	/	/	C	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	M <sub>1</sub>	M <sub>2</sub>

すべて歯根は欠如し、歯冠のみが残存していた。咬耗度は、歯冠の一部が破損していた上顎左側の I<sub>1</sub> I<sub>2</sub> と下顎左側の C は不明であるが、上顎右側の I<sub>1</sub> と M<sub>1</sub> が Broca の 1 度、下顎両側の M<sub>1</sub> が 2 度で、その他は咬耗が認められない。従って、上下両顎の M<sub>1</sub> と上顎右側 I<sub>1</sub> は萌出し、その他は未萌出であったものと推測される。また、下顎左側 M<sub>1</sub> にはカリエスが認められ

た。

以上のことから、この人骨は、7～9才の小児（I期）骨と推測される。

### 31-2号横穴 2号人骨（幼児、4～5才）

残存歯は次のとおりである。

/ M <sub>1</sub> / / / / /	/ / C / P <sub>2</sub> M <sub>1</sub> /
/ M <sub>1</sub> / / / / /	/ / / / / / / / /

すべての歯冠のみである。上下両顎のM<sub>1</sub>は、歯冠は完成しているが咬耗が認められない。CとP<sub>2</sub>の歯冠は形成途中である。このことから、この人骨を4～5才の幼児と推定した。また、上顎のM<sub>1</sub>には両側ともカラベリーの結節が認められる。

M <sub>2</sub> M <sub>1</sub> P <sub>2</sub> P <sub>1</sub> / / /   / / / / / / / /
---

### 34-2号横穴人骨（男性、壮年）

現場では頭蓋、歯、大腿骨および脛骨のそれぞれ一部が残存していたが、取り上げができたのは、右側側頭骨、左側頭頂骨、後頭骨のそれぞれごく一部と右側脛骨骨体のみであった。縫合はラムダ縫合の一部が観察できたが、この部分は内外両板とも開離していた。残存していた遊離歯は上顎歯のみで、次のとおりである。

咬耗度は Broca の1～2度である。

### 37号横穴 1号人骨（男性、年令不明）

右側大腿骨が取り上げられたにすぎない。骨体は大きく、粗線も良く発達している。骨体中央横径と矢状径が計測できた。大腿骨の径が大きいことから男性と推定したが、年令は不明である。

### 37号横穴 2号人骨（性別、年令不明）

大部分が取り上げ不能で、大腿骨片を確認できたにすぎない。

### 38-1号横穴 1号人骨（女性、年令不明）

他の人骨に比べると、保存状態は良い。残存していたのは左側橈骨、左右の大腿骨、左側脛骨、左右の腓骨および左側の距骨である。

#### 1. 橋骨

左側骨体が残存していた。その径はやや大きく、骨間縁の発達も良好である。

#### 2. 大腿骨

右側は骨体の遠位に近い部分が、左側は骨体近位部が残存していた。粗線の発達は悪く、その径も小さい。また左側骨体の上部は扁平である。

### 3. 脛骨

左側骨体の後面が残存していた。ヒラメ筋線の発達は不良で、径も小さい。

### 4. 腓骨

左右とも骨体近位部が残存していた。右側の径はやや大きく、稜の発達も良好である。

### 5. 性別・年令

四肢骨のうち、橈骨および右側腓骨の径が大きく、あるいはその他の四肢骨とは別固体との疑いもあるが、一応大腿骨、脛骨の径が小さいことから、女性と推定した。年令は不明である。

## 38-1号横穴 2号人骨（女性、壮年）

本例の保存状態も良好なもので、歯、橈骨、尺骨、寛骨、大腿骨、脛骨および腓骨が残存していた。その残存状態は図2に示すとおりである。

### 1. 歯

次の遊離歯が残存していた。

/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	M <sub>3</sub>
M <sub>3</sub>	M <sub>2</sub>	M <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>1</sub>	C	I <sub>2</sub>	I <sub>1</sub>	I <sub>1</sub>	○	C	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub> M <sub>1</sub> M <sub>2</sub> M <sub>3</sub>

咬耗度は Broca の 1~2 度である。

### 2. 橈骨、尺骨

橈骨も尺骨も径は小さい。

### 3. 寛骨

右側は大坐骨切痕の観察が可能で、その角度は大きい。

### 4. 大腿骨

左右とも骨体が良く残存していた。骨体の径は小さい。粗線の外側唇の発達は良好であるが、骨体後面全体が後方へ突出することはない。

計測値は、骨体中央矢状径が 25mm(右)、24mm(左)、骨体中央横径は 24mm (右、左) で、骨体中央断面示数は 104.17(右)、100.00(左) で、骨体中央周は 77mm (右、左) となり、骨体は細い。また、上骨体断面示数は 84.62(右)、74.07(左) となり、左側の骨体上部は扁平である。

### 5. 脛骨

左右とも骨体が残存していた。骨体の径は小さい。前縁は強いS字状のカーブを描いており、ヒラメ筋線の発達は悪い。また、中央断面形は左右ともヘリチカのⅡ型を呈している。

計測値は、中央最大径が 25mm(右)、中央横径が 19mm(右)、18mm(左) で、中央断面示数は 72.00(右) となり、骨体は扁平ではない。また、骨体周は 71mm(左) 最小周は 65mm(右) で、骨体は細い。

## 6. 胫骨

右側骨体が残存していた。径はやや小さい。

## 7. 性別・年令

性別は、大坐骨切痕の角度が大きいことから、女性と推定した。年令は歯の咬耗が著しく弱いことから、壮年と考えられる。

## 考 察

保存状態が比較的良好であった、女性の大腿骨と脛骨について検討してみたい。熊本県内やその周辺地域での詳細な検討は別の機会に譲ることにして、ここでは、同県益城町にあった福原横穴群から出土した古墳人、山口市の朝田墳墓群第Ⅱ地区出土の朝田古墳人、および宮崎県の大萩古墳人と比較してみることにしたい。また、参考までに西北九州現代人（栄田、1967、久松、1979）とも比較してみた。なお、ここで比較に用いた古墳時代人骨は、いずれも古墳時代の後期に属するもので、福原古墳人と朝田古墳人は本例の場合と同じ埋葬形態である横穴墓から、大萩古墳人は地下式横穴から出土した人骨である。

表4をみてみると、骨体中央周は福原、朝田および大萩古墳人とほぼ同じ値で、現代人よりは大きく、この古墳人4群の大腿骨の骨体の太さはほぼ同じであることがわかる。骨体の形態は古墳時代人のなかでは大萩古墳人に近く、また現代人とも近く、福原古墳人や朝田古墳人のように横広くはない。骨体上部の扁平性は現代人はもとより朝田古墳人や大萩古墳人よりも強く、比較的福原古墳人に近い。

表4 大腿骨主要計測値（女性、右、mm）

	6.	古城古墳人		福原古墳人		朝田古墳人		大萩古墳人		西北九州現代人	
		(松下・他)		(松下・他)		(松下)		(栄田)			
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
6.	骨体中央矢状径	1	25	1	24	7	24.00	4	24.75	30	24.23
7.	骨体中央横径	1	24	1	26	7	25.29	4	23.50	30	22.93
8.	骨体中央周	1	77	1	77	7	77.43	4	77.00	30	73.13
9.	骨体上横径	2	28.50(左)	1	30	4	28.75	4	27.75	30	24.67
10.	骨体上矢状径	2	21.50(左)	1	22	4	22.75	4	21.75	30	24.67
6/7	骨体中央断面示数	1	104.17	1	92.31	7	95.47	4	105.63	30	106.07
10/9	上骨体断面示数	2	75.37(左)	1	73.33	4	79.15	4	78.59	30	100.74

次に脛骨であるが（表5）、骨体周、栄養孔位周および最小周はともに朝田、大萩古墳人よりも小さく、現代人に近く、骨体はかなり細いことがうかがえる。また、中央断面示数や栄養孔位断面示数は現代人よりは小さく、朝田、大萩古墳人に近く、なかでも朝田古墳人にきわめて近い。すなわち骨体は現代人と同じぐらい細いが、骨体の断面示数は他の古墳人に近いもので

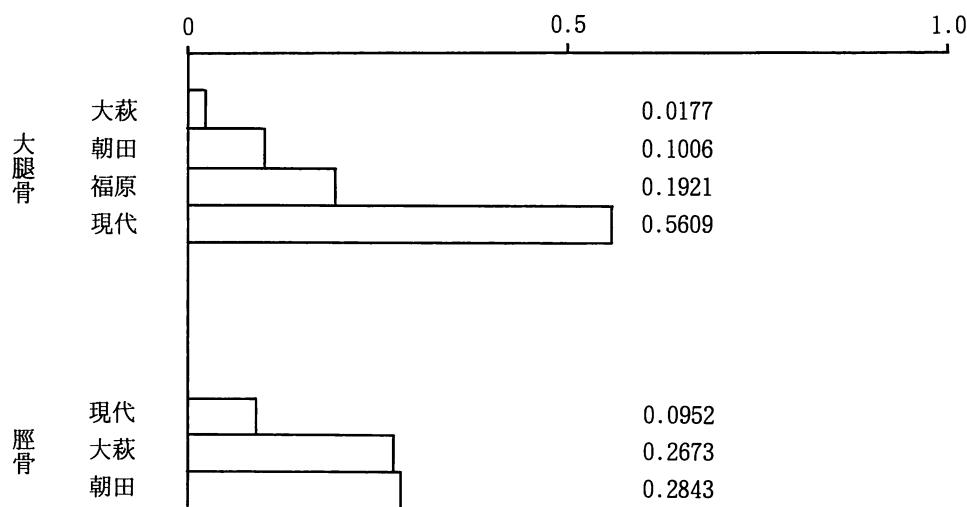
ある。

表5 脛骨計測値(女性、右、mm)

		古城古墳人		朝田古墳人		大萩古墳人		西北九州現代人	
		(松下・他)		(松下)		(久松)			
		n	M	n	M	n	M	n	M
8.	中央最大径	1	25 (左)	2	29.50	4	29.00	40	25.02
8a.	栄養孔位最大径	1	30 (左)	2	34.00	3	32.00	40	28.22
9.	中央横径	1	18 (左)	2	21.50	4	20.25	40	19.68
9a.	栄養孔位横径	1	21 (左)	2	24.00	3	22.33	40	21.66
10.	骨体周	1	71 (左)	2	80.00	4	78.25	40	70.11
10a.	栄養孔位周	1	80 (左)	2	92.00	3	87.33	40	79.03
10b.	最小周	1	65	2	75.00	3	74.00	40	63.61
9/8	中央断面示数	1	72.00(左)	2	72.81	4	69.94	40	78.72
9a/8a	栄養孔位断面示数	1	70.00(左)	2	70.48	3	69.96	40	76.90

そこで、大腿骨と脛骨について、比較資料との近遠関係をみてみるため、ペンローズの形態距離を算出してみた(大腿骨5項目、脛骨7項目)。図3に示しているように、大腿骨は大萩古墳人に最も近く、次いで朝田、福原古墳人の順に近く、現代人とは大きく離れている。一方、脛骨は現代人に最も近く、大萩古墳人と朝田古墳人とは同じ程度やや遠く離れている。

図3 ペンローズの形態距離



すなわち、今回比較に用いた資料との関係でいえば、古城古墳人の女性大腿骨は大萩古墳人に、女性脛骨は西北九州現代人に最も近いようである。

## 総 括

熊本市古城町にある古城横穴群の1983年（昭和58年）の発掘調査で、人骨が出土した。この人骨群の保存状態はあまり良いものではなかったが、熊本県における古墳時代人骨の報告例は少なく、本例は今後の貴重な資料となるものである。観察と計測を行ない若干の考察を行なった。その結果は次のように要約することができる。

1. 人骨は8横穴から合計14体出土した。そのうち2体は幼小児骨で、残りの12体が成人であった。この成人骨のうち男性骨は4体、女性骨は3体で、あとの5体は性別を明らかにできなかった。
2. この人骨は古墳時代後期に属する人骨である。
3. 頭蓋の保存状態は著しく悪く、観察および計測ができた頭蓋は男性がわずか1体のみで、この例の頭型は不明であるが、顔面の径は小さく、特に高径は低いものであった。
4. 四肢骨も保存状態が悪く、男性はほとんど計測ができなかつたが、現場で観察したところでは、その骨体は太いものであった。一方、女性四肢骨は計測ができるものがあり、その骨体は男性とは対称的に細いものであった。
5. 以上のように、本古墳人の四肢骨については、男性は骨体が太く、女性は細いものであった。女性の大脛骨と脛骨を福原、朝田、大萩の各古墳人および西北九州現代人と比較してみると、大脛骨は大萩古墳人に、脛骨は現代人に最も近いものであった。

古墳時代人骨を検討する場合は、縄文・弥生時代人骨の場合とは異なり、所属する階級を明らかにしておく必要がある。それは階級によって形質の変化のしかたが異なっていることが、近世人骨の研究結果などから分かっているからである。日本人の形質が弥生時代から古代に向かってどのように変化していくのかは大変興味ある課題である。階級によって、あるいは地域によってその変化様式は異なることが予想される。九州での古墳人の形質については、宮崎県での特徴が次第につかめてきた。しかし、まだその研究は十分なものではないし、周辺地域、特に熊本県や鹿児島県との関係はまだ明らかではない。このような研究を進めていくためにも、出土人骨の資料化を急ぎたいと考えている。

《擷筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた、熊本県教育庁文化課の諸先生方ならびに人骨研究に関してご指導いただいた内藤芳篤教授に感謝致します。》

表6 頭蓋計測値 (mm)

31-1号横穴 1号人骨		
(男性)		
5.	頭蓋底長	(101)
11.	両耳幅	124
41.	側顔長	77
47.	顔高	108
51.	眼窩幅(左)	41
55.	鼻高	48
57.	鼻骨最小幅	6
	Nasion Rad.	95

表7 下顎骨計測値 (mm)

31-1号横穴 1号人骨		
(男性)		
67.	前下顎幅	53
69.	オトガイ高	25

表8 横骨計測値 (mm)

38-1号横穴 1号人骨 (女性)		
左		
4.	骨体横径	16
4a.	骨体中央横径	16
5.	骨体矢状径	12
5a.	骨体中央矢状径	12
5(5).	骨体中央周	45
5/4	骨体断面示数	75.00
5a/4a	中央断面示数	75.00

表9 尺骨計測値 (mm)

38-1号横穴 2号人骨 (女性)		
右		
11.	尺骨矢状径	12
12.	尺骨横径	15
S	中央最小径	10
L	中央最大径	16
C	中　　央　　周	43
11/12	骨体断面示数	80.00
S/L	中央断面示数	62.50

表10 大腿骨計測値 (mm)

	37号横穴 1号人骨	38-1号横穴 1号人骨		38-1号横穴 2号人骨	
		(男性)		(女性)	
		右	左	右	左
6.	骨体中央矢状径	26	—	25	24
7.	骨体中央横径	31	—	24	24
8.	骨体中央周	—	—	77	77
9.	骨体上横径	—	30	26	27
10.	骨体上矢状径	—	23	22	20
15.	頸垂直径	—	—	—	26
16.	頸矢状径	—	—	—	21
17.	頸 周	—	—	—	78
6/7	骨体中央断面示数	83.87	—	104.17	100.00
10/9	骨体上断面示数	—	76.67	84.62	74.07
16/15	頸断面示数	—	—	—	80.77

表11 脛骨計測値 (mm)

	38-1号横穴 2号人骨	(女性)	
		右	左
8.	中央最大径	—	25
8a.	栄養孔位最大径	—	30
9.	中央横径	19	18
9a.	栄養孔位横径	—	21
10.	骨 体 周	—	71
10 a.	栄養孔位周	—	80
10 b.	最 小 周	65	—
9/8	中央断面示数	—	72.00
9a/8a	栄養孔位断面示数	—	70.00

表12 肋骨計測値 (mm)

	38-1号横穴 1号人骨 (女性)	38-1号横穴 2号人骨 (女性)
	右	右
2 . 中央最大径	14	13
3 . 中央最小径	10	12
4 . 中央周	43	43
3 / 2 中央断面示数	71.43	92.31

表13 齒の計測値 (mm)

人骨番号			頬(側)舌径	近遠心径
18-2号横穴人骨 (性別不明)	上顎 左側 M <sub>1</sub>		11.60	10.25
31-1号横穴 1号人骨 (男性)	上顎 右側 I <sub>2</sub>		6.00	6.30
	C		7.85	7.45
	P <sub>1</sub>		9.65	7.65
	P <sub>2</sub>		9.65	7.45
	M <sub>1</sub>		11.60	10.40
	M <sub>3</sub>		12.05	8.60
	左側 C		8.10	7.30
	P <sub>1</sub>		9.55	7.70
	P <sub>2</sub>		9.30	6.90
	M <sub>1</sub>		11.35	10.50
	M <sub>2</sub>		11.15	9.50
	下顎 右側 P <sub>1</sub>		7.85	7.05
	M <sub>1</sub>		10.40	11.05
	M <sub>2</sub>		10.55	10.15
	M <sub>3</sub>		10.75	11.40
	左側 P <sub>1</sub>		7.85	7.00
	M <sub>3</sub>		10.55	11.45
31-1号横穴 2号人骨 (男性)	下顎 右側 C		8.30	6.45
	P <sub>1</sub>		8.20	7.00
	M <sub>1</sub>		10.65	11.80
	左側 M <sub>1</sub>		10.75	11.50

人骨番号		頬(隅)舌径	近遠心径
31-2号横穴 1号人骨上顎 (小児)	右側 I <sub>1</sub> C P <sub>1</sub> P <sub>2</sub> M <sub>1</sub> M <sub>2</sub> 左側 C P <sub>1</sub> P <sub>2</sub> M <sub>2</sub>	— 8.55 10.35 10.00 11.50 11.55 8.35 10.20 9.95 11.75	8.35 7.80 7.60 7.10 10.10 9.25 7.90 — 7.00 9.55
下顎	右側 C P <sub>2</sub> M <sub>2</sub> 左側 P <sub>1</sub> P <sub>2</sub> M <sub>1</sub> M <sub>2</sub>	— 8.20 10.25 8.50 8.25 10.75 10.20	7.10 7.55 11.35 7.55 7.50 11.60 11.60
31-2号横穴 2号人骨上顎 (幼児)	右側 M <sub>1</sub> 左側 P <sub>2</sub> M <sub>1</sub>	10.95 9.10 10.95	9.85 6.80 9.90
34-2号横穴 人骨 (男性)	上顎 右側 P <sub>1</sub> P <sub>2</sub> M <sub>1</sub> M <sub>2</sub>	9.00 9.95 12.60 12.60	7.30 7.15 11.20 10.15
38-1号横穴 2号人骨下顎	右側 I <sub>1</sub> I <sub>2</sub> C P <sub>1</sub> P <sub>2</sub> M <sub>1</sub> M <sub>2</sub> M <sub>3</sub> 左側 P <sub>1</sub> P <sub>2</sub> M <sub>1</sub> M <sub>2</sub>	4.90 6.15 7.40 8.05 8.70 10.45 10.05 10.30 7.65 8.60 10.50 10.10	5.75 6.55 6.80 7.40 7.60 11.05 11.10 11.15 7.30 7.65 10.90 10.75

## 参考文献

1. 栗田和行、1967：西北九州人大腿骨の人類学的研究。長崎医学会雑誌、42：313－324.
2. 藤田恒太郎、1949、歯の計測規準について。人類学雑誌、61：27－32.
3. 久松 嶽、1969：西北九州人脛骨の人類学的研究。長崎医学会雑誌、44：718－728.
4. HOJO,T.: 1982 : A prehistoric Female Skeleton of the Keyholeshaped(Scquare Front Circular Rear)Mound in Mukonoda, Uto City, Kumamoto Prefecture. J.Anthrop.Soc.Nippon, 90 : 129－138.
5. 北條暉幸、1983：熊本県玉名群菊水町江田大久保船型石棺人骨(会)。人類学雑誌、91：235.
6. Howells.W.W,1974 : Cranial Variation in Man. Peabody Museun Papers,vol.67.
7. Martin-Saller, 1957 : Lehrbuch der Anthropologie. Bd.1.Gustav Fisher Verlag, Stuttgart : 429－597.
8. 松下孝幸、1982：山口県朝田墳墓群第Ⅱ地区出土の人骨。朝田墳墓群 V (山口県埋蔵文化財調査報告第64集) : 179－206.
9. 松下孝幸、野田耕一、1983 a : 宮崎県高原町旭台地下式横穴出土の古墳時代人骨。宮崎県文化財調査報告書、26 : 78－107.
10. 松下孝幸、他、1983 b : 山口県山口市朝田墳墓群第Ⅱ地区出土の人骨－総括篇－。朝田墳墓群 VI (山口県埋蔵文化財調査報告第69集) : 219－242.
11. 松下孝幸、石田肇、佐熊正史、1983 c : 鹿児島県成川遺跡出土の古墳時代人骨。成川遺跡 (鹿児島県埋蔵文化財調査報告書24) : 236－261.
12. 松下孝幸、1984 a : 宮崎県野尻町大荻地下式横穴出土の古墳時代人骨。宮崎県文化財調査報告書、27: 53－111.
13. 松下孝幸、1984 b : 宮崎市跡江横穴出土の古墳時代人骨。宮崎考古、第9号: 34－48.
14. 松下孝幸、1984 c : 鹿児島県大隅半島の古墳時代人骨。鹿児島考古、第18号: 171－181.
15. 松下孝幸、1984 d : 鹿児島県大口市諫訪野地下式土壙 5号墳出土の古墳時代人骨。諫訪野地下式土壙 5号 (鹿児島県大口市埋蔵文化財発掘調査報告書3) : 15－28.
16. 松下孝幸、中谷昭二、1985：熊本県益城町福原横穴墓出土の古墳時代人骨。熊本県文化財調査報告第7 7集
17. 内藤芳篤、1975：塚原中世墳墓・丸尾 5号墳出土の人骨。熊本県文化財調査報告、第16集: 317－322.
18. 内藤芳篤、分部哲秋、1980：清水 1号古墳出土の人骨について。清水古墳群・野寺遺跡・林源衛門墓 (熊本県文化財調査報告第41集) : 22－28.

## **Human Skeletal Remains of Kofun Period from Hurushiro Caves, Kumamoto City.**

Takayuki MATSUSHITA, Tetsuaki WAKEBE, Shoji NAKATANI

Department of Anatomy, Faculty of Medicine, Nagasaki University

In 1983, human skeletons excavated from Hurushiro caves, Kumamoto city, are 14 individuals and belong to the late phase of Kofun period. 2 individuals are child skeletons, 4 male adults, 3 female adults, but the sex of 5 individuals can not be estimated. The facial height of male is low and the postcranial skeletons are thick, but the femurs and the tibiae of females are slender.



38-1号横穴1号人骨（女性，壮年）·下肢骨

# 熊本市古城横穴墓群発見の文字銘について

\* 八木 充

昭和57年11月から翌58年6月にかけ、熊本県教育委員会文化課の手によって、熊本市古城の熊本城本丸台地南側の崖面（県立第一高等学校敷地）に残存する横穴墓群の全面的な発掘調査が行われた。その結果、当横穴墓群のうち、第39号墓の閉塞石表面から、陰刻文字2字が発見、確認されるにいたった。

今回発掘調査された古城横穴墓、あわせて53基の造営年代は、発掘担当者の推定によると、構造・出土土器などから以下の4期に大別できるという。第Ⅰ期墓（3基）は、中段左寄りにならび、6世紀末期、第Ⅱ期墓（6基）はその左右と右寄りに位置し、6世紀末から7世紀初頭にかけて築造、第Ⅲ期墓（17基）は、中段の第Ⅰ・Ⅱ期の横穴墓の間やその周辺、さらに右端寄り、上段の左側、下段の右寄りなどに配置、7世紀前半から中期のころにつくられ、第Ⅳ期墓（27基）は、大部分上段中央寄りにならび、ほかに一部は中段・下段にも築かれたが、7世紀後半に造営されたと考えられている（乙益重隆・高木正文「古城横穴墓群」『隈本古城史』）。

文字銘閉塞石をもつ第39号墓は、最上段中央やや右寄りにつくられていた。造営年代を直接示す遺物は発見されなかつたが、ほぼ同一構造ですぐ左下につくられた第37号墓から出土した須恵器の長頸壺と台付坏からみて、7世紀末造営にかかるものという。「羨道部の平面形は逆梯形で、右側には一段の飾り縁がついている。羨門は閉塞石で塞がれ、その根元は三個の軽石を置いて固定してあった。この状況は埋葬当時のままと考えられた。閉塞石は凝灰岩切石で、横55cm、縦83cm、厚さ17cmを測り、上部はやや丸くなっている。外面の中央部や上方に『火安』または『火守』と読める文字が薬研彫りに刻まれており、文字の大きさは火が横7cm、縦7.5cmで、その下の安は横7cm、縦8cmを測る。文字の周辺は他の部分に比べて表面仕上げがない（平坦）であり、前工程で文字を彫るのを考慮していた」（同上、高木正文「熊本市古城横穴墓群の調査」『考古学ジャーナル』223）。これによると、文字の刻銘じたいも、第39号墓築造とはほぼ同時であったと推測でき、被葬者の埋葬直後にノミで彫りこまれたものとみて、あやまりなかろう。

銘文が7世紀末における文字資料であるとすると、わずかに2字だとはいえ、肥後国内では、現玉名郡菊水町瀬川出土（寛政6年）の日置□公銅板墓誌（なお後述）、同町江田の船山古墳出土（明治6年）の鉄刀銀象嵌銘、下益城郡豊野村下郷淨名寺の4碑（延暦9年・延暦20年・天長3年・康平7年）につぐ金石文の発見となる。とりわけ文献史料の乏しい7世紀以前の第一

\* 山口大学人文学部教授

等史料として、本閉塞石銘文は学術的にことのほか珍重されなくてはならない。今次の発掘調査の新知見は、単に肥後地域の古代史を解明するためだけでなく、ひろく古代わが国における政治・社会の実態究明のうえで、大いに注目し、慎重に検討されるべき貴重な成果だといってよい。

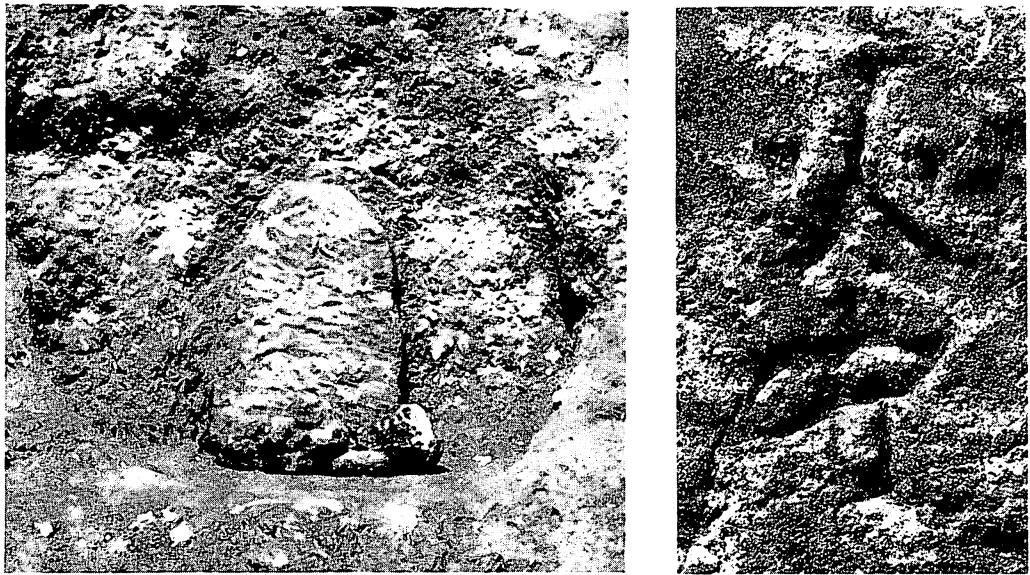
1

第39号墓閉塞石の2文字のうち、第1字は火、第2字は安または守と読め、安なら火安、守なら火守となる。凝灰岩にたいする約1300年前の陰刻として、ノミ痕の残りが少し不明確な箇所があり、第1字は別として、第2字目が安か守か、一方とだけ読めて他方とは読めないというほど明確な字画を伝えているわけではない。以下、残されたやげん彫りの銘文そのものにたいする検討と、文字を刻んだ7、8世紀前後の金石文字、あるいは墨書文字の形状と対比しながら、安・守のいずれが、より適当な読みなのかについての吟味を行い、それによって、原字が何であったかを詮索することとした。

当該閉塞石は実見したところによると（昭和59年6月9日、収蔵先の熊本県教育委員会文化課分室において、調査の機会を与えられた）、第2字の上半部は火、下半部は女であるように見える。つまり安の字である。ノミ痕の幅・深さやノミ圧は、むろん字の部分によってことなり、一様とはいえないが、特段に留意したいのは、女字の第1画と第2画の末端部分が相互に交錯しあい、女の字形としてはなはだ整っているように観察できる点である。かかる字形は、問題の字が安であるか守であるかを識別するための基本的な分岐点となるものである。女字部分の第1画はなかほどで屈折したのち、その末尾の部分が第2画末を突き抜け、他方、第2画が全体的にゆるやかに曲がりながら、第1画の彫りと交差する字形を残していることは、一見明瞭のようである。これに反し、守字だとするばあい、寸の字画の第2画と第3画がそれぞれ終りの部分で交わり、両者がたがいに突きとおることは、まずありえないとすべきであろう。この感触は、第2字がもともと守ではなく、安であったとするうえでの、すこぶる有力な決め手といわなくてはならない。

当該文字をひとまず安とみて、さらに当時の文字資料にあらわれた安字の字形と比較し、同時代の字形の特徴的なあり方から、上の判読が裏づけられるが、あるいはそれが必ずしも孤立的な字形でないかを、次に点検することにしよう。

安の字は、現在伝存する金石文にあたってみると、多くのばあい、火と女、すなわち安と5画で書く用法となっているのがわかる。白雉5年（？）の积迦像光背（東京国立博物館）、天智7年以後とみられる船首王後墓誌、朱鳥元年（？）の長谷寺法華説相図、慶雲2年（？）の宇治宿祢墓誌、養老7年の太朝臣安麻呂墓誌、神亀6年の小治田朝臣麻呂墓誌などにみえる安は、その具体的な例証となる。また藤原宮出土木簡のなかに、安と書くばあいがある（たとえば、



古城39号横穴墓の閉塞石と文字

178・450・787号など)。朝鮮では、百濟武寧王誌石や新羅真興王巡狩碑などに、同じ書法が見出せる。

もともと書法は、金石や木紙などの素材によって多少変わることがないとはいえない。ただ古城横穴墓39号は凝灰岩の表面に刻してあり、上にあげた金石の素材と基本的に共通し、そのうえ素材の如何をこえて、書風・筆風の時代的な傾向は、安易に無視されがたいところである。そればかりでなく、第2字目を宀と女とすると、その女の字形は、上に指摘したとおり第1画と第2画のおのの後半部でい交わることが不可欠であるのに加えて、さらに第1画の前半の筆・ノミの角度が、実例をあげるまでもなく、ことごとく右上から左下に向う傾きですすみ、例外をみない点を見落としてはならない。これは、女でつくられる文字、たとえば倭・委・汝・妻・妾などについても、同じことがいえる。問題の2文字は、上部が丸みをおびた長方形の閉塞石の中央上寄りに、左右平衡をとって刻されている。2字目の女字とみなしている第1画は、上から下方にとおって、二字全体がかすかに右下りの字配りとも察せられ、そうならむしろ左上から右下に傾く筆勢で彫られているとさえ、いえなくもない。してみると、女の第1画は、当代の字形が右上方から左下方へと運ぶのとはことなるノミ使いを残したと判定せざるをえない。

女の第2画が末端部で左下方に曲げながらはねた形で止めているようにみえる点は、すでに述べた。ただしそれにしても、第2画の全体がゆるやかにカーブしているのでなく、その大半は、じつは直線形をなし、第1画とクロスする箇所から、はじめて左下方に流れるようにはね

たにすぎないというのが、たどりうる的確なノミ痕であろう。第2画のこのようなノミ使いもまた、同時代の女字のそれとは、同調しないようにおもわれる。女の第2画とみるためには、第1字目の火の字の第3画のごとき形をとるのが通例なのである。

ここで、いま一度閉塞石の表面を入念に観察すると、すでに指摘されているとおり、表面は平坦に面取りされている。その作業のさいノミはおそらく右下から左上の方向にあてた痕跡がいたるところに残っている。女字の第1画が第2画に抜け出た部分と第2画のはねた部分は、女字を形づくる部分のノミの痕ではなく、もともと刻字する前の表面加工にともなう、そのようなノミ痕ではないかと看取される。面取りのキズか、刻字部分なのか、また風化によるくぼみか、判別を要するが、女字相当の第2画のはねた部分の付近の刻みは、面取りのノミ痕のように見分けることが可能であるとおもう。そして女字の第2画は、左下へはねたのではなく、むしろ左上方にはね上げた形となっていたのではないか。左上にはねた筆法とするならば、その部分は、深く鋭い彫り方を示していることとなる。あたかも「の第3画の終りの部分の深い彫り、はねた止めの筆法と女相当の第2画の終りのノミの勢いと形は、同工異曲の趣き」といってよい。もし女部分の第2画を上のように見届けることができるとするなら、女の第1画の前半の終りの部分のノミ痕が浅く、後半部相当のそれとつながらないようにみえてくる点も、このさいあらためて比較されてしかるべきである。

当の文字銘を火安と読むには、安字をめぐり、以上のようないくつかの難点をぬぐうことができないとしなくてはならない。もちろん、第2字を安と読みうる可能性は少なからず残されており、その範囲内で問題点をあげるとすれば、少なくともこのようないくつかの観点からの検討を避けるわけにはいかないとおもうのである。

では閉塞石の刻銘を火守とみたら、どうであろうか。いうまでもなく守字の寸が問題であり、寸のはか寺・等・侍・府・符などの字形が参照される。これまで、もっぱら安の字形・書法を検討してきたが、そのことは半面、第2字が守ではないかという、もう一つの推測をおのづから導き出してきたようにおもわれる。ところが守字としたばあい、同時代の字形は寸の第3画が第1画と第2画の間におさまるように点されている形が圧倒的に多いのである。寸を部分とするさきの諸字でも、まったく同一の字形を示し、いちいち例をあげる必要もなかろう。これに反し、閉塞石銘の守字は、安字讀解の適否を吟味したさい述べたとおり、最終画の点が、一とはなれてその下方に打ってあるのではなく、一を上から下に突き切る形をとっている。

ただ閉塞石の第2字の場合、守相当字の形がやや特異であるにしても、まったく類例が知られないわけではない。管見の限りにおいて、たとえば長谷寺法華説相図（朱鳥元年ヵ）に寺とあり、伊福吉部徳足比売骨蔵器（和銅3年）に同じく寺、法隆寺釈迦如来造像記（7世紀後半ヵ）に侍、太朝臣安麻呂墓誌（養老7年）に寺と刻する。また御野国戸籍に守、藤原宮跡土器墨書（SD1901A出土）は寺、さらに平城宮跡出土木簡（421号）に守などとある。第39号

墓の造営期、つまりその閉塞石に2文字を刻した時期前後の金石文のなかに、寸字の第3画が第1画の一に交わり、しかもやや長い線形に打つばあいさえ、じつはけっして少なくないことがわかる。したがって全般的にみると寸形が多いのは否めないにしても、他方寸形もそれほど例外的な字形ではなかったとしてよいであろう。

そうであるとすると、第2字目の当該文字は、第5画の筆法といい、また第6画の形状といい、これを守だとするうえでの支障は、とりたてて存しないとみるべきである。当の文字は、こうして火と守であり、火にかかわる人もしくは集団の一定の所為を意味する名辞であったのではないか、との解釈に到達できる。「火守」は、さきの「火安」とともに、あるいは「火安」案にたいし、より蓋然性をもつ釈文となるのではなかろうか。当面、二者択一的な読法にたいし、あくまでそれを避ける慎重さを失ってはならないが、「火安」の読みに加えて、ここで「火守」の読みをとくに提示したいと考える。

## 2

第39号墓の閉塞石に刻んだ2字を火守もしくは火安と読んだばあい、この2字がいったいどのような語義・内容を含蓄しているのであるかについて、次に検討する。

まず火安のばあい、それをめぐる特定の実体あるいはイメージは、現在まったく不明確というほかない。私の調査の範囲で、古代名辞としての火安は、文献上他に所見がないようである。火安の内容を究明する手だては、目下のところないというのが現状であろう。

これに反し、火守と読んだとき、火を守る人、あるいはその集団、すなわち火にかかわるある種の身分なり職分なりにつながる人々が、ただちに想起されてくる。火守の守が一種の職能・職掌に密接に関連することは、現に火守そのものではないが、以下のように某守の類例が文献上いくつも見出せることから、容易にたしかめられる。すなわち山守（部）（日本書紀・和名抄）・水守（和名抄）・川守（同）・津守（書紀・和名抄）・道守（書紀・御野国戸籍）・掃守（部）（書紀・出雲国賑給帳）・守部（御野国戸籍）などの某部である。これらはすでにウジ・部名として伝えられるばあいであり、あるいは地名化したケースであるが、いずれにしてもウジ名・地名に転化する前代は、一つの職務・職掌上の称呼であった。

じじつ、掃（守）部は大蔵省掃部司・宮省内掃部司の下級官人、伴部として存続し、津守・道守や烽守は、天平6年出雲国計会帳にいわば官職的な身分呼称として機能したことを示している。さらに殿守は宮内省主殿寮伴部の殿部につながり、平城宮木簡には一つの職称として殿守がみえる（概報9-4）。また藤原宮木簡によると、宮守官（466号）があって、藤原宮時代、某守が明らかに官職名であったことを証している。他に中央政府の各省には物守を配したようである（大日本古文書2-397・429他）。民部省にはこの省物守以外に、戸籍守・鳥守・瓦屋守が配属されていた（同上）。難波宮にも物守（同2-429・8-543）、造石山寺所には

庄守（同5-21、15-391他）が所属した。また地方官司で、大宰府に物守（大宰府跡出土木簡53号）、守客館・守辰・守駅館（延喜民部式下）が知られる。平安初期、国府勤務の徭丁に、正倉官舎院守（三代格、弘仁13年閏9月20日官符）がみえる。

時代をさかのぼると、陵守・県守（書紀）があり、陵守の後身が、治部省諸陵司の陵戸・陵守・墓守、ひいては延喜諸陵式の陵戸・守戸に継承されたのであろう。時代的な隔たりはいっそう大きいが、3世紀、邪馬台国統属下の奴・対馬などの諸国の副官が卑奴母離と称したことは、魏志の記述から周知のとおりである。後代、筑前国糟屋郡や日向国諸県郡に夷守駅、越後国頸城郡に夷守郷が存在した。

このような諸例からみて、某守の呼称は、列島においてはやくから朝廷なり国家機構なり、あるいは特定組織のなかでの職掌、とくにある物体・地画・状態を守ること、護視・看守・保守・守衛にかかわる職業身分を指したことがうかがえる。もし閉塞石の銘文を火守と読んでよいとするなら、火守もまた、火の看守ないし保守にあたる職掌ではないかとする推定は、すこぶる当をえたものといえよう。火守の性格・地位を、以上にあげた諸「一守」ほどと同列に理解したいと、私はおもうのである。

それでは、火守は職称そのものなのか、あるいはすでに多くの事例をみたように職称から転化したウジ名なのであろうか。発掘担当者の判断によると、銘文は、第39号墓造営時の7世紀末に刻まれたという。7世紀末期というのが、80年代・90年代あたりに相当するとすると、すでに良民は原則的にウジ名を称していた。この時期に先立つ庚午年籍作成にあたって、良賤制による国家的身分秩序の形成と個別人身的支配の強化をはかり、良民にたいする一斉付姓（ウジ）を実現したとみられるからである（八木「律令制民衆支配の成立過程」岸俊男教授退官記念会『日本政治社会史研究』上）。ところで火守をウジ名と解そうとすれば、カバネや名も書かれたにちがいない。そうでなければ、被葬者の名を伝えることができず、扉石に刻名する理由があいまいとなる。人名の略称や略記ならともかく、このばあい、やはり職名のウジ化した呼称ではなく、7世紀末、つまり当の人物の死没時における職掌名を記録する意図があったとするのが穩当であろう。

しかし、職名的な呼称だとしても、それが、形成過程における律令国家、またはその地方組織にかかわる官職名か、それとも地域における有力首長層配下の一一種の役割分担を意味するかは、あらためて考えなくてはならない。そのためには、銘文が発見された火国における当代の政治的・社会的状況を、ここでかえりみる必要がある。

肥後国はいうまでもなく、もと肥前国とあわせて肥国といい、そのことは肥前国・肥後国風土記の冒頭に記述するところである。しかも肥国は火国であった。火国の地名由来は、日本書紀、景行18年5月条に、筑紫巡狩の途上、葦北から発船し岸に向ったところ、はるかに火の光がみえ、それをを目指して着岸した地点が八代県豊村であったといい、誰人が火ぞときいて、「人

の火に非ざるを知り、故に其の国を名づけて火国と曰う」とある。ほぼ同一の地名説話は、肥前国・肥後国風土記にもみえ、「八代郡火邑なり…此の燎火、是れ人火に非ず、所以に火国と号す」という。また両風土記によると、崇神天皇が八代郡白髮山に止宿したとき、「火、自然にして燎え、稍々降下して、此の山に就きて燎ゆ…天皇勅して、未だ曾て聞くところにあらず、火下る国を火国と謂うべし」といったとある。肥後地方には八代海の不知火や阿蘇の噴火もあり、人火にあらず、いまだ聞かざる奇怪、神秘な火光を国名の起源にしたと伝える。

さまざまな某守のなかで、他にまったく所伝のない火守名が肥後国飽田郡地方の一角から発見されたのは、ほかでもなくこの火国の火光と結びつけて、はじめて事実に近づきうるのではないかろうか。肥後の火守は、神秘的な火の祭祀・信仰にかかわる、その火を保守する職務にたずさわる身分であったのではないかとおもう。7世紀末から8世紀初期にかけて編修された日本書紀は、現実に火地方で火守が職務を担当した時代背景のもとで、火国の地名説話を景行紀に託し、書きしるしたということができる。

ところが、そういうと、肥後地方に分布した日置部や日奉部との異同が問題となろう。日置部は、和名抄に玉名郡日置郷がみえ、また上述の玉名郡菊水町瀬川出土の日置□公墓誌（□は印・郡・鄭などをあてるが、小森田義広の釈文——奈良国立文化財研究所飛鳥資料館編『日本古代の墓誌』所引——のように、部が当たっているとおもう。ただそれでは氏姓のみで名を欠くことになるが、松本健郎「日置氏墳墓考」鏡山猛先生古稀記念『古文化論叢』の第2図によると、銅板の周縁部は破損、腐蝕しているので、「日置部公」の下に名が記してあったかも知れない。そのばあい「公」の下に少し空白があるのが気にかかる）がある。また菊池川流域には日置の地名が現存するという。一方、日奉部は葦北郡内に伝わる（続日本紀、靈龜元年10月条）。しかしこれらの部は、どちらもヤマト政権の部であって、しかも各地の部民がただちに部の伴造と同じ職掌を分担したというのではなく、伴造の職務遂行のための貢納民にすぎない事實を、このさい見のがしてはならない。加えて両者とも、大王の日神信仰に関係した部であった（上田正昭「祭官の成立」『日本古代国家論究』、岡田精司「日奉部と神祇官先行官司」『古代王權の祭祀と神話』）。日置・日奉と火守とでは、さらに少なくとも日と火、甲類のヒと乙類のヒの差異がある。ただ日置は、令制下、宮内省主殿寮の殿部の負名氏の一つとして、天皇御所の燈燭にたずさわったが、これは「やがて日置から火置へという混同がおこった」（上田、前掲）ためであろう。

それでは、先の課題にたちもどって、火守は、いったい何によって組織された職種であったのかを、あらためてとりあげよう。まず律令国家における某守の員数をみると、大殿守4人（平城宮出土木簡概報9-4）、諸国国府所属の正倉官舎院守は院別12人、大宰府の守辰6人などが知られる。しかも名称からいって、下級官人とするより、一般公民層を編成した特業身分だとみなしてよい。じじつ正倉官舎院守は徭丁であり、民部省管下の物守・戸籍守その他は、

仕丁出身であった。中央官司のばあい、某守があるいは下級官人たる雜任であったこともあるが、天平6年出雲国から京進した公文中に烽守帳・道守帳・津守帳が兵士歴名簿・駅馬帳・官器仗帳などと一括されているのによると、某守の基本的な身分は公民層であったとみてよい。あたかも里長が、律令制地方統治機構の末端部分に組織されながら、下級官人ではなく、里内の「白丁の清正にして強幹なる者」をとて、戸口の検査や賦役の催駆という行政責任の一端を負わされたのと、軌を一にする。

某守は、やはり律令国家の中央官司や地方機関の大宰府・国府に所属し、特定領域の保守業務に従事した身分階層の呼称であったであろう。したがって古城横穴墓の銘文は、古代某守制といふいわば官職分業組織、あるいは職業身分制を解明するための貴重な新史料を提供することになったといえる。肥後國託麻郡津守郷の地名となった津守、さらには平城宮木簡の「『殿守二升』□□□ 英田□国□肥後國合志郡鳥鳴□余々」(上掲) のばあいの殿守についても、ひとしく國家組織における職務分担と関連させて、解釈していくのが適切であるとおもう。

しかし、肥後國飽田郡内の火守の問題は、その存在を示す時期が律令国家成立期の7世紀末であるだけに、ただ単に上述のごとき律令国家の特業集団といふ一般的な理解の枠内にとどまるべきではないであろう。火守にかかるヤマト政権の職業身分、たとえば品部としての火守部は、現在史料上確認することはできない。火守がヤマト政権の各地域服属過程で設定された職業集団であったとするのは、根拠のある推測ではないのである。そうではなく、この火守が非官的な職業分化の1部門をなし、しかも7世紀末の呼称だったことからいうと、その前身母体が、すでに火地方において、火をめぐる地域首長層支配下の祭祀に直結する職制として成立したとみると、必ずしも行きすぎではないであろう。出雲国神門郡には、火守社(出雲国風土記)が奉祀されていた。かかる首長制下の地域的土着的な職制を、律令国家は再編、整備し、火守として地方行政体系の末端に、その他の某守とあわせ組織しようとしたのではなかったか。古城第39号墓の被葬者は、ちょうど律令国家が確立する転換期において、この集団墓に埋葬された数十人の、あるいは追葬分をふくめ100人をこえる人々のなかで、ただ一人、しかも、もっとも新しい年代に火守として選ばれ、火地方の火を保守する職務にあづかったのであろう。そしてその一代の所業は、死後墳墓の扉石に刻銘され、やがて墳墓が発掘されることによって、はからずもはるか後代まで伝えられることとなったのである。

なお一言すると、火守はヒモリと訓むのが、当時もっともありうべき呼び名であったとおもわれる。

〈付 記〉 本銘文調査の機会をつくられ、教示を与えられた熊本県教育委員会文化課の各位と肥後考古学会三島格会長に、あらためて謝意を表する。

## 横穴に表現された文字の用例

乙益重隆\*

わが国の古墳時代において、日本人が日本人を対象に、文字をもって意志を表明した例は少くない。もちろんそれらの中には渡来人によって記されたものがあるかもしれないが、とにかく中国において成立した文字を古墳時代の当時にあって、読み書きできただけでなく、これを日本流に表現できる者がいたことだけは確実である。すでに古くから知られているものには和歌山県橋本市垂井隅田八幡宮の銘文ある画文帶神獸鏡や、熊本県玉名郡菊水町江田船山古墳出土の銀象嵌銘文ある大刀などがあり、近くは埼玉県行田市埼玉稻荷山古墳出土の金象嵌銘文ある剣をはじめ、島根県松江市大草町岡田山第1号古墳出土の金象嵌銘ある大刀、兵庫県養父郡八鹿町小山箕谷第2号古墳出土の銅象嵌銘ある大刀などがある。それらはこんにち文献史学の空白を埋める貴重な資料として重視される。

しかるにこうした族長級の高塚古墳に副葬された遺物のばあいとちがって、年代も下降するが身分階層もやや下るとみられる横穴に、文字を表現した例は意外に少ない。まず第Ⅰの例は本報告書にのべられている熊本市古城横穴群のうち第39号の扉石正面に陰刻された「火守」または「火安」ともみえる用例であろう。これについてはすでに山口大学教授八木充氏の厳密な考証があるので、あえてくりかえしのべるまでもない。<sup>(1)</sup>おそらくその読み方は八木氏の言われるよう「火安」とみるよりも「火守」と解するにふさわしく、氏の説については全面的に支持したい。文字は扉石のほぼ中央のやや上縁寄りに陰刻され、おそらく横穴の入口に表示した表札のような意味をもつてはなかろうか。副葬品が残っていないので年代の決めてを欠くが、内部構造の類例からみて7世紀の後葉頃の所産と考えられる。

そこで古城横穴群第39号のように、横穴の墓室内部その他に何かの形で文字を表現した例を全国的に求めると次の諸例があげられる。それらの中には後世の偽刻となし、疑問視されるものもあるが、ここでは報告書の記載にもとづき、一応そのままとりあげることにした。

第2の例は静岡県田方郡伊豆長岡町大字北江間字男坂、北江間横穴群のうち大北横穴群50基の中から発見された第24号横穴の石櫃（Ⅱ-1号）があげられる。<sup>(2)</sup>この横穴群は昭和52年12月から同55年8月まで、4次にわたる調査が行われた。横穴は幾つかの集団をもって掘穿され、それらの年代は7世紀代に始まり8世紀前半に栄え、墓前祭祀のごときは9世紀代まで継続しているという。それらの在り方はきわめて変化に富み、大勢は普通一般の横穴と大差ないが、中には墓室内部に刳抜式石棺を納めたものや、火葬骨の容器として特別につくられた石櫃を納めるもの、或いは火葬骨を直接納めたとみられる超小形の横穴などがある。また普通の横穴にも

\*国学院大学文学部教授

墓室の床面に12cm×13cm、深さ12cm位の角孔や円孔を穿つものがあり、それらの中にも火葬骨を納めるものがあったという。しかもこれらの横穴群をめぐって階段や通路が設けられ、おののおの単位集団を示すかのようであった。

中でも石櫃は全部で23個あり、それらは原則として墓室内に1個～2・3個納められ、中には墓室前庭から出土したものもあり、おそらくそれらは攪乱によるものであろう。

文字を有するⅡ-1号石櫃は第24号墓室より出土し、蓋を失っていた。この横穴は墓室の奥行2.43m、開口部幅0.95m、中央部の幅0.98m、奥壁の幅1.14m、天井までの高さ1.14mを有する。墓前域は約1.8m×約1.6mにわたり、その中央に幅40～70cm・深さ15～20cmの墓道を設ける。石櫃は縦52.1cm・横50.6cm、の方形を呈し、高さ37cmを有する。上面に縦24.8cm・横23.4cm・深さ19.0cmの方形の彫り込みを設け、その上縁は高さ5cm・幅6.5cmの石蓋を受けるための縁取りがなされている。石櫃内とその周辺に骨の細片があり、火葬骨の容器であったことが知られる。正面中央に「若舎人」の3字がのびやかな書体で陰刻されている。墓室内より甕の破片、墓前より長頸壺の破片、墓室の敷石の部分から坏蓋の口縁部破片が出土し、それは8世紀代に入ることが明らかであるといふ。

そこで問題になるのは「若舎人」という人物名であろう。いうまでもなく舎人とねりといふのは朝廷に仕えて雑役に服する者の職名である。故にこの場合は、伊豆長岡町付近から都に上り、朝廷に仕えた若い舎人の骨を石櫃に納めたと考えられないこともない。そうだとするとこの石櫃の文字は墓の主の正規の名を表明したものではな



(上段) 静岡県大北横穴群第24号出土石櫃の文字  
(伊豆長岡町教育委員会『大北横穴群』より。)  
(下段) 千葉県絹根方横穴群第2号の文字。(平野元三郎・滝口宏「大同元年を銘横穴」古代第49・50号より。)

く、通称名、或は渾名をあらわしたことになろう。それは墓の蔵骨器に刻んだとしてはふさわしくない。それよりもこの場合は蔵骨器の主の、氏の名をあらわしたのではなかろうか。もしそうだとすると『万葉集』卷20に常陸国茨城郡の出身で、若舎人部廣足という人物の名がみえる。この人物は防人に召されるにあたり、次のような歌をよんでいる。

(4363) 難波津に御船下すゑ 八十楫貫き今は漕ぎぬと妹に告げこそ

(4364) 防人に発たむ騒きに 家の妹が業るべきことを言はず来ぬかも

この2首の歌は舎人と直接関係はないが、よんだ人物が若舎人部氏であることに注目される。おそらくそれは、職名から部の氏名に転じたものであろう。したがって大北横穴の蔵骨用石櫃に表現された「若舎人」は、氏名ではないかと考えるものである。

第3の例には千葉県富津市大字絹（元、君津郡大貫町絹）絹根方横穴群のうち第1号・第10号があげられる。<sup>④</sup>これらの横穴群は房総半島の南部、東京湾にのぞむ低丘陵地帯を縫って西流する岩瀬川の狭い渓谷にあり、比高約30mの丘陵南斜面に10基の横穴が二段にならぶ。それらはほぼ同形式で、玄室の平面観が方形に近く、墓室の床面は羨道部床面よりも1m以上段上りにつくられ、天井は穹隆状をなす。羨道は天井が高く幅広く長い。一部の横穴の前庭部から土師器の細片を出土したというが実態が明らかでない。

うち第1号横穴は床面の総奥行5.20m・羨道部長さ3m、幅1.23~1.50m、天井までの高さ2.06mを有する。玄室は長さ2.05m・幅2.21m・天井までの高さ1.40m・羨道床と玄室床の差は1.35mを有し副葬品の有無は明らかでない。羨道部の左側壁（西側）に肉太い彫りで「許世」の2字があり、縦35cm・横24cm内に収まり、調査者によると「到底後世の落書のようなものと考えることができない。」<sup>⑤</sup>といふ。この字の右隣（玄室側）に「大同元年」の4文字が彫られ「この方は書体もやや乱れ、刻みもやや明確を欠き、字の配置もやや曲がっている。」おそらくそれは「許世」の2字が彫られた後に年号が加えられたものという。それを物語るかのように、右側壁（東側）にも「大同□年」「古世」という刻陰があり、その他にも細い線で人物の顔かと思われる不鮮明な絵らしいものがみえるという。

第10号横穴は総奥行5.43m、羨道長さ3.15m、幅1.15~1.40m、天井までの高さ1.40mを有する。玄室の長さ2.05m、幅2.26m、天井までの高さ1.40m、羨道床面から玄室床面までの高さ1.30mを有し副葬品はない。羨道右側壁（東側）に肉太く「木」の1字を彫る。

調査者はこれらの文字について、第1号の「許世」は、絹の南3キロにあたる「古船山」<sup>⑥</sup>の地名との共通性から、安房・上総・下総地方に蟠居した古氏族「巨勢」氏に比定されている。また「木」については、これも同地方に蟠居した「紀氏」に比定し、上段の横穴群は巨勢氏一族のもの、下段の横穴群は紀氏一族のものとみなしておられる。しかるにこれらの文字については、たとえ年号の通り大同元年（806）まで横穴墓が存続した可能性はあるとしても、文字そのものについて疑うむきもあるが、千葉県では指定史跡に指定している。

尚、平野元三郎氏によると南房州では各地に横穴群があり、中でも稻原横穴群中にも文字を有するものがあるという。奥壁に「人王・六十・天神・天王七代」と陰刻しているが剥落が著しく明確を欠き、意味するところが不明であるという。<sup>(6)</sup> その他に舟かと思われるものもあるらしい。おそらくこれらのうち文字をあらわしたものは後世のものではなかろうか。

次に紹介するのは東北新幹線開設工事に伴う関連遺跡の調査にさいして発見された、福島県須賀川市大字滑川字十貫地、治部池横穴群のうち第2号墓の一例である。この横穴群は昭和48年10月1日より、同年12月26日までの間に発掘調査が行われた。その総数100基以上に上るが、実際に発掘されたのは18基であった。現地は東北本線安積永盛駅より南へ約1.8kmにあたり、周辺一帯丘陵をめぐって複雑に谷が入組んでいる。治部池横穴群は北に笛原川をひかえ、南に滑川が流れるその中間にはさまれた丘陵の南斜面に位し、標高250mを有する。周辺一帯には御代田古墳群や四十壇古墳群・才合地山横穴群・梅田横穴群・神成横穴群などが知られ、福島県下では有力な古墳群地帯の一つにかぞえられる。

治部池横穴群のうち第2号墓は、平面観が隅丸方形を呈し、奥行2.1m、幅2.1m、天井までの高さ1.25mを有し、天井は寄棟形<sup>(8)</sup>である。天井中央には直径20cmの円形の凹みがあり、天井と壁には屋根の軒回りを示す幅10cmの線刻がめぐる。墓室の西壁羨門寄りに「山千」の2字を太い線で陰刻している。羨門と前庭部との境は間仕切りのため30cm位の段差がつくられ、この部分には石積で閉塞した形跡があったという。前庭部の2層目から土師器坏片が5片出土し、他に前庭部B区5層からも土師器坏が出土している。それらの時期は明確に示されていないが、横穴群そのものが須恵器や土師器の示す形態から、7世紀後半から8世紀にわたる頃に比定されている。

墓室内の羨門寄りに彫られた「山千」の2字は、線の刻み込みが深く後世の落書きや追刻とは考えられない。「山」の字は両側の縦棒が横一棒よりも下につき抜け山形をなす。このような書体は後漢末以後の隸書体にみる特色といわれ、一般にあまり見かけるものではない。また「千」の字は上の1画が水平に近く表現され、あたかも千の字にみえる。しかし上の1画はやや左に傾き、やはり千とみるべきであろう。「山千」の2字は人名をあらわすものか、また地名その他を意味するものか明らかでないが、他の用例から考えると氏姓をあらわした可能性がある。しかし当地方では「山千」に相当する氏姓には思い当るものがない。

以上、ここには熊本市古城横穴第39号墓の扉石に刻まれた「火守」に関連して、静岡県大北横穴群第24号墓に伴った石櫃の「若舎人」の銘。千葉県絹根方横穴群のうち第1号墓の「許世」「大同元年」「大同□年」「古世」および第10号墓の「木」の例。更に福島県治部池横穴群第2号墓の「山千」の5箇所の例をあげたが、それらはたまたま管見に入ったものだけである。おそらく更に追究すると他にも多くの例が検出されるであろう。現に文字らしきもののみえる横穴の例は、手元資料の中にも数例あるが、あまりにも疑わしいのであえて取上げなかった。

## 註

- 1、本書 147頁参照
- 2、齋藤 忠他『大北横穴群』伊豆長岡町教育委員会、1981年3月。
- 3、桜井 満訳注『現代語訳対照萬葉集』中巻、旺文社刊、1974年
- 4、平野元三郎・滝口宏「大同元年在銘横穴」『古代』第49・50号1967年。
- 5、同書 100頁
- 6、同書 106頁
- 7、「東北新幹線関連遺跡発掘調査報告」 I  
『福島県文化財調査報告書』第80集 1980年3月
- 8、報告書には切妻とあるが実測図では寄棟形を呈するので、ここでは寄棟形とした。



## 馬の隨葬例について

乙益重隆\*

今回の古城横穴群の発掘調査にあたり、かって昭和33年12月より翌年3月にかけて断続的に調査した、第1号より第10号にわたる横穴群は、図面縮尺統一のため再度実測図を作成する必要を生じた。たまたま作業を進めて行くうちに第2号横穴内部の左屍床から1頭分の馬の歯が検出された。それは明らかに前回調査時に見落したもので、おそらく隨葬されたものであろう。

このような古墳や横穴に馬を隨葬した例については、すでに森浩一氏<sup>(1)</sup>の精緻な論文があり、今更贅言を要しないが、その後の出土例を調べると意外に多いので、改めてとりあげることにした。これらを大別すると古墳の周溝内や、周溝の近くに土壙を掘り、その中に1頭分または体軀の一部を埋納したものと、古墳石室内部や横穴の内部に、体軀の一部を切取って納めたもののはかに、馬だけの単独埋葬がある。まず熊本県内の出土例から検討を進めたい。

### 熊本県玉名市大字玉名通稱宮山馬出古墳<sup>(2)</sup>

古墳は玉名平野の西北部、字永安寺の永安寺東古墳（装飾古墳）から東に約250mにあたる、宮山台地上にあった円墳で、内部は横穴式石室であった。石室奥に石屋形があり、その奥壁と左右内壁および正面両袖石に三角形連続文や円文を線刻していた。石屋形の前面には幅広い通路をはさんで2区の屍床が設けられ、床は石敷であった。古く盜掘をうけ、中央通路を中心に耳環1対をはじめ刀子、鉄鏃、轡、勾玉、切子玉、ガラス小玉等が出土し、おそらく6世紀頃の所産であろう。床面にはこれらの他に馬の頭骨1頭分が検出されている。

### 同県熊本市古城町、県立第一高等学校敷地内、古城横穴群第2号

本例についてはすでに「IV 横穴墓と遺物」の項にのべた通りである。

### 同県同市黒髪町宇留毛浦山、つつじヶ丘療養所内<sup>(3)</sup>

上野辰男氏によると昭和42年3月、療養所の敷地拡張工事にさいして数基の横穴が破壊され、うち1基の内部から人骨とともに馬の脚骨1本が出土したという。同横穴の一つから須恵器も出土したといわれ、おそらく周辺の宇留毛横穴群や浦山横穴群の一連をなすものであろう。

### 同県下益城郡城南町大字塚原字丸山、塚原古墳群のうち丸山第26号<sup>(4)</sup>

円墳の周溝内より土師器・須恵器のほかに馬歯と轡金具が出土している。馬歯と轡は周溝の西側に設けられた陸橋の南溝内より検出され、馬の頭部も北西に、鼻部を南西に、顎底を上にむけた状態に置かれていた。おそらく本来轡金具を装着した頭部を切断し、周溝内に埋められたものという。

### 同県同郡同町大字同字同、塚原古墳群のうち丸山第27号墳<sup>(5)</sup>

\* 国学院大学文学部教授

## 馬齒・馬骨出土古墳一覧

古墳名	所在地	墳形	出土地点	種別
馬出古墳	熊本県玉名市玉名 通稱宮山	円墳	横穴式石室内	馬頭骨
古城 2 号横穴	" 熊本市古城町	横穴墓	玄室内左屍床	馬齒
つづじヶ丘横穴群	" " 黒髪町 宇留毛・浦山	"	玄室?	脚骨
丸山26号墳	" " "	円墳	"	"
	" "			
丸山27号墳	" " "	"	"	"
	" "			
塚原古墳群 39号方形周溝墓	" 下益城郡城南 町塚原字丸山	方形周溝墓	周溝	馬齒
上の原 1 号墳	" " " " 字上の原	"	" (1 区)	"
上の原 6 号墳	" " " " "	"	周溝内土壙 (4 区)	"
上の原12号墳	" " " " "	"	" " (1・4 区)	"
長塚古墳	" 上益城郡御船町 久保	前方後円墳	" " (2 基)	"
小田良古墳	" 宇土郡三角町 中村字小田良	円墳	横穴式石室の 屍床	馬骨
六野原地下式横穴	宮崎県東諸県郡国富町 六野原	地下式横穴?	玄室内部?	馬頭骨
小木原地下式横穴群	" えびの市小木原 宇久見迫～馬頭観音	土壙	地下式横穴 1 号と 7 号との 中間	馬頭骨
芦ヶ谷古墳	岡山県久米郡久米町 芦ヶ谷	円墳 (横穴式石室)	周溝内西端土 壙	馬骨と歯
岡第 1 号古墳	京都府竹野郡網野町 小浜	円墳	横穴式石室内 の仕切石上に 置く	馬前脇骨 1 本
四条駿町 D 古墳	大阪府四条駿市四条 駿町	?	横穴式石室内	馬歯
奈良井方形周溝墓	" " 奈良井	方形周溝墓	周溝内の土壙	馬 1 頭
清瀧古墳群第 2 号墳	" " 清瀧	円墳	西側周溝内	歯と骨(馬の 頭部だけを埋 めたらしい。)
丸山塚	福井県遠敷郡上中町 天徳寺丸山	円墳	横穴式石室内	馬骨
新井原12号墳の北、第 4 号土壙	長野県飯田市座光寺 新井原	帆立貝式前方 後円墳周辺	周溝の北方約 7 m の土壙内 に埋葬	馬 1 頭分
五輪堂第 4 土壙	" 更殖市屋代新 屋五輪堂遺跡	集落内	土壙	馬 1 頭分
長泉古墳	静岡県駿東郡長泉町	円墳か?	石棺付近	馬 1 頭分
小前田第 1 号墳	埼玉県大里郡花園村小 前田	円墳	横穴式石室内 ?	馬歯
尾井戸円形周溝墓	千葉県柏市尾井戸遺跡	円形周溝墓	周溝に囲まれ た墓域内土壙	馬の左肩胛骨
和田蝦夷穴古墳	福島県須賀川市和田		不明	馬歯・馬骨

この表は松本健郎氏の作成による、熊本県内における「馬歯・馬骨出土古墳一覧表」にもとづき、

伴出遺物		文献
馬に伴う遺物	その他の遺物	
	刀子・鉄鏃・轡・勾玉・切子玉・ガラス丸玉	松本雅明編『熊本の装飾古墳』1976
	金銅製帶金具	熊本県立第一高校『隈本古城史』1979
	人骨・須恵器	熊本市文化財調査報告書Ⅱ(北部地区) 1971
轡	金環・鉄鏃(主体部)、土師器・須恵器(周溝)	『塚原』熊本県文化財調査報告書16集、1975
鉸具	須恵器	"
		"
	土師器・須恵器・玉類・鉄器	『上の原』同調査報告書58集、1983
	土師器・須恵器・鉄器	"
(周溝1区轡) (周溝4区土師器)	土師器・須恵器・玉類・鉄器	"
	土師器・須恵器	『久保遺跡』同調査報告書18集、1975
	鉄劍・鉄刀・鉄矛・刀子・銅銅・棗玉・白玉・その他	『小田良古墳』三角町文化財調査報告書、1979
轡を装着		『六野原古墳』宮崎県史蹟名勝天然記念物調査報告、13輯 1944
轡金具を装着		田中茂、「えびの市小木原地下式横穴3号出土品について——地下式横穴と墳丘——」『宮崎県立総合博物館紀要』2. 1974
鞍・鐙軛・鉢上部金具	土師質亀甲形陶棺2基・須恵器66(甕・坏・蓋・高坏・平瓶)土師器(甕・坏)鉄鏃・刀子・ヨロイ・小札・鉸具・釘	久米開発事業に伴う埋蔵文化財調査団『久米開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』2「稼山遺跡群」Ⅱ、1975
	単鳳環頭大刀1、鏃26、刀子3、鑷子1、円棒1、勾玉3、管玉5、切子玉1、算盤玉1、丸玉1、有蓋高坏4、無蓋高坏2、有蓋浅鉢2、長頸壺1、蓋2、土師器皿1、鉄剣1、鉸具4、鉄環1、皮金具7、不明品2	『網野・岡の三古墳』京都府文化財調査報告書、22冊、1961
		直良信夫『日本および東アジア発見の馬齒馬骨』1970
	須恵器(甕・高坏・坏・聰・蓋)土師器(甕)土製模造品(人形・馬・ニワトリ・動物・玉)滑石製模造品(有孔円板)底板等の加工木片	『奈良井遺跡現地説明会』四條畷市教育委員会、1979
		『清瀧古墳群発掘調査概要』四條畷市教育委員会 1980
	画文帶神獸鏡1、三葉環頭大刀1、双竜環頭大刀1、水晶三輪玉1、玉類一括、聰、その他	斎藤優「若狭の十善森と丸山塚の調査顛末」古代文化4号、1958
轡(鏡板付)杏葉2、飾鋤12、責金具4		小林正春「新井原発見の飾られた馬」伊那4号、1980 大沢和夫「馬の墓と新井原12号墳の保存」『ごんが』、『下伊那市』Ⅱ、1955
土師器高坏4、同甕4		矢島宏雄「馬骨を出土した更埴市五輪堂遺跡」長野県考古学会誌31号、1978
馬具	石棺蓋上面より劍1、棺内に耳環1対、棺周辺には完形土器10数個出土	『考古学雑誌』8卷12号 1918 彙報
		直良信夫『前掲』
		古宮隆信他『尾井戸遺跡』1980
		『福島県史』第6巻 考古資料、1964

乙益が増補した。尚、紙面の都合上韓国の古墳に伴った馬の隨葬例は省略した。

丸山第26号墳の東に隣接した円墳で、周溝内の堆積土は上部より1層は黒色土、2層目は黄褐色土、3層目は黄褐色粘質土からなる。東側周溝の2層上面より馬歯と鉸具を出土し、陸橋の東側溝内では須恵器甕片を大量に出土したという。

#### 同県同都同町大字同字同塚原古墳群のうち第39号方形周溝墓<sup>(6)</sup>

この周溝墓は上部が削平攪乱をうけており、主体部は凝灰岩の石棺であったらしく、副葬品の有無は明らかでない。周溝の一部には陸橋があり、その東方にあたる溝内の、溝底より20cm浮いたあたりに馬の歯が出土している。上下頸骨ともに遺存がわるく、歯だけが残っていたという。出土地点の周溝は幅90cm深さ60cmを有し、たとえ上部の盛土が削平されたとしても、馬1頭分を埋めたにしては溝の規模があまりにも小さすぎ、四肢骨がなかったことからみて、おそらく首から上だけを切りはなして埋納したことが考えられるという。

#### 同県同都同町大字同字上の原、上の原古墳群のうち第1号墳・第6号墳・第12号墳・同墳<sup>(7) (8) (9) (10)</sup>

上の原古墳群では合計11基の円墳群のうち第1・第6・第12号墳の3基に、それぞれの封土を囲む周溝内から、馬の歯を出土している。中でも第6号墳と第12号墳では周溝底に土壙が掘られ、馬の歯はその中から出土したという。また第12号墳周溝の1区から検出された馬歯には、わずかに離れて轡が出土し、おそらくこれは馬頭に装着されたものが、軟部の腐蝕によって離脱したものとみられている。さらに同じ第12号墳の周溝4区に出土した馬歯には土師器（盤）を伴っており、おそらく隨葬時に埋納したのであろう。

#### 同県上益城郡御船町字久保、長塚古墳<sup>(11) (12)</sup>

現地は調査前に封土も主体部も失われたため実態が明らかでない。しかし残存していた周溝から復元すると全長46.2m、前方部幅23.1mの前方後円墳で、内部は横穴式石室であったらしい。周溝は幅6～8m、深さ80～100cmを有し、西南方向に陸橋を設け、溝内より馬歯を伴う二基の土壙が検出されている。うち第1号土壙は陸橋部に沿って堀られ、溝底をさらに深さ40～50cm、長さ192cm、幅85cmをもって橢円形に掘り込み、その壙底面より約50cm浮いたあたりに馬歯がまとまって出土したという。第2号壙は深さ160～220cm、長さ156cm、幅130cmを有し、馬歯はその壙底面より約130cm浮いたあたりから出土している。したがって発掘を担当した緒方勉・田中義和氏らは、馬を埋葬したことは明らかでも、土壙中に馬1頭が入れるような状態でないところから、馬の頭だけを埋納したことと考えられるとしている。

しかし上の原遺跡の発掘を担当した松本健郎氏によると、古代の馬は中型馬・小型馬（林田重幸氏によると体高120cm前後）が多いところから、長塚古墳の第1号土壙のごときは、体軀ごと埋めた可能性があるという。そして長塚第2号土壙や上の原第6号墳や同第12号墳周溝内土壙のばあいも、無理すれば1頭分埋納できないことはないとみなし、一般に四肢骨や頭骨は歯に比べて腐蝕が早いことを指摘しておられる。

#### 同県宇土郡三角町大字中村字小田良、小田良古墳<sup>(13)</sup>

円墳で内部は半地下式の石障系横穴式石室。すでに古く盗掘をうけていたが、石室内の周囲にめぐらした石障のうち、正面壁に軒と楯と同心円文を、左右壁と入口側壁に同心円文をそれぞれ浮彫にしており、国の史跡に指定されている。昭和53年の発掘調査にさいして、南屍床から刀子片や人骨片とともに馬の前肢骨やイス、イノシシなどの骨が出土している。それらは屍床の底面に礫を敷いたその直上から出土したことは事実であるが、屍床内部そのものが攪乱を受けていることから「古墳築造当時のものであるか、その後に混入したものであるのか断定できない」という。

#### 宮崎県東諸県郡国富町六野原古墳群のうち地下式横穴<sup>(14)</sup>

この古墳群は昭和17年、現地一帯に軍事施設ができるため、円墳13基・前方後円墳1基・地下式横穴27基以上が発掘改葬されたものである。うち地下式横穴第8号から北の方20mを隔てた地点に、深さ1.80mの土壙があり、「北西壁ヨリ50厘、東壁カラ20厘ノ處ニ轡ガアリ鏡板、銜、引手等物色シ得ラレ、ソレガ馬の顎骨ニ挾マレタ儘遺存シテキタ。」という。おそらく地下式横穴内に、装具をつけたままの馬の頭骨を隨葬したのであろう。

#### 京都府竹野郡網野町小浜、岡第1号墳<sup>(15)</sup>

砂丘内に築かれた片袖の入口を有する横穴式石室墳で、人骨5～6体分が埋葬されていた。副葬品には単鳳環頭大刀1、鎌26、刀子3、鑷子1、円棒1、勾玉3、管玉5、切子玉1、算盤玉1、丸玉1、有蓋高坏4、無蓋高坏2、有蓋浅鉢2、長頸壺1、蓋2、土師器皿1、馬勒1、鉸具4、鉄環1、革金具7、不明鉄器2などがあり、遺体が多いだけに副葬品も少くない。石室の最奥区を間仕切りしたその上に、馬の前脛骨が1本あったという。それは「馬の脚部を肉づきのまま死者に献げたのではないか」とみられている。

#### 大阪府四条畷市四条畷町D古墳出土の馬歯<sup>(16)</sup>

直良信夫氏によると昭和10年前後頃、藤沢一夫氏から調査を依頼された馬歯で、第二次大戦のさい戦災で焼失したという。それらの馬歯は横穴式石室内より出土したといい、詳細についてはわからない。

#### 福井県遠敷郡上中町天徳寺丸山、丸山古墳<sup>(17)</sup>

円墳で片袖の入口を有する横穴式石室墳。画文帶神獸鏡1、三葉環頭大刀1、双竜環頭大刀1、玉類、碇その他須恵器類などとともに人骨、馬骨を出土したといい、出土状態は明らかでない。

#### 長野県飯田市座光寺新井原12号墳の北方出土第4号土壙<sup>(18)</sup>

現地は長野県下伊郡地方最大の前方後円墳といわれる高岡第1号古墳から、東にむかう緩斜地にあたり、第12号墳の帆立貝式前方後円墳の他に13基の円墳が群集する。それらは長期にわたって築造されたらしく、内部構造も遺物も変化に富む。中でも第12号墳は大正11年（1922）国鉄飯田線の工事で大半が失われた。昭和55年飯田座光寺バイパス建設工事にあたり、第12号

古墳の北方、周溝外約7mに1.80m×1.10m、深さ60cmの平面観が長方形を呈した土壙が検出された。その中に1頭の馬が背を西にむけて埋葬され、骨はすべて壙底にあり、これより若干浮いて轡一式と杏葉2、飾鉢12、責金具4が出土した。それらは馬に装着されていたもので、銚馬そのものを隨葬したのであろう。鏡板はf字形の古式に属し、新井原12号墳の年代とほぼ併行するという。

#### 同県更埴市屋代新屋五輪堂遺跡出土の第4号土壙<sup>(19)</sup>

本例は古墳時代の集落遺跡内から出土したもので、古墳に隨葬されたものではないが、馬の埋葬墓として注目される。現地は弥生時代から中世におよぶ複合遺跡で、100軒近い住居跡とともに各種の遺構が検出されている。中でも北地区から発見された第4号土壙は1.40m×1.80m、深さ50cmの楕円形を呈し、内部にはほぼ完全な形の馬1頭分が埋葬されていたという。成馬であるが小形で、首を折り、前後の足を折り曲げ、背椎骨と肋骨は腐蝕して残っていなかった。遺物には6世紀中葉の高坏・甕形土器が各4個体分、意図的に破碎されたように小破片となって残り、更に長さ10.5cm、直径0.5cmの丸い棒状の青銅製品と銹化が進み形態不明の小金属片が出土したという。おそらく土器類は埋葬にさいて供献し、しかる後破碎したものであろう。

#### 埼玉県大里郡花園村小前田第1号墳玄室内崩土<sup>(20)</sup>

直良信夫氏によると玄室内の崩土中より馬歯が発見されている。それは本来古墳の中に納めてあったものとみられている。

#### 千葉県柏市尾井戸遺跡のうち円形周溝墓に伴う第3号土壙<sup>(21)</sup>

遺跡は利根川の湿地草原にむかって東北方に突出した台地の一帯にあり、土師器鬼高式を伴う住居跡8軒と、国府式を伴う住居跡の他に、須恵器を伴う円形周溝墓1基を出土している。うち円形周溝墓に伴った第3号土壙は長軸2.90m、短軸1.34m、深さ33cmを有し、舟底形を呈した壙底の北東側から、馬の左肩胛骨を出土している。土壙内部の土層には乱れがなく、特別な遺構や遺物こそ出土していないが、おそらく馬を隨葬したのであろう。

#### 福島県須賀川市和田古墳<sup>(22)</sup>

『福島県史』史料篇によると古くこの古墳から馬歯馬骨が出土したという。

以上のはかにも古墳時代の遺跡に伴った馬骨の出土例は少からぬものがあり、大阪府枚方市日下遺跡<sup>(23)</sup>では、全身完全にそろった馬一頭分の骨が出土している。直良信夫氏の『日本および東アジア発見の馬歯馬骨』(日本中央競馬会1970)によると、他にも長野県塩尻市平出出土の馬骨をはじめ古墳時代とみられる出土例だけでも10数例があげられている。まして中世の屍馬埋葬例までとりあげると俄に集計できないほどである。

一体古墳に馬を隨葬する風習には、本来いかなる意味があったのであろうか。

墓の内部に馬を隨葬せしめる風習は、すでに中国の殷時代にさかのぼる。すなわち河南省安

陽県の侯家荘や武官村では、地下深い堅壙に木槧などによる墳墓を構築し、犬や馬、戦車を牽く馬、頭と胴を切離した人物、その他の隨葬が行われた。またユーラシア草原地帯騎馬民族の墳墓には、しばしば馬を殉葬したり馬具を副葬し、中には戦車を伴うものもある。さらに『魏志』<sup>(25)</sup>の東夷伝によると朝鮮半島南部の韓では、『其れ葬るに棺有りて槧無し。牛馬に乗ることを知らず、牛馬は死を送るに盡す。』<sup>(26)</sup>とみえ、牛馬を葬送儀礼に供したことが知られる。こうした中国古代の風習や三世紀頃の朝鮮半島南部の習俗が、日本の古墳時代にそのまま継承されたとは断言できないが、乗馬の風習や馬具の伝来とともに影響がなかったとはいえない。時代は下降するがわが国の古典には時おり馬の殉葬（隨葬）に関する記事をみかける。すなわち『孝徳天皇紀』大化2年（646）の詔にみえる禁止事項の一つには、次のような文がある。

凡そ人死亡ぬる時に、若しくは絞ぎて自ら殉<sup>ひ</sup>、或は人を絞ぎて殉<sup>ひ</sup>はしめ、及び強<sup>ちに</sup>亡したる人の馬を殉<sup>へ</sup>、或は亡したる人のために寶を墓に藏<sup>め</sup>、或は亡したる人の為に髪を断り股を刺して誅<sup>す</sup>。此の如き旧俗は一に皆悉に断めよ。<sup>(27)</sup>

とあるように、人の殉死とともに馬の殉葬をも禁じている。この記事は当時明らかに人の殉死や馬の殉葬が行われていたことを物語るもので、それが現実に行われていたればこそ、禁止の対象となったのである。

また『播磨風土記』飾磨郡貽和の里の条によると、馬墓池の地名成立についての説話がみえる。それは雄略天皇の時、尾治連等の祖にあたる長日子なる者が、生前に良き婢と馬を持っていた。時に長日子が死のまぎわの遺言に「吾が死なむ以後は、皆葬りは吾に准<sup>へ</sup>」<sup>(28)</sup>と稱した。そのため第一の墓を長日子とし、第二を婢の墓、第三を馬の墓とした。後に墓のほとりに池を築いたため、馬墓の池とよぶようになったという。はたしてこの記事が史実であったかどうか明らかでないが、たとえ地名起源にまつわる説話であっても、人や馬を隨葬する風習があったことは否定できない。

このように人の隨葬のほかに馬の隨葬が特別な扱いをうけ、他の動物が含まれていないことは、馬が単なる副葬物ではなかったことを意味するという。『雄略紀』13年春3月の条にもみえる通り、歯田根命がひそかに山邊小嶋子を姦した罪をとられた時にも、馬八匹と大刀八口をもって罪過の「祓除<sup>ひらひ</sup>」を行わしめており、また『天武紀』5年秋7月壬午、彗星があらわれた時にも異変対策として「大解除<sup>おほはらへ</sup>」<sup>(29)</sup>が行われ、國造たちには「馬一匹、布一常<sup>きた</sup><sup>(30)</sup>」を供せしめている。こうした事例からみても馬は単なる財物ではなかった。その点増田精一氏によると「馬を神聖視し、馬に祓の力があるという観念を根底にして考えられ、さらに馬を神に捧げる風も見られ、鎌馬の意義もこれと関連させられるので、古墳に馬具を副葬することはこのような観念と無関係でなかった」ことを指摘しておられる。

このようにみてくると、おそらく古城横穴第2号より出土した馬の歯をはじめ、全国各地から散発的に発見されている馬骨については、こうした信仰的な呪術的意味があったのであろう。

それにしても古墳周溝などに1頭分の馬を埋葬するものと、古墳石室や横穴内部に馬の頭骨や四肢骨の一部を供獻するものとには、何か目的上の相異があったのかもしだい。しかし今はその理由を詮策するだけの余裕もないので、類例だけをあげて後考に供したい（一覧表参照）。

## 註

1. 森浩一「大化薄葬令の馬の殉殺について」井上光貞博士還暦記念会編『古代史論叢』上巻 1978
2. 松本雅明編『熊本の裝飾古墳』56頁、熊本日日新聞社 1976
3. 上野辰男「つつじが丘横穴群」（熊本市文化財調査報告書Ⅱ）（北部地区）1971
- 4・5・6. 饗昭志・野田拓治他『塚原』（熊本県文化財調査報告第16集）1975
- 7・8・9・10. 松本健郎他『上の原』（熊本県文化財調査報告第58集）1983
- 11・12. 緒方勉・高木正文・田中義和「長塚古墳」『久保遺跡』（熊本県文化財調査報告第18集）1975
13. 松本雅明・饗昭志・江本直・他『小田良古墳』（三角町文化財調査報告）1979
14. 梅原末治・瀬之口伝九郎・他『六野原古墳』（宮崎県史蹟名勝天然記念物調査報告書第13輯）1944
15. 樋口隆康他『網野岡の三古墳』（京都府文化財調査報告書第22冊）1961
16. 直良信夫『日本および東アジア発見の馬歯馬骨』日本中央競馬会 1970
17. 斎藤優「若狭の十善森と丸山塚の調査顛末」（古代文化第4号）1958
18. 市村成人「古墳」『下伊那史』第2巻 1955  
小林正春「新井原遺跡発見の飾られた馬」（伊那第4号）1980  
大沢和夫「馬の墓と新井原12号墳の保存」『ごんが』
19. 大島宏雄「馬骨を出土した更埴市五輪堂遺跡」（長野県考古学会誌31号）1978
20. 註16
21. 古宮隆信他『尾井戸遺跡』尾井戸遺跡調査団 1980
22. 『福島県史』史料篇、福島県 1964
23. 『日下遺跡』帝塚山大学考古学研究室 1906
24. 平出遺跡調査会『平出』朝日新聞社 1955
25. Sergei I.Rudenko.(Translated and with a Preface by M.W.Thompson.1970) Frozen tombs of Siberia  
—— The Pazyryk burials of Iron age horsemen.——1953.
26. 商務印書館本により書き改める。
27. 『日本書紀』平泉澄校訂、大日本文庫本 1934、による。
28. 『風土記』日本古典文学大系2、1958による。
- 29・30. 註27による。
31. 三木文雄・増田精一「副葬品」日本考古学講座5、1955
32. 森浩一「古墳出土の馬具」、森浩一編『馬』日本古代文化の探求、1974

# 図 版

図版 1

(この図版の写真は乙益重隆氏提供、昭和34年冬撮影)



1) 県立第一高校運動場拡張工事



2) 工事により発見された横穴墓（左から3号、1号、2号）

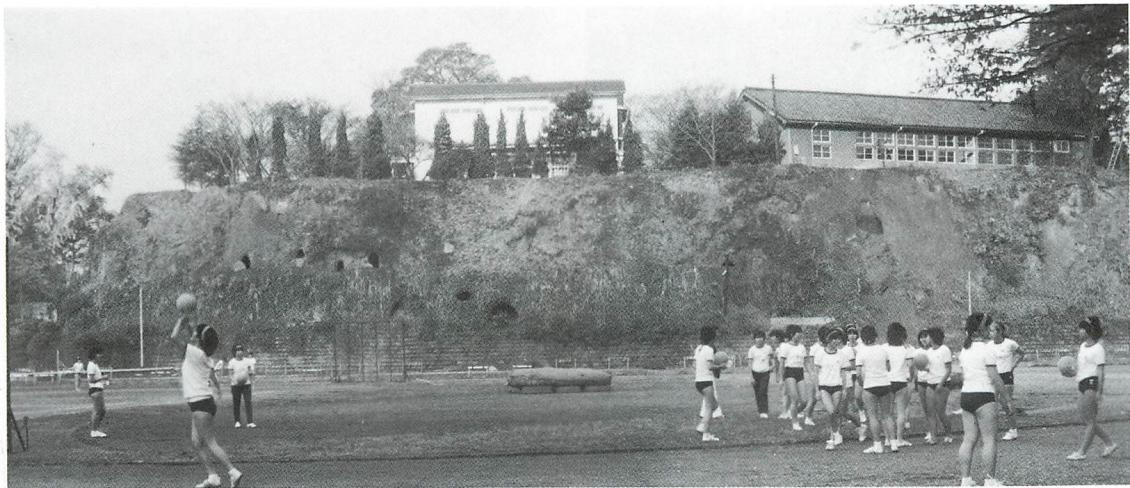


3) 2号横穴墓の上段ステップ出土須恵器

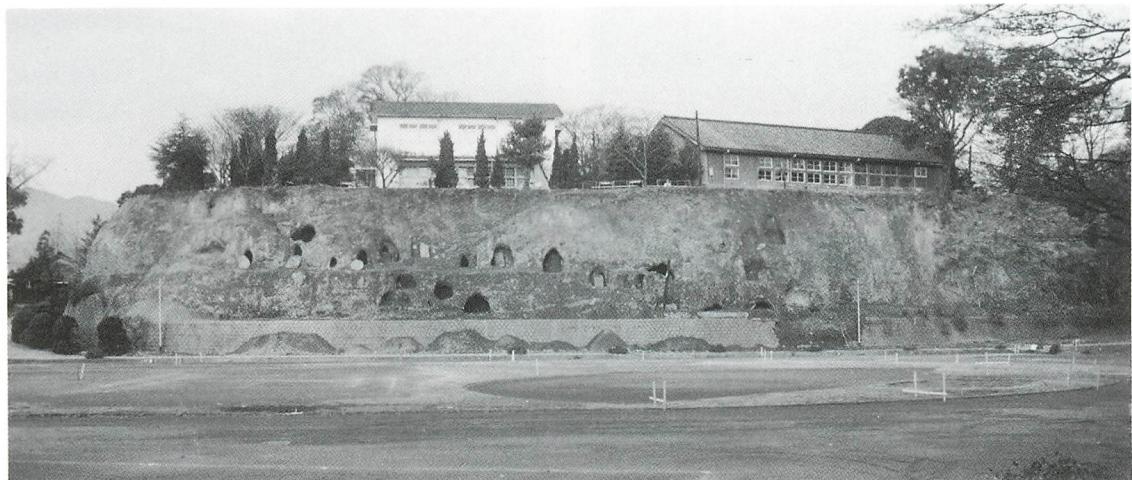


4) 横穴墓奥壁（現24号）

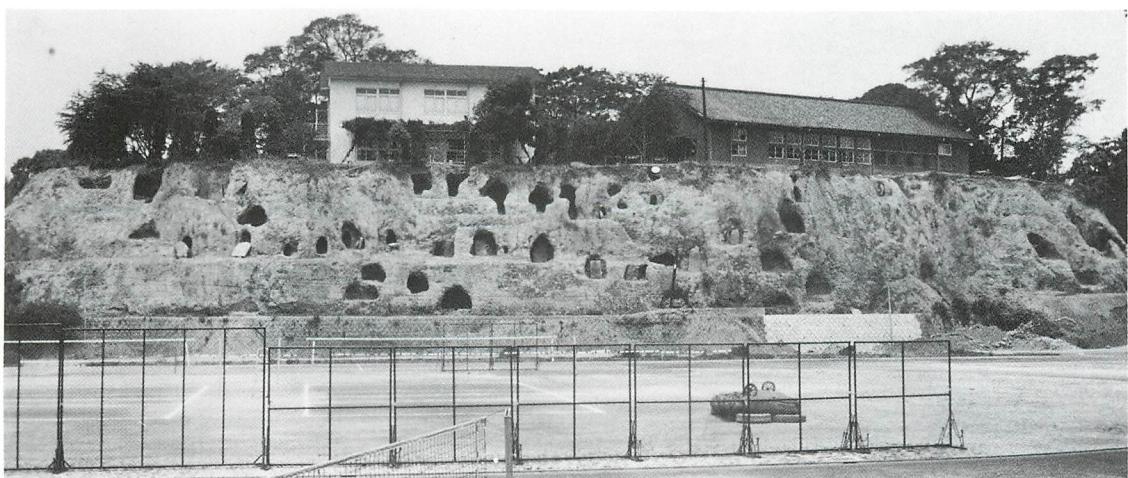
図版 2



1) 調査開始直後の全景（昭和57年11月）

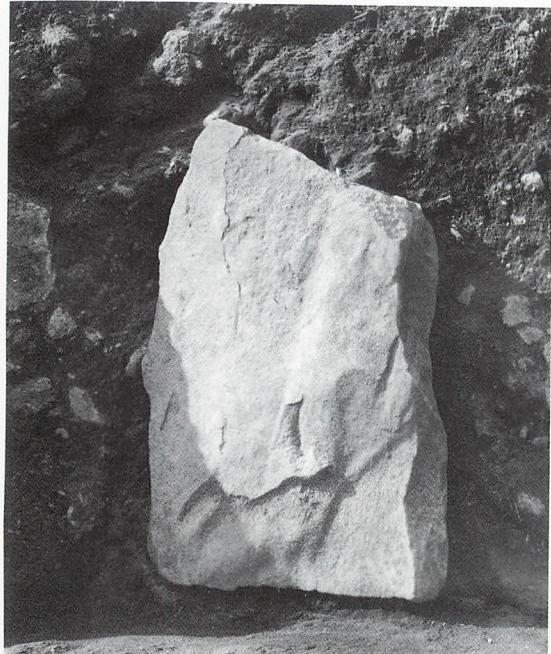


2) 調査途中の全景（昭和57年12月）

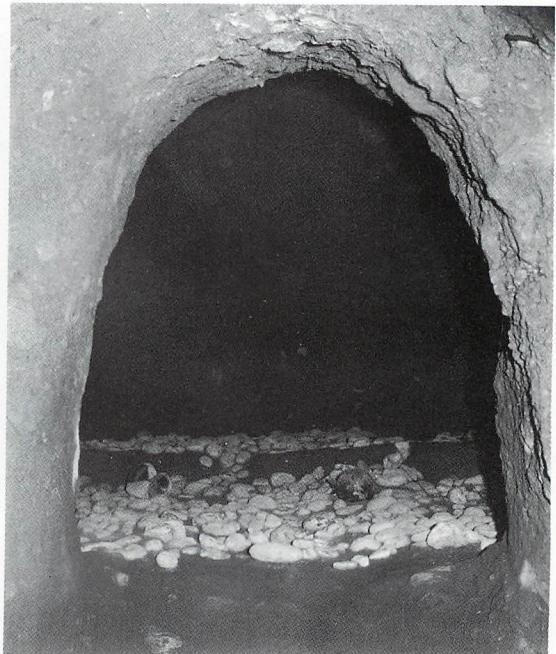


3) 調査完了時の全景（昭和58年6月）

図版 3



1) 20号横穴墓閉塞状態



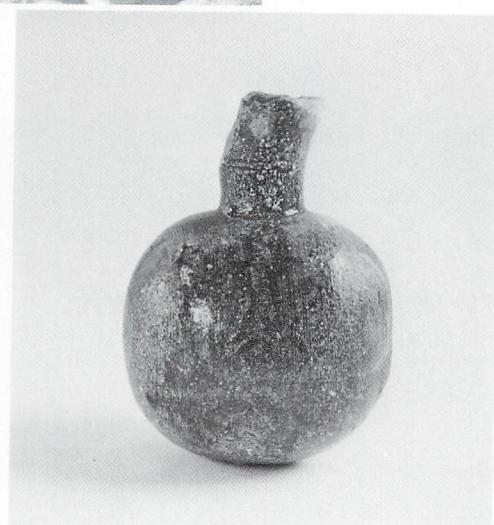
2) 20号横穴墓の前室から見た後室



3) 20号横穴墓後室の須恵器出土状態



4) 20号横穴墓出土須恵器



5) 同 左

図版 4



1) 16号横穴墓閉塞石



2) 8号横穴墓閉塞状態

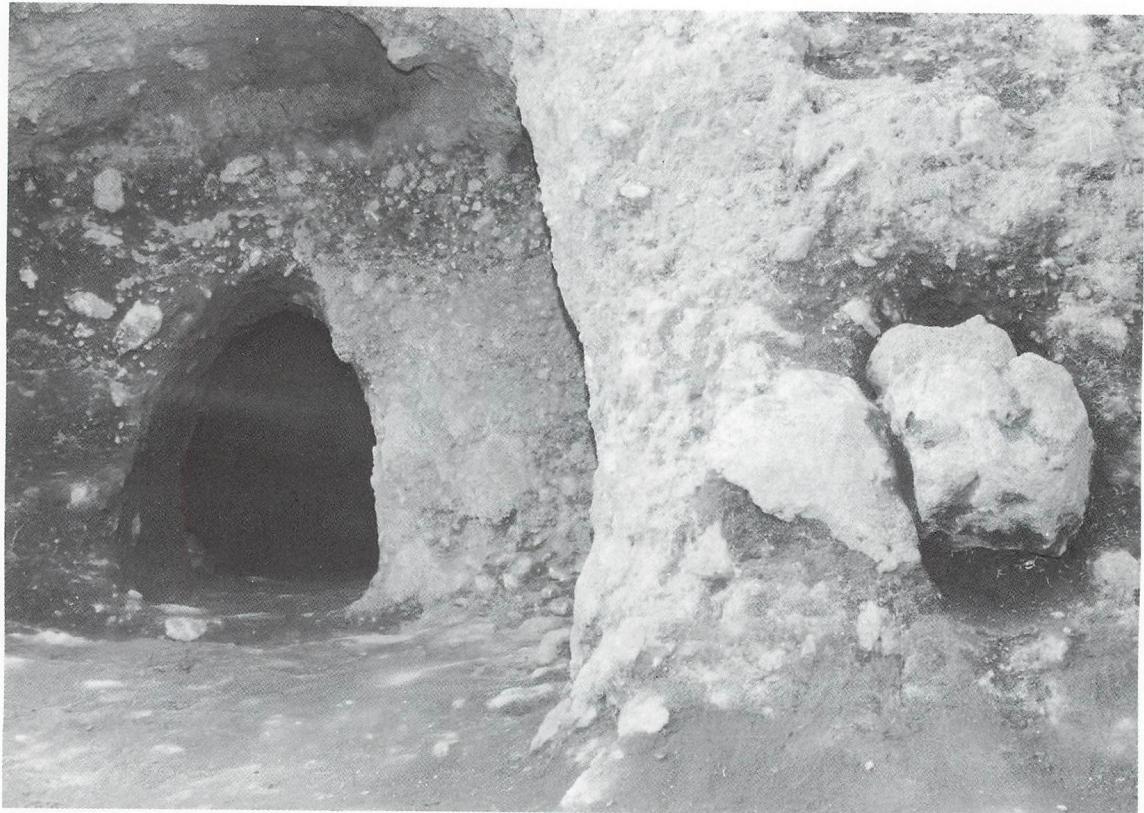


3) 8号横穴墓出土須恵器

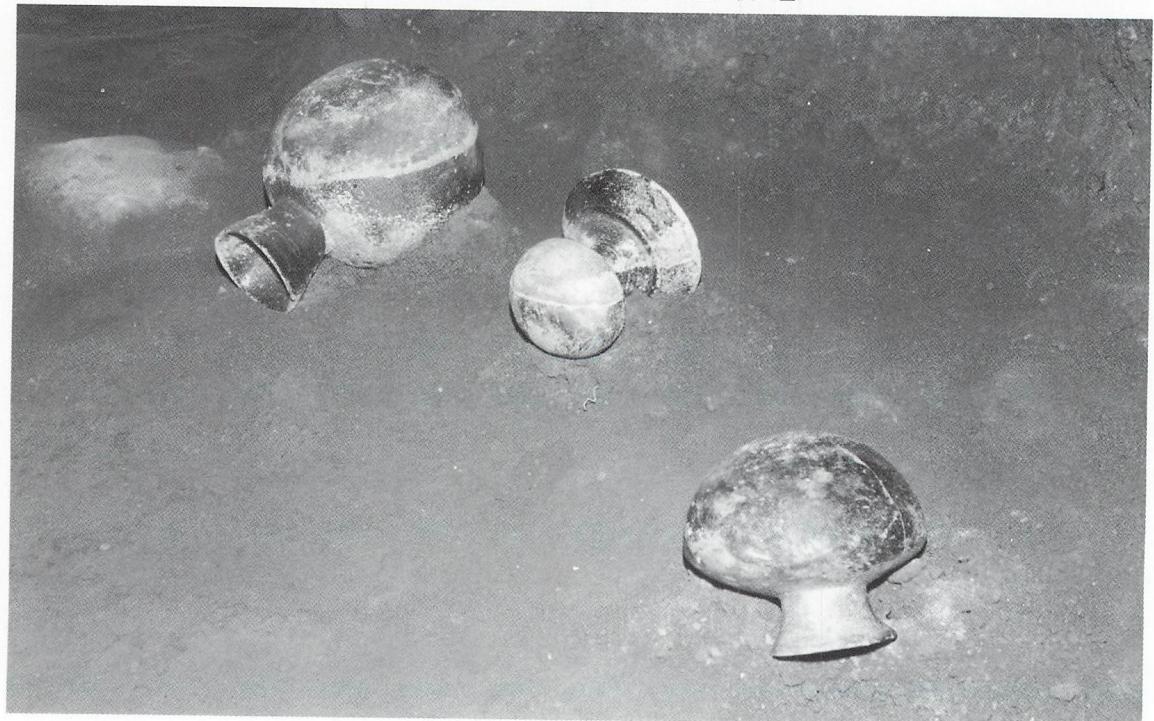


4) 同 左

図版 5



1) 18-1号(左)と18-2号(右:小型)横穴墓



2) 18-1号横穴墓玄室の須恵器と土師器出土状態

図版 6



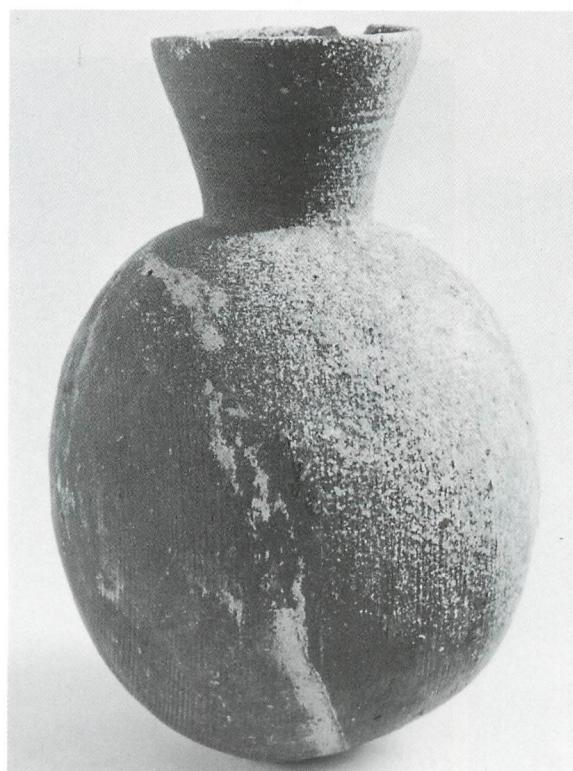
1) 18-1号横穴墓出土雲珠・杏葉など



2) 18-1号横穴墓出土鉸具



3) 18-1号横穴墓出土須恵器



4) 18-1号横穴墓出土須恵器

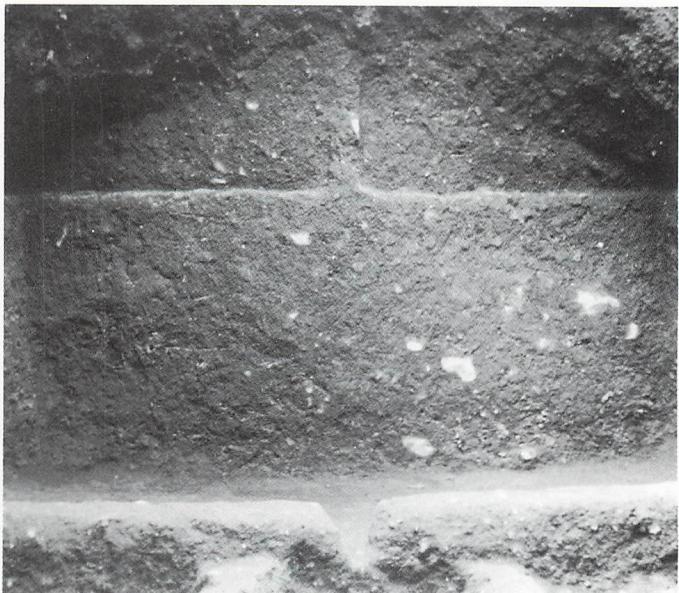


5) 18-1号横穴墓出土土師器

図版 7



1 ) 31-1号横穴墓閉塞状態



2 ) 31-1号横穴墓奥壁



3 ) 31-1号横穴墓右屍床の人骨出土状態



4 ) 同 左の人骨頭部

図版 8



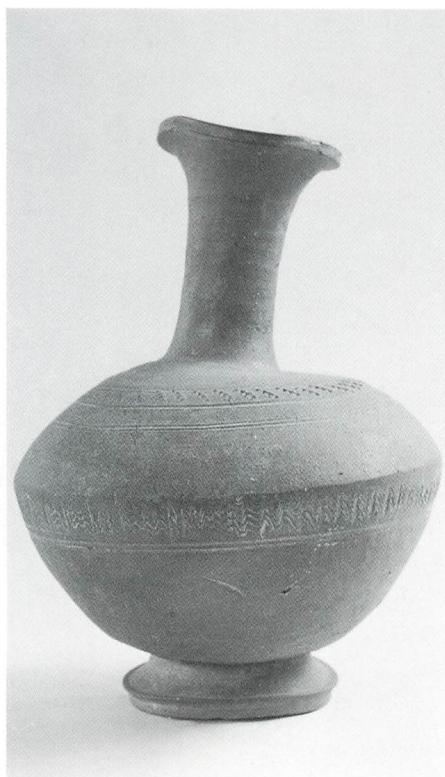
1) 31-1号横穴墓の人骨調査



2) 31-2号横穴墓外観



3) 31-2号横穴墓の須恵器出土状態



4) 31-2号横穴墓出土須恵器



5) 同 左

図版 9



1) 38-1号横穴墓右屍床人骨出土状態



2) 34-2号横穴墓（小型）の人骨出土状態

図版 10



1) 37号横穴墓玄室の須恵器と人骨出土状態



2) 37号横穴墓出土須恵器



3) 同 左

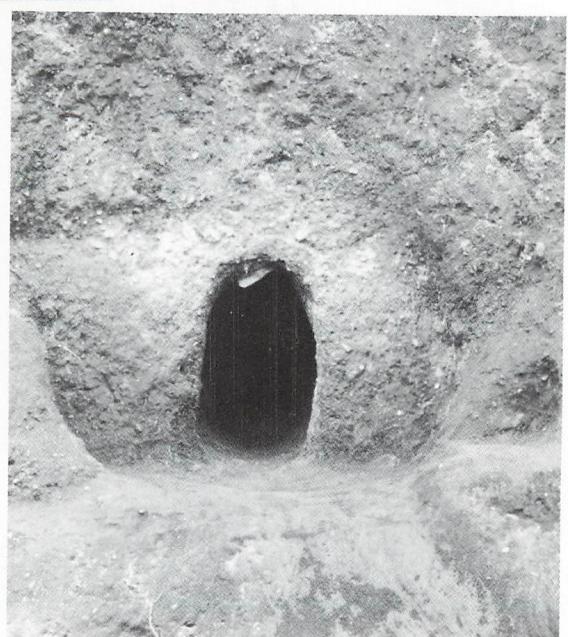
図版 11



1) 39号横穴墓閉塞石



2) 39号横穴墓閉塞状態



3) 39号横穴墓開口状態



39号横穴墓閉塞石の文字銘

図版 13



1) 46号横穴墓玄室全景（奥屍床は後世に埋葬に再利用）



2) 46号横穴墓玄室の線刻文



3) 48号横穴墓屍床の遺物出土状態



4) 49号横穴墓奥屍床の遺物出土状態



5) 同 左

熊本県文化財調査報告 第74集

**古 城 横 穴 墓 群**

---

昭和60年3月31日

編集発行 熊本県教育委員会  
〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号

印刷 熊本県印刷センター  
〒860 熊本市清水町高平1255

---

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第74集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：古城横穴墓群

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2016年3月31日